

---

# トマトリップ

みーや

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

トマトリップ

### 【Zコード】

Z45910

### 【作者名】

みー や

### 【あらすじ】

莉月20才は、ある日、異世界へ飛ばされます。共に異世界へと渡ってきたのは、手にもつっていたミニマートの苗、一株99円。拾われた屋敷で優しい人達に囲まれ、メイドとして働く傍ら、苗を片手に畑作りに精を出す。そんな時、畑で出会った男とは…。ラブコメディの異世界トリップファンタジー。逆ハ…頑張ります。

# 1 ラジオ（電波）

ラジオへお題ごとが。

心地よい風が吹いてる。

空は快晴で雲一つなく、日差しは眩しく鳥たちはさえずり、緑の木々は風に吹かれてそよと揺れている。

私は一つ、深呼吸をして伸びをする。

「ん――！ 今日もいい、おつ天氣！」

こんないい天気だったら、私の植えた苗もぐんぐん伸びて成長するに違いない。

私は、自分のテリトリーである自分の畠を満足して見つめる。

…とは言つても勝手に決定しただけで、私の土地ではないのだけれども。

照らしつける太陽に、爽やかな風を肌で感じて、上機嫌になりながら、鼻歌なんぞ歌つて水やりをする。

の世界は、常に一定の気候が保たれており、快適だ。たまに雨は降るけれど、聞くところによると、年中一定の気温らしいから驚きだ。

だけど、私はまだこっちに来て、半年なので、あと半年過ぐしてみなければ年中一定の気温かどうかはわからないのが正直なところ。

なぜ半年かと云つて、話は半年前に遡る。

その日、会社も休みの休日、朝から私はホームセンターに行つた帰り道。手にはミニトマトの苗。

なぜなら、今住んでいるアパートのベランダのプランターでミニ一家庭菜園をやるべくして、苗を購入しに行つてたのだ。

昔から、植物や野菜など育てるのが結構好きで、機会があれば畠などを耕してみたいものだ、と常常々思つていた。

まあ、あまり若い娘の趣味とは言えないでの、密かにこいつそりアパートのベランダなどせまこましい空間でひつそりとやつているだけだったのだが。

なにせ、ミニトマトは実用的だと思つ。

サラダにもなるし、お弁当の色どりにも最適だ。

さあ、家に帰つてプランターに植え替えして肥料をやらなくては！

と意氣込んでいた矢先、いきなり視界に入つてきたのは光。全身を包む光。

自分の体がいきなり光に包まれたかと思つた瞬間、私は意識を手放

した。

.....

チチチチチ

「び」からか、鳥の鳴き声が聴こえる……。ああ……、もう朝か……仕事に行かないといと……。

.....つて、仕事！？

私は、その場で跳ね起きた。先ほどの出来事は夢か、幻か、いや夢じやない。その証拠に……

「ビツ…ビツよ…ヒヒ…ヒ…！」

気がつけばあたり一面は緑の木々が生い茂り、地面に寝そべっている状態だった私、そして手には先程購入したはずのマートの苗、一株99円が袋に入つてしまふ手に握られていた。

「えーつ？えー——つ？？？」

確か、確かに、道路を歩いて帰り道を急いでいたはず。それがなんで、こんな自然たつぱりの場所に来ちゃっているわけ？しかもアスファルトから、マイナスイオンたつぱりの緑の木々に囲まれているし！

もしかして、わたし…

道に迷つた…？

…少し考えて、その可能性はない事を悟る。

いくらなんでも、迷子というよりは、スケールが違う感じがする。  
落ち着けわたし。さあ、よく考えて。

とりあえず、起き上り、体全身についていた土を払う。心を落ち着かせるように努力して、周りの状況を改めて確認してみると、あたり一面は木に囲まれていて、人の気配など全く感じない。軽くパンクになりそうになり、泣きそうになった。

「…」

いきなり光に包まれたかと思うと、見知らぬ土地で、しかも森。この状況は私に向かって『死ね』と言っているのと同じ状況じゃないか。

それともアレですか。

リアルサバイバルですか。自分でしけんて作って小動物とか仕留めて食べるようなサバイバル生活に突入しろと！？  
うさぎ追っかけて、かのや～ま～まで行かねばならんと！？

死ぬのも嫌だけど、サバイバル生活も無理だと涙が出そうになつた、

いや、確實に田の端に涙は溜まっていたはず。

心が折れそうになった次の瞬間、後ろの茂みから何かの気配を感じ、悲鳴が出そうになった。

もしかして熊とか狼とか、遭遇しちゃつたりして…? 「それも追つかける前に私が食料になつたりして!?

危険な考えは、ぐるぐる頭の中を回るのに、足が動かない、頭の中をこれまでの人生が走馬灯のように走りながらとした瞬間、茂みの中なら聞こえたのは、

「あら? あんた、どうしたねー?」

茂みから現れた人物は、熊でも狼でもなく、まぎれもない人間だ、そして女性だ。その瞬間『助かった!』とガツッポーズをしたくなつた私だが、何か違和感を感じて振り擣げかけた腕をいつたん停止して、目の前の女性をまじまじと見つめる。

「あんた、どこからまぎれこんだね? ここは辺一帯は、ヒューストン伯爵様の私有地だよ」

不思議そうに言つ女性を、私も不思議な思いで見つめていた。だつて…服装が…。

「あんた、不思議な格好してるけど…どこから来たんだい？」

…その台詞、そつくりそのままお返ししたい。だって、田の前の女性は、本でしか見た事のないまるで中世ヨーロッパのような服装。ふんわりとした長めのスカートにエプロン、まるでどこかの屋敷に仕えるメイドさんだ。

「あの…すみませんけど…」「は…？」

その答えを聞くのは怖いけど、勇気を持つて田の前の女性に尋ねる。

「ここへこじら辺一帯は、ヒューストン伯爵様の私有地で部外者は立ち入り禁止の土地だ。あんたは一体…」

ヒューストン！？

ヒューストンって何ね！？

そんな地名、日本に、いや、近所にあったっけ？私が歩いて行ける

距離に！？思考回路がショート寸前、いや、完璧ショートした。その瞬間、

もう駄目だ。

私は、こらえていたはずの涙を、ついに解放し、人目もははからず大聲あげて泣いてわめいた。

私、  
宮川 みやかわ  
莉月 りつき

途方にくれて泣きわめいた20才の初夏…

チ  
ー  
ン

## 1 ドラマと共に（後書き）

誤字脱字、設定不足等あると思いますが楽しんで書けたらいいなあと想っています。

トマト×トマト×トマト×トマト

作者のタイトルセンスのなさがモロばれの作品ですが

お付き合ってありがとうございました。

## 2 トマト畑に侵入者

しかし、いま思いだしてもアレは恥ずかしい。いい大人が初対面の人の前で涙と鼻水を垂らして号泣するなど、田頃の私からは考えられない行動だ。それだけ、パニックになつていたつていう事だらうな。

私は、庭の畑に水をまきまき半年前の回想に思いをふける。

その後、私は、号泣しつづけた。目の前の女性は、そんな私の様子に驚き、ドン引きしていたようだつたけど、しばらくすると、泣いていた私をそのまま放置できないと思ったのか、必死にいろいろ心配をしてくれて気遣つてくれた。

女性の名前は、マーサと言つた。

しばらく号泣し続けた私が落ち着くのを待つて、マーサさんはゆつくりと優しく話してくれた。

ここはカールディア大団のヒューストン伯爵の領地だといつ事。そしてマーサもそこで女中として働いてるといつ事。

そして、私の目を真っ直ぐに見つめて言った。

「どこか余所の世界から迷い込んできたね」

びっくりした。私の当たつてほしくない予想をドンピシャで当たった。なんでも、このカールディア大国には、異世界からの迷い込んでくる人たちが年に数人はいるとの事。だから、マーサさんは驚きながらもどこか冷静に対処してくれたのだった。

私は信じたくなかったけど、自分の身に現実に起きている事だ、信じるしかあるまい。

しかし、よく小説とかで異世界トリップとかあるけど、あれじやない?

だいたいトリップ先は、その国の王子の元とかで、惚れたはれたの逆ハー展開が待ち受けているんじゃないの?

こんな森の奥地で、道に寝つ転がつて泥だらけって設定もあんまりじゃないか。

全く、途方に暮れて涙が止まる事はない。

マーサさんは大層、同情したらしく、

「大丈夫、ここのかーるディア大国は異世界人を見つけたら迫害する事なく、元の世界に戻るまで面倒を見るのが普通なんだ、そもそもヒューストン伯爵は大変慈悲深いお方。きっとあなたの事も面倒みてくれるから、心配するでないよ」

マーサさんの台詞を聞いた瞬間、涙が一瞬止まった。

「え…？元の世界に戻る事が出来るの？」

「ああ、異世界から来た人達は、時期が来たら皆帰つていいくつとう噂だよ。だからあんたも心配しないで安心おしょ。あんたの面倒は、ヒューストン伯爵に私が頼んであげるからわ」

元の世界に戻れる可能性のありがたさと、初対面のマーサさんの優しさに触れてまた涙が出てきた。

それから私はマーサさんに連れて行かれて、ヒューストン伯爵に対面を許された。

初めて会つ伯爵様は、優しげな顔立ちの中にも紳士の威厳を兼ねていた素敵なおじさまで、まさにダンティ、ダンティズム。

元の世界に戻るまで、この領地でマーサと一緒にメイドとして働かせてもらえる事を快く了承してくれた。

惚れてしまつだらつ！

そんなに優しくされてしまつひとつ！

なんて、一瞬本気で思つたが、長年連れ添つた奥様も「子息様もいるらしい素敵なダンディおじさまなので、憧れで終わる事にする。

そうして、あれよ、あれよ、といづらひにヒューストン伯爵の土地の一角にあるマーサの家に居候として、ヒューストン伯爵の城で女中として働くかせてもらえる事になり、その日の晩にはマーサの家で家族に居候として紹介され、温かい食事をして柔らかい毛布にくるまつてぐっすり熟睡した。我ながら自分の神経は図太いと思いながら。

そんなこんなで、あれから半年。

いまだに元の世界に戻れる方法はわからないけれども、「異世界人は時期が来たら元の世界に戻る」というマーサさんの言葉を信じて、焦つてもしようがないので、どうせなら自分のこの状況、立場を楽しもうといつ事で日々充実した毎日を送っていた。

ヨーロッパあたりの古城をおもわせる城で働けて、マーサさんを筆頭とする皆が優しい。

初めは、「異世界トリップは王子様つきだろ!」とリアルに思つたが、右を見ても左を見ても王子様なんていやしない。けど、私はむしろこっちの人生、マーサさんにお会つて拾われた事に感謝する。マーサさんは、こっちの世界のお母さんみたいな存在で、私にいろいろいろいろ教えてくれたいわば命の恩人だ。マーサさんがいなかつたら、今頃、私は森で熊か狼の食糧か、はたまた、うさぎ追っかけるサバイバル生活の末、狩りが一度も成功する事なく餓死していた

かもしだい。

そんなマーサさんへの感謝の気持ちと、半年前の回想にふけりながら、

私は、水やりを終えた畑を眺める。

「よしー今日も、水やり完璧ー。」

満足して声に出す。実はマーサさんに拾われて城で働き始めて真っ先にした事は、このヒューストン伯爵の土地である森のはずれに、ちょっとした畑を作ったのだ。そして、そこに私と共に異世界トリップしてきた運命共同体のアリタマトの苗を植えたのだ、駄目もとで。

それが、予想と反して、育つわ育つ。

もともと土地が栄養たっぷりなのか、気候が適しているのか、あつとこつ間にミニトマトは実り、もはやミニトマトは言えなごべらいの大振りのミニトマトになつて赤く熟れている。

株を増やしたら、あつとこつまに増え、もはやミニトマト菜園状態。うはうはだ。

こっちの世界には、トマトという野菜がないようなので、最初収穫してマーサさんにあげたら、おつかなびつくり口にしてたつけ。でも食べた後の感想が「すっぱいけど甘くて美味しい」と言つてくれたので、調子にのつた私は、朝晩の水やりを欠かさないで、せつせつトマトを育てていた。

私もトマトは大好きだし、なによりマーサさんの喜ぶ顔が見たいか

う。

その日。

いつものように早朝、城での仕事前にマイ畠へ水やりに。早朝なので、少し霧がかかっているけど、畠への道のりは慣れたものだ。

だてに毎日、朝晩通つていよいもんね。

だけど、その日は思わぬ先客がいた。

私が畠につくと、霧の中、私の畠に人影があった。私が近づくと、相手も気付いたようで私を振り返った。

「お前は…」

その人物から問われて私は驚きで畠を見張る。

流れる蜂蜜色のハニー・ブロンドの髪は長めで、蒼い空を思わせる瞳、すつきりとした鼻筋、霧の中でもそうとわかる、整った顔立ちの美形な男性は、私より頭一つぐらい高いであろう頭上から、私を真っ直ぐに見つめている。

やけに美形な男性と目があつた瞬間、私は固まつた。

そして次の瞬間、

私は、いきなり走り出して田の前の彼を勢いよく突き飛ばした。

勢いよく弾かれたその男性は、ふらつきながらも後退する。私的には全身で猛タックルラグビー選手並みのつもりだったが、そこは体格差であろう。

「な……なこを……。」

「何をじやないわよ———。セ———踏んでるつ——。」

さつきまで美形がいた場所を指さして、訴える。

「セ———タマトのハセ———田植えたばかりなんだから———踏みつけたつ——。」

きっと私は涙田になつて叫んでいたに違いない。

### 3 侵入者は変な奴

「苗…？」

「やつよつー、アマトの苗よつー！ 昨日植えたばつかりなんだからー！」

いきなり私に突き飛ばされたあげく、続く言葉攻めにあい、田の前の彼は、一瞬あっけにとられていた様子だったが、すぐに体勢を持ち直した後、いきなり人の事を頭のてっぺんからつま先まで、観察した後、

「で、なまは？」

と偉そつと高飛車に聞いてきた。

人に尋ねるのに、何じやーその上から田線な態度はあーーー！  
しかし、そんなに気になるのか、と考えたあげく、

「だか、ひ、ひーーー、アマト、だつて、まーーー！」

私は胸を張つて堂々とその名を主張する。どうだ！見事なかわいいミニトマト達だろー！私が栽培しているのだーうははははー！

田の前の彼は、少し不思議そうな顔をしながらも

גָּדוֹלָה וְעַמְּדָה

反芻して聞いてきたので、私は「クン」と一つつなずく。

「…変わった名前だな、お前」

「…つて、私がかいつ！？」

「今、自分で言つたじやないか」

「だから、それは畠の作物の名前つ！」

『アヤタ!!!』なんて呪文、呪わされたら親を恨むひなんでも、いへり。

あんまりだ。しかも最後のは格闘系でやたら強そうな気がする。実際、この名前なら親を恨むというか確実に殺意レベルを抱くね。私の思いつきりひきつた顔を見ても、全然ちつとも気にした風でもなく目の前の彼は涼しい顔して聞いてきた。

「で、お前の名前は？」

再度私に聞くと言つより上から田線な物の言い方の態度を見て、力チ「コーナンと来た。人に尋ねるのにその態度ですか、ああそうですか。ちょっと美形だからと言つて、そんな俺様な態度は初対面の人間にどうかと思うんですけどね。大体初対面の人間にその態度は礼儀がなつていないよ、全く。

私は先程、自分がその初対面な人間をいきなり突き飛ばした事も忘れて、ムツときたので

「人に名乗る前に先に名乗るのが礼儀です」

と、つっけんどんに言つてやつた。そしたら、彼は

「…知らないのか」

と少し驚いたような様子だつた。

だけど、私は、逆にそつちの態度にビックリだよ！ いるんだよね、こーゆう、ちょっと美形だからって自分の事は知らない人はいないはず！ と思っている自称有名人みたいなのが。かーーーっ。見てらんないね、その思いこみの激しさは。だから言つてやつた。

「知りません」

はつきりと。真っ直ぐに、彼の蒼い空色の瞳を見つめて。そう告げられた彼の空色の瞳は、驚きの表情を再度見せ、次の瞬間は、

笑つた。

唇の端を少し上げて、まるでおもしろい物でも見るよつに私を見た後、再度目を細めて笑つた。私はそれを見て、不覚にも一瞬ドキッとしてしまつた。

ハーブロンドの髪を風になびかせて蒼い瞳を細めながら、微笑む様子を見ると、こんなに整つた顔立ちで笑うとなおさら美形率がアップするのね、と素直に感心した。

性格はどうだかいまいちわからないけれど、きっと周りにもてはやされて、こんな高飛車になつてしまつたのかもしれない、などと冷静に分析した。

「アデレイだ」

「え？」

「俺の名前はアデレイだ」

何が面白いのかわからなかつたけど、微笑んだ後の彼は、まっすぐに私を見つめ、私の頭一つ高い場所から、見下ろして私に教えてくれた。

彼の名前は、アデレイか。

ふーん、と思った瞬間、大事な事を思いだした。

「…で、お前の名は？」

「やばつー私も行かなきゃつー…」

そうだ、朝だ、早朝だ。

私は水やりを終えたら、城にお仕事で向かわないといけないといけない、今日は早朝当番なのだ。

ここで見知らぬ人…いや、名前だけついさつき知った人物アデレイと話しこんでいる暇はない事をようやく思いだした。水やりしている時間は、今の私にはない。残念だけど、仕事が終わったらここに来よう。

今来た道を帰るべく、彼に背を向けて走りだそうとしたけど、ふいに思い出して彼に、アデレイと向き合つ。

「イリはヒューストン伯爵様の土地だから、勝手にあちこち侵入したら駄目だよ」

親切心から言つてやつたつもりだったのだが、彼は再度おもじろをうに目を細めて笑い

「じゃあ、お前みたいに『トマト』とかいう物を勝手に植えるのはいいのか？」

何とも鋭いツツ「ミ」が帰ってきて、一瞬ぐへえと、言葉に詰まるが、そこは何とか笑顔でカバーと言つより、笑つて誤魔化す。

「眠らせておくより、土地の有効活用よー食料にもなるしー。」

開きなおり、「じゃあ、私も行くな」とだけ言つて去つた。背中にさつきの男、アデレイの視線を感じていたが、時間がないので、気にしちゃいられなかつた。

しかし、目的の水やりも出来ず、何しに行つたんだ、私。

3 侵入者は変な奴（後書き）

朝のお城は慌ただしい。

まずは、私の仕事は、城の窓拭きなど床の掃き清掃などに、それが終わったらヒューストン伯爵様の食事の用意のお手伝いなどなど。その日によつて、仕事は様々だけど、メイド頭のアドマさんとか、マーサさんや他のメイド仲間に囲まれて充実した職場環境だと実感している。厳しいながらも優しく指導してくれるから苦手だった家事も、まあ上達したかもしれない。

今日も、仕事が一段落ついたので、皆で甘い焼き菓子を囲んでちょっと一息休憩タイム。

温かい紅茶を飲みながら、ほつとする。  
ああこの時間が幸せだ。そこで、おしゃべり好きなカリ亞が口を開く。

「ねえ、庭師のローデイって、本当に素敵よね。今日も庭の掃き掃除の時、掃除しているふりして私、チラチラ見ちゃったわ。あの茶色の髪が日に透けて、爽やかに『おはよつ』なんて言つから、もう朝からドキドキしちゃつて」

「どうやら、カリ亞は庭師のローデイに恋つこんラブ（死語）らしい。カリ亞は十代後半の赤毛でそばかすのかわいい女の子だ、恋について熱く語る。これって十代の特権だよね。って私も最近まで十代だったけど。

「ねえ？ リツキは？ どう思つ？ ？」

話の矛先を向けられた私は、笑つて誤魔化す。だつて正直、ローディの顔とやらが思い浮かばない。実際いつか元の世界に戻るものだと割り切つて、恋などしてゐる暇もないし、仕事を覚えるのに精一杯だつたので、男の人の顔と名前が一致しないのが正直な所。

「おや、おや。つい最近まで、馬屋の飼育係のボブが素敵とか言つていたのに、もう心変わりかい？」

茶田つけたつぶりに、からかうマーサさんにカリ亞も

「いいじゃないのー。見ているだけも田の保養だわ」

カリ亞は恥ずかしそうに赤くなりながら笑顔で言つた。

「でも、一番の田の保養といえば……」

それまで口を開かれていた皆が一齊に口を開いた、

「「「「シコーストン様の」「子島様よねーー！」」」

皆が同じ名前を口にしたので、びっくりした私を尻目に皆が口づちに騒ぎ始める、

「あのスラリとした身長ー！」

「そして爽やかなあの笑顔ー！」

「物腰も柔らかくてー！」

「あの方に話かけられたら、もう一寸夢心地よね！！」

なんだ、なんだ、皆が騒ぎ始めたが、私一人は蚊帳の外だぞ。あぜんとする私にカリアが、教えてくれた。

なんでもここヒューストン伯爵様の「」子息様は、とても美形で素敵なお方らしい。

今は、王都のほうにいらっしゃるらしいのだが、長期休暇になると帰つてくるのだが、そのたびにメイドのテンションが上がるらしい、という事を聞かされた。

ふーんという風に聞いていたら、カリアに急に

「そういえば、リツキは元の世界にいなかつたの？好きな人」

唐突に聞かれて

「へ？」

間抜けな声を出す私に、カリアは興味津々に聞いてくる、

「だつてさー！絶対もてそuddtて！リツキってばー！」

いやいやいやいや、そんなそんな、私なんて、めつそりも「」やしません！とばかりに紅茶を噴き出しそうになつた。

カリアの声の大きさに、皆が気付き、

「そうだよ、リツキ！あんた、好きな人ぐらい、いなかつたのかい？」

「いたでしょー？」

話の矛先が私に変わった。皆に続く質問攻めにあいタジタジだ。

「だつて、リツキ、女の私から見ても綺麗だもん。悔しいけどもあ

「わうわう。リツキのまっすぐに伸びた黒髪と、シミ一つない白い肌、ぱつちりとした一重に、小さいながら少し上向きの赤い口。初めて見たとき、驚いたわ。そのつむ、でっかい目に涙ポロポロ流して、わーわー大泣きして、よく見つやドロだらけで、こっちがビックリだつたさー」

初対面での出会いをマーサさんと笑い話として語られて、赤面する私。

「やうだよ、リツキの事、初めて見た時、思ったもん。ねえ、異世界人で、みんなこんなに綺麗なの？」

いえいえめつそうもない！

きっと皆が物珍しさに騒いでるだけだと思つ。ほら、やつぱつビンとなく漂う異国の顔立ちというか雰囲気」。けど、まあ褒められるとやっぱ嬉しいよね。照れるけどつ。

「じつちでは黒は神祕的な色として崇められてるからね。黒髪に黒い瞳なんて、憧れだよ」

「やうだよ、ついでましこーー。」

日本じや、黒髪黒目なんて、当たり前だつたし、むしろ金髪に憧れ

た。かつこじいじやん？金髪。

ふと、今朝会った不思議な金髪の男の人の事をなぜか急に思いだした。

アテレイイって言つたよな？確か。

だけど、思ひだしたのは、ほんの一瞬の事で、ぼんやりしていたら

「やーて、そろそろ戻るかね」

女中頭のアドマさんの掛け声と共に、本日の私達の憩いのお茶会は幕を閉じて皆が持ち場に戻つていった。

さてーーもつひとつ頑張りしますか！

ヒューストン伯爵の庭はだだっ広い。

そりや、もう東京ドーム何個分?といつぐらい。一人でぶらぶら出歩いたら、迷子確實間違いなし。

現に迷子になるのは、半年前に身をもつて体験済みだ。…あの時、庭を涙目でさまよう私をカリアに見つけでもらえなかつたら…と思ふと今でも怖い。

今は慣れたので、迷子になる事もなくなつたけどね。

その庭の全ての隅々のいたる所まで、手入れが行き届いているから、感動だ。ところどころに、多種多様の花が咲き乱れ、それでいてバラնスのとれた彩色の花の群衆は、見ている者の気持ちを幸せにすると思ひ。

今日の私のお仕事の担当は、庭から花を摘んでくること。そしてそれを花瓶にいけて城に飾るのだ。  
さて、どの花を城に飾ろうかしら。

私は、辺りを見渡すけど、本当にどれも綺麗。かすみ草のよう、可憐な花もあれば、薔薇のようにゴージャスな花も。みんなそれぞれに個性があつて、どれも素敵。目移りしてしまう。

ど～の～は～な～にしようか～な～?

音程外れ調子はずれの自作の歌を口ずさみながら、花に手を伸ばす。

「ちよつと待つて」

ふいに背後から声がして、驚いて後ろを振り向くとそこには、日に焼けたがつしりした体つきの男の人だった。年は私よりちょっとと上ぐらいかな？たくましい体つきで、ほんがり日焼けしていて健康的。爽やかな笑顔で、気さくな感じのお兄さん的な感じの人だった。

「今日飾る花は……つて……あんた……」

男の人は、急に私の顔を見つめて、口に手をあてて、何やら驚いている様子。

あれ？なんだらう。きっと異世界人が珍しいのかな。けど、この城で働いてもう半年だし、私の事見かけた事ぐらいはあると思うんだけど……。

「あの……」

おずおずと、話しかけた私に、目の前の男の人は、なぜか照れたのか真つ赤になつて、

「ああーすまんーちよつと。ボーッとしてたー！」

手を振りながら弁解を始め、そこで我にかえった様子で、

「花を飾るなら、ちょうど囲いの向こう側の花が、今が一番いい時だ、つて教えようとしただけなんだ。迷惑だったらすまないが」

男の人は、慌てながら、そこから100メートルほど離れた辺の辺りを指をさし、教えてくれた。  
なんと…このお兄さんは、お勧めのお花を、親切に教えてくれたのだ。

親切な人だな、と感動しながら

「ありがとうございますー早速行ってみますー」

お礼を言つて立ち去り立つとする私に、

「待つてくれ。あんた…名前は…リツキだろ? 異世界から来たつて?」

「はい。やっぱり異世界から来たつて事で、ある程度有名なんですかね? 私

苦笑しながらも答えると、彼はちょっと返事に困つたように

「いや、あんたが有名なのは、単に異世界人だからって訳ではないんだけど…」

「? ?

「とにかく…」

そこで、彼はうつむいてた頭を上げ、そらしがちだった瞳を真つ直

ぐにして私の皿を見て言った。

「異世界人ってだけじゃなく、あんたは昔から注目されているって  
ことや」

「…？？意味がわからず、首をかしげるが、まあいいや。

私はお礼を言つて、そそくわとお皿当ての花を摘みに行こうと足を  
すすめるとふいに後ろから声が聞こえた。

「また来るんだろ？明日も。城の中はいつも花を選んで飾つてるも  
んな」

「はい、当番ですが、カリ亞さんに指示されてから摘みに来てます  
飾つたお花が枯れてしまつ前に3口に一度ぐらいのペースで花を生  
けているのだ。

「じゃあ、またあんたが来た時の為に、一番綺麗に咲いている花に  
皿屋をつけておくから」

「ありがとうございます」

「…だから、また来いよー」

「はい」

「俺の名はロー・ティ、この庭の管理をしているから、また来たら、声をかけてくれ」

そう言ひとロードイは日焼けした肌に、ひとりつこい笑みを浮かべて笑つた。

私は、その名前にじこかで聞き覚えを感じながら、その場を後にしてた。

花を花瓶につつし、その花の美しさにつつとつと、じばし見つめていると、カリアが水場にいた私に急いで走つて近寄ってきた。

「大変！大変リツキ！」

「?.?.どうしたの？」

「ヒューストン子息様が、急きよ、王都から帰国したそうよ！なんでも、ヒューストン伯爵の急な用命らしくつて、昨夜遅くにつけたんですつて！」

興奮して上氣して赤くなつたカリアに私が示した反応とは、

「ふーん」

「何よおつー？ロツキの反応？…それだけっ？…」

カリ亞の反応は、あきらかに不服そうだ。

「だつて、私会つた事ないし、まあ、はつきつ語つてしまえば関係ないといつか…」

「何言つてんの！？」子息様は、年齢22歳、誰もが認める美形！すらりと高い身長！それに私たちメイドの者にも優しいし、それになんていつても、この伯爵家の跡取り！お金持ちよ！」

「…あれ？カリ亞さつき誰かの事かっこいいって言つて…」

そこまではしゃべつてカリ亞に遮られる、

「何言つてんの！？」子息様は観賞用よ…雲の上の存在よ…見かけるだけで、存在を皿にするだけで幸せな気持ちになれるお方よつ…」

…なるほど。

皿の保養的存在ね。ふむふむ。

「とにかく！」

カリ亞の声にびくつとなりつつも

「昨夜遅くにお城についたらしくて、まだ寝室らしいから、お見かけ出来るのを楽しみしていましょうね。あと……」

コホンと咳払いをしつつ、カリ亞が言つ。

「二子息様にお茶を運ぶ役目とか、二子息様に関するお仕事は、抜け駆けなしのジャンケンよつ！」

カリ亞に、いまだかつてない勢いで力説されて、ただうなづくしかなつた。

## 6 またまたトマト猫

本田のお仕事は、早番だったので、いつもよつよつ早めに仕事から上がり事が出来た。帰りきわに、カリ亞が息をきらせて急いで走ってきた。

「どうしたの？」

「今、わっせー。」トト息様に廊下でお会いしたのー。」

何やら興奮冷めやらぬ様子で、カリ亞が早口にまくしたてた。

「わうなんだー。で、どうだった？」

「相変わらず、素敵だったわー。」

カリ亞は、まるで夢の中にいるかのように幸せそうに遠い田でつぶやく。おーい。意識は戻つてますかー。カムバーックー。

しかし、カリ亞が、ここまで書いた人物なつちよつと興味があるし、見てみたい。

けど、このお城で働く以上は、いつかはすれ違う事もあるだろうから、次回から廊下を歩く時は、きちんととすれ違う人の顔を見て、そして覚えておこうと思つた。

「そつか。私もこつかは会う事ができるかもね

「わーー。その事なんだけどね…」

カリアが興奮冷めやらぬ様子で教えてくれた。

「ヒューストン伯爵様がご子息様を急に呼び戻したのはね、実は、そろそろこの城を譲つて引退なさりたいそよ。ほら、奥様の体の具合がよろしくないから、北のお屋敷のほうに何年も休養中じやない?ヒューストン伯爵様は、何でも、奥様の側でゆっくり毎日を過ごされたいらしわよ」

ふむふむ、なるほど。ここで、愛妻家判明。私の中で更にポイントUP。

「で?だから、子息を呼びもどしたのね」

「そつーそつー…つて事はつまつ…」

「つまり?」

「い子息様のお顔を見れるチャンスが増えるつて事ー。」

そうか、そういう事か。

ヒューストン伯爵も、奥様といい加減離れて暮らすのが、寂しいんだろうな。

だから、そろそろ息子に任せて引退なさりたいのだろう。しかし、ヒューストン伯爵が北のお屋敷にうつったら、私はちょっと寂しい。異世界人の私に本当に優しくしてくれた人だから。

ヒューストン伯爵のこれからのお日々自適の生活にメールを送りたい気持ちと共に、寂しい複雑な気持ちを抱えたまま、私は城を後にした。

「遅かつたな」

…招いていない客が…いた。

昨日は、ヒューストン伯爵の引退の噂話をカリアから聞き、寂しさからちよつとへこんで帰った、その翌日。

毎朝の日課の畑に向かつた私の田の前には、先客がいた。知り会つたばかりの彼、アテレイだ。

なぜ、彼がここにいるのか、意味がわからず、思考停止。しばらく考え込む。

そんな私を、まっすぐに見つめる、田の前の男、アテレイ。

彼は一休向をしてこじこじまで来ているのだらつ。

私は不信そうに、彼を見つめたら、そんな思いが伝わつたらしく。眉間に少し皺を寄せて、

「なんだ。何を考えている」

田の前の男、アテレイはなぜか、面白がついた。

何を…つて。

あなたが聞きますか。こっちが聞きたいよ。何かご用ですか？私の

煙が気になりますか？

もしや、伯爵に密告するつもりですか。

「伯爵の土地で勝手に、煙を作っている奴がいます。もはや家庭菜園レベルというかわいいレベルではないです」と。

それは、ますい。それはますいぞおおおおお。

ヒューストン伯爵の土地は、緑と花に囲まれた、まるで童話に出でてきそうな素敵かつメルヘンチックな風景なのに、実はその裏の一角にはこんな所帶じみた煙がありました、しかも無断で。なんて事が知られたら、さすがにイメージダウンにつながる。

目の前の彼を、ちらりと見つめる。

サラサラした細いハーブロンドの金の髪に、意志の強そうな蒼い空の色をした瞳。すつきりした鼻筋に、口元を少し上げ、長身に長い手足。

やつぱり美形だな、この人。立っている姿も様になつている様子。

加えて、白がベースの服装は軽装だけど、質は上物だとわかる。腰に巻くベルトも足元に履くブーツもきっと、一流品だと感が騒ぐ。この人、さりげなく身につけている品物はシンプルだけど、それで

いて素材は高級品だと思つ。

まさにシンプル イズ ベスト みたいな。

そんな事をぐだぐだ考えていて、観察を兼ねて見つめていたが、気がつくと、田の前の彼もまた、自分の事を観察していた事に気づいた。

「何を考えていた?」

おもしろそうに、聞いてきたので、あれこれ悩むより、こっちも正直に出る事にした。

「いや、ここで何をしているんだらうなあつて思つて」

ストレートに自分の気持ちをぶつけてみた。アデレイは、くくくつと口端を上げて笑つた。

「早朝の散歩の途中だ」

へえ、そりなんだ。健康的だな、この人つてば。

そんな思いを込めてアデレイを見つめる。見た感じ20代前半ぐらいに見えるが、普通このぐらいの年頃と言えば、早朝と言えば『眠い』『だるい』に加えて『あ～あ仕事行きたくねえな』じゃないだらうつか。

そしてたまにの一回酔いに。

それは、日本で育つた異世界人である、私的偏見かもしれないが。

…てことは、こないだも早朝散歩の途中だつたのだろうな。めちゃくちゃ朝型だな、おじいちゃんみたいだな。ふと実家の祖父も毎朝5時には起床していた事を思い出す。

「こつも、ここに来るのか？」

「私？私は、毎朝ここに水やりと様子を見にくるわ」

そつ言いながらも、手を動かし水やりを始める。

その間も彼、アデレイはじつと私の作業を見つめている。その視線を感じていたので、表面は平常心だったが、内心どきどきしていた。

なぜならこつ煙の事を突っ込まれるのか、詳しく聞かれたらどうしようつか、と。

態度には出でなくとも、内心は小心者のチキンハートな自分ですから。

「…そつ言えば、まだ聞いていなかつたな…」

「へ？」

「あつ、あたーーー！」

ついにきたよ、質問タイムが！

煙？煙にみえますかね？いや、自然に成長している、不思議な赤い実ですよつ。たまたま、見つけて毎日水やりしてるんですつ。そん

で『リードマート』って勝手に命名したんですよ！

「人に尋ねる時は、自分からと言つたのはそっちだろう。だから、俺は答えた。今度は、そっちの番だろう？」

上から目線の彼の言い分に、一瞬ポカーンとした。

「…はい？」

何？何て言ったこの人？

畠関係はスルーですか。ほっと一安心し、つい頬が緩む。しかし、今度は私の番とは一体何の事だろう？

## 7 遅れましての自己紹介

今度は私の番…？

今度は、そつちのほうに頭を悩ませ、つい、不思議顔になってしまった。何の事を言っているか、さっぱり思い出せないけど、何か約束でもしたつけな…。

正直、記憶にない。目の前の彼、アデレイの顔を見つめながら、考える。

風になびくハーネーブロンドの金の髪は、日に透けてより一層金色に輝いて見え、まっすぐに私を見つめる蒼い目は透き通っている。まるで、童話に出てくる王子様みたいだな…。

いるんだな、異世界には、yreやう王子様チックな人…  
漫画の世界以外にもいるんだな… 8等身の人間つて…

ぼーっと観察していたら、

「聞いているのか？」

ハツ！瞬間、我に還りました、すみません、心は違う方向に向かっていました。

だけど、約束事なんて正直覚えてない。

昨日の晩ご飯すらすぐには思いだせない私に、そんな話は無理、無

理、無理。

「二二二は正直に、

「えつと… なんでしたっけ?」

はつきりと、正直に、だけど思いつきりの笑顔で尋ねる。二二二は、おどおど申し訳なさそうに聞くより、正々堂々と聞きなおつてスマイル満点で聞くのだ。

人間開き直りが肝心。

私の満点の笑顔とは裏腹に、田の前の彼は、そっぽを向き、盛大なため息を一つついた後、私のほうに向きなおす。

あれ?

今ため息ついたよねえ?思いつきり呆れたよねえ?

そんなつっこみは心の中にしまって、二二二と笑みを絶やさず私は、笑つて詭魔化す、スマイル全開。

「…お前の名前だ」

…は？

「私の…名前…？」

「そうだ。言つただろ？、『人に尋ねる前に自分から名乗れ』と。だから俺は名乗った」

…思ひだした。

そう言えればそうだったような気がする。けど、そんな事を聞く為にわざわざここに来たの？

しかし、私つてば、偉そうにそんな台詞吐いたまま、結局自分の名前も言わずに去つた気がする。

今さらながら、失礼な事したと思ひだしてちょっと後悔しながらも、

「私の名前…？」

「ああ」

「私の名前は……」

口が開きかけた時に、ふわっと一瞬強い風が吹き、彼の髪が風に流れる。私の黒髪も同じように風に流れる、今日は風がいつもより強い日だと感じながら自分の髪を手で押さえる。私が口を開くより先に、彼が口を開いた。涼しい蒼い瞳をまっすぐに私に向けて。

「……リツキ」

「えつ?…どうして…」

私の名前を知っているの?その疑問を口にする前に、彼のほうが先に口を開いた。すごく優しい眼差しで、それでいて真剣な顔をして、「最近話題になっている異世界人とは、お前の事だろ?」

まっすぐに質問される。なんだ?最近話題つて。異世界人って珍しくもないって話しだつたような…。

「話題がどうかは知らないけど、確かにこの国の人達から見たら、私は異世界人って呼ばれるのかもしれない」

…同じ人間なのにね。

最後の部分は、自分自身に言い聞かせるかのように小さく声で下を向いてつぶやく。彼に聞こえているのかいないのかはわからないけれど。

そしてすぐ顔を上げて、彼に問う、

「だけど、どうして？それに最近話題って…？」

「…自分で自覚なしか…」

彼のつぶやく言葉に、私はますます首をかしげる。

「」の世界のあちこちに、異世界人が時おり紛れ込む。だが、神秘的な黒髪に黒い瞳を持つという人間が紛れ込む事は珍しい。それにその姿では、話題になるのは当然だろう。事の他、使用人の男達は浮足だつているとも聞いたが

黒髪に黒い瞳つて珍しいのか。てことは、日本人が紛れ込む事は稀という事？

けど、時が来たら帰る事が出来るんだよね？マーサさんがそう言つてたし。

急に不安な気持ちが広がる。いつかは帰れると思って、ここでの暮らしを楽しむなきや損だと割り切つてきたけど…

「紛れ込んだ異世界の人達って、皆いつか帰るんでしょう…？今まで紛れ込んだ人って皆帰ったんでしょう？」

アデレイは、一瞬じつと私の目を見つめて、

「… そうだな。時期がきたらな…」

フツと、誰に言つてもなく軽くよつと囁き微笑する。一瞬不安になつたが、その言葉でもつて安心し、つられて私も自然に笑顔になる。

「だけど、私は運が良かつたと思うの。ここに来て最初に出会つたマーサさんは本当に親身になって私の世話を焼いてくれた。そして、こここの伯爵様も。私は、得体のしれない異世界人なのに、快くお側で働く事を許可してくれたわ。正直、ここの人間関係には、だいぶ救われているわ」

アデレイは、またしても私の顔を見つめ、ふつと笑つた。

「… そりゃ

「ええ、そりゃ、本当にそりゃだわ」

人間、どんな状況に陥つても、何かプラスに考えられる事が一つでも多いほうがいいと思う。

自分の状況をなげいていたつて何も変わらないと思うから。

そう告げると、アテレイは、

「やうが」

「ええ、やうが」

「」の、土地の一角で自分の畠も作れたしな

「えつ？！ それは……」

慌てる私に、アテレイはくくくと再度口の端を上げて笑つた。  
ばれてる、ばれてる、モロばれやんけ――――――

だけど、それ以上追及しない彼に、何となくだけど、他言はしない  
ような気がする。

「じゃあ、そろそろ行くね

「…ああ、またな

彼は私に軽く右手を上げて、ふつと微笑んだ。

なんだ、なんだ、その仕草。やけに美男子オーラを振りまいてるけど、相手は私だぞ。無駄だ、もつたいたい。だけど、本物の美男子つていうのは、あーゆう仕草も自然なのかもしね。：美形の考えていいる事は正直よくわからんが。

しかし、アテレイ：。お城の関係者が何かか？私と同じ使用人か？いや、でも、彼の放つオーラというか気品は、一般人のそれと、ちと違う気がするが。

まあ、いいや。後で誰かにでも聞いてみよー

呑気に考えながらも、いつものように煙を後にした。

ふん ふん ふん

今日も元気に…さあ

どーのーはーなーみてもーきれいだなー

つとな。

鼻歌混じりに、歌なんて、歌つて本日飾るお花を田びとく探しながら、お庭探索。

本田の私のお仕事は、このお庭でのお花選び。  
さあ、今日の一一番のお勧めのお花はどうでひつそり咲いているのか  
な?

枝切りハサミを片手に、園庭をすんずん歩く。ああ、癒される緑の  
庭園よ。咲き誇る花に、緑に、風は心地よく、さつとマイナスイオ

ンたつぶりのお庭だ。

振り返ると、広大なお城。大きく広い歴史あるだらつ由緒正しきお  
城を振り返り、日差しを眩しく感じながら眺める。

このお城の部屋数はいつたいいくつなんだろうか。このお城で皆で  
かくれんぼでもしたら、確実に迷子だな。

「おまよつー」

ぼーっとお城を眺めていたら、後ろから声がかかったので振り返つたら、ローデイが立っていた。どこからか、走つて現れたらしく、顔がほんのり上気して赤い。

「あ、おはよひいだいいます」

頭を下げ、笑顔で朝の挨拶。これ基本。

「今日も、花を選びにきたのかい？」

「はい、そうです。それで今日は、どの花がお勧めですか？」

微笑みながら、ローデイに問いかけると、ローデイは先ほどより、もつと赤い顔になつた。あれ？

「きょ…今日は、向こうの噴水の手前に今朝咲いたばかりの赤い薔薇がある。もしなら、それがおすすめだ」

なんだかしどろもどろで、赤い顔をしながらもローデイは、噴水側に向かつて指を差しながら教えてくれる。

実は、前々から噴水側の薔薇がつぼみをつけた頃から田をつけていたのだ。一番綺麗な時に摘んで城に飾ろうと思つていたので、時期が来た事に私は喜び、お礼を言つて立ち去ろうとしたら、不意に呼

び止められる。

「あつ、あのや」

「はい？」

「今度さ……！」

「はい？」

「おれ……！」

「はい」

「おれ……！」

そこまでローデイは言つて一息ついて黙つたままだ。次に続く言葉を待つてゐるのに、なかなか言葉が出てこないらしい。

なんだらう？『おれ』『おれ』『おれ』つて。

おれおれ詐欺？？

この異世界で面と向かつて『おれおれ詐欺』はなかろうと、自分自身につっこみを入れつつも、ローデイの次の言葉を待つていると、意を決したようにローデイが口を開く。

「おれと今度、休みの日に市場でも買い物でも行かないか？」

「…え？」

「そこで、美味しい物でも食べてや」

…それははどうゆう意味だらうか。市場に行つて、食糧品の買い出しに付き合つて欲しいとか、そういう事か。

「え…つと…」

私は、返答に困る。ローティは、私の返事を待つてゐるのか、赤い顔したまま、私の目をそらさない。正直休みの日は、お世話になつてゐるマーサさんの為に、掃除したり、慣れない家事に悪戦苦闘したり、たまにカラリアと休みが合えば遊びに行つたりと忙しいんだけど、ローティは私の事を暇人だと思っているのか。だから、市場に連行して一緒に用事を足して欲しいのか。

『なんか断りにくいけど…』

迷いながらもローティを観察すると、私の返事を待つて緊張しているのが空氣で伝わつてくる。

ううう、どないしよ。悩んでいたら、ふいに、後方から声がした。

「誘われてるのか、お前」

……この声はっ！

確信と共に、後方を確認すると、声の主はやはり予感的中、アデレイだった。

なんで、こんな場所にアデレイがっ！？

私は、一瞬パニックになる。だけど頭が混乱しつつも、ハーブロンドの髪と蒼い瞳を持つ美形アデレイと、縁に囲まれ、多種多様な花の咲き誇る庭園では、あまりにも似合にすぎていて逆に私とローデイの方がミスマッチな気がしてくる。……すまんローデイよ。

ローデイは、いきなり現れた人物に驚いたのか、びっくりした顔をして声も発せず口を開けたままアデレイの顔を凝視している。対するアデレイは、眉間に皺寄せて、そんなローデイを横目で軽く見つめた。

あれ？アデレイ？

いつものアデレイの雰囲気とちょっと違うモノを感じる。そう、どっちかと言うと、不機嫌なオーラが漂つというか…微妙に何かが違う気がする。

いやいや、しかし関係ない！状況を把握したのち、

「ちょ…、ちょっと、用事思い出したので、失礼しますね…ローデイさん…」

定番の言い訳文句をしどろもどろに伝えると、不機嫌そうな顔していきなり田の前に現れた男、アデレイの袖を強引にぐいぐい引っ張つて行き、噴水の方に無理矢理連れしていく。

## 8 強制連行（後書き）

ローテイ… 不憫なヤツ…

脇役だから我慢して（笑）



## 9 自称客人

とつあえず清らかな水の流れる噴水までアーテレイを連れ出し成功。

「見かけによらず、積極的だな」

「は！」

「だが…。そういうのも嫌いじゃないぞ」

先程までの不機嫌そうな様子はどこへやら、ハーブロンドを光に輝かせながら、蒼い瞳の目尻を下げて、嬉しそうに視線ぶつけてくる彼の発言に思いつきり眉をひそめて

「…何を言つてゐるのか、まるつきり意味不明だけど

彼の思考回路は一体どうなつてゐるのか。意味不明なイミフー発言は、この際スルーして、

「…ていうか、何でここにあなたがいるわけ？」

アーテレイはふふんと鼻で笑つて、

「俺がここにいちゃ悪いか？」

「こやこやこやこや、まあいでしょー！」

アデレイイつてば、アデレイイつてば、もしさ朝の日課の散歩の途中でそのままふらふら庭園にまで迷い込んだんじゃないだろうな。ここは、ヒューストン伯爵の土地だよ、関係者以外まずいつて、何回も言つてるでしょう！朝の散歩の途中で迷いこんで帰り道わからなくなっちゃったなんてさあ、徘徊老人じゃないんだからさあ！しつかりしてよね！

「ここは、ヒューストン伯爵の私有地よ。関係者以外は立ち入り禁止だよ。見つかったら怒られるわよ！」

「じゃあ、問題」

私の焦りと裏腹に、さも愉快そうに呑気にアデレイは、私に向かって立てた人差し指を揺らして、

は？

「俺がここにいても怒られる事はない」

思いつきり不審人物ですけど、その自信はどこから来るんだじょつか。

「だけど、怒られないのには、理由がある。その理由とは何だ？」

怒られない理由？

何だソレ。

アーテレイは、ここにいても怒られる事はないし、不審人物扱いを受ける事はないという事か…。

そしてその理由は何だと思つ?つて、どうやら私に聞いているらしい。なぞなぞかよつ。全くアーテレイめーもつた!いふりやがつて!

そう思いつつも、アーテレイが楽しそうなので付き合つてもいる事にする。

田の前のアーテレイの様子をじっと観察して、ひらめいた。

「まさか!」

「わかつたか?」

「今日から、JINのお城で働く事になった、とか？」

ふいに思いついた事を自信たっぷりにアーテレイに言つ。

アーテレイは、一瞬私の答えを飲みこみ、考えた後、急に吹き出した。そして吹き出した後、笑いが止まらないという感じで楽しそうに笑つていてる。

いつもの含み笑いではなく、心底楽しそうに声を出して一人で笑つていてる。

なんだ、失礼な奴だな、その態度。

むつとくるが、その反応を見ていると、私の出した使用人説は消えたな。あとは……。

「もしかして……JINのお屋敷に招かれたお姫さま……とか」

そうだ、よく見る、私よ。アーテレイの身につけている物は、全て素材は一級品ではないか。会った時に感じた違和感をもう一度自分の中で思い出せ。彼の容姿、装飾品等からといって、ただの使用人ではあるまいと。

未だに愉快そうに笑つてているアーテレイは、

「…まあ、そんなとこかな？」

なんて、口端を片方上げて、あいまいに答えた後、またもや愉快そうに笑っている。人が真面目に答えたのに、なんのさ、その態度。そもそも捕まると悪いから心配してやったのに、心配して損をした。

「不法侵入だと思つて捕まると悪いから心配してやったのに…」

ぼそりとつぶやいた、その言葉を聞いて、ますます面白そうに笑う彼は、どうやらジボにはまつたようだ。この際、笑い上戸の彼はそつとしておいて、自分の仕事を全うさせる事を優先する事にした。

噴水の手前側には、ローテイが教えてくれたとおり、真っ赤な薔薇が咲き誇る庭園が広がる。薔薇のアーチなんて、本当に見事だ。薔薇の香りが鼻をくすぐり、その薔薇の香りにクラクラするぐらい酔つてしまいそうだ。この庭に、ずっといたら、私自身が薔薇の香りを身にまとう事になりそうなぐらいだ。

一面に敷かれた緑の芝を背景に、咲き誇る真っ赤な薔薇達は、激しいぐりこに己の存在感を示していた。

私は、田ざとく狙いをつけた、一番大輪の花びらを咲かせている薔薇に手をかけた瞬間、

「痛つ…」

指先に激痛を感じ、反射的に薔薇の枝から、手を引き抜く。どうやら、視界に入らなかつた鋭い薔薇の棘がうつかり刺さつてしまつたらしい。

私の人差し指から、一筋の血が道を作つて流れる。その道すじの色はまさに薔薇と同じ色。薔薇と同じ色の道すじが、私の体から流れ行く…不思議な気持ちで自分の人差し指から流れて行く深紅の道すじを見つめる。

その様子に気付いたのか、愉快そうに一人笑つていたアデレイがふいに真剣な顔して近づき、

「見せてみる」

私の右手を有無を言わさず掴み、人差し指の傷口を見つける。

「ああ…これは、結構深く刺さつたな」

そう言うといきなり、私の人差し指の傷口を指でなぞつた。

一瞬、痛みがチクリときて、顔をしかめるけれども、アデレイに、されるがままでその様子を見つめていた。

次の瞬間、アデレイは、私の指を自分の唇で優しく口付けた。

えつー?と思つたのもつかの間、

「薔薇は、棘が鋭い。気をつけないと痛い目にあう」

それは、一瞬の仕草だったけど、私の目を見つめたまま言つと、唚然としている私に向かつて、なんて事もないような自然な様子で微笑んだ。

私の右手を掴んだまま、微笑む彼を見つめたまま固まる私。

そして、そのまま、ふいに力をこめ、私の右手を力強く引き寄せた。一瞬の事だったので、バランスを崩し、私は前につんのめり、結果的にアデレイの胸元に飛び込む形になった。

薔薇の香りが広がる園庭で、薔薇以外の香りが私を包み込む。

弾ける水しづきのような爽快感を思わせるベルガモット系の香りは、透明感と力強さを併せ持つ香りで、私を包み込むのは、その香りだけではなくアデレイ自身でもあるとようやく理解して顔を上げると、彼と目が合つた。

彼は私のその姿勢が、まるで計算どおりだったとでも言つよう、再度不敵に微笑みながら、真正面から私に問つ。

「あれに、何を誘われていた？」

あれ？あれって、もしゃローディですか？アレ扱いですか。

いや、それよりも、何をするつ……！

そう口にするより前に、アテレイは私の腰を引き寄せ、気がつきや、アテレイの力強い腕と見かけよりもずっと厚い胸板に包まれていた。

## 9 自称客人（後書き）

ジェラシーアテレイ、手が早い（苦笑）

お付き合いありがとうございました。

10 薔薇と反撃（前書き）

リツキの反撃、カウンター作動します。

え……この体勢……！

ぐんと、近づいたアデレイとの距離と、私を包みこむ薔薇とは違う香りに焦った私は、

……パンツ……！

乾いた空気を裂く音、何かにぶつかる音が晴れた青空の下、響き渡る。

一瞬、アデレイが驚き、腕の力が緩んだ様子が伝わってくる。どうやら自分の頬が打たれたと気づくよりも、呆気にとられているのかもしれない。

その隙をついて、アデレイの元から走り抜け、後退しながら距離をとる。アデレイは、打たれた左頬を抑えながら、口を開きかけたので、そんなアデレイを遮つて、私は想いをぶつける。

「何するのよ……」のエッチ！ ハロ！ ハロス！」

私は鼻息荒く、まくしたてる。

もちろん顔面真っ赤になりながら、先程、アテレイの唇に口づけられた私の人差し指を自分のスカートでぐいぐい擦りつけ、拭きながらだ。

このお城のお客様だか何だか知らないけど、いきなり、何しゃがんでえええ。

いくら美形だからと黙つて失礼にも程があるわつー。こっちの世界の貞操感がどうなつているかどうかわからないけど、私は私、乙女の純潔、自分で守るのみ！

拭き終わつた人差し指をアテレイに向かつて突き付け、声も高々に言い放つ、

「例え、綺麗な薔薇じゃなくても、棘はあるもんなんだよー覚えておきなよつー……アテレイーー！」

薔薇だつて、棘は自分の身を守るもの。たとえ薔薇ほど綺麗じゃなくとも、自分の身を守る為なら、棘を出すんだからね、私はっ！最初、私の勢いに呆気にとられていたのか、大人しく聞いていたアテレイは、よつやく事態を理解したのか、口を開く。

「初めて…」

なんだよ、なんだよ、まさか『初めて女に叩かれた』とでも言いつわ  
け？

そりや、残念でした！いくら美形でも、万人が万人才オールオッケー  
ではないのだ。

初めての挫折に打ちひしがれて、己の行動に後悔するがいい。アデ  
レイの言葉の続きを、少し緊張した面持ちで待つ私に、アデレイが  
口を開く。

「初めて……呼んだな。俺の名を」

……はい？

……今……なんと？？

叩かれた事より、拒否された事よりも、そっちですかい！

アデレイはハニーブロンドの髪を風になびかせながら、やけに、満足げな表情で爽やかな笑顔を私に向けて笑っている。

……アデレイ……。

初めて女に叩かれておかしくなってしまったのかもしれない、本気で心配した。

先程の薔薇園で意味不明に無敵に微笑む自称・客のアデレイを放置して、私は大輪の薔薇を抱えてお城に戻ってきて、水場にて花瓶に飾る。

花瓶に飾りながらも、さつきの出来事を反芻していた。

庭園からの去り際、この際アデレイを無視して薔薇を選んで、枝切りハサミを大活躍させていたら

「今日は薔薇を飾るのか

……

もつ、この際、めんべくさいのでシカトしていたら

「薔薇とはいی選択だ」

「…？ なんで？？」

やばつ。つい好奇心に負けて、口を聞いてしまつた。シカトするつて決めたばつかりなのにいい。

「俺が好きな花だからだ」

…はい、わかりました、左様でござりますか。自信たつぱりに言つアデレイに、返す言葉がない。

しかも、そこで自信たつぱりなところが、全くもつて、意味不明のイミフー君だ。

確かに、薔薇がとても似合つ容姿ですけどね。薔薇庭にたたずみアデレイは、薔薇に負けていないぐらい綺麗な顔立ちだ。…というより薔薇を常に背負つていつも現れる気がする。そこまで華やかな人…つて事だけだ。

口を開くと残念な人だけだ。

摘んできた薔薇を全て花瓶にいけ、お屋敷の所々に飾る。かすかに廊下に香る薔薇の香りが良い感じ！我ながら、グットチョース！なんて、自分で褒めたけど、本当はローデイのおかげだ。

…あれ？ そういうや、ローデイにさつきは誤魔化しながら、その場を離れたけど、きちんとお礼を言つたっけな？

なんだか、自信がないけど、まあ、いいや、今度会つたら、きちんと

と謝つて、薔薇のお礼を言わないとな。

「あつ！戻つてきちゃつた！」

「ええ～！ライバルは少ない方がいいのにーー！」

給仕室に入った途端、その場にいたメイド仲間全員が一斉に私を見て、騒ぎまくしてたる。

え？ 私なんかしたつけな？

「ほり～！そんなトコにぼけつと立つてないでー！リツキも参加だよ」

カリアが前に出てきて、私の手をひっぱる。私は、何がどうなっているのか、わからないまま、されるがままに引かれて皆の輪の中に自然に入る。

そこでカリアが咳払いを一つ、

「えーでは。土壇場になつて、ライバルが一人増えましたが、時間がないので、手短に行きます」

皆の空気が真剣なものへと変わり、一瞬で空気が重く張り詰めたのを感じる。周囲にはカリアの真剣な声のみが響き渡る。

「では、行きます」

皆がじくじくと、唾を飲み込むのがわかつた。その次の瞬間、カリア

が大声を張り上げる。

「恨みつらみはナシの正々堂々の……」

皆が真剣だ、私も身を固くしてカリアの声をしつかりと胸に刻む。  
張り詰める空気……！

「本日のJKT様にお茶をお出しする権利です！！

……では、ジャン、ケン、ポイ！……！」

皆が一斉に各自の勝利への願いを込めて、ジャンケンの手を差し出す。つられて私も、つい条件反射で……。

「きや――！」

「またダメだつたあああ――！」

名々々の叫びが聴こえる中、じつと手を見る、自分の右手。どうしう、成り行きとは……

「えー、では、恨みつらみはナシにして、今回はリツキに決定です

コホンとカリアが皆に言へ渡すけど、皆怖いよおおお。かつき恨みつらみはナシって言つたよねえ？

正直、ご子息様のお茶の権利とか、あんまり興味が……。やつ思つ、ここのは穩便に

「私、今日は辞退…」

「ダメよつー」

「ヒロカリアにきつべ毗うれる。

「平等に決めた事だから、行つていらしゃいー本当は、ワイロ渡してでも交代してもらいたいけどさ、そつしたる旨にするこつて責められちゃうから、リツキが行つてきなきこー」

…はー。

あと3分でも、遅かつたら、参戦しなくても良かつたのこ、自分のタイミングの悪さを呪うわ、私。

しかしアーテレイには、ちつとも反撃とも思われてない様子！  
残念でした。

## 【番外編】～それぞれの休日～（前書き）

お気に入り登録ありがとうございます

今回の番外編は、物語の始まる前の設定です。  
書き進めるうちにリシキが、おっさんになってしまった。

なので、見たくない人は注意です（汗）

## 【番外編】～それぞれの休日～

「なあ、お前もう見た？」

「アレだろ！？見た見た見た！もう俺ビックリしたのなんのって」

「だろー！？」

市場の隅にある、いつも常連で賑わうこの酒場は今日も常連客で賑わっている。そんな酒場の隅に男達が三人。アルコールを片手に最近話題の話に華が咲く。

「俺なんてよおー、この間バケツの水ひつくり帰した場面にたまたま  
出くわしてしょ、チャンスとばかりに手伝ったんだぜ」

赤毛の青年は白慢げに話しかけると、

「お前、それ水ひっくり返すようにわざと仕向けたんじゃねーの？」

やつかむかのようし、隣のそばかす顔の青年が語つ。

「いや、俺は何もしてねえって！だけどよ、床が濡れたのを手伝つて拭いてやつたらよ、『ありがとうございます』って、かわいい顔で笑つてお礼言つたんだぜ！」

そこで赤毛の青年は思い出したかのように、田尻を下げてでれでれと笑う。そばかす顔の青年も負けじと反論する。

「バッカ！お礼言つなんてそんなも当り前だろ？！たいして珍しくもねえーっていつのー！」

そこで赤毛の青年も負けとはいひない。

「はあ～？じゃあ、お前はしゃべつた事があるのかよ？」

そう聞くとそばかす顔の青年は胸を張つて

「ああ、あるぞ！俺なんてこの前、重いカゴ持つて歩いていたから自分から進んで『持つてやるぜ、貸しな』って、荷物運んでやつたんだからな！これで俺の株も上がるの間違いねえって！」

赤毛の青年は黙つて聞いていたが、アルコールをグイッと飲みほすと、

「はあ～？『なんてキザなヤローだ』って思つたに違いねえぜ！」

「なんだとー？お前みたいにお礼言われたぐらいで喜んでる男に言われたかねえな！」

「なんだとー！」のキザヤローー！」

〔冗談から段々ヒートアップしたムードになつてきたのを感じた瞬間

「ストップ！」

一人のよく日に焼けたやわらかい茶色の髪の青年が立ち上がり、仲

間の2人を止めにかかる。

「2人とも、もうやめなつて。俺から聞いていたら、びつちがびつ  
ちだし、ぐだらない事で言にあいなんて止めよつぜ」  
「ばつちがつ

そこで赤毛とそばかすの青年は声をそろえて

「「「ぐだらない事ーー?」」

「ああぐだらない事だろ、びつせ」

「お前、俺たちが何の話してゐるのかわかつてゐ?」

と、赤毛の青年が問い合わせ、

「いや?わからん」

と、茶色の髪の青年が答へ、

「お前…まだ会つた事ないだろ?」

とそばかすの青年がため息と共に囁ねる。

「つて誰に？」

「……」

「……」

そこで赤毛の青年とそばかすの青年は顔を見合させ、盛大なため息を一つついで、茶色の髪の青年に向かって言ひ。

「……お前も一度会つてみるといにわ。ヒューストン伯爵の城で働く異世界からきた娘を。

そしたらきつとお前も俺達の話題に入つてこれるだろつな、ローデイ

「

いきなり一人は、うなずきあいながらローデイを『可哀想なモノを見る目つき』で見る。

『何なんだ！ 何で俺が同情されなきやいけなんだ…』

理不尽に思ひながらもローデイは酒をかづくらつ。かづくらついる間も2人だけの会話は尽きない。

「あのサラサラして真つ直ぐな黒髪に、白い肌に、まるで人形みてえだ」

「ああ！ 肌は白く透き通つてゐし、黒い瞳と対象的でいつそつ綺麗に見えるよな」

「手も荒れていないし、さつと異世界では働いた事がないよつな良

い所の娘だつたんだらうなあ…」

「やうだらうな。…けど頑張つてゐよな、今」

話に入れないローディは、一人黙々と二人の話をつまみに酒を飲みすすめるしかなかつた。

「今日も良い天氣だ――！」

私は、晴天の元トマト畑に朝から来ている。本日お休み、フリーターアイム。

…なので、今日はトマトの株分けをしてトマトを増やしていきたいと思ひます。

名付けて『トマト増量大作戦』です！ハイ！そのまんまです。

とりあえず事前に借りてきたクワを片手に土を耕す。

しばらく耕していると鼻の頭につつすら汗をかいてきたので、首にかけてあつたタオルで汗をぬぐつ。ああ労働の汗つて素敵。コンクリートジャンゴーだつた元の世界とは大違ひだわ。人間やつぱり縁とか自然つて癒されるわ。

私は、汗を拭いたあとタオルを首にかけようと思つたが、

そろそろ口差しが強くなってきたので、タオルを帽子かわりに頭にかぶつた。ほつかむりの出来上がり。

調子づいた私は、そのまま鼻歌歌いながらクワで耕して進む。

「完<sup>アヘ</sup>」

クワで耕し、トマトの苗を植えて水をやり、満足気に畑を眺める。そろそろ日も高くなってきたし、本日の畑仕事はこれで終了するか。片づけを終え、私は自分の畑をもう一度振り返る。赤いトマトはまだ小さいながらも、ちゃんと実をつけている。

もっともっと実るといいなあ、と期待を込めると同時に

「……しつかし……だんだん大きくなってきたな……この畑」

当初の予定より広がりつつある畑を眺めて苦笑しながら、クワを肩に担いで畑を後にした。

【番外編】～それぞれの休日～（後書き）

名前のない赤毛の青年だのそばかす顔の青年だのに囲まれていると、ローディ、名前が出ただけ主役のような感じですが、本編では立派な脇役です。

リツキ……おっさんやん…

人は見た目じゃわかりませんねー。

紅茶道具一式の用意されたカートを押しながら、進むべくは、ヒューストンの子息様のお部屋の前へ。

ああ気が重い。

皆が羨ましがる中、一人重いカートを押して進む子息様の部屋までの道のり。

このカートと私の気持ちのどっちが重いかしら。皆が羨ましがるけど、私的には、コレ何の罰ゲーム？

なぜなら礼儀作法にはあまり自信がない。

だって、『お茶の時間』って簡単にいつたって、お茶にはいろいろ種類があるらしいのだ。それこそ、なんとかの葉っぱと、かんとかの葉っぱを、7対3の割合でブレンドしてとか、どこの産地の紅茶の葉は甘めで、この産地の紅茶の葉は渋みが強い、とか私にはわざとばかりで、ちんぷんかんぷんだ。

すじこよ、皆さんの知識、紅茶のマイスターになれるよ。

だいたい、日本で育つた私には、『お茶』といえば、『ンビニで買うペットボトルのお茶だ、おー、お茶とかね。』んな葉っぱからブレンドして、しかもティーポットで入れた事は、人生において

片手で数えるほどしかないかもしれない。

本当に大丈夫か？私。

急に不安になる。一応、マーサさんは、この世界に来た当初、お茶の入れ方を指導してもらつたのだが、正直、あまり自信ない。今来た道を、カートを押してそのまま、まわる右つて引き返したいぐらいだ。

カタカタとカートを押して進む、直線状のだたつぴろい、なおかつ広い廊下は、高級なシックな赤い色の絨毯がふかふかしている。このふわふわ具合なら、私なら床でも寝れると思う。

あらかじめ教わっていた、「*子息様の私室*とやらの田印のファンファーレを意味するラッパのシンボルがついた扉を見つけ、そのラッパのシンボルの素晴らしさに息を飲む。

『ラッパのマークの正露丸』

一瞬、そんな事が思い浮かんだが、正露丸が扉に張り付いている訳ではない。当たり前だ。その精巧で何だかめでたい造りのするラッパ

の彫刻から、緊張度が増したような感じがする。ここは、息を一つ、吸い込み、教えられたとおりに、ドアを3回ノックする、ええい、ここまできたら、女は度胸だ。

その人は、窓辺にたたずみ、本を読んでいた。

私のノックに軽く一言返事をし、部屋に入る事の許可をくれた。

部屋に入った瞬間、部屋の広さ、豪華さは、田を見張るものがある。だけど本当はもつといろいろあつちこつち觀察したい気持ちを抑え、職務を全うするべくカートを押し部屋の隅へと進む。

話題の「子息様は、今は読書に夢中で、私の事は眼中にない。アウト・オブ・眼中つてやつですね。

「子息様の、視界、しいては、興味の対象に入つてないのを良い事に、今のうちに仕事を終え、さつさと退散するべく手元の紅茶の用意を急ぐ。

確か、この葉っぱを3の割合で、1つちは7の割合で用意して、言われた分量をティーポットにそそぎ、しばらく蒸らす。その間もティーカップは温めておいて……と、何だか一人でテンパつたけど何とか一通りの用意は出来た。

ここまで来たら、ホッと一息、あとはマーサさんに教わった通りに、数分蒸らすだけ。

「ここまで来て、ようやく『子息様の姿を視界に入れる余裕』というものが出来てきた。

栗色の柔らかそうな髪に、優しげな大きな瞳は、夢中になつて目の前の本に注がれている。鼻筋も整つていて、口元は、優しく引き締まり、窓辺にたたずむその姿は、まるで一枚の絵のようだ。

『うわあ。これは、カリア達が騒ぐのもわかるわ。見て納得』

実際、ヒューストン伯爵の面影もあり、伯爵の若い頃が少し想像できた。『子息様が、歳を召して渋みとダンディさをプラスすれば、今のヒューストン伯爵様の出来上がりって感じかな。』

『しかし、『子息様つてば、伯爵様の『コボリだわ』

男性にしては、可愛らしい系の顔立ちで、線は細めで、まるで童話に出てくる王子様みたいだ。

白いブラウスに、ハーフパンツ丈のグレイのパンツに茶色のブーツを履いている。そのブーツの飾り具が銀色に輝きをはなっている。

フリフリレースのブラウスとか、小さな王冠を頭に乗せたら似合いそう。うん、絶対似合いそう。下手したら、かぼちゃのパンツも似合っちゃうかもしれないな。

白いタイツも似合ひそう、……うん、よし、『王子様なら許せ』。

そんな事を、考えていたら、紅茶のいい香りが鼻につき、慌てて温まつたティーカップを用意して、お茶を注ぐ準備をする。やばっ！あんまり時間をおきすぎると、渋みが出るつてマーサさんに口を酸っぱくして言われたのに、はやる気持ちで、あわてて紅茶を注ぐ。ティーカップに紅茶を注ぐと、これまた良い香りが部屋中に充满した。

『さすが、高級そうな紅茶の葉っぱ。丁バッグとは違うわ』

私は感心しながら、紅茶の他に甘いお菓子を添える。焼き菓子もなんだか上品な出来上がりのフィナンシェで、私なら一口で食べれるだろう。このお皿全てのフィナンシェも3分で食べ尽くすことが出来るだらうな、などと想しながらも準備完了。

さあ王子様よ、味わってくれえい！

と言わんばかりに『王子様』に声をかけるべく顔をあげた瞬間、目があつた、王子様…いえ『王子様』と。瞳がぶつかる。

今までの私の作業、一人でお茶を用意するまでのテンパッた様子が見られていたかと思うと、恥ずかしく感じるとともに、何か失礼

な態度をとつていなかつ不安になる、たとえば、甘いお菓子を食べたそつに見ていた、とか。

私と田が会つた瞬間、何かに弾かれたよつて、一瞬驚きの顔をして、その後まじまじと私の顔を見つめた。

私は、初対面の「」子息様に穴があくほど見つめられ、この場から逃げ出したい心境。

「あの……」

おずおずと顔を出しだが、「」子息様は私を見つめたまま動こうとした。私は、頭に「？」と浮かびながらも、困惑した表情を浮かべていたと思つ。

「」子息様は、柔らかそうな栗色の髪に、田の色は、薄紫のすみれ色だ。そのすみれ色の瞳は、くづくづとした大きさで、私の事を見つめている。

その眼差しは、なんといつか、その…

『とつても興味あるものを見つけた』

そんなニコアンスの瞳で輝いているよつて、見えるのは、私の気のせいだろうか。

その興味の対象も、色恋とかじやなくて、例えていうなら都会の小

学生が、カブトムシを見つけたときの瞳の輝き… そんな例えがよく似合うような輝きだと思う。

しばらく、カブトムシになつた気分で「子息様の視線をずっと浴び続ける。

「君が… 異世界から…」

ああ、異世界人が珍しいのか。やっぱり気分はカブトムシ。



「子息様から、薄紫の瞳の真っ直ぐな視線を受けて私は、うなずきながら

「はい、やつです。リツキと申します」

よろしくお願ひいたします、という意味を込めて頭を下げる。

ついでに言つと、『ほんとうに、お宅のお父様にはお世話になりました』

などと、言ひだしたかつたが、おばちゃん風なので厚かましいと悪いので、やめておいた。

「さうか、君が…。いや、まじまじ見つめてしまつて失礼。だけど、なるほど。皆が騒ぐだけの事はあるし…なにより彼が気にかけるのもわかる気がするな…」

なんだか、独り言のようだ、私は意味もわからなかつたが、とりあえず微笑んでおいた。

「ああ、『めん、僕は、』のヒューストン家のラインナルトだ。よろしく」

すみれ色の薄紫の瞳を私に向けて優しい笑顔で挨拶してくれる。なんて紳士的…！

なんてジョンナルメン……！

「うえ、あの…」ハーリー、よろしくお願ひします

私は慌てて、頭を下げる。伯爵家の「」長男ともいふ方がただのメイドにわざわざ皿口紹介をして、挨拶までしてくれる、そんな出来事に私は感動していた。

「ハハハ、」のヒーストン伯爵家に雇われて幸せだと思つ。

「何をしてる」

不意に後ろから最近聞きなれた声が聞こえると同時に、扉を力強く開け放つ音と人の気配を感じて振り返る。声の主は金髪のハニー・ブロンンドが口に当たり、透けるような金の糸のようにまぶしく輝き、蒼い空色の瞳は、輝いてこちらを見ている。

まるで、彼もおもしろい興味の対象を見つけたように、空色の瞳は嬉々として輝いている。

アテレイだ。

アテレイがいた。

つて事は『子息様の知り合いか?』といつよつ『子息様のお客様つて事なのか。ノックなしで』『子息様の部屋に入つてこれる程親しい間柄つて事だよな…。

### 「アテレイ」

『子息様が声をかける。その声に反応し、軽い微笑みで視線だけを』『子息様によこして、あとは無言でおもしろそうな田でずんずん私の田の前まで、近づいてくるアテレイは、まるで網をもつてカブトムシを捕まえに来た捕獲者のようだ。

距離を詰め田の前にやつて来るアテレイに、姿勢は引き気味。なんだ、なんで近づいてくるのだ。一瞬ひるんだが、

「何やつてる?… つて言われても、『子息様にお茶をお出しして…』

そうだ、アテレイ、私の本来の仕事はメイドだよ。トマト畑にいるのは仮の姿の趣味の世界だよ。

こつちが私の本職なのよ、忘れないでもらいたい。

全部言い終わらないつむじアテレイは

「紅茶」

「はい……？」

「紅茶」

「……」

……紅茶つて一言かつ！もつと別の言い方あるだらう。「紅茶が飲みたい」とか「紅茶が欲しい」とか。私はあんたと長年連れ添つた夫婦じやないんだよ。一言で通じる仲には、まだまだ遠いつていうの！まつたくアデレイめ。先程の「ご子息様の紳士的な態度をちょっとは見習つて欲しい。

……でも、ここは我慢我慢。彼は、お客様、ご子息様のご友人。怒りを抑えつつも先程の手順で、紅茶を用意する。ティー・ポットから沸き立つ紅茶の葉っぱの香りが、心地よい。高級そうなティー・セットを一客出して、紅茶を注ぎ入れ、焼き菓子を用意する。

そして、目の前で待つアデレイに無言でぐいっと差し出す。

さあ飲め、心おきなく、味わいたまえ。

アデレイも無言で紅茶のセットを受け取ると一口、口にした挙句

「洪」

「まず、ティー pocca に入れてから時間が立ち過ぎた。これでは、香りが半減し、味も渋みを増す」

「そうだったのか！しかし、アデレイめ！ただの変わり者では、なかつたようだな。

あなた紅茶の「マイスター」になれるよ。

そう言われた瞬間、はっと顔を上げ

「うーん、子息様！すみません、先ほどの紅茶は飲まないで下さい。」

ご子息様は、優しく微笑み

「大丈夫、僕には十分に美味しかったよ。しかし、アデレイは紅茶に厳しいね」

お世辞だらうかもだけど、美味しこの一言にほつと胸をなでおろす。  
しかしへ「子息様の優しさはお父上譲りでしょつか？」それに比べて…

「… 濃いものは濃い」

はつきりと断言した台詞を聞いた私は、一瞬ケツという顔をしたと思つ、つてこいつ出した。それに田代とく飯付いたアーデレイが

「何だ、その顔」

何だと言われましても、だつふんだ。たとえ「子息様の」友人だとわかつても、先ほどの園庭でのHロスな態度を忘れてはいな「いぞ、私は。

「… いえ、別に」

「… 何だ、可愛げがない態度だな」

「はい、可愛くないです。ありがとうございます」

嫌味を込めて、台詞棒読み。

私とアデレイのやり取りを、『子息様は私とアデレイの顔を交互に見つめながら興味深そうに眺めていた。  
…というより、絶対おもしろがってる。だつて薄紫のすみれ色の瞳は楽しそうに輝きを増して口元は笑いをこじらえて歪んでる。

アデレイは私の不機嫌な態度の理由をちつとも気にしていない風で、それがまた腹の立つ。  
このマイペース人間め。

「まあまあ、二人とも仲良ぐ、仲良ぐ。前から知り合いみたいだし？ケンカするのは仲良しの証拠でしょ」

『子息様のからかうような台詞を受け、

『仲良くなんてありませんー』

つて、全面否定の言葉を『子息様に叫びたかったが、怒鳴る訳にもいかず喉まで出かかった声をぐつと抑える。

『アデレイ、否定しろー！』

と尊の相手のアデレイを眼力で訴えてみたが、効果はちつともない  
よつで、どこ吹く風の涼しい顔だ。  
しばらくすると、私の眼力に気がついたらしく

ん？

なんて、首をかしげて甘い微笑みを向けてくる。ちょ… むやみに笑  
顔を向けないでくれる？アデレイ、中身は残念だけど、外側は極上  
なんだから、その甘い笑顔に、不意打ちだとドキッとするじゃない。  
アデレイ相手にドキッとくるなんて、不覚だわ。赤くなる顔を隠す  
よつにアデレイから顔をそらす。

… って空氣読んで否定しろつー！アデレイ！

## 12 紅茶の時間と乱入者（後書き）

アーテレイにとつて、空気は読むものではなくて吸うだけのものです。

### 13 誰の紅茶の時間？

わたしが赤くなつた顔を隠すように、後ろを向いていたら何だか、背後から心地よい香りがしてきたので振り返つてみるとアデレイがいきなり無言で私に紅茶のティーカップを差し出してきた。

え？ これってどういう事？

「アデレイが君の為に紅茶を淹れてくれたから遠慮せずにどうぞ」  
ご子息様が、ティーカップをアデレイから受け取り、テーブルに置いて、さりげなくソファーに座るように勧めてくれる。

え… でも私… お仕事中ですから…

戸惑いを隠せないでいると、

「立ちながら飲む紅茶より座りながらリラックスして飲むほうが美味しいよ。ね？ アデレイ」

話を向けられたアデレイも、座れと言わんばかりにソファーに視線を送る。

ええ？ でも、ご子息様もアデレイも田の前に立たれていて座っていないのに、私だけ座れと？ それは、無理だよ。

「いいから座つて。ほひほひ、遠慮せざ」

「子息様に勧められ申し訳なく思いながらも、ソファーに腰かける。ソファーの感触は、もうふつかふか。

目の前のテーブルに置かれた私に淹れてくれた紅茶を手に取り、恐る恐る一口飲む。

もちろん、間違つても、紅茶をソファーにこぼしてシミなど作らないように細心の注意を払つて、だ。

元が庶民なので、こんなふかふかソファーなんて座つた事ないし、逆にリラックス出来ない氣がするのは僕のせいではないはずだ。

「美味しい」

口の中に広がる紅茶の香りに、体だけじゃなくて心も温まる氣がする。

「良かつたね、アデレイ」

「子息様が、アデレイに向かつて微笑む。アデレイは涼しい顔でご子息様と自分の分の紅茶をティーカップに注ぐ。部屋中に広がる紅茶の心地よい香り。

本来、紅茶つてこんなにいい香りを出すものなんだ、と感心した。しかしアデレイ、自分で紅茶を淹れるとは、やるな。さすが紅茶マスター。

「あ、良かつたら、リツキこれも……」

「J子息様から、差しだされたのは甘いお菓子のフィナンシエ。

「えー」

「いいんですか?」と言いたかったが、それは無理でしょう。それはご子息様の分です!

と、J子息様は察したのか

「良いんだよ、一人じゃ食べきれないし、甘い物はそんなにたくさん入らないし、ここで食べなかつたら捨ててしまふんだろうし。それなら作ってくれた人に申し訳ないから食べてくれるとありがたいな」

でも……でも……

「美味しいー！」

結局、甘いお菓子の誘惑に負けて食べてしまった。

ち…違つて…これは…」子息様が頼むから…業務の一環よ…  
だけど、このフィナンシエ、バターの味がしつかり出ていて甘さも  
ちょいどいい。確かに上品なお味だわ。

遠慮なく口にいれた後、率直に美味しいと感じたままの感想を叫ぶ  
私に

「…一口か」

アデレイが呟く。その隣に立つ「子息様は微笑みながらも

「さあ喉につかえると悪いからアデレイの淹れた紅茶をもう一杯飲  
んで。それにそんなに慌てて食べなくてもまだたくさんあるから…  
ね？」

いや、「めんなさい、」子息様。これ私の普通です。そう思いながら勧められるまま紅茶2杯目を飲み干す私。  
美味しい紅茶とスイーツと美形な一人に囲まれてティータイムなん  
て幸せだわ。例え一名、中味がちょっとアレでも。

しかし…

何この高レベルの執事カフェ・イン・異世界。

やばいわ。元の世界に帰つたら、私執事カフェとか通つちゃうかも。常連になつちやうかも。

しかし、ここまで高レベルな執事の組み合わせつてそつそつないんじやない？

一人は、かわいらしい感じの美形の執事で物腰は柔らかく、薄紫のスミレ色の大きい瞳は興味深げに動き、行動はレディーファースト。もう一人の執事も綺麗な整つた顔つきの美形で髪はハニー・ブロンドに、蒼い空色の瞳でとつても美味しい紅茶を淹れるのが上手。

こんなタイプの異なる美形執事2人に囲まれてのお茶なんて、そうそう飲めることなどないわ。一生でもう最後かも…。

ほつと一息至福の時…

つて…

「子息様とその客人（仮）を前にして、ソファーに腰かけ紅茶に、焼き菓子まで食つてくつろいでるメイドがどこにいるんだ！！！」

…つて私だよつ…………！

穴があつたら入りたい。メイド失格じゃ！！執事カフエとか萌えてる場合か！？私！？  
ノンノン、そりや違うだろ～～！

我に還つた瞬間、自分の愚かさに目まいがする。

「本当にすみませんでした！」

「なんで謝るの？気にする事なんてないのに。ね？アーティ

あれから、私はソファーを飛び跳ねて立ち上がり、平謝りだ。  
これじゃあ、誰のお茶の時間だかわかりやあしない。

「けど本当に美味しかったです、紅茶。私ももうと美味しく淹れる  
事が出来るように勉強します」

次回、『子息様の紅茶の時間争奪戦のジャンケンに勝利した時の為  
に練習しなくては。

「じゃあ、毎日、紅茶を淹れてもいいつか」

いきなりのアーティの発言に私は

「げつー。」

今度は顔だけじゃなくて口に声に出した。だって自分でも聞こえたもの。カエルの踏みつぶされたような声が。

「それは、無理です」

と回答する。

「何?」

「私は、ヒューストン伯爵家のメイドです。決して、あなた専属のメイドではありません」

私はつーんと顔をそっぽに向かって言つてやつた。そつだ、そつだ、雇い主はヒューストン伯爵だ。雇い主の言つ事無視して勝手に決めるかつていつの。

そんな様子の私にアーテレイといふ息様は声を出して笑い楽しそうだ。

なんだ、なんだ、その態度。

その日の夕刻、執事のメリーストさんから、丁重な一通の封書を渡された。ヒューストン伯爵直々の家紋が押されてあり、何だかただならぬ雰囲気を醸し出す封書だ。

メリーストさんは、この伯爵家に昔から仕えている執事さんで、年は50代ぐらいの白髪まじりの田尻の優しい素敵なおじさまロマンスグレーだ。

「え……これは……」

驚く私にメリーストさんは

「伯爵様からの封書です」

と優しい笑顔で微笑み、私に手渡す。

あせる気持ちのまま、封を開き、入っていたのは一枚の手紙。その紙を見て、驚愕する。

その紙に書かれていたのは、何とまあ、私風に簡単に略すると

『毎日、客人であるアテレイに紅茶係を頼む。By あなたの雇い主のヒューストン伯爵』

……そんなような事を丁寧な文章かつ達筆に記されていた。

くつそ―――アテレイめ！なんか汚い手を使つたな！

私はその場で地団駄を踏んで悔しがつた。

「「「めんね、父が君の意見も聞かずに…。それに、アテレイは言い出したら聞かない性格なんだ」

先日、「」子息様に会つたら、開口一番に謝られた。

いえいえいえいえ！めつそつも「やれこませんーそんな伯爵家の「」子息様ともあらうお方が、わざわざメイドの私に頭を下げるなどとは、恐れ多い。

私は慌てて

「いえ、そんな、謝らないで下せー」

手を振りながら、答える。

「彼は、ああ見えて少し気難しい人物なんだ。だから、誰かを気にいつたりする事はめつたにない事なんだ。だから、リツキー君はす「」いよ」

何がすごいか、よくわからんが、私は「」子息様が自分の名前を覚えていてくれた事のほうが、ビックリ感謝感激だ。

「『仮に』いられるかどうかは、わかりませんが、毎日、紅茶のじ」  
れ…いえ、指導してもいいってます」

実際、あれから、毎日紅茶を差し出すのは、田課になつた。そのため、「渋い」とか「香りがない」とか散々だつたけど、本来負けず嫌いだつた私は、ようやくアーテレイが納得する紅茶を淹れる事が出来るようになつてきただ。そうすると、自然と私自身も、紅茶に興味が出てきて、美味しく淹れる努力も苦にはならなくなつてきたのだ。その点ではアーテレイに感謝している。

なので、じじは素直に

「でも、おかげで私の紅茶の腕前も上達したと思います。だから感謝します」

やつぱりじじ、子息様はまつとした顔をして

「そう言つてもらえると、僕も嬉しいよ。何よりアーテレイが楽しそうだしね。

…本当はね、彼は最初は『リスクを自分専属のメイド』って希望したんだ」

そこまで聞いて、ゲッといつ気持ちがモロに表情に出た。その顔を見たじじ子息様は苦笑して

「ああ、大丈夫、その点では、しつかり止めたから。リツキの立場も考えたほうがいいってね」

そりやそうだ。傍からみたら、『ご子息様の客への専用メイドの立場なんて、羨ましく思う人もいると思う。だけど、私は困る。そんな立場になつたら、嫌でも皆の嫉妬や妬みを買つてしまつではないか。

そりや、この世界の住人だつたら、『田指せ気にいられて玉の輿！』とガツツの一発でもわくものかもしれないが、私は所詮異世界の人間。いうならば腰かけだ。この世界では平穏に、皆楽しく暮らせたらそれで幸せだ。

せつかく築きあげた友情を女の嫉妬とかで壊したくはない。だつて、いずれ元の世界に還るのだから。

しかし、『ご子息様の優しい心遣いに感謝だ。私は目の前の『ご子息様を見つめ、につこり微笑みながら

「『ご子息様のお心遣い感謝いたします』

そう言つて頭を下げる。

私より、少し背が高いご子息様は、すみれ色の瞳を細めて、笑つた。その笑顔は、極上王子様スマイルでくらくらする。

なんなの、このリアル乙女ゲームの王子様は！『ご子息様の、お優しいその態度に、前々からの疑問を投げつけてみる。

「あの……そもそも彼が私を気にいってるって、『ご子息様はおっしゃりましたが、なぜなんでしょう。特に気にいられる事はしていないはずですが……』

むしろ、嫌われても不思議ではないと思う。……実際ひつぱたいたし、初対面ではタックルくらわした気がする。これは『ご子息様には内緒だけど。

「彼はね、リツキのその態度が好きなんだよ。実際、僕の客人でも、特に媚びる訳でも、言いたい事ははつきり言つでしょ？だからだよ。……本音で接してくれるからだと思つよ。あと……余計な詮索はしないでしょ？アデレイの事、本人から何か聞いたりした……？」

アデレイの事……？アデレイに関する情報と言えば、まつたくない事に気づく。彼は『ご子息様のお客人だけど、どういった立場のお客人なんだろう。』

しばし、首をひねる。

「その様子だと、何も聞いてないね。……そう言つたりツキの態度が好きなんだと思つよ。」

ん——と。アデレイは、そうだなあ。まあ実家は金持ちだろうな。で、きっとイメージ的には貴族の六男とか七男とかで、好き勝手に遊んでる放蕩息子とか？んで、親に『お前の素行の悪さを直していい！』と言われ、『ご子息様と同じ王都へ出されたとか。そこで、ご子息様とお友達になり、『ご子息様の里帰りに、暇なのでついてきた、

と。そんな感じのイメージかな。

「確かに『ご子息様のご友人でいらっしゃられるので、それなりの身分の方だと思うのですが、私はこのお屋敷のメイドです。そのメイドが『ご子息様のご友人を、あれこれ詐索する訳には行きませんので…』

『ご子息様の瞳が笑みで揺れる。私もつられて笑う。さすが、ヒューストン伯爵様の『ご子息、きちんと父親と友人のフォローもして、私がみたいなメイドの事まで心配してくれるなんて、たいしたお方だと思う。実際、そんな心配されるほどの事でもないんだけどな。ただアテレイと過ぐす紅茶の時間が増えたぐらいで。』

私ども『ご子息様の秘密のお話みたいな感じに思えて、私ども『ご子息様の二人は目を合わせてふふふとお互いに微笑んだ。

「あつ、そうだ、リツキ」

急に思いだしたかのよつに、『ご子息様は口を開く。

「その『『ご子息様』つて言い方やめてよ。僕の名前はラインナルトだよ。ラインつて呼んで欲しいな」

『ご子息様の申し出に、一瞬思考が固まるが、即座に

「むつ……無理ですー私はメイドです」

私は、断固拒否の姿勢を示したが、『ご子息様も怯まない。笑顔のまま

「だつて彼の事は、呼んでるでしょ、アーテレイヒ」

「それは……」

だ、だ、だつて……。

それは、いつの間にやら、そうなつただけで、今からでもアーテレイの呼び方変えれば』『子息様は、『ご満足か！？  
アーテレイは、そうだなあ、『ご子息様のご友人様』とか、『ご子息様の悪友様』とか『ご子息様のご友人である貴族の放蕩息子様』とか？

アーテレイへの憶測を含めて、勝手に呼び名を考えていた私に、『ご子息様は笑つて

「そんなに悩む事はないよ、リツキ」

「だつて、それは……。私なんかは、ただのメイドですし」

「…彼の興味の対象になつてゐる時点で、将来的には、立場が変わ  
る可能性もある」

「…？」

「いや、今は何でもない

ぼそりと独り言のよつと、意味不明な事を言い、また笑顔に戻る、  
「子息さま。

ううう、無理だよ。私的には、会社の上司を呼び捨てにするような  
感覚だよ。

精神的に苦痛。これで、現代におけるパワハラじやー！助けてー、  
メンタルヘルスを希望する。

精神的に苦痛。これぞ、現代におけるパワハラじゃー！助けてー！メンタルヘルスー！

ご子息様を呼び捨てなんて恐れ多くてバチがあたる、困っちゃつと涙ぐんでいたら、

「何をしている」

左腕がふいに掴まれ、その力の強さから顔をしかめる。掴まれた腕を見つめ、その先を見ると、アデレイだ。そのいつも整った顔は、微妙に険しい目つきで、目の前のご子息様を不機嫌な顔して見つめていた、というより睨んでいた。

「うーん、何をしている」

アデレイは、私の顔を見ず、掴んだ腕も離さうともせず、また力を緩める事もなく、ご子息様に詰め寄る。

一方、ご子息様は、相変わらずの優しい空気を身にまとい、余裕のオーラだ。

私はといつと、アデレイに掴まれた腕は熱を持つてジンジンときてる。

「ただ、お話をいただけだよ、ね？リツキ

話がご子息様から私にふられて、アデレイが私の顔を見た瞬間、一瞬目を見開き驚いたような顔をしてから再度ご子息様に向き合つ

「だったら、なんで、涙ぐんでいる」

「それは…」

私は、しつこく息様に詰め寄る。アデレイに向かって

「それは、アデレイに掴まれた腕が痛いからだよっ…！」

声も高々に言い放つた。もうちょっと優しく掴め～！取り扱い注意だよ！

「まったく、アデレイつてば早とちりしきだ。僕がリツキをいじめているとも思ったの？」

「子息様は、ため息をつきつつも笑顔で問題の主に問う。問われた相手は、無視だ。完全なるスルーだ。窓際にたたずみ外なんて眺めている。

「おおおい。人に聞かれたら、ちゃんと答えようよ。無視はイカんよ。

私はため息をつき、

「「自分で勝手に勘違いして、そのくせ都合が悪くなると無視なんて、勝手すぎます」

「…」

「おい！またもや無視か。無理矢理、田の前まで行って田を見て言つてやうとか思つたが、時間がないのでやめた。

今日もお仕事が忙しいのだ。本来の業務に戻るべく、早々に退室の言葉を出すと、帰りきわに「子息様が声をかけてきた。

「やつさんの事、考えておいてよ」

「無理です～～」

「…じゃつ、これは、業務命令」

「…」

「こやかに爽やかに、サラリと権力行使してきた「子息様のスミレ色の笑顔が一瞬、デビルに見えた。それもものすつごい美形な小悪

魔系。やっぱリメンタルヘルスが必要かもしれない。

「だつて、じうでもしないと、呼んでくれないでしょ、『ライン』つて」

『ご子息様は、爽やかに笑顔に、権力行使をしてくる。負けた、完敗だ。』

「…はい、わかりました。…ライン様」

「『『ライン』だつてば。様はいらないよ』

「…はい」

明るく権力行使をしてみせた『ご子息様』とは、真逆に私の顔色は悪い。だいたい、アデレイといい、『ご子息様』といいなんだつて私に構うのだろうか。

そんな私の心中を察したのであろう、彼は

「他の人の前では、今までどうり『ご子息様』でもいいから、僕と二人の時は、ラインつて呼んで欲しいな」

「わかりました。でも…」

なんで、このお屋敷の跡取りともいふお方が私には、こんなに友好的なのか。なんだろう。なにか裏があるのだろうか。いつておくが、私は何も持つてないぞ。

私の疑問を読み、あつさり口にする彼は

「この国は、稀に異世界人が現れる。過去にもそういう例はあるからね。過去の異世界から来た人たちは、皆、さまざまな知識などを僕たちに教えてくれて、それがとても貴重な情報であり、新しい知識なんだよ。僕たちの国が栄える為のね。だから、こそ、異世界人が現れた時点で皆、歓迎するんだよ。リツキ、父は君が望んだから、メイドという立場に置いたけど、なんなら、今からでも客人として迎えて…」

「いえ！それは結構です」

「ご子息様のありがたいとも思える申し出を即答で遠慮する。

私的には、雇つていただけるだけでもありがたいのに、異世界人つてだけで、客人扱いなんてされて日には、申し訳なくて神経すり減らす。

それよりも、こうやって肉体労働しながら、働いていたほうが、よっぽど気が楽だ。

異世界人だというだけで、客人対応されても、私には返すようなものはない。知識って言つても、私は学者でもないし、たいして頭が良かつたわけでもないし、

どこにでもいる20歳の社会人だ。『客人』として扱つてやつたのに、お前の知識はその程度か！といつか追い出される口もくるかもしれない。おーこわ。

もちろん、そんな事はしない人達だとは思うけど、根っから庶民の私には、かしづかれる客人なんて似合わんよ。正直、三食プラス昼寝つきには憧れるけど、

そこまで待遇されるような大した知識持つてないし。

このままこのお屋敷でみなさんと一緒に働きたいと思つてゐる意志を、はつきりと、ラインに告げ、先程アデレイに掴まれた為、熱を持った腕をさすりながら退室する。

リツキの退室した後に残された男が一人。

「本当に、面白くて興味深い。ねつ？アデレイ」

「…あまり必要以上にかまうな」

「あれ？アデレイってば焼きもち？」

「…」

「そんな田で睨まないでよ。…だつてさあ…正直に言つとひと、アデレイが人に興味を持つ事なんて珍しいぢやない。だから僕もお近づきになつておいたほうがいいと思うんだ」

「…言つている意味がわからん」

「そんな事言つて、わかつてゐるくせに…。それに、彼女もこれらの方との関係を考えると、僕という味方をつけておいたほうが、彼女の為でもあるし、保身だと思つけど」

「……」

内心、『彼女とこれからの方との関係』とやんわりと指摘したけど、沈黙を決め込んで否定しなかつた事に気付いて、窓辺にたたずむ、長年の親友を見つめ、微笑んだ。

その笑顔とは裏腹に何もなかつたような態度で、窓辺から離れ、部屋から出て行く親友の後ろ姿に軽く手を振る。きつと先程部屋から退室した彼女を追いかけていつたのだろう。そんな親友の後ろ姿を見ながら、残された部屋で一人苦笑した。

ラインの部屋から退室し、さてお次は厨房のお手伝いかなと思つて歩みを進めていると、

「おい」

背後から、声が聞こえる気がする。しかも、最近とつてもよく聞くこのお声。なんだろう、何か用事かな?と思つて背後を振り返ると例の「」とくアデレイだ。

「はい?」

なんだらか、なんか用事でも言いつけられるのだろうか?そう思つて見つめると当の本人のアデレイの顔は少々困惑氣味だ。

「見せてみろ」

そう声がしたと思った瞬間、私の腕はいきなり掴まれ、袖をまくりあげられる。一瞬の事で、身動きのとれなかつた私は、びっくりを飛び越して思考停止だよ。

「…赤いな」

そう呟いたアデレイの視線の先は、先ほどアデレイに掴まれた私の

左腕。いきなりだつたから、力の加減が出来なかつたのだろう、指の跡が多少、残つていてうつすら赤くなつていた。だけど、痛くはないので、あと一時間もすれば、きっと跡は消えるだらう。だから

「大丈夫。痛くもないし。あと一時間ぐらいで消えると想つわ」

私の腕をまじまじ見つめるアデレイに、腕じやなくて顔が赤くなりそうだよ。とこりより、そろそろ離して欲しいんですけど。

「あの……」

さすがに、いきなり腕を引っこ抜いては、失礼かと思つて、そろそろ解放してほし、空気を出したが、アデレイは、そんなのどこ吹く風だ。

『離して！アデレイ！腕の脱毛は、ここ一ヶ月ぐらいでぼつてるの离して！』

ああ、そう叫べたら、どんなに楽か。しかし、アデレイは、何が面白いかのか、まじまじ見てる。なので、强行突破で「ゴー。

「はー、はー、もつ、おじまーー」

そう言いつと、私は、アーテレイから腕を抜こうとしたが、アーテレイは離してくれなかつた。ちよ…アーテレイつてば、どうこうつもつ…。

「細い」

「は？」

彼は、感心したように呟く、

「俺の手で容易く掴む事が出来る腕の細さだな…。きっと、骨を折る事も容易こいんだらうな」

やめてつー一句を考えてるの?…またか、本当に出来るかどうか、実験ぞおおおおつ！

がてらに、私の腕をやつちやわないよね？あ、ポキッとな…みたい  
な。

折られちゃたまらんと、必死の形相で腕を引っ張りぬく私に、すこ  
く眞面目な顔して

「冗談だ」

笑えねーし。

しかも、冗談なら、もつと笑って言えー！

「ちょっと、アテレイ、わざわざそんな冗談言いに来たの？私忙し  
いんだけど…」

「いや、部屋を出るときに、腕をわすっていたので、気になつた」

え？

もしかして、やつきの力強く腕をつかんだ事、彼なりに反省し、謝

りに来てくれたのかしさ。

私はアーテレイに常識といつもののが、あるのだと感動し、謝罪の言葉を待つ。

「…」

「…」

しばし無言でお互いに向き合つたが、一向に、謝罪の言葉が出てこない。その攻防戦に私のほうが痺れを切らしてアーテレイに尋ねる。私はお仕事中で忙しいのだ。

「…たしかに腕を、強く掴まれて赤くなつてちょっと痛かったわ。  
……で？？」

謝罪の言葉をアーテレイの口から聞けるかと期待して待つていた私にアーテレイは、蒼い瞳を揺らして口元にも笑みを浮かべ、上機嫌のやけに優しい声で私にむかへく。

「わかった。責任はとるつもりだから安心しろ」

「は？」

責任って何の責任だ？思わずツッコミたかつたが、間髪いれずに

「いえ、結構です」

そう告げると、その場を早々に立ち去る事にする。やつぱり彼に謝罪という言葉はないらしいという事を知つた。そして彼の責任と言いう言葉の意味も聞いちゃいけない気がした。

今日も大量収穫祭り。

私は、赤く実ったミニトマトを摘み籠に入れる。それでもってここ最近はマーサさんだけではなく、アドマさん、カリアなど他のメイド仲間にも配っているのだ。

トマトを食べた皆の感想は

「みずみずしくって美味しい」

「ちょっと酸味があるけど美味しいね」

と口々に褒めてくれるので、私も段々調子にのつづつあり、畠もどんどんでかくなってきた気がする。

…いい加減このぐらいの畠の大きさで止めておかないと。

この前、ローディにも庭園あげたら、喜んでくれた。

それこそ、どつちがトマト? こんなぐらいに顔を真っ赤にして喜んでくれた。

…彼はそんなにトマトが食べたかったのか。それは、生産者としては嬉しい限りだわ。

本当はヒューストン伯爵にも差し上げたいんだけどね……。

けど、いきなり異世界からの食べ物を差し上げるって、かなりハー

ドル高いと思うんだ。

変な話、伯爵との立場にもなれば見た事もない変な食べさせられて体調崩す事がある悪いし。

調理人達は、ものすごく細心の注意を払って健康管理して日々の料理に挑んでると思うし。

それを私が「採れたて新鮮です」と書いてマートを差し出したって怪しいし、使えないよね。

だけど、いつかは食べてもいいことにな。

無理だと思いながらもそんな期待を持ちつつ本日の収穫を終った。

## 16 心配と謝罪と責任と（後編）

ローディ、本編に帰ってきた。（笑）

いや不憫のお声が多くつて。

どうせなら本編で不憫な役をやつてしまおうかと（鬼）

なんて、先の事はわからません～。

意外にラストはローディと幸せな家庭とトマト農園築くかもしれない。

## 17 イメージと誤解

今日もお茶の時間に話が咲く。

話題はもぢりん・。

「ああ、本当に今日も素敵だつたわー。」子息様つてばー。」

毎日、毎日、同じ話題でよく飽きないなあと思いつつもみんなはこの話題に飽きないらしい。

「今日なんて、私がお茶を淹れて差し上げたら『ありがとう』と言つて下さったのよ。それも笑顔でよー。もう、顔が真っ赤になつてところけそつだつたわ」

メイド仲間のカリアが、興奮して騒ぐ。そうか、本日の「」子息様へのお茶出し権利争奪戦は、カリアが勝利したのか。

何かをしてもらつて、『ありがとう』と感謝の気持ちを口にするのは、人として『』く当たり前の事と、日本で育つた私は思うけど、この世界では違うらしい。身分のある人は、身分が下のメイドなんて、人とも思つて扱わない人もいるらしい。

その中で、『』子息様のラインはきちんと感謝の言葉など口にしてくれる。それでいて、あの容姿、それじやあ人気が出るはずだな。

私も毎日食べてる焼き菓子に飽きる事なく、手を伸ばしつつ、ぼんやり考える。

「そつー-」子息様も素敵だけど、アテレイ様も負けてないわよー。」

同じメイド仲間が口を開く。きたきた。また、同じ話。

「えへ、私は『子息様派だわ』

カリ亞が迷いなく答え始める。

「そりや、アデレイ様も『子息様に負けずに素敵な容姿だけ』…。何だか、アデレイ様つてとつつきにくいつていうか、怖いんですね。威圧感つていうか、強者のオーラみたいな。私達メイドなんて、視界にさえ入っていらないみたいじゃない。ねえ？リツキ？」

「…んじつ？」

急に話をふられて、焼き菓子を口いっぱいに含んでいた私は、答えようにも答えられない。

代わりに、他のメイド仲間が口を開く。

「せうかしら？私は、その人を寄せ付けない雰囲気もまた、貴族の持つ独特の威圧感でそれもまた魅力の一つだと思つわ

焼き菓子を頬張りながら、心の中でツツツツを入れる。おこおいおいおい。

アデレイは、怖くも、威圧的オーラを身にまとっている訳でもないと思つ。

人を寄せ付けないなどと、うまいイメージらしいが、私に言わせりや、アデレイは、早朝散歩を好み、毎朝畠へ顔だすような、老人体質だと思つ。

なぜなら、あれから、しおりちゃんと、私のトマト畠へ早朝顔を出す。しかも、私が行くと必ずといつていいほど先に来ている。まったく、早く来ているのなら、先に水やりをしていてくれてもいいのに、ちつともそんな事を思いつかないらしい。

まあ、私も私で彼には期待をしてはいけないが。そのくせ、ちょっと寝坊して遅れて畠に顔を出すと、「遅い」などと文句を言つ。

『あんた、何しに来てんですかい』

と、言つてやりたくなるだらつ。

まさか…

トマトを狙つてきてこいるのではなこだらうか。

盲点だつたかもしれない。アテレイはトマトが食べたくて、畑に来ているのかもしれない。もし、そつなら、食べさせてやらない事もない。

だけど、早く言つてくれればいいのに、アテレイめ。しかし、「働くもの食うべからず」だ。私の丹精こめて育てたトマトは、アテレイが水やりを一回でも手伝つてくれたら、あげようかな。

うん、それが、いい。

毎朝毎朝、早朝から、トマトの観察に来ているとは、余程氣にいつたと思える。アテレイめ。もしや観察日記でもひつひつけてるとか？

「聞いてる? リツキ?」

「あつーじめ…何?」

メイド仲間の楽しげおしゃべりを、まつたくの上の窓で聞いていた私は、正直に謝る。

「まつたくーーリツキつばーー!」

ちよつと拗ねた態度のカリアにえへへと笑つて誤魔化す。

「そういえば、アテレイ様つて、元の出身なんかじりへ、誰か知

つてる？」

カリ亞の台詞に皆が一様に知らないと首を振る。もちろん私もだ。

「アテレイ様に関しては、まったく情報がないの。ただ、ご子息様のご友人だつていうだけで」

「きたーー！」友人説きたね。きっと、貴族の放蕩息子説が有望だと私は睨んだ。

「だけど、その謎なミステリアスな空気がまた素敵つていう子も多いのよ。あの容姿だしね」

「そもそもかもしれない。アテレイは、口を開くと残念な人。だけど、美形だから許されている部分もあると思う。」

「ねえリツキは、ご子息様とアテレイ様どっちが好み？」

「へ？」

幸いな事に、私が毎日アテレイのお茶を用意しているのは、彼女達は知らない。知っているのは、ごく一部のここを取りまとめている人達だけ。

「それも、きっとご子息様の、ラインの計らいなんだろうなあ。このお屋敷に私が働きやすいように気を使ってくれてるんだろうな。」

「どうちつて

「ナーフー・ビッカーフー、ゾノ島様とアーテレイ様」

カリ亞は興味津々の目を輝かせて聞いてくる。

ふと考える。そういうえば私、恋愛対象で見た事一度もなかつたな、あの2人の事。

自分とは、世界が違うつていうか…。いや、実際違うんだけどね。

「わあわあ、おしゃべりはいいがでこして、仕事、仕事」

マーサさん、お仕事再開の掛け声とともに、顔が一斉に、持ち場に戻るべく立ち上がる。カリ亞は

「え～残念。じゃ、リツキ、あとで聞かせてね」

にっこり笑つて、手を振つて持ち場に戻るカリ亞に私も手を振つて自分の持ち場に戻つた。

美味しい紅茶を飲み、自分の持ち場に戻るべく庭園を歩いているとローディが私に気付いて近寄つてきてくれて、

「この前もひつた果実のようなトマトはすいへつまかつたよ

そつ言われて顔が嬉しさでぱあああと赤くなるのは私。

「しかし初めて見たよ。市場でもいろんな物、洋服とかアクセサリとか小物、それこそ野菜なんかも種類も豊富に売っているんだけどな」

「なんだと？」

私はいきなりローディとの距離をつめて近づき、無理矢理、彼の片手を取り私の両手で掴み、彼の目を見つめて言へ。

「お願いがあるの。ローディ」

離さないぞとばかりに握った手に力を込めた。

「あ……あ……ああ」

なんだか、ローディの顔が見る見る赤くなつてこくよくな氣がするのは氣のせい。

「市場の場所を教えて欲しいの」

「そつ……それなら簡単だ。」  
「……」  
「」  
の伯爵様の土地から出て、丘を越えた向こうの街側だ。  
「……」  
こら辺の者なら誰でも知ってる

はずだ」

詳しく述べてくれたローディに感謝しながら、

「ありがとうー早速カリ亞でも誘つて行つてみるー」

「え… いや… あの俺…」

私は感謝の気持ちを両手に込めてローディの手にさらに力を込めた。ローディの手は庭園を管理しているだけあって、日に焼けてごつごつしてまさに職人の手だと感じた。この手でこんなに綺麗で纖細な庭を造り出していくのね。

「じゃあ、もう行くねーお仕事まだ終わらないの」

「あ… 市場へは、なんなり…俺が…」

「大丈夫ー気を使つてくれてありがとうーけど、お仕事忙しそうだし、邪魔しちゃ悪いわ」

「わ、そ、そんな…そんな事ないってーー」

ローディは、市場の場所だけじゃなくて、場所まで案内してくれようといふのか。

なんて親切なんだ。だけど、彼の好意に甘え過ぎてはいけない。きっと彼も忙しいはずだから、

「本当にありがとうーカリ亞を早速誘つてみるー」

「え……あ……うん。……いやいやいや！俺と……！」

私は去り間際に手を振りながら笑顔でお礼を言つて立ち去る。

「ありがとね————！」

さつそつと走り去る後ろ姿を見つめながらローディは、『待つてくれ』と言わんばかりに手を伸ばしたが

「あれ……俺と……俺と……俺と……」

「俺と……行こばいばい！」

その手を伸ばしたはずの彼女はもういない。

ローディの丹精込めて育てている薔薇だけが聞いていた。

部屋に漂う紅茶の葉っぱの香りに、満足したような顔を浮かべて飲む部屋の主に、私は先日のカリアの台詞を心の中で思いだしていた。

『ねえリツキは、『ご息様とアデレイ様どっちが好み?』

考えた事もなかつた。元から恋愛偏差値は低いと言われてた私に、そんな事聞くほうが間違つてると思つ。

窓辺から空を眺めながら、私の淹れた紅茶を飲んでいるアデレイは、私の思考はどこ吹く風と言つた感じだ。

金の髪は、さらさらと光を浴びて輝き、蒼い瞳は宝石みたいだ。すつきりした鼻筋に、引き締まつた唇。身につけている洋服も、上品な着こなしの白い上着には刺繡が入り、腰をしめた黒いベルトの位置のなんて高い事か。足の長さがさらに際立つ。

改めて観察してたら、アデレイも私も見ていた。

「何を見ている?」

やばい、人間観察中、アデレイに気付かれた。

「えっと…。前に聞かれた事が気になつて見ていたの」

一瞬不思議そうな顔をしたアデレイは

「何を聞かれたと？」

私は正直に、

「メイド仲間とのお茶の時間にラインとアデレイのどっちが好みかつて聞かれたから」

その言葉を聞いた瞬間、またもや愉快そうに笑うアデレイに、

「馬鹿正直だな」

「そうかな？」

とつさの事で正直に答えてしまった私。アデレイも笑っているし、まあいいか。

しかし、目の前で愉快そうに笑うアデレイを見ていると、どこが、どこが、威圧的で怖いのか、私にはちつとも理解できない。『子息様であるラインの友人であり、客人だという事で、本来なら私の態度は無礼にあたる。だけど、彼は、いつも楽しそうに笑っているし、今さら態度を改めるのもなんだかなあ』と正直少しの迷いはあつたのだが、アデレイが『別に今のままでいい』と言つたので、あつさりそれに従つた。

「それで、何と答えた？」

「え？」

「やつちの答えは、ぜひ、お聞かせ願いたいものだな」

そう言つた瞬間、窓辺から離れ、アデレイが私に近づいてくる。蒼い瞳は、私の瞳を見つめたまま、まるで獲物を捕獲するかのように、じつくり私を追い詰めてくる。

なんだか、危険な香りがしてきた、まるで凶暴な肉食獣のようなアデレイの雰囲気を一瞬で察知した私は、手にしたティーポットを迷わず、ワゴンに乗せ

「では！私は忙しいので！失礼！」

片手でアデレイに向かつて『来るなストップ！』とけん制しながら、もう片方の手でワゴンを押し部屋から退室しようと試みる。徐々に近づいてくるアデレイの気配を背後に感じながらも、必死でお茶セットの用意されたワゴンを押しながら、扉へという『ゴール』を目指して一直線。

なんとか、背後から獰猛な肉食獣が、迫つてくる空氣に鬱えながら足を速める。だけど、このワゴンが重い。つ。

ゴールまで辿り着き、扉に手をかけた瞬間、肉食獣は、私の背後まで迫つていた。だけど、それに気付かないふりをしたまま

「失礼しました！」

そう扉に手をかけ、後ろを見ないまま退室しようとした時、扉に向かって背後から一つの手が伸ばされて、必死に『ゴール』の扉を開けよ

うとしていた私の行動は断念される。

オーマイガー。

「うひちも見ないまま、部屋から出て行くのは、常識だと思つか？」  
それとまだ、質問に答えていないと思うが。お前は、いつも俺に常識とか、とやかく言うが、お前のその行動は、常識の範囲か？」

身長差のせいだろう、背後の、しかも頭上から声が降つてくる。

ハイ。そうです。いつもアデレイに常識とは何だとか、しつこく説教してしまいますが、そーいう時は聞く耳もたないくせに、こーゆ

私が黙つていると、アデレイは、

「人と話す時は、きちんと相手を見る。いつもお前は言つていなかつたか？」

扉を見つめたまま、背後のアデレイに振り向かない私に向かつてアデレイは、言う。

この状況で後ろを向けつてか？私の目の前には、扉。しかも、背後にはアデレイ。扉は、見事にアデレイの手で押さえられている。さて、問題です。ここで、私とアデレイとの距離は、どのくらいでしょう。

ピーンポン。

はい、近い。

近いです。

めつめに近いです。近いことよりも、体がくつこむんじかな  
いかと想ついらっしゃいます。

なぜなら私の証拠に、アデレイの体温らしい熱が感じられ、なにやら良いく香り、ベルガモット系の香水の香りがする。

アデレイは、後ろを向けと言つけど、今振り返つたら、アデレイが  
どんだけ至近距離まで近づいているのか、一瞬にしてわかるので、  
いやだ。

断固拒絶する。しかも、この距離、絶対絶対セクハラじゃーーー！

無理やり肩を掴まれ、アデレイのまつ毛に向かせられる。私とアデレイの距離は、思つた以上に近く、お互いの熱を感じじとの事が出来る程だ。

頭一つ分、高いアデレイは、私を見下ろしながらも、扉にかけた手  
を離そうともしない。扉とアデレイに挟まれて身動きとれない私は  
絶対絶命のピンチだ。

そんな私の心境は、ちつとも気付いてないのか、おかまいなしながら、私にすぐ真剣に問う

「それで、お前はフラインと俺のどっちだと答えた？」

まつすぐに見つめるアーテレイの瞳は深く蒼い。まつげ長いなーと、内心思いつつアーテレイの顔を見ながら質問の内容を自分の中で反芻する。

「ワインとアーテレイのビーフが好みのタイプかつて？ 答えは決まっている。考へるまでもない。答えは一つ

「ビーフもタイプじゃない

「…」

正直に答えたが、さつきまでの蒼い瞳の真剣な眼差しに鋭い熱が宿つたのを肌で感じた。

やばい、私、地雷を踏んだ！？

しかし……つづキセん、正直者すがまます。

リップサービス、学びましょ。つ。



「どうちもタイプじゃない」

本人を目の前にして、あまりよく考えもせずに思いつくまま言葉を発した瞬間、当の本人アデレイの蒼い空色の瞳は、真剣な眼差しの中、一瞬目を細めて不機嫌そうにゆがんだように見えた。

あれ？不機嫌？

もしかしたらの地雷スイッチオンに、私は慌てる。

アデレイは、無表情に何かを考えたまま、扉と私を相変わらずはさんだまま、その手をよけてくれない。

彼の爽やかでそれでいて力強い水しぶきをイメージさせる香水の香りは、彼と私の距離の近さを嫌でも認識させ私を落ち着かなくさせる。

アデレイは、私を見下ろしたまま何かを考えている風で動かない。この時初めてカリア達が言っていた威圧感とやらが少しわかつた気がした。

いつもらしくないアデレイの様子に私は焦つて

「あのや、まずタイプじゃないってこのも理由があるのよ」

私は一気に弁解を始める。

「アデレイもラインも私には勿体ないっていうか。…まず、綺麗すぎる顔。そんなに綺麗で美形で一緒に歩いていたら絶対目立つでしょう？」

そして街ですれ違う人、すれ違う人、皆が振り返るの。んで、『かっこいい』って思うの。

そしてそれから、隣にいる私を見て『男かっこいいのに、彼女は大した事ないわね』って言われると思つの。下手すりや舌打ち食いつかも。

けど、これは、『ぐ自然でしうがない事だとは思うんだけどさ、女としてプライドズタズタなのよ。ラインは、女の私より綺麗で可愛い顔立ちだし、それにアデレイの顔も整っていて美形な顔立ちだからさ』

…性格残念ですが。

私は早口にかつ、正直に考えを述べる。最後の一言は、言わずに心の中でだけ発した。

「だから、どいつもタイプじゃないわ」

威圧感を醸し出すアーテレイは、私の答えに怒っているかも知れない。

けど、これが、私の正直な感想。まっすぐに私を見つめる深い蒼い瞳は、私に対して怒っているのか、はつきりと感情は見えない。

「まつたくお前は…」

セーヴィングアーテレイは笑いだした。あれ? じい笑う? じいへ。

「だから面白い」

そうですか。ありがとうございます。…ってか、笑うツボが違うアーテレイに褒められてもなんとも微妙だけれど。

「前から思っていたが、自分の考えをはつきりと言ひ。嫌なものは嫌で、好きな物は好きと、はつきりしていて見ていて心地よい。

駄目なものは駄目と俺の目を見てはつきり物を言ひ。そんな奴はあまりいなかつた」

…そつか。だからアデレイ性格そんなになつちやつたんだね。

これまた私の心の声ね。

「なぜやつらと自分の意見を言えるっ？」

「それはきっと育った環境だと思つわ」

「お前の育った環境とはどんなだ？」

「基本的に身分の差はない。男女平等だし自由かな」

アデレイは、私の話に何だか興味を示したみたいだ。

そして、そのまま部屋の中央にある上質の革張りソファを田で見て座るように訴えたので、そのまま従いソファに腰をかける。

アデレイも当り前のように私のすぐ隣のソファに腰をかけたので、『なんでわざわざ隣なの？話す時は田の前じゃないの？』

とこう私の質問を全く無視して、

「さて、育った環境とは?」

「いつきたもんだ。でたね、マイペース。

いつして私はアテレイに私のいた世界の事を話して聞かせる羽田になつたのだった。

長々と話した気がする。

時間的に1時間ぐらい?

それは、やばい、それはやばい〜おおお〜！

アテレイが、いろいろと質問をしてくるので、ついつい話しこんでしまつたのだったけど、私の本来の業務をうつかり忘れていた。おおおー掃除をせねばあ。アドマさんに怒られるうう！

「いのん。アテレイ。私も行かなくちゃ

いきなり席を立つた私を見て、少し残念そうに眉をひそめて

「ああ…。続ければ、また明日な」

軽く手を上げた。

ええー？また明日ですか？そんなに面白い話をしましたか？私つ？最初は、ただ、自分の産まれた国についてだった。ただそう難しい話しじやなかつたし、普通の私の暮らしなど、生活の習慣とか、普通におしゃべりしていたつていう感じなだけで。ただ、そのうちアーデレイのほうが、いろいろ質問をしてきたから、自然に答える形になっていたのだった。

「…ああ、そうだ」

何かを思い出したように、一人呟いたアーデレイは、ソファに座る私より、先に立ちあがり、私に手を差し出す。

なんだ？私にも手を出せと？何かお菓子でもくれるのか？

そつ思い、私もアーデレイのようニアーデレイに手の平を向けて差し出す。

「…………」  
「ひかり無事のアーテレイの反応を見ていると、この対応は違つたようだ。

「…手をとりひ」

「あー…そういう事か！」

手を差し出してくれると、アーテレイもレーティファーストだのう。そう思いながら、大入しくアーテレイの手を取る。アーテレイが私の手をすっぽりと包み込む。アーテレイの手は想像より大きく、それでいて力強く握ってきたので、愚鈍な私でもドキドキしてしまった。

ふいにその手を一瞬、強い力で掴まれ、よろけて転びそうになる私を支えながら、アーテレイは耳元で囁く。

「お前は俺をタイプじゃないとほつきつと言こさつたが、俺は決してやつではないからな。…覚えておけ」

ビックリして、弾かれたようにアデレイの顔を見ると、アデレイは、蒼い瞳を宝石みたいに輝かせて笑った。

## 19 正直者の結末（後書き）

しかし、アデレイ実は内心『ガーネン』とへこんでたのかもしだせん。

見せないだけで（笑）

それなら愛い奴（笑）

今日はお休み、カリ亞と共に市場へ来ていた。カリ亞に『市場に行きたい』ってお願いしてみたら、喜んで一緒について来てくれた。拳句の果てに『まだ行った事なかつたの?!』って驚きもされたつけ。

すゞい人ごみと立ち並ぶお店で活氣づいていて、見ているだけでわくわくしてきて、テンションが上がつてくるのが自分でもわかる。

「これかわいい！」

カリ亞がアクセサリのお店に入つて、シルバーの花のブレスレットを見てはしゃいでる。細かい細工で出来ている可愛らしい花のブレスレットは、試しに身につけてみるカリ亞の細い腕によく似合つていた。

「私は、このちのトザインも素敵だと思つわ

私はシルバーでクローバーの模様のネックレスを見て、手に取つて

みる。すかさずカリ亞が

「そのネックレスもかわいい！」

私が目にとめたネックレスの可愛らしさに同意して、うなずいてくれる。そんなカリ亞も花のブレスレットがよく似合っている。

「かわいいね。…ね？自分への」褒美に買つてもいいんじやない？  
そのブレスレットよく似合つているよ」

私の提案にカリ亞は、少し困んだ顔をした末、

「えー。でもちょっと高いなあ。もう少し考えてみる」

どうやら、カリ亞は少しお財布と相談するみたい。そうだよね、いろいろ見て回つてから最終的に決めてもいいんじゃないかな。まだ時間はたっぷりあるしね。

私とカリ亞はとりあえずキープと決めて、他の店も見に行く事にした。

やつぱり買い物って女の子同士だよね。

同じものを見てはしゃいだりする事が出来るし、可愛くて綺麗なモノをみているだけでもストレス解消の場になるし、この感覚、男の人と分かち合うのって結構難しいと思う。

一通り市場を回つてみた後、私の足はすでに棒のよつだ。

カリ亞と共に腰をおろして飲み物を買って飲んだ。新鮮な果実の絞りたて100パーセントフレッシュな味がしてとても美味しい。座りながら眺める市場の風景は、いろいろな人が行き交い活気に溢れていて、心が楽しくなつてくる。

ひと休みした後、私とカリ亞はもう一度それのお田端での店に行くべく、別行動をする事にした。

「じゃあ、ちょっと別行動ね」

「うん、またここに集合ね」

私とカリアは、それぞれが気になっていたあるお店にさあ行こう。時計台で時間を確認し、待ち合わせ場所と時間を決めてそれぞれの目的の場所へと向かつて行つた。

「見てーちょっと高かつたけど、日頃の自分への『褒美』に勝つやつた！」

カリアは腕に光るシルバーの花のブレスレットを嬉しそうにはじやいで見せてくれた。

「うわ！かわいい！良い買い物したねっ！」

カリ亞の腕に光るシルバーのブレスレットは、とても可愛らしい細工でカリ亞によく似合っていた。

「リツキは結局何を買つたの？… その袋をひきから氣になつてるんだけど…？」

カリ亞は私が大きい袋を携えて現れたから氣になつてているみたいだ。

「あつ？これ？」

私は袋からガサガサと音を出して引つ張り出し、私の戦利品をカリアに自慢する

「じゃーーん！野菜の肥料！特大サイズ買っちゃつた！」

そなのだーこの市場の一番のお目当てはコレー愛しのトマトに捧げる肥料。これを購入するのが、今回的第一目的ともいえる品物。

呆れたような眼差しで見つめるカリ亞は

「…すゞ」得意げな顔して見せるから何だと思えば…」

「へつへつへー、ずっと欲しかったんだあ」

半ば呆れ氣味のカリ亞に向かつて満足氣に笑つ。

「で、ネックレスは買わないの?」

「うん、肥料買つたらお金なくなつたからまた次回にするわ」

あつさりあきらめた私に

「…まあ、リツキがいいなういいけどね」

とカリ亞は呆れたように苦笑した。

「やあ！一人で買い物かい？」

カリ亞と購入品をお披露目しあい、お互いがご満悦氣分に浸つて市場を歩いていた所、後方から聞き覚えのある声が聞こえてきて、カリ亞と私は声の主を確認する。

あ…ローディだ、ローディがいた。

偶然の出会いにちょっと驚いていると、

「俺はこここの市場に叔父が店を出しているから、今日はちょうど休みだし、ちょっと店を手伝いにきたんだ」

なんだか赤い顔したローディを見つめながら、あーそうなんだ。休みの日なのに働き者だなあ、そう思いカリ亞を見るとなぜかカリ亞が今度は赤くなってる。…なぜ…？

急にカリ亞がローディに気が付かないようにこいつそりと耳打ちをした。

「ちゅうとローリック、いつの間にローディと仲良くなつたの?」

「え? いつも庭園に花を選びに行くところ?」

「そんな、あつさり『いるよ』みたいな、ビijoからか、わいて出た  
みたいな言い方して!」

「だつているんだもん」

「あーーもう! そんなんだつたら、私が毎回庭園に花を選びに行け  
ばよかつたーー」

もしかして…カリアつてば、ローディがお氣に入り?ええええ。そ  
うなんだ、と私はカリアとローディを慌てて見比べる。

カリアは、19歳で赤毛がふわふわしていて、本人は癖毛で嫌らし  
いけど、私的には、ボリュームがあつて自然なパーマでうらやまし  
い。

笑うとえくぼが出来て、そばかすなんかも魅力的なチャームポイントだと思つ。

性格は文句なく明るくて面白いムードメーカー的存在だし。私が男なら文句なく『俺の嫁』宣言していたかも知れない。

カリ亞の視線の先のローデイは…と言つと、

たくましい体つきで日焼けして健康的。なんだか人の良さがにじみ出でいるような優しげな顔つきだし、お礼を言つた後などの、本当に嬉しそうに顔を赤らめて笑う顔はどこか可愛らしいとも思つ。性格は何よりも優しい。何しろ、毎回庭園での花選びを付き合つてくれる。きっと面倒見のいいお兄さんタイプだと思つ。

何だか、こうやって改めてローデイを観察するのは初めてかもしれない。

こう改めて見ると、ローデイもカッコイイと言われる部類の男性だといつ事に気づく。

田頃、アデレイやご子息様のラインを見ているので、私のイケメンセンサーはどこかマヒしていた事に改めて気付く。ローデイを改めて人間観察していると、ローデイは、相変わらず顔を赤らめて提案してきた。

「 もう！」飯は食べた？」この先にすつ」こ、美味い屋台のランチトがあるんだ」

「 え？ ランチ？ 食べたい！ ねつ？ リツキ」

ローディの提案にカリアが皿を輝かせて私に意見を求める。

「 ランチって……？」

初めて聞くランチとつ食べ物について二人は教えてくれた。

なんでも、羊肉を秘伝のソースにつけて焼いてから、新鮮な野菜をはさめて、またソースをかけて、パンで包んで焼き上げるという、こじりの伝統料理らしい。

たつ……食べたいつ！

思わずヨダレが出そうになる程食べたい気持ちを抑えつつ私は、あら行動を取る事を決意する。

「 あつ！ 私、買い物された物があるんだつ！」

思いだしたかのよう、「元気なり」と出る。

「じゃあ、それ買つてからまで待つよ

「いやいやいや大丈夫！」

相変わらずのローティの優しく申し出で、心配い無用とばかりに慌てて手を振る。

「あとは若い一人で楽しんで！」

「… そう変わらない年だと思つたびへへ」

何言ってんの?といぶかしむカリアに、なんだか、あわあわするローティに向かつて私は

「じゃ——ね」

手を振つて走りだす。途中ローティが手を伸ばし何かを言いかけたが、

『グッジョブ』

と、親指をたてた私なりの声援を眼力と共にローディに送つて、そのまま市場の人ごみへと消えて行つた。

## 2.1 私のいた世界について

窓から眺める外の世界は、珍しい事に雨が、ざあざあ降つてこる。この国に来て、雨とは非常に珍しい。基本天気は、晴天だ。だから、この国では『恵みの雨』とも言つらしい。雨に当たつて窓から見える外の木々も心なしかホツト一息ついているような印象にも見えなくもないかもしだれない。きっと喜びの歓喜の声を上げている事だらうな、

私のトマトちゃん達も。

「よく降るな」

私は、広い窓から、庭をぼんやり眺めていたらふいにアーテレイが声をかけてきた。

あれから、私の国の話しがアーテレイにしたら、いたく興味が引かれたみたいで、毎日お茶の時間は、質問せめだ。

私の住んでいた国について、聞かせてくれ、と。

余程興味があるらしく、いろいろな事を聞いたがる。まあ、感覚的には、外国の事を聞くような感じなのかな。まあ気軽に旅行でも行ける場所でもないしな。

もつとも、そんな気軽に旅行に行ける距離なり、とつて元の世界に帰つてゐるわ！

ところ私の心の一人突つ込みをアーテレイは知る事はなく、今日も私はアーテレイの為の『私のいた世界』について講義が始まる。

「お前の国では、雨はあまり降らないのか？」

「ううう。うちの国よりはまつと降るよ。年間を通して雨季というのがあって、その時期は、すべく降るよ。」

「ほう。うちでは恵みの雨とも言われるが、そんなに降るとありがたみもないか」

「ううだよ、あんまり雨が降ると川が氾濫したり災害起きるし。」

それに、あと雨が多いと洗濯物も乾かないんだよ、生乾きの臭いつ

て最低！と言つたら、アデレイはその綺麗な整つた顔を一瞬『な顔したのぢ、軽くその話題についてはスルーされた。こんな調子で、毎回たわいもない会話だけど、日々のお茶の時間は過ぎて行く。

「リツキ、前にも聞いたな。お前の国には身分制度はないと

窓辺で雨の事を眺めていたアデレイは私に問う。アデレイの本日のお召し物は、黒のパンツに黒の長い上着を羽織つていて、中に着ている白いブラウスは、ボタンをラフに3個程開けていて、胸の肌の露出が多い。ハーフロンの柔らかそうな髪は、その首筋に絡んでいて、そうやって窓辺で雨の降る様子を眺めている姿も、なんとも言えない妖艶というか色気が漂つていると思う。

対する私はアデレイに勧められるがままソファに座り、焼き菓子をほおばつていた。

アデレイに焼き菓子を勧められて最初は、遠慮してたけど、アデレイはちつとも甘いお菓子を食べない。食べてもほんの一口とか。そのまま破棄に回る事を知つていて私は、もつたいないのHACKの気持ちでこいつをつて毎回食している。

「ん？ないよ。基本的に。人類皆平等を掲げている。…だけど、お金持ちと貧乏の差は、あるよ。やっぱりね。けど、お金持ちだらう

が、貧乏だらうが、人としての権利は平等をつたつてこゐる

「婚姻関係は？」

「ああ結婚？それも自由だよ」

私は、手に持つていた焼き菓子の残りを口に頬張る。

「自由とは？」

私の返答を聞いた後、驚いた顔をした後、いたく興味がひかれたみたいで、アテレイが再度尋ねる。

「結婚するもしないも自由。相手を選ぶのも自由だよ」

お話ししながらも、口は動かす。ちょっと行儀悪いけど、この焼き菓子、美味しくてやめられない、とまらない、その魅力はかつぱえびんみたいだ。

この、アテレイめ。いい焼き菓子食べてゐなあ。

「自由に将来の伴侶を選べるのか」

「そうだよ。だって、結婚つてずっと自分が一緒にいたいから、明るい家庭を作りたいと思った人と一緒になるんじゃないの？この国の人はどういう考え方知らないけど、少なくとも私はそうだよ。誰かに決められて結婚するなんて、嫌だよ」

いちおうこんな私でも結婚に夢を持つというか、ちょっと語つてしまつた。

だって、好きでもない人と何十年も一緒に暮らす事、あんな事やこんな事なんてして、おまけに子供まで作るなんて事、想像できない。というより、嫌いな奴とそんな事しなきやいけないなら、一生独身で通す！無理して結婚するよりも、逞しい老後を夢見て、貯蓄に励むわ。

アデレイは、私の話す『私のいた世界』について、その都度いたく感心し、興味を寄せる。こんな幸せそうな国でも、さすがに文化の違いは大きいだろうしな。

「あつそつそつ。基本的には、結婚相手はもちろん一人だよ

アデレイは窓辺から、私を見つめる。なんだか、いたく興味が沸いている模様で、胸元がはだけ気味な格好から、真っ直ぐに私を見つ

める蒼い瞳は、愚鈍な私でもドキリとした。

ちょ… その無駄にダダ漏れ色氣を押させてくれませんかね？

私はアーテレイの色氣を無視して、話を続ける。

「この国の貴族間では、一夫多妻制とか？政略結婚とかあるかもしれないけど、私のいたトコでは、夫一人に妻が一人。そして結婚するもしないも自由だよ」

「…自由な発想だな」

「そう？私的には、普通な感覚だよ。両親もそうだったし。むしろ、自分の結婚した相手を誰か他の女性と共有する事が私には耐えられないと思つわ」

ふと、思い出す。こつちの世界に来る前に夢中になつて、読んでいた日本の大奥のお話の小説！

そこには、一人の殿の寵愛をめぐつて、めぐるめぐ愛憎入り乱れた世界！

おお怖い！小説のおもしろさに、最後まで一気読みしてしまったが、昔の日本の大奥もすごかったのだなあ。殿一人に、何十人という姫が集められて、まさに女の鬪い。

小説の内容を思い出しひびりして自分の両腕をさすつていたら、ア

『テレイは、黙つて私を見つめていたのに気付く。

「…とにかく、私のいた国では、一夫一妻。そして、お互いが好きな相手だよ」

「… そうか」

「やうだよ。だって、それが一番お互いが幸せじゃない？」

そう言って、私は焼き菓子片手にアテレイに向かってこっこり笑つた。

れつから窓辺で黙つたままのアテレイが、真剣に何かを考えている様子なので黙つて見守る。

窓辺に手を添えて、片方の手で顎のあたりを押さえて考へこんでいる様子は真剣なご様子。

そんな真剣な何かを考えている顔つきも見ていると、そのうち、真剣に『日本に行つてみたい』とか言いだしそうな雰囲気な気がしないでもない。

そうして、浅草あたりに行つて、どこぞの外国人みたいに、写真を撮りまくり、レトロな模様の入ったTシャツなんかも購入して『オーラ、スーシー』なんて、言いながら寿司を喜んで食べるのだろうか。おまけにレトロ模様なTシャツを購入したあげく、ズボンにインしていたりしたらどうしよう。

アデレイの外見とのギャップとで、その様子を想像しただけでくらぐらする。そして悲しすぎる。

私の視線に気付いたのか、アデレイは

「何だ？ また何を一人で考えている？」

いぶかしげなアデレイのその視線を、私は哀れみを含んだ瞳で見つめ返す。

大丈夫、アデレイ。

もし日本に行く事があつたなら、私が観光案内してあげる。そして、レトロなTシャツの購入も、はしゃいで寿司を食べる姿も阻止してあげよう。

道行く人の、強いては乙女の夢を壊してはいけない。なぜなら、アデレイは、見た目は美形、異国の王子様のようなんだから。

私は心に固く誓つたまま、いぶかしげな顔のアデレイを部屋に残して、焼き菓子も美味しく頂いた事だし、本田の『私のいた世界』講座を終了した。

**【番外編】**トマトと私とあるの人と（前書き）

番外編です。

## 【番外編】～トマトと私とあるの人～

トマトトマト～

ああ、私のかわいいトマトたち。真っ赤にプリプリの可愛いい  
ほっぺで、食べじりまあともひょいと。

あれからトマトもだいぶ、実をつけて、大収穫の時までもひょい

と。今では、早朝の水やりはかかせない仕事の一つ。

成長期だもんね！もりもり食べないとね！お水だけね！

そんな思いを抱きつつ、朝のお水やりに精を出す私。一面に広がる  
私のトマト畑、私の秘密の花園に実る赤い宝石達よ。

私は、我が子の成長を楽しみにするかのように微笑ましい気持ちで  
トマト畑を見渡す。

「 ひつ少しだな

。

そうですが、それが何か？

「どんな味がするのだろうか、楽しみだな」

。ルーラーがアーティスト

そして、あなたは何で楽しみと?そこで私はクルリと後方の声の主の方向に振り向くと、

「あがるなんて言つてなによ」

ちょっと意地悪を言ってみる。言われた本人は、ちつとも気にした風もなく、風になびく金の髪をかきあげて笑った。

そしていつものアーデレイ（なぜか）。（トマトのトマト、水やつ、トマトのトマト、毎朝恒例のトマト畑。）

今日もアデレイは、何を手伝うでもなく私の水やりの時間にここに

来る。

「あのね、アデレイ。私の国にはね、『働く者食つべからず』つていう言葉があるの」

アデレイに言つてみても、彼は何がおもしろいのか愉快に笑うだけ。何がそんなに面白いのか全くわからないけど、私といる時のアデレイは笑い上戸だと思つ。

「だからね、アデレイ。欲しかつたら、働かないと駄目なんだよ。タダでは、手に入らないんだからね。物事はなんでも努力しないと手に入らないんだからね」

笑うだけのアデレイにちょっと説教してみる。

……まあ、まったく聞いちゃあいないだろつから、こっちも真剣には言つてないけど。

どうせ言つたところで彼には無理無駄、馬の耳に念仏。アデレイの耳に説教だ。

「…努力はしてるんだがな、手に入るよつ」

アデレイは、笑っていた顔をこからに向け、不意に真剣な顔つきで  
言つ。

アデレイの蒼い瞳は、真剣な眼差しで、私に真っ直ぐに向けられる。

「はー?アデレイなんて毎日見てるだけじゃん」

そんな真剣で熱を帯びたような瞳を急に向けられて、熱意を語られ  
ても私的には何の努力なのかな?ともわからない。  
私が反論すると、

「INの時間が一番ゆっくりで誰にも邪魔されないからだ」

…全く、毎日毎日、トマトの成長見に来るべったりならお世話してみれば良いのよ。

もしかしてアレか？アーテレイは、私の憶測どおりトマトの観察日記でもつけていたりして。あつえなくもないトマトに対する執着っぷりに私は納得した。

だけど、黙つて見ていたつて食べれるよひよひませんからねー。あきれ顔な私に、

「…だけど、まだその時ではないらしい」

微笑しながらも、ぽつつと漏らしたその言葉

「やうだね、まだ先かな。もひょつと赤くなつてからね

私は愛しのトマトを眺めて呟いたら、その様子を見ながらアーテレイは苦笑した。

【番外編】「トマトと私とあの人と」（後書き）

リツキさん、相変わらず激鈍です。

彼の言葉の深い意味を探ろうとも思わないご様子です。

先日の恵みの雨とはうつてかわって、本日は晴天なり。やつぱり晴れでお日様が出ている日は心も軽くなる気がする。そんなうきうき気分だった午後にちよつとした事件は起きた。

本日、午後のお食事を済ませていつもおしゃべりタイム。そんな時に、事件はやつてきたのだった。

いきなり女中頭のアドマさんが皆を食堂に集めて、話をしだした。話を一言簡単にまとめると、

「本日午後から、急なお客様がいらっしゃるので、準備にとりかかるよ」

との事だった。その一声がまるで合図かのよつて、皆が一斉に持ち場へと戻り、各自来客準備を開始した。

さすが、これだけの大きなお城では、急な来客にも手慣れた対応。もつとも忙しいのは、このお城で開かれる夜会だそうだ。聞けば、数百人とも集まるとか。

夜会なんて、まるでシン『ト』レーヴの世界みたいだ。

初めての来客体験で、私は皆の足を引っ張らないよつて、カリ亞について行くので精いっぱい。

まずは、カリ亞と庭園に花を摘みに行く。今日は、いつもより多くの場所に花を飾るそのので、花の良い香りのする緑の庭園へ、カリ亞と一人出かけていく。

「なんでも今日のお客様は、女性らしいわよ」

カリ亞が仕入れてきた情報を聞く。さすが、カリ亞情報早いなあ。

「女性？」

「そりゃじこわ。しかもわざわざ侍女付きでいらっしゃるついで、から、ひょっとしたら、しばらく滞在なさるかもしないわよ」

「ふうん」

誰のお客様かはわからないけど、何だか、少し大変そう。

「じゃあ、私は向こうで花を選んでくるから、リッキは、あひね

カリ亞は、私にそう指示してさりと向こう側に行ってしまったので、私はカリ亞に言われたとおりの方向へと足をすすめて花を選抜する事にした。

まあ、どれにしようか。

ふと、庭園にいつもいるはずのローディの姿を探してしまった。  
彼がいればお勧めの花を教えてくれるので、一発なんだけど……。

自然に彼を目で探してしまった。

だけど、探してみても庭園のどこにも彼の姿はなかった。  
いつも彼の方から、声をかけてくれて花の選別を手伝ってくれるけど、今日は忙しいのかもしない。

ふと、彼の好意にいつも甘えてばかりの自分に気付く。

きっと彼は優しい人だから、私が困って悩んでいるに気付いて、見るに見かねてアドバイスくれていただけなのだろうな。自分の仕事も忙しいのに、私の為に時間をさいててくれたのだろう。  
そんなローディの優しさに改めて感謝しなければ。

ローディを自然に目で探してしまったけど、今回はあきらめて自力で咲き頃の花を選ぶ事にして、庭園を探索していると、不意に前方の人影を確認する。

「やあ、リツキ」

思いもよらない人物と庭園でばったり出くわしたので、少々驚いた。

「ここにちわ。お散歩ですか？」

「ちょっとね。リツキはお仕事中?」

「お客様がいらっしゃるのでの準備です」

「やうだね。急な来客だから、色々皆に迷惑もかけると思ひナビ、よろしく頼むよ」

そんな「子息様であるワインのもつたないお言葉を聞き、初来客の対応に頑張る」と思ひ。そうのないよひ、伯爵様とワインに恥をかかせる事のないよひ、精一杯振舞うとよひ。

…と書つても影の働きだけだ。

お客様に満足のいくサービスを提供できるよひに努めます！

「わうわう、アテレイを見かけなかつた?」

「え?見かけませんが… お探しですか?」

「……そつか。ちょっとね……探していたんだけど……まあいいか……」

独つ言のよひしふやへラインへ、テンラインへ、つりかり

「だけど、今朝は見かけましたよ

ヒ言つた後で自分で気付いた。もしラインに

「ビリで見かけたの?」

なんて聞かれたびびつみわ。

『こつものマタ猫で猫マタを観察しました』

なんて言つたら最後、いろいろシシコリビリ満載だと思う。  
すみません、すみません、伯爵の土地を無断で借用します。  
強いてはいすれは、いじ子息であるラインの土地になると想いますが、  
見逃して下さこつ。

ラインは不思議そつな顔をして、

「朝に？アテレイを見かける…？」

やばー！私やっぱり余計な事を言つたー自分で自分の首を絞めてる  
結末？冷や汗をかきながらも

「はい。毎朝見かけますが」

「おおおおおお！」

やうやく余計な事を言つたー『毎朝アトリエ見かけねどアトリエ』

…なんて、質問されたらどうしよう。

とこうよつ、質問してトセコ、と皿の上にこじりこじりな物のじやない  
いか！

皿の上にこじりこじりな物のじやないにナビ、墓穴を掘るのは私得意なのーー

私の苦笑いを不思議そうな顔で見ていたラインは、一瞬、驚いた顔  
をしてから、少し考え込んだ様子だ。

すみれ色の瞳は、穏やかに優しい色を浮かべつつも、まるで面白い  
事を知ったかのような笑みを浮かべて

「アテレイを毎朝見かけるの？…へえ…」

なんだか、一人で思うところがあるのか、笑いを止められない様子のラインを見て、何が面白いのかちっともわからない。

「僕の知ってるアーテレイは、ものすごく朝に弱い姿しか知らないけど」

愉快そうに言つてアーテレイは、なぜか嬉しそうだ。

「なんでだろうね？ そんな彼が早起きする理由は

そこで、まっすぐにラインは私を見つめる。スミレ色の瞳は、きらきらと輝きながら、私は問われて、少し考える。

誰が朝に弱いって？ アーテレイのどこが朝に弱いのだろう。私の中でアーテレイは完璧朝型人間ですが。

…もしや、トマトか…？ トマト効果か…？

食べるだけでなく、見ても健康に良い新たな健康法か…アーテレイ

イ、身を持つて実践か！

「とっても、興味のひかれる何かの為かもね…」

そう言つて、ふいにラインは一步私に近づく。ラインは私より身長が少し高いぐらいで、その顔が近づいてくる。中性的とも言える男性にしては、かわいらしい顔立ちだと思つ。やわらかな栗毛にスミレ色の瞳は、優しげに輝き微笑んでいる。笑みをたたえた唇は、赤く小さめだ。

そのラインが、近付いてきたので、私は心臓がドキリとして反射的に後ずさつそうになる。

「髪につけてるよ」

「え…？」

ラインは私の髪についていたらしい一枚の葉を取つて、私の顔の前に持つて来て、見せてくれた。

「あつがとうござんな…」

お礼を言つて顔をあげたら、顔を上げた視線のすぐ先にラインの顔があつてその近さにびっくりする。

ラインは私より、身長が少し高いぐらいなので、自然に顔の位置が近くなる。

その息遣いが、感じられる程の距離に私は顔を赤らめる。そしてそのまま私は下を向く。

距離の近さから感じられるのは、爽やかな甘めの香り。いつもはアデレイのベルガモット系の香りに慣れてるので、いつもと違う香りに私の心臓は高鳴る。

ラインは、私の長い黒髪を一房掴み、

「流れる神秘的な黒髪に、意志の強そうな黒い瞳は、恐れを知らずに真っ直ぐに見つめ返してくる。異国の雰囲気を持つ美しさに興味をひかれるのは、彼じやなくとも理解できるよ」

そう言いながら私の髪を離し、そのまま私の頬を、その柔らかい手で撫でた。

あまりの出来事に私は、顔が真っ赤になってしまった。

こっちの世界は、こーゆつ恥ずかしい事も余裕でしてしまつお国柄なんでしょうか！？

この場合、私の対応は、どうしろと…？

もしやここはアメリカンスタイルで、これは「よく普通の事なの…？」

混乱していたら、ラインは笑つて、

「リツキ、真っ赤だよ」

その言葉にますます真っ赤になる私。照れるに決まつてゐるでしょー！  
ラインは、笑つて

「そんな、リツキもかわいいね」

更に、私の顔面はヒートアップ。ゆでダム... ゆでダムにするつもつ  
なの？あなた様はつ？

その時、遠方から私を呼ぶ声が聞こえた。カリアだ。  
助かった！神のお助け！

その声を聞いたラインは

「呼ばれてるね」

と、笑顔でちよつぴり残念そうに肩をすくめて言った。

カリ亞に呼ばれている皿を告げ、挨拶をして立ち去り立とある際、

「アテレイに知られたら怒られちゃうかな」

何だか苦笑しつつも楽しげなラインと、なぜここアテレイの名前  
が出るのか疑問に思いつつもカリ亞の元に駆けつける。

そして花も選ばずに、手ぶらでカリ亞の元に戻つた私は、カリ亞からお説教を食らつたのだった。

## 22 来客対応（後書き）

リツキ、初めての来客対応つて、見事にアーテレイをカウントスルーしてますね。

さてさてライン、久々です。

可愛らしい顔つきですが、彼はなかなかのやり手です。



## 23 客人到着と私の予感

「早く、早く！リツキ、急いで」

「ちよつ、待つて、待つて！カリア」

カリアに、呆れられ、怒られながらも急いで花を選び、フロアの全てに花を飾り終えた後、玄関に出迎えに行くと客人は、もうすでに到着していた。

この屋敷に仕える人の皆が出迎えにあたっているかのように思え、玄関のフロアは人だかりだ。

皆が笑顔で客人を迎えている。

こんなビック待遇、受けるお方はどんなお方なんだろうか。

興味がそぞれ、私も人の垣根から、顔を出す。そして、客人の姿を確認する。はしたないと思いつつも、だつて興味あるんだもーん。

客人は女性という情報から、きっと貴族とか身分のある女性に違いないと思って。

私の興味とは、アデレイといいラインといい、美形が多いこの世界で、貴族の女子というものは、どんな美しさなのか、興味津々だつ

たのだ。

毎日が結婚式みたいなドレスきて、髪型は金髪でくるくるロールのリアルベルべラを想像した。

そして、羽のついた豪華なうちわ…違った、おつぎっ…センス？何て言うのかわからないけど、その豪華なうちわを風にゆるがせてオホホと笑うのだろうか。

人の垣根から、何とかこつそり首を伸ばし、そこにいらっしゃった客人を見て、予感的中。

髪型はクルクルたて巻きロールではなかつたけど、赤が強めの茶色の髪は柔らかく自然なウェーブで背中まで波打つていて、瞳は髪の毛と同じ赤茶色の瞳。

パツチリとした二重にやや釣り目な瞳は、勝気な性格を予想できる。透き通つた白い肌に、すらりと通つた鼻筋、口端を上げて微笑み、なんていうか、大人の美しさというよりは、かわいいタイプだと思う。

服装は、華美ではないけど、ふんわりとした形の白いドレスで、とてもよく似合つていて、彼女の可愛らしさをよく引き出していた。年齢は、きっと私と同じぐらいだろうか？それともまだ十代後半だろうか。気の強そうな可愛い顔した少女が、そこにいた。

ヒューストン伯爵が笑顔で迎える。

「長旅」苦労がありました、しかしそく来てくださいました。しばらく  
ご自分の屋敷と思って滞在されるといい」

につこり微笑むヒューストン伯爵の笑顔に今までクラクラきそうにな  
る。やっぱり素敵だ、ダンディ伯爵。対するお嬢様もにつこり笑  
つて

「お言葉に甘えて、しばらくお世話になりますわ、ヒューストン伯  
爵」

二人は、一通りの挨拶を交わした後に、

「それより…」

お嬢様が、何かを質問したそつに口を開きかけた時に、

「やあ。久しぶりだね。アルメリア」

扉を開け、まっすぐに階段下の玄関のフロアに降りて来たのは、ヒューストン伯爵のご子息のラインだ。

ご子息様とお嬢様は親しそうだけど…という事は、ご子息様の友人か?アデレイといい、このお嬢様といいラインはご友人が多い。

「ラインナルト様」

お嬢様は、ラインの姿を見つけると微笑む。ふむふむ、お嬢様はアルメリアお嬢様といつのか。これは覚えておかないと。メモメモ。

「…だけど、本当に来たんだね…」

苦笑まじりのラインに、

「いけませんの?」

キッと強気な眼差しをラインに向けるお嬢様に、ラインは、やれやれといったため息混じりの様子だ。

「まあ、別に僕は構わないよ。気のすむまで滞在するといこう

「最初から、そのつもりですわ。…で、今はどちらが…」

「… やあ？」

お嬢様の質問に笑顔でさらつとかわしたがい子嬢様。

…もしかして、…もしかしてですけど…ちょっと立っていませんか？ほんのすこーし、ほんのすこーしですけど。

いつもの素敵な笑顔の裏には若干黒い影が見えるよつた気がします。私は、そのやり取りを、ひやひやしながらも、観察する。

「把握なんて出来やしないよ。…君も十分知つてゐると思つナビ。  
…まあ、気のすむまでやるといい」

「そのつもりですわ」

お嬢様は不敵に勝氣に微笑む。対する「」子息ラインも負けとはいひけど。

二人の会話の意味は、私にはちつとも理解できなかつたが、まあ関係ないので、スルーする。だけど、お嬢様は、何かしら目的があつてこの城にいらっしゃつたという事はわかつた。そして、ラインが実は、あまり歓迎モードじやないつて事も、何となく空氣で感じてしまつた。

その時、もう一人お嬢様の側に立つ人影に気付いた。お嬢様觀察ばかりして、その隣に立つ男の人の存在は、まったく眼中に入つていなかつた！

アウトオブ眼中とは、まさにこの事さね！

視力があまりよくないので、眼をこらして、改めて観察してみる。

隣に立つ男の人……というより、年は私より年下かもしぬない。お嬢様と同じ赤茶色の髪の色して、くせ毛まじりで柔らかそう。そして、お嬢様と同じ、瞳の色も赤茶色だ。

「もしや、姉弟？ そういえば、よく似ているかもしね。霧岡氣とか、生意氣……おつと一活発そうなところとか。

対するこちらは、美少年という感じかな！」

こうしてお嬢様と美少年を並べてみると、よく似ている。

なんと美しい姉弟かな。

感心してしまう。

感心して見入っていたら、バチリと目があつた、美少年と。赤茶色の瞳は、真っ直ぐに私を見つめる。

ヤバい。客人なのに、見いってしまっていた。こんなに見つめてちや失礼に違いない。

慌てて眼をそらし、人の垣根から首を引っ込めるも、目が悪いので、睨んでいたかのように見えたかもしれない！

リツキ、初めての客人対応早くも失敗か？

先程、伯爵とラインの為に頑張ると心の中で誓つたばかりではないか！

「部屋に案内をせよ。ゆっくり紅茶でも飲もう」

ラインの声にうなずくお嬢様。その側に立つ美少年と共に、案内役の執事のメリーストさん後に続く。

ほつとしながらも見送りの為、後ろ姿を見つめていると、お嬢様の隣に立つ美少年が、後ろを振り返る。

そして、また目がバチリとあつてしまつた。

え…えつと…

戸惑いを感じていると、美少年は、しばらく私を見つめた後、まるで『嫌なものでも見てしまつた』とでも言つよう眉間に皺をよせた。あきらかに不快そうな顔をした後、顔をそむけてメリーストさん後に続いて行つた。

な…何だ…あの態度…

『フンッ!』といつ態度をあからさまにとられて、ショックといつより驚いた。

『フンッ!』でなければ、『チッ!』と舌打ちが聞こえてきそうだつた。

何あれ！感じ悪いよね！絶対悪いよね！

そりや、私だつて、客人相手に観察してたのは悪かったかもしけな  
いけどさ！

メリーストさんの後ろに続くお嬢様と美少年を見送りながら、何だ  
か嫌な感じがする。ひと波乱でも起きそうな予感。

私の予感よ、どうか外れて欲しい。願わくば、私には関係あります  
んように…！

保身を考え切実に願つた。

なぜなら、行動が意味不明な客人は、アデレイ一人で十分だから！  
間に合つてますから！

【番外編】～トマトと私とあの人と～（前書き）

アクセス数が100万PV超えてました！  
ユニーク数も20万超えてました！

ありがとうございましたの気持ちの番外編用意しました。

## 【番外編】～トマトと私とあの人～

本日は一人収穫祭。

カゴを片手に新鮮トマトを、もいではカゴに入れていく。

ずつじうとくる重さに、大量収穫を感じる。

だんだん重くなってきたカゴを片手に中腰の姿勢はツライ。腰を痛めるかもしれないこの姿勢。腰は男の命ですよっと、な。なんて、男といわず、女性も腰痛には注意でしょ。

中腰の姿勢から、起き上ると、不意にカゴを持つ手が軽くなる。驚いて周りを見るとアーテレイだ。

視線の先のアーテレイの右手には、私がさつきまで持っていたカゴだ。もしかして、私の為にカゴを持ってくれたの？

「ありがとう」

急に軽くなつて腰も楽になつたので、お礼を言つ。

正直びっくりした。

だって、いつも畑に来るけれど、本当に言葉通りに『畑に来る』だけだったアデレイが初めて手伝い diligere 事をしてくれたのだから。

アデレイは、笑顔で一つうなづいたので、そのままトマトを採る。「もう収穫時間だよアデレイ。お礼とこいつをあなんだけど、…食べる?」

アデレイの持つカゴがトマトでこぼこになつたので、本日の収穫は終了。

側でカゴを持つアデレイに向かってお礼を言つ。

「あつがとうアデレイ。お礼とこいつをあなんだけど、…食べる?」

そうだ、今日は初めてアデレイがお手伝いした日。働くもの食うべからずの精神にのつとつて今までちょっと意地悪してあげなかつたけど、トマトを一つつまんで差し出す。

初めてのおつかい並みに、アデレイの成長に喜びトマトを一つ指先でつまみ、アデレイに差し出す。  
真っ赤に熟れたトマトは、ほんのりと甘くしてこな。

アデレイに、笑顔で差し上げるべく指でつままで差し出すと、急に手首を引っ張られる。

痛い！！

…って言うより何…？

驚いて、つまんだトマトを落つことしかなくなるほど、何とか持ちこたえる。

何するの…？という視線と共にアデレイを見上げる。トマトを掴んだ手は、アデレイに手首を捕まられている。

アデレイは見た目は線は細いのに、手は想像よりずっと大きくて力強く、私の手首は、簡単に捕まえられている。

私の、視線を感じて、笑みを浮かべたアデレイは、そのまま私の手首を自分の唇へと誘つ。

え… ちょっと…

そうして、そのまま私が指先でつまんでこむトマトを私の指から食べる。

指先にアデレイの歯の跡の柔らかさが伝わってきて、心臓の動悸が高まる。

アデレイは、トマトを食べると

「みずみずしくて美味しい」

と私に向かって微笑む。

「アデレイ…」

私は手首を掴んだままのアデレイに、呼びかける。

アデレイは、満足気な笑みを浮かべたまま私に微笑む。

「ふ…普通に食べなきこつー」

なんだ、その色っぽい食べ方はー私のほうがトマトのよつこ真つ赤になるわー！

おかげで、ドキが胸胸ハネハネしちやつたわ！

…違う。

胸がドキドキしたわ！

【番外編】～トマトと私とあの人と～（後書き）

昨日から引き続きクリスマスイブのまたかの連続更新…

べ…別に暇な訳じゃあないんだからねっ！

拍手も久々変更しました。クリスマスバージョンです。

べ…別に暇な（以下同文）

お付き合ひありがとうございました。

「部屋に飾つてある花を全部換えるよ！」

開口一番に女中頭のアドマさんから言われた時は、意味がわからずポカーンとしてしまった。

なんだ、なんだ、お嬢様は花粉症か？と。

その私の呆けた顔を見てアドマさんは再度言つ、

「アルメリア様のお部屋に飾つてあるお花を全部薔薇に交換するよ！」

申し訳なさそうに伝えるアドマさんの言葉の意味を考えて理解する。

今日、客人をお招きする部屋に飾つたお花は白いプリメリアや薄いピンクのブーゲンビリアだ。私的には、色も清潔感あふれる白と可愛らしいピンクだし、香りも甘い香りで気になつていてる花なのに、どうやらお嬢様のお好みとは違つてしまつ。

しかし、さすがお嬢様。

そこにある花の美しさよつ、自分が気にいった花以外受付ないとは、なんといつ完璧ぶり！田の前の花を楽しめばいいのに……。

まあ私たち凡人とは感覚が違うのかな。そして気にもせずに、

「はい、わかりました」

申し訳なさそうに言いつつアドマさんとは正反対に、私は調子よく声をだす。

さあ、もう一度庭園へ出掛けなくては。

「失礼します」

扉をノックする事3回、中から「お入り」とのお許しの声が聞こえたので、薔薇の飾られた花瓶をワゴンに乗せて部屋に入る。

部屋の主のお嬢様は、部屋の中央に置かれた椅子とテーブルに優雅に座り、素敵なティーカップで一息ついているティータイムのようだ。

…きっとカップを持つ手は、小指が立っているに違いない。

気にはなるけど、あまり見ちゃいけない、興味を持たれてはいけない。

…だって、このお嬢様に興味を持たれでは、後あと面倒な事になりそうだ。

なんだか、知らないけど、根拠のない私の第六感がそう告げる。

私は、平穀に穏やかに毎日を過ごしたいのだ。  
いつか帰る日を、心の中で待ちわびながら、トマトがすくすく育つ成長を楽しみに過ごし、そしてある日、トマトの成長を見届けた記念すべき日に帰るのが私の理想ね。

部屋に入るとお嬢様に一礼をして、そのお顔をあまり拝見せずに、早々と花瓶の交換作業に取り掛かるとした。

くつー花瓶め！重いー！

水を入れた花瓶の重さは、まさにバーべル級。私一人でどうにか出来る重さではなかつたわ。

腕がプルプル言いながらも花瓶を両腕で抱え、ワゴンに移動させていると、中央のテーブルから声がかかる。

「ねえ。ちょっと聞きたいのだけど」

お嬢様は、私の腕がプルプルいいながら花瓶を抱えているのを気にもとめずに、というより、そんな事知ったこっちゃない様子でのんびり優雅に聞いてきた。

きっと、お嬢様が一生かけて持つ物の重さを全て足しても、この花瓶の重さ程にはなるまい。

「はい」

プルプルいう腕で花瓶を抱えながら、お嬢様に向き合つ。花瓶の花でお嬢様のお顔が見えない。

「ここに、男の人人がいるでしょ？」

男の人？つまりは誰の事を言つてゐるのだ。男といえば、世界の半分は男な訳で。このお城にも男の人はいっぱいいますけど。

「はい、いらっしゃいます」

「そう…やつぱりね！」

お嬢様は自分の予想が当たつたのが、余程嬉しかつたのか、心底嬉しそうな声ではしゃぐので、

「このお城では力仕事とかも多いですから、男の方も結構仕えていります」

と、答えた瞬間、

「…誰が使用人の事なんか聞くのよ…いるでしょ？この城に一人目をひく程の男の人…」

ムツとした感じのお嬢様に瞬時に言い返される。

はて？

このお嬢様の言っている事の意味がいまいちよくわからないけど、見田麗しい殿方達なら先程出迎えで会つた気がするのだが。

「…ああーヒューストン伯爵ですか！素敵ですよね」

あの歳の取り方はダンディだ。立派なお髭がなんとも言えずに紳士で素敵なジェントルメンだ。

あんな父親がいたら、私は今頃ファザコンだ。結婚するなら、父親みたいな人としたい、と心底望んでいたに違いない。

「違つわよー」

お嬢様は、私の答えが気に入らなかつたらしく高い声で叫ぶ。やばい、怒らせたか。女人は怒らせないに限る。めんどくさい。しかし、短気でヒステリックなお嬢様だ。きっとカルシウムが足りないのかもしねり。

そんなに怒つてばかりじゃ一言アドバイスしたくなる、『短気は損氣だぞ』つと。

お嬢様のお怒りの、意味がわからなかつたが、とりあえず

「すみません」

一言謝罪の言葉を口にした。わがままお嬢様を怒らせたら、謝るのが一番。

花瓶の重さに腕をブルブル言わせながらも謝罪の言葉を口にする。お嬢様は、私の謝罪を耳にしたはずなのに、聞いちやいない様子でティーカップを口に運ぶ。

私は運び終えた花瓶をワゴンに乗せ、新しく飾つた薔薇の花の花瓶を配置する。薔薇の香りが部屋に充满する。先程まで飾っていた花の香りも混ざつて、きつこ香水のような感じだ。もつたいないな。このプリメリアとブーゲンビリアはもうつて帰るつ。せつかくの花だもの。

「失礼します」

深々と頭を下げる、部屋を退室しよう。部屋の主、お嬢様は黙つたままだ。顔を覚えられないのが一番だ。そつと退室する為、扉に手をかける。

「待つて」

部屋の中央のテーブルから、お嬢様の呼びとめる声が。なんだろう。私はため息をつきたくなりながらも、お嬢様に向かつて振り向く。

そこには、髪も瞳も同じ赤茶色に輝き、気の強さがにじみ出ているような眼差しを、まっすぐこちらに向けている人形のような、可愛いらししい顔したお嬢様が私を見つめていた。

お嬢様は、私の顔を見ると、一瞬眉をひそめ、すぐ驚いた顔をした。

あ、異世界人だつて、ばれたかもしれない。これで覚えられてしまつたかもしれない。

「あなた…」

その後に続く台詞が想像できたので、お嬢様より先に口を開く。

「はい、異世界から来まして、訳あってばかりでお世話になつております」

深々と礼をする。ハイ、アウト。これでばっちらり顔を覚えられた。  
これでもつ、変な事できない。…いや、するつもりはないが。

私の礼を怪訝なまなざしで見ていたお嬢様。

あれ？なんか私の顔についてますか？それとも異世界人で珍しいですか？だけども、お嬢様と同じで目は2つに口も鼻も一つですよー。  
同じ人間ですよー。

「…初めてみたわ」

呟くお嬢様に、ああ異世界人って初めてなんだ、と納得した。だから、こんなにまじまじ見たのね。穴が開くかと一瞬思ったわ。いいよ、いいよ、珍しいもんね。

…なんて、実際穴が開く訳がないのだけれど、もし本当なら毛穴が開くのだけは本気で勘弁したい。

その後、お嬢様は、私の足の先から頭のてっぺんまで、遠慮なしにジロジロ見つめた。

なんだと言うのだろうか。

黙つて観察されるがままにしていたが、お嬢様の目には、宇宙人かのよう見えるのだろうか。しかも結構な時間を観察したあげく

「…ふうん」

…一言ですか。何ですか。感じ悪つ！その態度。いくら高貴なお嬢様でも人を見つめてそれはないんじゃないの。ちよつと怒っちゃうからね。そんな私の様子を見てお嬢様は、

「名前は？」

「は…？」

お嬢様が、私の名前を聞いている。はつきり言つてただのメイドの名前を聞いてどうするというのだろうか。絶対良くない予感がする。どうする、いつそ偽名でも使うか？

「名前を聞いてこよのよ」

お嬢様は苛立つた様子で声を荒げる。その様子に

「…リシキです」

「おーーーつい答えちまたよおおおーとつさに偽名が浮かばなかつたよおおお。

「…そう。黒い瞳に黒の髪。初めて見たわ。異世界人で皆そうなの？」

「私のいた国では、ほとんどそうですが…」

私は早く退室したくてたまらない。私の背後の扉の向こうには自由が待っている！そんな気持ちでチラチラと扉をチラ見していたら、扉が向こう側から先に開き驚く。

驚いた顔と同時に、扉の向こうから現れた人物は、先程の美少年だ。

あっ！と驚いた顔した私と美少年は、まっすぐに視線がぶつかる。視線は、私より少し高いぐらいの所で、赤茶色の瞳が私の存在を認識した瞬間、驚いた顔をする。

美少年は、大きい瞳を更に大きく見開き、赤茶色の瞳で私を見つめる。声こそ出さなかつたけど、唇が少し開いたのでやはり驚いたの

だろ？。

誰だつて、扉を開けた先に人が立つていいぢや、驚くよね。

私だつて、驚いたもの。

美少年が、扉を開けた瞬間に私の頭にぶつかつて『ゴーン』とならなかつたのが、救いだわ。

驚いた顔をしたけれど私は、即座に笑顔を作り、微笑みを美少年に向ける。

『お客様おもてなしモード…おもてなしモード…マクドナルドスマイル〇円』

心の中で呪文を唱えながら、扉のすぐ側にいて、美少年を驚かせた事を謝罪しようと口を開きかけた時、

「ずいぶんと鈍そうなメイドだな。これをメイドとして雇つているのだから、ヒューストン伯爵の気がしれない」

は？

「まあ、見た目は悪くないから、使っているだけか」

はい？

田の前の美少年は、悪意のある言葉を私に突き刺す。

…おい、美少年。本人の目の前で堂々と言つなんて、その根性もなかなかあつぱれだな。

「もしかしてヒューストン伯爵のお手付きとか？」

美少年、あらうことか、私の顎を人差し指で持ち上げ、視線を合わせる。赤茶色の瞳は、ぶしつけに私の顔をのぞきこむ。

私はといつと、会つたばかりの他人に顎を持ちあげられて顔を覗きこまれるという事態に思考回路は遮断されていた。

そして…

部屋の中を空気が裂く音と、何ががぶつかる音が響く。

心地よい音が部屋に響き渡り、美少年、一瞬何が起きたかわからなかつたようだ。

そつ、私は、美少年の手を叩いてのけたのだ。

「失礼しました。私の事はよくても、私の雇い主を侮辱する事だけは聞き捨てなりません」

何触つていやがんだあああ！お姉さん、お痛がすきひなは怒つちやうよ！

しかもよりによつて、私をヒューストン伯爵のお手付きとは…！美少年、お手付きの意味がわかつてゐる？

失礼にも程がある。そこに、なあれ！

「…」

美少年は、怒りで顔面がひきつっている。赤茶色の瞳は気性の激しさを表してるのは本当かもしれない。

もし、ここで怒りのあまり、この美少年から殴られたりしたらどうしよう。

この距離では、余程反射神経が良くなれば避けられない。しかしどんな理由であるにしろ、女子供に手を上げるのは、ろくな奴じやない。人でなしだ。私は暴力には決して屈しないのだ。

私は、怒った眼差しを私に向ける美少年に、それに負けない気迫で、視線を逸らす事なく睨む。

『いですよ、闇黒の獣たちよ！』といつ、今すぐ何だか魔獸でも召喚できそうな眼力で美少年を見つめる。

「しかし、こここの使用人は、客人に対する礼儀もなつていはないのか」

「お言葉ですが、先に礼儀がなつてないのは、お客様のほうですと感じましたので、それ相応の態度に出させて頂きました」

私は、ツーンとそっぽを向いて抗議する。

「クビにしてやるーお前なんか」

「顔を赤らめて怒る美少年に、私はあざけるよ！」

「私の雇い主は、お客様ではありません。ヒューストン伯爵です」

「そのヒューストン伯爵に言つからなーお前が逆らつたと  
伯爵に伝えます」

…ああ、『あつかんべー』ともしてやりたい。

元から、身分の差など感じずに生きてきた私は、貴族だから敬うとかそんな気持ち、実際あんまりわかんない。

貴族でも人として駄目な事は駄目だと思うけど、この世界のルールにそつて一応我慢はするようにはしているのだ。これでも、

だけど、人間我慢の限界つてあると思うんだ。

もし、これで、私がこのお城からお暇を出されたらと思うと、正直困るけど、そうなつたら街に行つて住み込みの場所で働くんだ。その時は、この美少年にとび蹴りという置き土産を忘れないで行こう。そう決心も固まつた時だった。

「おやめなさいー・ジエネミーー。」

「姉上」

「仮にもヒューストン伯爵のお屋敷で、彼の悪口は許しません。長旅で疲れているからといい、何をムキになつてゐるのですか」

意外にもお嬢様は、冷静な判断を下したようだ。

お嬢様は、馬鹿じゃない。

そう思った。その分、弟は、だいぶ馬鹿かもしないけど。残念だ。

「リツキ。尊敬する伯爵の文句を聞かされ、気分を害されたでしょう。それは謝罪するわ」

私は無言でお嬢様のほうを向き、黙つて頭を下げる。美少年はシカトだ、スルーするに限ると決め込んでいた。

しかし、残念な美少年だ。

見た目は、美形でも、中身がこれでは、将来苦労するだろう。しかし、姉上であるお嬢様の言つ事はきちんと聞くなんて、もしかしてシスコンかもしねりない。

しかし、この美少年といい、なぜか、美形なんだけど、中身は残念な美形が多いなあと、ぼんやりアーテレイの顔を思い出してつづ退室する。

## 25 戦ひ私（後書き）

『一緒にするな』 BY アテレイ  
の声がきこえできそうですが、いやいや！アテレイ！

あんたも同じような事して、リツキにカウンター攻撃されてるから！  
そんなんあなたも、次回出番だよ！用意しておきなさい、アテレイ。

美少年の名前をいろいろ考えて下せつた方々ありがとうございました！

今回は『ジユネミー』に決定です。

レイチエル様！ありがとうございます！

可愛くて生意気なヤツにしたいです。

あくまでも希望なので、途中で方向曲がる可能性無限大。

お付き合ひありがとうございました。

【登場人物一覧】（前書き）

あけましておめでとうございます。

新年一発目は登場人物まとめてみました。

## 【登場人物一覧】

### 【宮川 莉月】

リツキ

ある日、トマトと共に異世界にやつてきた本編主人公。20歳。20歳のわりには、恋愛偏差値低く激鈍。

黙つていれば綺麗な黒目黒髪を持つ美しい人という印象だけど、中身は残念なぐらいオッサン&男らしい。

共に異世界にやつてきたトマトをヒューストン伯爵家の土地の一角に内緒で畑を作り

田々ばれるのを恐れながらも栽培に励む日々。

### 【アーテレイ】

トマト畑に毎朝といつていいほど現れる人物。

金髪のハーフブロンドに蒼い瞳に整った鼻筋は、綺麗な美形。

だけど、リツキの中では『口を開くと残念な人』認識。

ヒューストン伯爵家の客人でありラインナルトの友人らしい。結構謎につつまれているが

そこは、さすが主人公、気にしていない。

### 【ラインナルト・ヒューストン】

ヒューストン伯爵の『子息様。通称ライン

スミレ色の瞳に、男性にしてはどこか中性的な感じのする可愛らしい容姿。

だけど、その実態はなかなか腹ぐる

### 【アルメリア・ディラン】

貴族のお嬢様。20歳。赤茶色の腰まであるウエーブかかった髪に赤茶色の瞳。

### 【ジョネミー・ディラン】

アルメリアの弟。18歳。赤茶色の瞳と髪を持つシスコンぎみな美少年。

### 【ローディ】

本当はとっくに本編から場外のつもりだつたが作者が愛すべきヘタレキヤラとして現場復帰。

リツキに恋するヒューストン伯爵家の庭師。  
不憫フラグ。でも、かつこいい場面も用意…しているはずだ！

### 【ヒューストン伯爵】

リツキがお世話になつてゐるお城の主人でラインの父。物腰といい容姿といい紳士。ジェントルメン。

リツキは、自分の周りにいる男性の中で一番素敵だと素で思つている。

【カリア】

メイドのお友達

【アドマ】

メイド頭

【マーサ】

最初に異世界に来た時に出会った人物であり、マーサ宅で居候させてもらつてゐるにも関わらず全く出番がないという作者的に、ホントスンマセンキャラ

## 【登場人物一覧】（後書き）

今後人物増えたら、ここも増やす予定です。

けど、今のところ増える予定はないかな？？

お嬢様とシステムは『ティラン』家の方々です。JaZZ様ありがとうございます！

「騒がしいな」

「アーテレイ」

お嬢様のお部屋からの帰り道、ワゴンを押しながら廊下を進む私の背後からアーテレイの声が聞こえて一瞬驚く。

もしや、私の『客人』=残念な美形 思考がアーテレイを引き寄せたのか？

「平穏に過ぎ」していたといふのに、招かれざる客と云つのは厄介だな

「？」

半分独り言のように一人でつぶやき、さりげなく私の手からワゴンを奪い、自然な形でワゴンを運んでくれるアーテレイに

「ちよ…アデレイ！大丈夫！それ私の仕事、仕事」

私は慌ててアデレイからワゴンを奪おうとするけれど

「俺の方が力はあると思つただが…」

しつれつと言いながら、アデレイはなかなかワゴンを奪わせてはくれない。なので諦めて隣を歩く事にしたのだが、傍からみたら、とっても不思議な図だったと思う。

なにせ、一人のメイドが、身分が上であるお客様（しかも美形ときたもんだ！）に、ワゴンを押させて隣を歩いているんだもん。しかも、ワゴンにはプリメリアとブーケンビリアが飾られた花瓶があり、それを押す美形アデレイも絵になつていてるから不思議だ。

写真の一枚でも撮つておきたいぐらいだ。

タイトルは『花瓶の花々と萌え』なんぢやつて。

……なんか違‘つ。

『花瓶の花々と美青年』

こんな感じかもしねないな。

しかし、花が飾られた花瓶のワゴンを押す様子だから、まだ絵になるが、これが雑巾の入ったバケツだつたらシャレにならんから、そん時は全力で拒否しようつと心に決める。ワゴンを押すアーテレイの横顔を見つめながら、ふと思つた事を口にする。

「アーテレイも会つた? 今日のお客様のお嬢様」

「…お前は会つたのか?」

「うん。さつきも、お嬢様に言われてお部屋のお花を換えてきたとこ。だけどわあ、もうすこいこね。生まれながらにしてお嬢様つて感じだよね」

私の一人興奮にアデレイは黙つたまま耳を傾ける。

「手入れの行き届いた赤茶色のウェーブがかかった長い髪に、綺麗な肌に、可愛らしい顔して、お人形みたい。顔なんて、すくく小さいのつ」

私の興奮はまだまだ続く。無言で聞いているアデレイに向かって、一人舞台でマシンガントークを続ける。

「綺麗なドレス着てさ、それもまた似合つてるんだよね。なんかちよつと悔しいような羨ましいようなだけど。それでさあ、お嬢様は、まあおいといて、問題はその弟だよー」

「…弟がどうかしたのか?」

おつーアデレイ!私の会話に食い付いてきたね。なので、私は続ける。

「あれは完璧にシスコンだね!」

きつとシスコンの意味がわからないだろうアデレイに説明してやり

つつ、先程のムカつく一件についてアデレイに愚痴る。

「まつたくさあ。疲れてるだか、ビーだか知らんけど、初対面の相手に鈍そうとかいきなり言つ?

メイドだからと言つて、何を言つても許されると思っているその人権を無視した行動が頭にくるのよね。言い返さないとでも思つていいのか、弱者に対するその考えがまたムカつくのよね。いくら疲れているからと言つてさ、自分より弱い立場の人間にストレスぶつけるなんて最低」

私の愚痴をアデレイは黙つて聞いていた。

…というより、勢いに口を挟めないってほうが正しいかな。

私の怒りは一人でヒートアップする。

「しかも、『伯爵のお手付きか?』とか、問題発言して、おまけに人の顎勝手に持ち上げて顔近すぎるし、セクハラだつていうの」

怒りを吐き出す私に、隣でいきなりアデレイが動きを止めたのがわかつた。私は不思議に思つて立ち止まり、そこでアデレイの様子がおかしい事に気付く。

そこには、私の隣で私を静かに見下ろすアデレイの顔があつた。いつになく神妙な顔つきにこつちがビビる。

なんだ、なんだ、どうしたアデレイ、腹でも痛くなつたのか?

私の不安をよそにアテレイは

「…何かされたのか?」

「え…。されたといつか…」

いきなりのアテレイの真剣な眼差しに、じつちがうろたえる。

「されたのか?」

再度確認するかのように聞く、強い口調のアテレイに

「伯爵様のお手付きなのかとか言われて顔をのぞきこまれたけど…」

アテレイの迫力にじつちが押され気味になつて、なんだかしじろも  
どうに答える私。

アデレイは眉間に珍しく皺よせていつになく真剣な顔をしている。その様子がちょっと怖い。アデレイの蒼い瞳は静かに凍えそうな冷たさを放っている気がした。いつもは、蒼い空色の瞳が、今日はアイスブルーな瞳で怖いです。

何とか、話題をやらいねば……さすがにＫＹな私でも気が付いた。

……空氣重つ！

その空氣が重いままで足取りも重く、長い廊下を一人で歩く。

沈黙が長く感じぬ……。

その間もアデレイは何かを考えているような様子で、眉間に皺寄せて前だけ見つめて歩いている。

私は、隣のアデレイをチラチラ見ながらも重たい空氣のまま進む。

何か話題を……と思った時に、先程のお嬢様の様子を思い浮かべ、ふと、思い出す。

「そういえば、誰かを探しているみたいだつたよ、お嬢様は。アデ

レイ知らない?』

首をかしげてアデレイを見るとアデレイは、もう元の顔つきに戻つていてホッとする。そうしていつも涼しい顔で私を見つめ返した。だけど、その一瞬の隙を私は見逃さなかつた。彼は、何か知つているような空氣を醸し出し、そしてソレを誤魔化すような曖昧な笑顔を浮かべた。

アデレイの笑顔を見た瞬間、

『コイツは何かを知つている』

私の隠れた第六感、俗にいう女の感だろうかが、働いてピーンときた。絶対アデレイに関係のある事だ…。

だけど、内心どうでもいい事だと思い、

「ふーん。そつか

そう言い放ち、知らんふりをした。

お嬢様とアデレイがどんな関係だらうが、正直私には関係ないし、どうだつていいもんね。

しかもアデレイが話す氣ないなら、こいつちだつて無理やり聞きだすもんか。だんだん意地になつてきた。

…だけど、何で私は、こんなに意地になつているんだらうか。

自分でもよくわからないまま、廊下の突き当たり、左に曲がれば調理場という所で、アデレイとは別行動だ。

よく考えれば危なかつた。

一応アデレイも客人という立場であり、その客人にメイドのワゴンを押させて、自分は呑気に隣を歩いていたなんて、ばれたら私のクビが飛ぶ。なので、ここから先は私の出番。

「ありがと」

アデレイからワゴンをひつたくる様に奪い去つてから笑顔でお礼を言つて、後にはした。

久々アーデレイ来たなつ！

「こいつぱい実るのよね」

赤い実を人差し指で摘まんで太陽に照らして軽く見つめた後、会話の相手に差し出す。

「そつ… そうなんだ」

差し出された相手は、この赤い実と同じくらい赤い顔をしたまま返事をして、そのまま私が差し出した赤い実を手の平で受け取った。

「だから、畠に食べて欲しいの。何か良い方法ないかな? ローディ」

じつは、トマトがなるわ、なるわ、の嬉しい悲鳴で私と職場の仲間内に配つていいだけでは消費出来なくなってきたのだ。

そのまま食べずに腐つてしまつとしたら生産者としてとても悲しい事だ。

私は、庭園でトマトの今後について、ローディに相談を持ちかける。だつて、ローディは私の知つてゐる男の人の中でも一番親身に相談に乗つてくれそだだから。

アデレイは、トマトに興味しんしんな様子だけど、あのとおりだし……。

だいたいアデレイもラインも高い身分とやらなので、なんか、こう一般、ピーポーの田線ではない気がスル。

いや、別にローディが庶民だとか、言つてゐ訳じやなくて、一般人の生活に一番慣れ親しんでそだつて事で。

「じゃあ、市場で売るといい。俺が叔父貴に話をつけとこでやるから、そこで試しに売つてみればいい

「……えつ……本当……？」

「ああ。こんだけ美味しかつたら、売れるぜ、きっと。それに、うちの叔父貴も新し物好きだから、飛び付くと思うんだ」

ナイス　アイディア　　!!

思いもよらなかつたローディの申し出に、喜ぶ私。

やつた！その手があつたか！これなら大勢の人に食べてもらえる。

「じゃあ、叔父貴の了解が出たら、早速市場に持つて行くから、いろいろ準備しておいてくれ。価格も決めなきゃな

そうか、売るとなると価格も決めないといけないな。いやうへりうへりが妥当だろ。

：だけど、お金儲けが目的じゃない。

だから、お金とかあまり関係なく大勢の人に食べて欲しいという気持ちがあるんだよね。

だけど、さすがに無料配布と言つ訳にはいかない。

私なら、見た事もない食べ物をいきなり『無料で差し上げます』つていきなり言われても断固として断る。

毒かもしない、腹を壊すかもしない、何か裏があるのかもしない…

などなど疑つてしまふ。

ただより怖いものはないと思うから。

だから、安値でいいので、値段をつけて売る事にする。

まあ、値段は購入してくれる人の安心の為みたいな感じですけど。

「でも、実際どのくらいいたくさんあるんだい？」そして、ビルで作っていふんだい？」

ぐつー、ぐつー！

ローディは答へにいく事を聞いてくる。

「あのね一株にたくさんなるの。だから、消費できなくつてい

私は、なんだかローディの視線を真っ直ぐに見る事が出来ず、逸らしながらも答える。

「小さい袋いっぺいに入れて、一袋100セントぐらいで売ればいいかな？」

「安つー！そんな安ければ元はとれないんじゃないか？」

心配するローディ。だけど、元もなにもない。

土地は勝手に無断借用、水とお口様されあれば勝手に育つよつたも

のだし、

肥料だつてそんなに大した金額じゃない。  
人件費も私一人だし。…アデレイもいるが、あれはほぼ労働してない  
いのでカウント外だし。

「安くてもいいの。皆に食べもらえた嬉しいし。ありがとうございますローデイ」

心配してくれるローデイに笑顔で返す。

翌日、ローデイは早速叔父さんにお願いしてくれたみたいで、即日  
OKの返事をくれた。

なので、私は喜び勇んで畠へと行き収穫を始める。

「…売るのか」

「うん」

私はカゴにいっぱい収穫したトマトを見つめながら、答える。

「どうで?」

「市場で?」

売られてこべタマトたちを袋詰めする。今日のところは一〇袋。

「…市場で?」

「うふ。相談したら、聞いてくれたの」

あとは試食用に、たくさんのトマト。正直、試食用の方が量が多いが、これはこれでいいのだ。

あとは、美味しい食べてもいいよ…って祈るのみ。

「…相談?…誰?」

「え？ ローテイだけど」

話をしながらも、手を休めない働き者の私は、手は休めているけど、口は休めないアーテレイの質問に答える。  
何だか、とてもトマトに興味がある様子ですが、そんなに気に入るなら、手伝いなよねっ。

市場でトマトを売ると聞いた途端、眉間に皺寄せで、何だか不機嫌そうなオーラを出すアーテレイだけど、そんなん知るか。まさかトマトを全部食べたい、とか一人占め思考じゃないでしょうね。

「腐りすよりもいいじゃない

不機嫌アーテレイに反論しながらも笑顔で、

「まあ、捨てるより大勢の人間に食べもらえたならあつて。値段は、  
安値にするし」

「…欲はないんだな」

つぶやくよう言つたアーテレイの声に瞬時に反応して、トマトを詰める手を休めて顔を上げる。

「何言つてんのー私ほどお金が大好きな人間も珍しいわよー」

私は、アテレイの方を向き、大声を張り上げ堂々と宣言をする。

私的金銭感覚を語っちゃうと、まずは、先立つものは金だと思つ。それに、お金はいっぱいあっても困る事はない。

いっぱいありすぎて困っている人がいる、なんて聞いた事がない。いたら、私が助けてあげたいわ。

そんな『お金大好き』な私だけど、こっちの世界にきて、皆に本当に良くしてもらつて、あげく私の相棒ともいえる、共に異世界へと渡つてきた運命共同体のトマトを、自分自身の欲の為だけに商売するのには気がひける。

それも、よそ様の土地を無断で借用しての栽培だ。そんな商売してお金を手に入れても結局ね…

悪銭身につかず、ですよ。

「まあ、少しでもお金を貯めて、欲しい物でも買ひよ

「そうか」

「何を買おうかな~」

ウツツツと上機嫌に笑つてみたが、実を言ひと、お金の遣い先

はもう決めてある。

この伯爵の土地から少し先の、小高い丘の上には古くて歴史の感じられる造りの教会が建っている。

前にカリアと教会の前を通りかかったら美しい歌声の讃美歌が聞こえてきて、不思議に思つてカリアに聞いたのだ。なんでも、教会のシスター達が、身寄りのない子を引き取つて人々の寄付や善意で賄つてゐるんだつて。

だから、私はトマトの売り上げ金を寄付しようとか思つてゐる。きっと大した額にはならないだらうけど。

だけど、この事はアーテレイにもローディにも誰にも言つつもりはない。

別に内緒にするつもりはないけど、私のややかながらの、いつも世界の人々へのお返しかな。

だけど、なんだか恥ずかしいので、いつも小金を貯めていふつて事にする。

恥ずかしさから、嘘をつくなべ、これぐらにこによ。

今私は、ヒューストン伯爵家のメイドとしてのお給金も出るし、マーサさん宅に居候させてもらつていて、それもバカみたいに安い生活費で居候させてもらつてゐる。初め、お給金を居候費で全部入れるつて言つたら、恐ろしい勢いで拒否されたつて。

『何かの為に取つておきなさい!』つて。

だけど、それでは、いつの気がすまないので、無理矢理、一定額の居候費をマーサさんに毎月渡してゐる。

そんな訳で現状は衣食住にあまり困つていない。

それに

いつか帰る。

そんな私にあまりお金は必要ないとと思う。それよりも困っている誰かが使つてくれたならそれで嬉しい。

こんな気持ち元の世界にいた時は、考えた事もなかった。

お金はそれこそ生活していく上で必要不可欠で、欲しい物もそれこそたくさんあつた。欲しい物リストなんて書いて、どちらから購入するか悩んでいたぐらいだ。洋服も、カバンも化粧品も欲しいし、アクセサリーだつて欲しい。物欲の塊だつたと思う。

だけど、今は違う。

私がこの世界に来た事によつて、誰かが少しでも助かる事があるなら、それでいい。

だつて

いつか帰るから。

自分がここに来た事は、単なる事故か偶然かもしだれない。  
それでもいつか帰るその日までに、自分のやれる範囲で、この世界  
の人達に何かを返す事が出来れば、私がこの世界に来た事も、無駄  
じゃなかつたと、いつか笑つて言える気がする。

27 こいつかの日の為に（後書き）

100セント＝120 130円ベビー

今回、リツキは珍しく真面目に考えてましたね。  
きっと最初で最後かも（笑）

トマトを想う気持ちの半分でもいいので、  
男性群に気持ちを向けて行つて欲しいです。

「お客様は『ティラン伯爵家の姉弟なんですよ』って

お客様が来られた翌日からお城では、お客様の話題で持ち切りだった。だから嫌でも耳に入つてくる。

なんでも王都に近い場所に由緒代々続く『ティラン家』という伯爵家があつてそこ姉弟らしい。

ここは、比較的涼しくて過ごしやすい気候らしいのだ。縁が多く自然に恵まれて空気も美味しいけど、そんなド田舎でもなくそこそこ栄えている地方らしいので、身分の高い人達は、この土地に別荘など持つている人もいるらしい。

だから、あの姉弟は避暑がてらヒューストン伯爵を尋ねてきたのではないのだろうか。  
はたまたただの旅行か。

などなど、いろいろ憶測の噂は飛び交っているが、結局のところ、それが本気かわからない。

まあ、私としての予想は『姉の用事にシスコン弟がついてきた』に一票だ。あの様子は絶対シスコンだ。

「それでね、お嬢様のほうがアルメリア様で弟のほうがジョネニー様よ」

：知つてます。先日、到着したその日に訳あつて、バトルしましたから……弟のほうと。

「ディラン伯爵家のお一人も美しい顔だちよね」

ため息とともに、カリアが吐きだす。

「姉弟共通の赤毛の髪に、赤茶色の瞳。綺麗なお顔立ちよね。まあ、アルメリア様は気性が激しそうだから、怒らせなによつに注意しないとね」

弟のほうも、美少年だけど、気性は激しいと思つから要注意だ。

「だけど、私はやつぱり「子息様が一番だわ。可愛らしい顔立ちで優しいし」

「綺麗といえば、そうね、やつぱりアーテレイ様よ。あの気品と醸し出す威圧感は並ではないわ。ジェネミー様はまだ幼さの残る少年が青年になりかけて感じで目が離せない感じよね！」

噂話に、耳を傾けつつ呑氣に私は、黙つたままお茶をする。

「湖ですか？」

「そうなんだ、こここの土地からちょっと先に行くとね、すぐ澄んだ湖があるんだよ」

朝一に、モップを引きずりながら長い廊下を一人で歩いていたら、背後から「子息様に呼びとめられ、話を切り出された。

なんでも、とても澄んだ湖があるらしいけど……。

「だから、ディラン家の客人を避暑も兼ねて、湖に案内しようと思ふんだ。せっかくだから、食事も湖でしようかと思って、アドマに朝一で準備するよう伝えてある。そして湖に何人かメイドも連れて行つて準備を手伝つて欲しいんだ」

なるほど。メイドも現場待機ですか。

「けど、ディラン家のメイドの方々もいるのでは？」

「彼女たちには、アルメリア達が持ってきた荷物をほゞく仕事をお願いしてある」

「…どんだけ、持ってきたんだ、荷物。そしてどんだけ滞在するつもりなんだろ？、ディラン家の姉弟は。

「だから、アドマの用意が出来たら出発したいのだけビ、リツキも一緒に来て手伝ってくれる？」

「わ、わたしがですか？」

「…ことは、またもやディラン家の姉弟と同じ対面つて事だよね。参つたなあ、先日の出来事もあるしやばいなあ。なんとか断りたいこの空気。

ラインを田の前にして、即答で断りたい気分になる。

「あの…」

「ん?」

おずおずと切り出すと、『『子息様の柔らかな微笑みとぶつかる。その瞳は優しいようで、力強く訴えているような気がする。

『もちろん、手伝ってくれるよね?』

と。優しい笑みを浮かべながらも、何だか強制的な気がするのは気のせいでしょうか。

「…わかりました…」

敗者、リツキは戦う前から白旗上げました。チーン。

『子息様であるラインの笑みの前には逆らえません。

「そう、良かったーじゃあ、早速準備を頼むよ

私の気乗りしない気持ちとは裏腹にラインはすごく楽しそうだ。準備の為にすぐ退却しようとするが足取りは重い。そんな私にラインは、声をかける。

「実は、リツキにも見せてあげたいんだよね」

「私ですか？」

「何だらう。湖にはネッシーでも住んでいのだから。それなら見てみたい気がする。」

「そう。ともかく綺麗な場所だと思つんだ」

「そつなんだ、お勧めのポイントなのね。」

「それに、異世界からこいつの世界に来て、この城からあまり出た事ないでしょ？だから、こっちの世界にも綺麗な所はたくさんあるんだつて事、見せてあげたいんだ」

笑顔で微笑むラインの言葉に驚く。

なんてこいつたい。

私は正直、『めんどくさいなあ、あの姉弟と顔会わせるの。特に弟のほう』なんて密かに思つてました。

だけど、ラインは私の事気遣つてくれていたのね。

「あつがと/or/れこまわ」

「氣に入ってくれると嬉しい。僕のお氣に入りの場所だから」

ぐはあつ！私に対する心遣いとは裏腹に、面倒とか思つてごめんな  
れー。

「心遣い感謝します、『子息様』

まつ…眩しい…可愛らしい顔つきに優しい笑み…。反則技でし  
ょう、これは。

あまりの眩しい笑顔にたまらず礼を言つて頭を下げる。

「後さ、皆の前では、『子息様でもいけど、一人の時は『ライン』  
つて呼ぶつて約束しなかった？」

「…はつ？」

「それに一人の時は、そんな堅苦しい言葉も使つこなしだよ」

「はっ…はー」

そうだった。だけど、そんな事言われてもせっぱりこきなつは難しい訳でして…。

「せつかー。そんなんなら、次回はせっかだねー」

ラインは手を自分の顎の下に置いて、少し考え事している様子。なんだ、何を言いだすのだろうと想つていて、

「次回から、間違つた呼び方したる仕置をするよ。」

「ぐつはー?ー?ー?」

いたずらつ子みたいに微笑みながらツラインは、顔は笑つてこらけど、本氣と書いてマジと読む田つきじやないつすか? その田せ。

やばこよ、やばこ。それに…お仕置きてナンデスカ?

伯爵家の敷地を何周走るとか、熱血スポコン系ですか? それとも伯爵家の地下牢に入れる監禁系ですか? それとも…

「なーんてね」

焦る私と違つてラインは、ここに嬉しそう。そして楽しそうだ。

「素直にクルクル表情が変わつて本当に可愛い。考へている事が丸わかりだよ。…側においておきたくなる気持ちがわかるなあ」

いや、私はラインのお仕置きの意味がまったくもつてわかりません。どうするとー?どうするとー!?

「なーんてね。じゃあ、アドマのお手伝いよろしく頼んだよ。たまに城の外も見ないとね。

…ああ、これぐらこにしておかなーとね。…アデレイが怖いからね

ー

「はい?」

最後にアデレイの名前が出てくる意味がわからず、首をかしげるが、子息様は実に楽しそうに笑顔で

「じゃあ、準備をよろしくね」

わつわうと素敵な笑顔を振りまきつつ去つて行つた。しばらく後ろ

姿を見送っていたら、急に思い出したように振り返る。その顔は眩しいばかりの笑顔のまま、

「あつ、そうだ。もし次回は、僕との約束破つたら、どんなお仕置きがいいのかリツキの考えたお仕置きの中で選ばせてあげるよ？考えといでね」

…「ワイン…。

可愛らしげ中性的な外見とは裏腹に、隠れドSと認識したこの瞬間。

ああ… 何だか、ラインの性格が、だんだんクセのある方向に…。  
最初は、ただの『可愛らしく優しいおばしづや』ってキャラのつ  
もりが…。

けど、クセのある方が書いて楽しい気がスル（おい）

「まあ、とても綺麗！」

お嬢様のアルメリア様は歓喜の声ではしゃぐ。それもそのはずだ。私も驚きで声が出ない程だ。アドマさんの手伝いをして昼食の荷物を用意し、ティラン家の客人を乗せた馬車の後ろの馬車に乗せられて、やつて来たのは湖。馬車の扉を開けた瞬間、澄んだ空氣に小鳥のさえずる声。

澄んだ空氣をいつもより美味しいと感じるのではなく、これは自然に恵まれているからなのか。

ラインがお気に入りの場所だと呟つだけあってとても綺麗な湖に、花は咲き、小鳥は歌う。まるで地上の楽園。緑の生き生きとした森林に、澄んだ湖。

なんてメルヘン。例えていうならシルバ・アファミニリ・達がリアルで住んでいそうだ。きっと、今、森の陰から、ウサギが洋服着て出てきても、私は驚かないかもしねれない。

…いや、それはさすがに驚くか。

湖近くには、腰をおろして休む用の屋根つきのベンチなどもある。これは最高のピクニックロケーションだわ。私はその光景に感動する。

アルメリア様もはしゃいだ声を出して、きやあきやあ言つてゐる。やはり女性。きれいな景色に感動している。

そんなアルメリアお嬢様の今日のドレスは淡い黄色がベースで、レースで縁取りされた可愛らしい膝下丈のドレスに、ドレスとおそろいの帽子をかぶつていて何とも可愛らしい。

おわらいの帽子は、レースの長いリボンがついていて風にそよぐ。

隣に並ぶラインは、薄手の白いブラウスにひざ下まである、ハーフパンツ丈のグレイのお召し物。

爽やかな二人組を見ていて、何て素敵な二人なんだ！と感激してしまつ。

ラインも中性的な美形な顔立ちだし、横に並ぶお嬢様の髪は巻いてあって、クルクルしていくとても可愛らしい。

そして大きく開いたパツチリした瞳に、まつ毛も髪と同じにクルン

クルン。そしてバツサバサ。

そんだけまつ毛が長ければ、決して微塵のゴミでも田に入る事はないだろう。

なんて可愛らしい美形カツプルなんだ！

バックの風景がまた、二人のカツプル説に拍車をかける。もしかして、お嬢様は、ラインと何か特別なご関係が…？

なんて、思わず変な勘ぐりの一つもしたくなるような、美形カップルは風景に溶け込んでいた。

目の保養になる、美形カップルの組み合わせを見て私は、一人で微笑む。

…が、その隣にいる人物を見て、私は眉をひそめた。

忘れていたよ、その存在。

赤茶色の髪は日に照らされて、赤味を強く放ち、気性の激しさを表す、まるで炎のようだ。空色のブラウスに、短めのマントをはおつて、楽しくもないような顔立ちのその人物は、私を見ると顔をしかめた。

だけど、私も負けずに顔をしかめていたに違いない。自信はある。

お互に、しかめつづらのまま数秒見つめ合ふ。…といつよつ固まる。

何だか、その顔つきから言つて

『何でお前がここにいるんだよ』

つて思つてゐるよつたな顔つきですね。ずばりそうでしょう。何でわ

かるかつて？それはお互い様だからです。

メイド頭のアドマさんに促され、昼食の入ったバスケットを持ち、同じく飲み物を持ったカリ亞と3人で湖のベンチの周辺に場所を確保する。先程の赤毛のシスコンジュネミーの存在は無視だ、スルーダ。とりあえず、己の仕事を全うしよう。

そうして、いそいそと皿で昼食の準備を始める。ベンチの机を綺麗に拭き、ランチマットを敷く。そこに持参したお皿を置いて、バスケットを開けてサンドイッチ等の軽食を取り出す。

カリ亞が持っているのは、果物を絞ったフレッシュ果実ジュースだ。みずみずしくて美味しそう。

そうやつて皆で協力し、バスケットの中味を並べ、ライン達の昼食準備完了。

ここまでで私たちのお仕事はいったんお終い。護衛の男の人に声をかけ、昼食準備完了を告げ、ライン達に昼食を召しあがつて頂くよう、お伝えした。

「さて、私達も昼食頂こうかね」

アドマさんは、「子息様達の昼食を持参する際に、ちやっかり料理人にお願いして、私達の分も作つてもらつていたらしい。さすが、アドマさんは気がきくというか抜け目がない。

「じゃあ、あっちの湖畔の森の影になつているあたりまで行きましょ  
うか」

カリ亞も声が弾んでる。私もテンションが上がつてつきつきだ。だつて、ピクニックだもん、これつて。

ライン、ありがとう、おまけでもいいからこんな素敵な湖に連れてきてくれて。私は心から感謝した。

言われた時は面倒なんて、ちよつと黙りてしまつて本当に申し訳ない。ネッシーもシルバ アファミリーもいないと思うけど、十分満足だよ。

美味しいサンデイッチとピーナッツバター・パンをお腹に收め、すっかり私は満足だ。湖は太陽の光を浴びて反射し、眩しい光を放つている。

木々の縁と上手く調和して、なんどこうマイナスイオン！素晴らしいかな森林浴。

「お腹いっぱいになつたら、なんだか眠くなつたね～」

あぐびをし始めたカリ亞とアドマさん

「じゃあ、2人が休んでいる間に、私ちょっと散歩してくる

私はうきうきしながら、木々の遊歩道の方を指を差す。

「ああ、まだ、止づけの声がかからないうから、自由にしていいよ。だけど、あんまり、ふらふらして迷子になるんじゃないよ」

「大丈夫だよ

私は笑つて2人に手をふる。

「じゃあ、ちょっと散歩してくる

「行つてらつしゃこ

私は湖を囲んでこむ木々の遊歩道を歩き進む。さあ、マイナスイオンを浴びに行こう。

太陽の光が木々の間からもれ、小鳥はさえずり、心地よい風がふく。私の髪は風にゆれ、太陽は天高く上機嫌なお天気なのに、立ち並ぶ木々のおかげで気温は決して暑すぎず、肌に心地よく感じる。遊歩道らしき道を歩いていると、自然と足取りも軽くなり、スキップでもできそうな気がする。

木漏れ日の明るい遊歩道を歩き、湖のほうに近づくと湖は光に反射してキラキラしている。

なんだか、こんなにゆっくり自然と触れ合の時間つて日本にいた時はなかつたなあと、考えながらも足取りは軽い。

その時、前方から人影が見えた。その人物を確認した瞬間、思わず回れ右の体勢をとりたくなつた。いや、体はもう回る方向へと傾きかけていた。

「なんだ、お前か」

ふんつと、鼻で嘲笑い、私も見下すその視線に、気分は台無し。：つて言うか

なんでここにいるんだ

薄い水色のマントをはおったまま、私を見下ろす視線の持ち主は、ジエネミー様。あなた、あちらで昼食タイムじやなかつたの？もう昼食食べたのか。もつとゆっくり食べないと、早食いは、体に悪いぞ肥満の元。余計なアドバイスをしたい気持ちを抑えつつも

「……こんにちは」

先日の出来事を思い出し、一瞬自分のとるべく態度に迷つたが、前方の人物に愛想笑いで微笑みかけ礼をする。

くつ！大人な自分を褒めてやりたい。

うわべだけの挨拶と礼をして、前方の人物の横を通り過ぎる。

「待て、お前」

その人物は口を開く。

ああ、清々しい気持ちでお散歩つて最高ね。

「待てと言つているだらう

うんうん、マイナスイオンを浴びて、日々のストレスを解消しなくちゃね。

「止まれ！」

聞こえるのは幻聴と決め込んで、この場を黙つてスルーしたかったのだが、先程通り過ぎた人物は、そつではないらしい。

「聞こえないのか！」

何度も聞こえた声をスルーしたが、相手はめげないらしい。仕がないので、につこり微笑んで謝る。

「難聴なんです、私。すみませんね、ジエネミー様」

「で、お前は何をしてるんだ？」

「お散歩です。せつかく綺麗な湖に来たので」

「ふん。こんな田舎、散歩して楽しいか？お前？」

なんだか、ツンケンした態度ですが、そつぬつあなたも、散歩してるから、ここで私に会つたんじゃないの？

「私は散歩を楽しんでいるところです。ジェネミー様は田舎へそくへお嫌いかも知れませんが、私は自然な場所も大好きですの」

「… そうか。では、俺も暇だから一緒にやるつ

上から田線のジェネミー二

「いえ。結構です

瞬殺する。

そして瞬殺でバッサリ切りつけた後、相手の出方も見ずに散歩を続行する。

先程までの清々しい気持ちよ、アゲイン！カムバック！戻つてこい！鳥よ！私の為にさえずつておくれ！さあ！

「待てお前

「待てと言つてゐるだらつ」

「お前は、ビニに行へ？」

「止まれ…！」

木漏れ日の中、ジエネニーを置き去りにし、散歩を続行する私に向  
やら、雑音が聞こえる。  
いろんな声が聞こえるが、スルー。得意なスルー。完璧にスルー。

しかし、相手はいつまでも、あきらめる様子がないので、ため息一  
つと共に振り返る。

「…では、一緒に行きますか…？」

「…お前が、ぜひとと云つなら、一緒に行つてやる」  
…って…行くのかよつ…！

しかも相手は、なぜか上から田線。なぜこじで上から田線なのだろ  
うと不思議に思い首をひねるが、それは育ちのせいだらうか。  
しうがないので一緒に並んで歩く。

歩きながらも、隣のジエネニーを見ると、赤茶色の髪は木漏れ日を  
浴びて、赤味が強く感じる。  
大きい瞳に、真っ直ぐな鼻筋、口をなぜか斜めに結んで、一般的に  
美少年と言われるだらう、その横顔は何だか不愉快そうだ。なんで  
だよつ。

そして少し、頬が赤い氣がするのは、口差しが強いから熱いのか？

それとも大声出したらか、体温上昇でもしたのか？

なんだか、綺麗な顔を不機嫌そうに歪めて、赤い顔したジエネミーと無言で隣に並んで歩く。

「あつー。」

しばらくすると、私は、思わず声を出し、いきなり走り出す。隣のジエネミーが、私のいきなりの行動にビックリ驚いたようだが、気にならない。

そこは、遊歩道から湖に続く道の一角で、そこから見える景色は、最高だった。

太陽の光を浴びて輝く湖に、緑の木々が立ち並び、花が咲き誇っている。

私は目の前に広がる湖にただひたすら感動していた。

まさに絶景。ベストポジション、略してベスポジだ。

私は、靴を脱ぎ、ひざ下のスカートは少ししまくしあげて、湖に足をつけると、ひんやりと冷たくて心地よい。そのままひざ下まで水につかる。

湖は透明度が高く、そのままじっとしていると小魚達が寄ってきたりして、なんとも心をなじませる光景に、バシャバシャと足で水面で水を跳ねて遊んでいると、後の茂みから、気配を感じて、振り返る。

もしや、熊か！？

そう危機感を感じた私の目に飛び込んできた者の正体とは、

「お前ー何でそんな格好をしてーるー。」

あ…

ジェネミー…。

そういうやいたんだつた。あまりの絶景に存在を一瞬忘れていたよ。

彼は、何やら、真っ赤になつて怒つているが、意味がわからないので、彼の視線の先を追つてみると…

「あーもしかしてコレ？」

「わつだー！」

私は自分のひざ上まで、捲し上げたスカートを指差した。なんだ、なんだ、ひざ上スカート丈を怒つてているのか。

「これぐらニースカートとは言えないぐらニの長さだと思つナビ。はしたないとか言つなら見なきやいいだり、と思ひながらも、しぶしぶスカート丈を膝まで下ろす。ひざ下まで戻すと濡れちゃうと悪いもんね。

スカート丈を戻し、彼を見ると彼はまだ何かを言いたげだ。

「…何か？」

「お前には恥じらつてものがないのか！…」

なんだか、どつかの時代錯誤のお年寄りみたいな台詞に思わず噴き出して、笑つてしまつた。

「何がおかしい！」

その様子もちやんと見逃さなかつたらしく。

ジエネミーは、顔を赤くして真剣な眼差しで怒つている。

そんな私の膝上スカートぐらいで、そこまで怒らんでも…。

こんな様子で、もし私の世界に来たらどうするんだろう。

それこそ、こんな水辺では可愛くて若い女の子の水着がたくさん見れる。

それにも一喝するのだろうか。もしそうなら私は、ジエネミーに一言、言つてやりたくなる。

『自分に正直になれ』

と。

「いえ、失礼しました。あまりにも気持がよれそうなので、つい

彼は、フンと鼻を鳴らした後、

「ちょうど良かった、お前に聞かたい事がある」

「はい？」

彼が私に聞きたい事って一体なんだろうか。それこそ私でわかる事  
だろうか。

### 31 バトル アゲイン

ジェネミーは、私に向かつて口を開く。

「あの屋敷には、我々のほかに客人がいるだろ?」

他の客人? それって……もしや……私は、即座にピーンと来る。

「客人が一人いるはずなんだ。我々は、その客人に用事があつて王都からはるばるこの地にやつてきた。……まあ、用事があるのは、姉上だがな。こっちとしては早く会つて用を済ませたいのだが、その客人は、我々を避けているのか、同じ城にいるというのに、一向に会わない。ヒューストン伯爵も曖昧な態度ではつきり物事を語らずだ。

……何か知らないか?」

「……」

少しほんやり考える。客人つてアデレイの事? 私が知つてる客人は、アデレイしか思い当たらない。

黙つている私に、ジェネミーは続ける。

「……いるはずだ。眉目秀麗な容貌に、気品に溢れ、知性に優れる人だから一度見たら忘れない」

ハイ。

前言撤回。

一瞬、アテレイかと思ったが、気品に溢れ、知性に優れるお人?

そんな人物知らんがな。

黙っている私を見て、ジョネミーは、隠し立てしてるとでも思ったのか、声を荒げてきた。

「…隠してるとか?」

私の沈黙を肯定と受け取ったのか、ジョネミーは声を一方的に荒げる。

「どんなに逃げて隠れようと思つても、逃げも隠れも出来ない立場なのに、いつまでもぐずぐずと往生際の悪い。なぜ、お前は肩を持ち、隠れようとするのか?」

ちゅ…血口元結しそぞつ。

「…」

いつかは質問の意味の半分も理解するのに、精一杯なのに、勝手に

決めつけてお怒りモードにならないで欲しい。  
やつぱり、ジエネミー短気は損氣だぞ。

呆けた顔して、突っ立つてると、苛立ちを含んだ彼に、  
手を強く引っ張られ、引き寄せられる。その赤茶の瞳は、炎のよう  
に燃えていた。

まるでキャンプファイアー！

「ここの地にいる事は、わかつてゐるから、わざわざひがひまで出向  
いた。

それと同時に入ってきたのは、もう一つの噂、『あのお方は異世界  
の毛色の違う娘に『執心らしい』』と。

最初聞いた時は鼻で笑つたが、お前を見て噂が本当かも知れないと  
思つた』

至近距離で瞳を強く見つめられ、そらす事の出来ない彼の怒りを含  
んだ真剣な眼差しに、動搖する。

「…確かに、お前の姿では惹かれるのも無理はないかもしねえ。  
…で、お前は何なのだ？…どう思つてゐる？」

問い合わせるような真剣な眼差しを向かれ、私は、何だか怒られて  
いる気分。

…意味分かんない。

一人で勝手に、想像して、決めつけて、しかもなぜか怒りを向けられて、こいつの気分は、いいはずがない。

私は、ただ湖の散歩を楽しんでいただけですよつ！

そう思つた瞬間、思いつきり、掴まれた手を振りほどく、

「せつきから、言つてる意味全然わかんない！」

大声で叫んでいる私がいた。

「だから、言つていいだろう！お前は、あのお方をかばつてこるのはだらう！そんなにかばいだてするとは…」

ジエネミーは、一息ついた後、真剣な眼差しを私に向けたまま顔を荒げる。

「一体お前はどう思つていいのだ！」

「だから、何の話…？」

また手を掴まれようとしたので、身をひるがえして逃げる。一瞬、逃げられた事によつて彼は、ショックを受けて止まつたように思えたが、止まつたのは一瞬で、再度私の手を捕まえにかかつた。

やばい、拒否した事で、本気で怒らせたかも。

彼はますます本気で私の腕をつかみにかかつた。

まくしあげていたスカートも手を離して裾はビヨビヨだ。

私は必死に抵抗するが、再度思いつきり腕を掴まれて、引っ張られた。ジエネミーの顔が近い距離で、綺麗な細工の彼の顔は苛立ちを含み、私を見下ろす。真剣な眼差しを向けられたまま掴まれた腕が痛く、熱を持つている。

「どう思つているのだ、あのお方の事を…」

彼は、私の腕を力いっぱい無理矢理掴み、引き寄せた。

その瞬間、体のバランスを崩した私は、そこから先はスローモーション。

先程まで足を浸して遊んでいたはずの湖が私の顔面に近づく。

目の前で見る湖は透明度が半端ない程きれ…い…

盛大な水音が辺りに響き渡る。

周りの木々に止まって休んでいた小鳥たちも、湖でコラコラと漂っていた魚も、その水音の大きさに驚き、一目散に逃げ出した事だろう。

水音の出所は私。腕を思いっきり引っ張られ、バランスを崩して、水の中に前のめりになり転んでしまったのだ。

立ちつくすジョネミーと、湖に、這いつぶばっている私。

見つめ合ひ一人はしばし、ぼーぜん…。

冷たい…。

あっけにとらわれている、目の前の彼の瞳は怒りとこつよじ驚きの色に変っていた。

だけど、今度、瞳に怒りの色をともすのは私の番。

「 Bieber してくれるのよ！ 全身濡れちゃったじゃない！ 着替え持つて着てないのに！ 最低！ 」

そう言い放ち、あっけにとられて茫然と立ちつくしていた、ジェネミーの片足を思いつきり力任せに引っ張った。不意な事だったので、踏ん張る事も出来なかつた彼は、そのまま私に足元を持っていかれた。

また一つ、盛大な水音が辺りに響き渡る。

「本当に、こここの湖はとても綺麗。この美しさは心奪われますわね、ラインナルト様」

「ありがとうございます。アルメリアにそう言つてもうらえると、僕も嬉しい。ここは僕の昔から大好きな場所なんだ」

「あら。ジエネミーの姿が見えないけど……」

「ああ。先程、何かを気にしたように森の中に歩いて行つたけど、そこから辺を散歩してくるのかもしれないね」

「まあ、あの子つたら、フラフラと……」

「わうわう、こここの湖には、言ひ伝えがあるんだけど?」

「まあ、どんな言い伝えなの?」

「ここには、あの美しいと有名な妖精のマテリーンがたまに水浴びにきて、その水浴びを見た者の心を奪つていつ言い伝えがあるんだ」

「まあ。マテリーンは水浴びが好きな妖精で有名ですね。マテリーンなら私もぜひ、お会いしたいですわ」

「今頃弟君も、美しい妖精に心を奪われている最中かもしね」

「まあ。では、私の義妹は妖精という事になるのかしら……？」

そこで二人は、顔を見合させて笑つた。

ベヘン――クショ――ン――

かくしよつめえ――

寒い――くしゃみが出る――わあ、どうしてこれよつか――この始末。

私は私と同じく濡れネズミになつたまま湖の中、腰を下ろすジョネ  
ニーを睨みつけた。

31 バトル アゲイン（後書き）

やつぱりリツキは気が強い。

## 32 バトル エンド

私は、私が足を引っ張つたせいで湖ですっ転んだ、目の前のすぶ濡れジョネミーを強気な眼で見つめる。

対する私も全身濡れている。

元はといえば、ジョネミーが悪い。  
か弱い乙女の腕を力いっぱい引っ張るなどとは、転べと言っている  
ようなものだ。

見事にすっ転んで、濡れてしまった報復をして何が悪い…これで二  
人は全身ずぶ濡れ、おあいこだ。

今の状況がすぐに理解出来ないのか、言葉も発せず私を見ているジ  
ョネミーに

「これで、おあいこ…お互い様！」

びしつと一発言つてやった。

「だいたい何の事だかわかんないけど、いつまでもひだりだと…私  
には理解不可能…」

そうだ、少しここの水につかって頭を冷やせばいいんだわ。私は、  
ジョネミーに向かって言い放つ。

ジエネミーは、頭から水をかぶったようで、前髪から濡れている。全身を包んでいたマントも、ずぶ濡れだ。

まあ、あれだけ派手にすつ転んだら当つ前か。湖に転んだ時のままの体勢、尻もちをついたまま私を見つめてる。自分の今の状況、メイドの私にすつ転ばされた事態が、余程信じられないのか、放心状態かのようにも見えた。

したたる水滴は、彼の前髪を長く見せ、均整のとれた美しい顔も水滴がしたたつている。

まさに水もしたたるいい男（古つ）ちょっと一瞬見とれてしまった自分がいるが、私は頭を振る。

ダメダメ、顔は良いけど、この人シスコン。そして、私を湖にすつ転ばした張本人。

こんな場所に長居は無用だ。

私はそう思いつつ、転んだ湖からやつと立ち上がり、丘に上がりうと背を向けた瞬間、いきなり視界が揺れて反転した。

右腕が何かに力強く引っ張られる感覚、

バランスを崩す、

……あーーっ！

と思つた瞬間と同時に響く水音また一つ。

「な……何すんの……」

背後から腕を掴まれ転ばされ、不覚にも水を飲んでしまつて「ホホホ」と水言いながらも「最低」「か弱い乙女に何をする…」「女の敵」と散々わめき悪態をつく。

はつ……鼻から水を飲んでしまつたではないか！地味に痛いんですけど……

「これで、お互い様だらう

「先にやつたのは、そっちでしょ、うー！」

ギヤーギヤーわめきながら、手で水を相手にかける。相手も負けずに戻戦する。

「だいたい、そつちが正直に答えないからだろ？..」

「だから意味不明だつて言つてゐるでしょ」

「全く、ああ言えばいつ頃へ、どうして素直じゃない？」

「それは、じつちの台詞だあ！少しば相手の話を聞く耳持つたらどうなんだつーその耳は飾りかつ！」

私は、小馬鹿にしたよつにあつからんベーと舌を出しながら、水をかける手を休めない。案の定、ジョネミーは更にびしょ濡れだ。だけど、かまつもんか。

私だつて全身濡れネズミだ。

しばりく、ギヤーギヤーとお互に罵りあい、水を掛け合つた後、体力の消耗を感じて、肩で息をする。

敵を観察すると、敵も疲れたよつで、肩で息をしてゐる。しばりく、お互ににらみ合つて、肩で息をする。

ジョネミーの髪は濡れて、顔や首に張り付いてゐる。赤い髪は濡れ

てもなお、火のようすに赤い。瞳もまた、火の色をもち、私をきつい  
眼差しで見つめている。髪からしたたる水滴が、整った顔に落ち、  
そのまま湖へと滑り落ちる。

ふと、自分の格好を見てみると、髪はびしょ濡れ、服ももちろんそ  
う。水を吸って重たいつたらありやしない。よくもまあ、ここまで  
濡れる事が出来たなあと思つたら、自分自身に呆れて笑つてしまつ  
た。

「何がおかしい?！」

私の笑いにめざとく気付いた彼は怒りながら聞いてくる。

「何だか、ここまで濡れた自分が面白くて…」

ジェネミーは、自分の格好をまじまじと見下ろした後、

「…それも、そうだな」

力なく脱力気味に、認めた。その様子を見てなんだか、笑つてしま  
つた。

笑つた瞬間、相手からきつく睨まれたが、その様子もおかしくて、  
また笑つてしまつた。

「お互い水に濡れて頭も冷えたと言う事で、オッケーです、ケンカ  
両成敗ですね」

勝手に血口結して、笑つて告げる。

「……お前は、勝手に何を納得して……つてーお前何してるんだー。」

慌てた様子のジェネリーに、私は呑氣に答える。

「え？ 何つて、見てのとおりですか。ここまで濡れたので、せつかくなので、ちょっと泳げつかと。ガチでクロールしてみます。」

しかし、悲しいかな。ひざ下程の深さしかないので、浅い。泳げつと思つたが、浅すぎて泳げない。

「うーん。残念だ。」

「……何がだ？」

「いえ、ちょっとせつかくなので、泳ぎを披露しようとかと思つて。これでも泳ぐのは得意でしたので」

「……別に披露などしなくていい。」

「そんな事言って、ちょっと見たいんでしょ？私これでも元の世界で水泳大会で好タイム出して、つけられたあだ名が『カツバ』でしたから」

「…お前の言う『カツバ』とやらがわからんが、何かよからんものだと言う事は理解した」

「よからんものじゃないですよーちゃんとした空想上の生き物ですよーじゃあ、これなら、わかるかな？『人魚』ですー・マーメイド！わかります？」

カツバと人魚、じゃイメージ的に一緒にどうか微妙なところだが、とりあえず水に住む生き物だし、泳ぎがうまそうなので、よしとじよつ。私の必死な説明をジヨネミーは横目で聞いていたが、ふと思い出したかのように顔をそらした後、

「…泳ぎが得意な空想上の生き物といえば、」けりうでは、マーメイドといつ生き物がいる…」

「あ、そんな感じかな？よくわからないけど、泳ぎが得意で人ではない空想上の生き物ですね」

なんだか知らんが、ジジの世界にも空想上の生き物つてのはいるものなんだな。

カツパとマテリーンか。

こっちのマテリーンとやらも、頭に皿がのつててきゅうりが好物なんだろうか。

泳ぎたいけど、浅いため、泳ぎを諦めた私は水を手ですくい、顔を洗う。

「あー！ 気持ちいい！」

もつこじまで濡れたら、半分やけっぱちーじつせなら、湖を満喫する方向で行く。

…後の事は、考えない！

髪からしたたる零も、顔をぬらす水も全て手で振り払い、それをいつの間にか見つめていたジエネミーに気付いて、笑顔を向ける。

「…マテリーンか」

ぱつりとつぶやいた彼に、あえてその意味を聞かなかつたが、何だ  
ろい。

きっとカッパ的センスな私の泳ぎが見たくて残念だった咳きだろい。  
私は勝手にそうとらえて、彼の燃えるような瞳を見つめて笑つた。

### 32 バトル エンド（後書き）

ジェネミーと精神年齢一緒に。ケンカ友達的感覚ですね。  
マテリーン（美しい妖精）とカッパが同じ部類なんて…。

無言で私を見つめ、一瞬躊躇するような表情を見せた後、そっぽを向いたまま手を差し出すジエネミー。

私は黙つたまま、ジエネミーの手を取ると、その手は、予想と反して温かかった。

そして無言のまま強く手を握り返す彼と一緒に水から身を引き上げた。

丘に上がった私とジエネミーは、一人で全身濡れている。さて、皆に言い訳をどうしよう。

一時的な雷雨に見舞われたとでもいうべきか？ そりや無理だ。

とにかく、着替えもないがどうすれば。

最悪、この格好のまま帰りの馬車に揺られるしかないのかな。いろいろ考えながら、水を含んだスカートを絞り、水を出す。最初は靴を脱いで湖に足をつけて遊ぶだけのつもりで靴を脱いでいたので、幸いにして靴は濡れていない。

だけど、靴だけが濡れていなって、この状況でどうよ。それもうける。全身濡れていて靴だけが無事だなんて。

黙々とスカートを絞る私をジエネミーは黙つて見ている。ちょっとジエネミー、自分もちゃんと絞んないと風邪ひくよ、そり言いかけた時だった。

不意に何かの気配と視線を感じて、下を向いて絞っていた私は顔を上げると、私を見つめるジエネミーと田が合つ。

ジエネミーは、なぜか、私の顔を驚いたように真っ直ぐ見詰め、赤茶色の瞳は大きく見開いている。

声こそ出さないが、少し口を開きかけて何かに驚いているかの様子に私は首をかしげる。

どうやら、私の背後に視線がいつているみたいだと気付いたのは、数秒彼を見つめた後。

なんだ、私が見つめられているのかと思つて勘違いしちゃつたじやんかよ——

……

つて……

まさか今度こそ、本物の熊かつ！

私の脳裏によぎつたその可能性に、瞬時にジエネミーの視線の先、私の後方の木々の間に視線を向ける。

私の背後の木々の間にいたのは毛がモサモサの熊ではなかつた。だけど、何だか、他の動物っぽい……？

よくよく眼を凝らして木々の間を見ると馬のようだ。何でこんな所に馬？

そしてそこにはいはづのない人物を見かけて

「あ」

思わず、指をさして声を漏らす。

『人様を指で差してはいけません』小さい頃に、親からそう教わつて育つたのに、こぞとこつ時は忘れてしまうものなんだな。

いかん、いかん。

私に指を差された人物は、指を差されてる事など、少しも気にした風でもなく、近づいてくる、

「リツキ」

落ち着いた感じの低めの声で私の名を呼ぶその人物は、薄手の純白のマントを身につけ、ハニー・ブロンドの金色の髪を光に照らして輝かせ、風に揺らしながらこちらを見て真っ直ぐに近づいてくる。

声の主はアーテレイだ、アーテレイ。

てか、アデレイなんでここに？

あ～、アデレイ…と片手を上げて声をかけよつとした瞬間、ジェネミーが

「アーデレイド様！」

声を上げ、すばやく腰を折りたした瞬間、アデレイが片手でそれを制した。

あれ？この二人知り合いなのか？

「リツキ、何をしていた？」

心なしか、アデレイの声は笑つていらない気がスル…。むしろ少し怖い。なんだろう。顔は一見、笑顔のように見えるのに、声も瞳もちつとも笑つていらない気がする。むしろ底冷えするような冷たさすら感じる。

なんだろ？、水につかつて私の体は冷えてしまったのか？

「えつと、散歩」

「ただの散歩なのに、なぜ濡れてる?」

「それは……泳いだから」

「泳ぐって服のままか?」

アーテレイの瞳は、ヨリヨリそう険しい瞳に代わっていく。なんだろ  
う、レジナは正直に言わないほうがよさそうだと本能で判断した。

「えっと、湖に呑つけて遊んでいたら、転んで滑つてもがいていた  
ところをジエネミー様に助けてもらつたの」

本当は、ジエネミーにすつ転ばされたけど、私もお返しにすつ転ば

したので、先程の件は、おあいこだから言わないでおく。

それに何だか、正直に言わない方が、身の為のよくな気がしたから。  
…私にとつてもジエネミーにとつても。

「ふうん」

私の答えにまったく納得していない風なアーテレイは、そのままやつ  
くつと視線をジエネミーに向けた。

何だか、一瞬の緊張が空氣に走ったような気がする。

ジェネシーは驚きと動搖を隠せないまま、

「アーテレイド様、お久しぶりです」

「ああ。久しぶりだな」

「ヒューストン伯爵のお屋敷に休暇として伺っていると聞き、我が姉と駆けつけましたが、お会い出来て光栄です」

ジェネシーとアテレイの顔を見比べて、ジーイでやつと私の中で繋がった。

ジェネシーとアルメリアお嬢様が探していたのは、アテレイだったのだ。なんだ、なんだ、アテレイめ。私とは無駄に毎朝顔合わせているのに、なんで、ジェネシー姉弟には、会つてやらないんだ。自分をわざわざ訪ねてきたつていうのに、感じ悪つ。

非難めいた視線をアテレイに向けると、アテレイは氣付いて『ん?』と涼しい顔して田で聞いてきた。

だあ～相変わらず空氣の読めない男、アテレイめ。

ジェネシーは、あんたをずっと探していたんじやないか。

アテレイが、ひょこひょこジェネシーの前に姿を現していればこんな事にならなかつたのでは…。

…だとすれば、私はアテレイのせいでこんなに水に濡れてるんじやないのか？

なんだか、ハツ当たり場所を私は見つけた気がする。

そして何だか、アテレイとジョネリーの間に漂ひ空氣も微妙だと感じた私は、

「アテレイはどうして？」

そう尋ねるとアテレイは私に向かって首をかしげて笑顔を向ける。そして、

「寒くないか？」

出た出た、自分に都合の悪い事（？）は答えない男アテレイめ。早速私の質問はスルーで自分の質問か。

まあ、いいけど。そんなアテレイに慣れた風に私も答える。

「平氣。今は涼しいけど、潮は冷たくて気持ち良かったよ

「やうか

「気持ちよかつたから、アテレイも今度泳ぐ事をお勧めするよ」

「…………次回は一緒に……な」

アデレイは、爽やかな笑顔で笑った。

なんだ、なんだ、アデレイも興味があるらしいな、私のカツパ伝説に。

それなら、そうと次回披露してやらん事もないぞ。

すっかり機嫌を直した私も濡れたまま微笑み返す。笑っていたら、そのまま私の頭に何かがフワリと覆いかぶさつて、驚いた。

「風邪引くと悪いから、とりあえず、これを被れ」

そう言うなりアデレイは、私に自分の羽織っていた純白のマントをかけていた。アデレイの薄手のマントは、高級そうな柔らかな手触りとそれに加えてベルガモットの爽やかな香りが私を包んだ。

「え……いいよ、アデレイ！マント濡れちゃうし！」

「濡れたって平氣だ。乾かせばいいだけだ」

「でも……」

「……そのまま帰る訳にはいかないだろ」

私は自分の姿を見つめなおし、再度考えてから

「…では、『遠慮なくお借つします…』

「珍しく素直だな

「こひま、好意に甘える事にした。だって全身濡れネズミ。だけど、珍しいって何を。失礼しちゃうわ。

一言余計だわ。

「わい、こひづか」

「ほえ？」

手を差し出すアテレイに意味がわからず、首をかしげる私に、アテレイは微笑む

「その格好では皆と一緒に帰れないだろ？。だから、一緒に帰ろうつって、アテレイ、あんたは一体何しに来たの？」

「…と、こう訳で先に連れて帰るから、後は皆に会えておいてくれ」

「アーテレイド様ー！」

弾かれたよつに叫ぶジョンニーを尻目に私を引っ張りぐいぐい歩いていく。

「ちよ……もう帰つていーの? てか、アーテレイは何しにきたの?」

「いいんだ。もう目的のモノは見つけた」

軽く笑顔で微笑まれ、突つ込む隙も『えないアーテレイは、乗つてきたであろうつ馬にまたがると、私におこじと田配せをして手を差し出す。

「いいんだ。もう田的のモノは見つけた

そう言ったアデレイの何が田的のモノだったのか、私はさっぱり見当もつかない。  
だってアデレイ手ぶらだし。

当の本人アデレイは、軽く笑顔で微笑み、そのまま乗ってきたであろう馬にいとも簡単にまたがると、私において田配せをして手を差し出す。

「…しかも白馬…」

思わずポツリとつぶやいた私の言詞をアデレイはよく聞き取れなかつたみたいで、

「…何か言ったか?」

と尋ねるが、いや言ってないと首を振る。

金髪碧眼に加えて白馬ときたら、童話に出てくる王様の定番ではないか。

これでかぼちゃパンツに巻き髪へアーに白いタイツならそのまま童話の王子様になれる気がする。

白馬は立派なたてがみに毛並みも良さそうで、これまた立派で頑丈そうな鞍をつけて、主人であるアデレイを乗せたまま私を静かに見下ろしている。

何だか、そんな白馬の様子を見ていると、選ばれた人しか乗つてはいけない気がしてくる。

そんな白馬に選ばれた馬上の主の、ハニー・ブロンドの髪は、光を受けて輝き、綺麗な空色の蒼い瞳は真っ直ぐに、そして口元は優しい微笑みをたたえている。

アデレイは、見かけだけは完璧なので、白馬に乗る姿も何とも絵になる、ビューティホー。

それに比べて私は、借り物の男物のマントに身を包む、全身濡れネズミ。

『ヒッヒーン。小娘乗るんでないよーーーの一般庶民のパンピーチャん!』

白馬が、こんな事を言つてゐるよつた気持ちになるが、錯覚か。私の心の曇りで聞こえる幻聴か。

恐る恐る近づくと、白馬がいきなり尻尾を揺らしたので、その様子に驚いて、後ずさつてしまつた。

白馬は私を乗馬拒否か?と心配になつた。もしかしたら動物の勘でわかるのだろうか。

実は、馬刺しが好きだつて事を。

「…リツキ」

私の心配をよそに私の名を呼び、手を差し出すアデレイは、どこか余裕そうな顔して笑つている。

おいでと言つられて、はい、とそつ簡単に手を出して乗れる乗り物でもないだろつに…。相手は馬である生き物だ。生まれてこのかた、乗馬なんて経験した事もない。乗り方もわからないので躊躇する。そんな私の様子を悟つたアデレイは、目を細めて笑い、

「大丈夫だ。側にいる」

なんとも頼もしい台詞を吐いてくれる。

それでは、お言葉に甘えまして…と、思わず「ヨイショ」つと、気合一発の掛け声を掛けそうになつた瞬間、私が差し出した手をアーテレイの手が包み込み、そのまま力強く引き寄せられる。

その見かけからは、想像もつかないような、力の強さ、アーテレイの手の大きさ、そして包みこまれる感触に、ドキッとする。

やつしてアーテレイは、簡単に私を馬上へと上げてくれた。

初めて乗る馬は、想像していたより堅い座り心地で、最初は少し緊張した。だけど、この馬が走り出したらどんな速さなんだろうと段々と興味がわいてきた。

初めての乗馬経験で、ちょっと興奮気味になつてきていた私は、

「うわあ。すごいー初めて乗つたよーねえ?アーテレイー

ハイになりながらも後ろを振り向くと、なんともご満悦で微笑み満点、蒼い瞳を細めて笑うアーテレイの顔が私の顔のすぐ真上にあり、その近さにビックリした。

「うわー・ひゅー・」

慌てて後ろを振り向くのを止めて前方に視線を戻す。

やばー、アデレイのドアップを近くで見てしまった…！

なんたる、まつ毛の長さ…・シミ一つないきめ細かく綺麗なお肌…！  
私に何ポイントの、乙女としての精神的ダメージを与えれば、気が  
すむのだろうか、この男は。

「落ひなこよひ、ひづり捕まつてろ」

そう言ひつい、白鷺はゅつへりと走りだした。

私はと、後ろに座り手綱を引くアデレイの体温を感じて、正直落ち着かない。だって、想像していたよりも、ずっとアデレイとの距離が近い。こんなにも体が密着するものなどとは、考えてもいなかつた…！

私が借りたマントから、アデレイのベルガモット系の香りがして私の全身を包む。その香りは、マントから香るのか、それとも後ろ

にいるアーテレイ本人から香るのかもわからない程の至近距離。

透明感と力強さを併せ持つ香りに包まれながら、

黙田よ、黙田よーーーのドキドキーーーはただのつり橋効果よーー

自分自身に言い聞かせながら、走る馬の上で前だけ見て進む。

風が頬を横切り、肌に心地良く感じじる。後方から感じる人肌の体温と、爽やかで、それでいて鼻をくすぐる香りに私の心臓は鼓動がいつもより3割増しスピードで高鳴つている気がする。

『これは、きっと初めての乗馬体験だからつー。』

自分自身に言い聞かせながら、目を閉じる。

…駄目だ。

目を閉じたところで、私を包むアデレイ爽やかで心地よい香りに酔いそうだ。加えてアデレイの体温に、嫌でも距離の近さを感じさせられる。

私の後方、頭の上から、アデレイの吐息が時たま感じられて、くすぐつたい。

なんだか、いつもはふざけている人だと思つていたけど、私を乗せて馬にまたがるアデレイは、嫌でも男の人だと感じさせられる。

だって、アデレイの胸にすっぽり収まつてしまつているように、馬

にまたがっている自分がなんとも恥ずかに思われます。

なんだか、心臓こよくないう乗馬体験も、どれくらい走って進んだのだろうか。

ふと馬の走るスピードが減速する。

不思議に思つてアテレイに問いかげると後方に少し顔を向けるとアテレイは、微笑み

「馬を休ませる為、少し休憩する」

「…うん」

なんだか、ドキドキしてしまつて素直に返事をしてしまつた自分が妙に照れくさい。

相手はアテレイだからー毎朝、顔を会わせているじゃないーあのアテレイだから！

早朝散歩が趣味なアテレイだからーあつと、トマトを畠かに狙つているに違ひないアテレイだから！

だから静まれ心臓！と自分自身に言い聞かせる。心情的には、うおーっと言つて頭をかきむしりたくなるが、我慢する。

アテレイは休む場所を決めたらしく馬を減速させ、先に馬から降りる。

そして馬上に残されたままの私に下から手を差しだし、降りるよう

に笑顔で催促した。

いつも、アテレイの方が背が高いので私は自然に見上げる姿勢にな

るが、今回は逆だ。

私を下から見上げて見つめるアテレイに、馬上からアテレイを見下

ろす私。

白馬に乗った美形キャラに紳士的な態度で手を差し出される私。お

姫様じゃなくてごめんね。

そしてアテレイの手を取ろうとした瞬間、馬がちよつと体を揺らしたので、驚いた私はアテレイの手を取るどころか、あわや落馬の危機である。

「わわわっ」

馬から落ちそうになり、バランスを崩した瞬間、アデレイに力強く手を引かれ、体を支えられて、そのまま馬の上からアデレイに引き下ろされる姿勢になつた。またもや感じるアデレイの香りに、私は慌てて、アデレイから離れる。

「びつ…びつくりした……馬から落ちるかと思つた！」

「…落ちはしないぞ。…俺がいると言つただろつ」

私の落馬の危機を救い上げたアデレイは、何だか嬉しそうに笑つている。

休憩場所としてアデレイが選んだ場所は、近くに小川が流れ、木々が立ち並び木陰を作り、休憩するには絶好のポイントだつた。

私は、一番大きい木の下に行き、腰を下ろす。アデレイは、馬を小川の側まで連れて行き水を飲ませている。

馬も喉が渴いていたようで、嬉しそうに水を飲んでいる。アデレイだけではなく、今まで背に乗せているのだから、馬も疲れるのは当たり前だ。

こんな白馬の似合わない容姿の一般庶民の私でも、背中に乗せてくれるなんて、何て心の広い白馬だ。

何だか、初めて馬に乗つてみて、意外に馬が可愛いと思つたりして。そうなると、今まで『馬刺し最高——』とか言って食べてた過去の自分を反省する。

馬刺し断ちを今ここに決意する。

一人考えていると、アテレイは小川から馬を引き上げ、近くの木々の木陰まで馬を連れて行き、手綱を一番太い木にくくりつける。

その慣れた作業を、木陰から見守る。アテレイは慣れた手つきで馬のたてがみを撫で、馬を休ませている。馬の扱いに慣れている様子を見るとアテレイは常日頃から馬に乗つてているのだろう。慣れた動作と洗練された手つきのアテレイを木陰から観察する。

日の光を受け金色に輝く髪に、蒼い瞳は深い海のようだ。  
馬の扱いなれた手さばきでも、その手が荒れている事は決してなく、動作の一つ一つが品のある。

すらりと伸びた足は、まぎれもないハ頭身。顔立ちは、美麗。

本当にいい男だよ、アテレイは。…口を開かなければだけど。

観察している私の視線に気づいたのか、アテレイが蒼い瞳を輝かせた笑顔でこっちに向かってくる。

「服が濡れている」

「え？ ああ……だいぶ乾いたけどね」

心地よい風と強い日差しで、服もだいぶ乾いていたので、そう気にならない程だ。

「風邪をひくと悪いから脱いで乾かしたほうがいい」

「は？」

「脱いで畠差しの下に置いて、そして俺の上着を羽織つていればいい」

「やうだね。じゃあ、いつちよ脱ぎますか……つて脱ぐか……」

「…俺しかいないから気にする事など何もないのに」

「遠慮します」

何を考えているのだ、この男。やつぱりアーテレイだ。  
あんたがいるから、『』遠慮すると言つてているのですが。  
自分の存在は問題ないとでも言つたのだろうか。いや、いくら私でも  
人がいないからと書いて、外で裸になる趣味はない。

そんな公然わいせつ行為、捕まってしまうわ。

「俺なら脱ぐが。濡れた服は気持ち悪い」

まるでそれが当たり前かのように、平然と言つ。

いやいやいや、アーテレイ、それは、側にいる方の気持ちになつてみ  
なさいよ？

目のやり場に困るのですが。  
本当にまつ裸は勘弁して。せめてアダムを見習つて葉っぱで隠して  
欲しい。

私の呆れた顔を見るなり、クッと笑つて、アーテレイは言つ。

「…まあ『冗談だがな』

「冗談かよつ…！」

「冗談なら真顔で言つなよー相変わらずアーテレイの冗談は、区別がつかない。

まつたく、元はど壱えれば誰のせいで濡れたと思つてゐるの？

私は、楽しそうに笑顔を浮かべるアテレイに、湖からの疑問を投げつける事にした。

「アテレイ、あのジエネミーとアルメリア様はアテレイを探していたんだね」

そう問い合わせる私にアテレイは、「イエス」とも「ノー」とも言わぬあいまいな笑みを浮かべたままだ。

「なんで同じ城に滞在しているのに会わないの？あの入達と友達じゃないの？？」

ふと前々から感じていた疑問、きっと出会った当初から心の奥底にあつた疑問をアテレイに問い合わせてみる。

言葉にするのは初めてだけれども、私の隣に腰をおろしたアテレイの深い蒼の瞳を真つ直ぐに見つめて問い合わせる。

「アテレイは、何者なの？」

### 36 私の出した答え

「アテレイは、何者なの？」

今までずっと、ビリーが疑問に思っていたけれど、心に蓋をしていた事を口にしてみる。

蒼い瞳は私の問いかけに揺らぐ事もなく、真っ直ぐな瞳で見つめ返した後、私に微笑みかける。

「何者だと思つ?」

「おおつとーそつきましたか。こつちが質問したのに、逆に問い合わせできましたか。ずるい男ですね。しかもヒントも何もなしですかつ。ならばこには正直に、

「よくわかんない」

真っ直ぐに見つめる蒼い瞳を見つめ返して、自分の考えている事を正直に言つ。アテレイは太陽を背にして座つてるので、私の位置からは、太陽を眩しく感じてあまり直視できない。太陽を背にする

アテレイのハーブロンドは黄金色に輝き、そのにつにも増して眩しい輝きと、蒼い瞳は、快晴の空の色にも負けない。

太陽のせいか、アテレイの神々しさまでの存在感を眩しく感じて、右手で自分の顔に手をかざしながらも答える。

「よくわかんないけど、私の知ってるアテレイは早朝散歩が好きでトマトに興味があつて…」

身なりや容姿等、ラインの友人であるという時点で高い身分なんだろうと、じつちの世界の常識に疎いおバカな私でも想像がつく。本来ならメイドという私が口をきく事さえも出来ない高い身分かもしれない。

だけど、今まで接してきてアテレイは私の態度をちつとも怒る事もしないし、いつも静かに笑つて楽しそうだ。  
だから、今までも、質問する機会があつたはずだけど、なんとなく聞きそびれていた。

アテレイは何者なの？

つて。

そこで、ふと思いつ出す。

私が、この世界に来た時に、よく『異世界人』って呼ばれて噂されていた。

それは、しょうがない事なのかもしれないけど、同じ人間なのに…と悲しくなったのも事実。

リツキという私個人という人物よりも、『異世界人』という目で見られていた。

それは、何だか、壁を作られている様で、『異世界人』というひとくくりでまとめられているかの様で何だか、少し寂しかったのだ。

私は、私なのに…。

そこでふと思つ。

今、私がアテレイにぶつけた質問、『何者なの?』って聞かれて、自分が何者か答えられる人はいるのだろうか。

私だつて『何者なの?』って聞かれたら「私はリツキ」って答える。

私は、私。

例え異世界から来た事が事実でも、私は、リツキという個人であり、それ以外の何者でもないわ。

そう思つた瞬間、

「やっぱ、アーテレイはアーテレイだわ」

自分のした間抜けな質問に、私はケラケラ笑いながらアーテレイに答える。

一瞬、瞳を大きく見開き、驚いたような表情をしたアーテレイは、その直後に私を見つめて口の端を上げて静かに笑つた。

その表情が、何とも嬉しそうに良い表情だったので、私もつられて笑顔で微笑み返す。

アーテレイってば、いつもは、どっちかといつと無表情なタイプに見られがちだけど、

「ぐくたまに、すくべ嬉しそうに笑う時があるんだよな……」。

ほんやり、と呑気に思つて笑つていたら、いきなり力強く腕をひかれるのを感じて驚きで息がとまる。

それは、一瞬の出来事で、私はなぜか、先程まで私の目の前で笑っていたアデレイの腕の中にいる自分に思考停止していた。

いきなりの事だったので、私は心臓が高鳴るより前に、心臓が素手でわしづかみされた感覚で、心臓が止まるかと思った。

逆らう事も身をゆだねる事も出来ずに、ただアデレイのなすがままに力強く抱きしめられていた。

時間にしてほんの数秒だったのかもしれないけど、私にはすごく長い時間に思えた。

現に呼吸をする事を忘れてしまっていた自分がいる。そのまま力強く抱きしめられ耳元で囁かれる、

「… そうか。リツキから見て、俺は俺なのだな」

そう小声で囁かれた瞬間、ふわりとアデレイの香りが舞い、アデレイが私をその見かけよりもずっと厚い胸板から解放する。

思考停止していた私の嗅覚が、透明感と力強さを感じさせるベルガモットの香りを感じて我にかかる。

私を胸元から解放したけれど、アデレイの両手は私の両腕を掴んだまま、真剣な眼差しを私に向ける。

「…リツキには頼みがある。これから先、リツキの力を借りたい事が出てくるかもしれない。その時は力を貸して欲しい」

急なアデレイの申し込みに、一瞬、何を言われたのか理解出来ずに考えこむ。

は…？私…？私の力…？

…いや、そんなに目立つて力持ちではないとは思うけど…。

しかも、アデレイでも持てないような重い物は私でも無理だと思つけど…。

それとも、私がそんなに力持ちに見える？それはそれで心外ですが…。

怪訝な顔した私にアデレイは蒼い瞳を揺らして静かに笑い、即座に訂正する。

「…ただ、側にいて力を貸してくれるだけでいいんだ」

アデレイは、意味不明な事を言つ。

私はといつと、先程アデレイに抱きしめられた意味がわからず、思考停止からまだ完璧に立ち直つていらないプチフリーズ状態だ。そんな私に考える暇も与えないままお願いとは、アデレイも策略家だ。心の中は、全然整理できていないと言つた。

アデレイは、きつと意味不明で間抜け顔をしている私に優しい声で、

「… そう深く考える事ではない

ん? そうか……。

… まあ、私で出来るレベルなら協力を惜しまない事にしよう。

そう一人で納得して頷き、うつむいて考えていた顔を上げ、

「…わかつたわ、アデ…」

「リツキ…」

返事をしてアーテレイの方を向いた瞬間、田の前に飛び込んできたのは、艶やかな蒼い瞳を潤ませたアーテレイの顔だった。

何だか蒼い瞳は潤んでいて、唇からは吐息が漏れるのが感じられそうな程の距離の近さ、そして、その顔が徐々に近づいて来る事実に私の動きは止まる。

甘ったるこ声で私の名を呼び、瞳は優しく見開いて潤みを帯び、唇からの吐息を感じる。

綺麗に整った顔と私の顔の距離が徐々に近づくのを、熱を帯びたアーテレイの体温で感じる。

そして、そのまま、アーテレイの動きの一つ一つを、まるでスローモーションのように感じて見つめている私がいる。

アーテレイの放つ、透明感と力強さを感じさせるベルガモットの香り

が私に近づいてきた瞬間我にかかる。

そして、先程包みこむように抱きしめられた事を思い出して、顔が赤くなると同時に…

「近いっ！」

ギリギリセーフでアーデレイの顔を右手で制する。

ダメダメ！一度田は油断したけど、過剰なスキンシップは禁止じゃ！  
全く、何をするつもりだ！こちらは、アメリカン方式の抱擁に慣れてないんだから、そんな過剰なスキンシップは勘弁してくれ！感謝の気持ちはハグではなくて、せめて握手で十分だ。

右手で制したアーデレイの顔から、ため息が漏れたような気がしたのは、気のせいだろうか。

そして、その後、アテレイと共に白馬に揺られて無事に帰ってきた。  
お手伝いのつもりが、濡れて皆より先に帰つてくるといつ、出来事にて

『私、何しに行つたんだ…』

と一人後悔の念に苛まれた。

せっかくラインにお願いされたのに…。上手く最後までお手伝い出来ずにならめんなさい…。そして…

お願いだから、お仕置きはしないでえええーー。

と祈りながらも、眠りについた。

### 37 フラッシュな回憶（前書き）

腹黒さん視点です

### 37 ブラックな回想

「どうこうつもりだ」

「どうこうつもりもないよ」

目の前にいる幼少の頃からの友人の苛立つた声に動じずに、紅茶を飲みながら答える。まるで僕の決定事項が全て彼の意志に反するのだろう。苛立つているのがわかる。

「だから、湖に行くよ。アルメリアとジエネミーと」

最初、さして興味もなさそうに聞いていた彼は次の台詞を聞いた途端に、顔色をかえた。

「リツキも連れて行こうと思つて」

その言葉を聞いた瞬間、美麗な顔を歪めて明らかに不満そうに聞いた。

「なぜだ？」

「彼女にお手伝いをお願いしようと思つて。それに自然が綺麗なところだしね、見せてあげたいじゃなー」

僕は、彼の怒りなどさうとも気付いていない風に紅茶をティースプーンでかきまわしながら答える。彼の表情は苛立ちを浮かべて、その美麗な顔の眉間に皺を寄せながら、何かを考えている。

「…だから、君も来ればいいと誘つているのさ、アテレイ」

僕の言葉などまるで耳に入つていかないかのように、眉間に皺を寄せたまま僕の言葉を無視しているアテレイにため息を一つつきながら、  
「だつて、こつまでもこのままじやいけないのは、わかっているで  
しょ？」

僕の言葉に過剰に反応してこらみを利かせるアテレイは図星だったのだろう。

「…」

その沈黙こそが彼の答えだった。僕はその答えに気付かない振りをしました

「じゃあ、先に行ってるから

最高の笑顔で笑って、部屋を後にする。

部屋を出て角を曲がるとちょうどよくお田端の人物が現れた。今日も元気に楽しそうに華やいだ空気を出している。先程まで一緒にいたアーテレイの空気とはうつてかわって癒される空気だ。僕は彼女を見つけた瞬間、ほっと一息ついた。そして僕が近づくと、大きい目を見開いて驚き、すぐに笑顔を向け、にこやかに挨拶してくれる。

「湖ですか？」

「そりなんだ、こここの土地からちょっと先に行くとね、すぐく澄んだ湖があるんだよ」

リツキに先程の件をお願いする。何ごとも興味津々な態度を示す彼女の黒い瞳は、興味深そうに輝いて、ただ話すだけでも、こっちも楽しい気分になつてくれる。

「だから、ディラン家の客人を避暑も兼ねて、湖に案内しようと思ふんだ。せつかくだから、食事も湖でしょうかと思って、アドマに朝一で準備するよう伝えてある。そして湖に何人かメイドも連れて行つて準備を手伝つて欲しいんだ」

彼女は一瞬輝くような笑顔を向けたけど、何か心配事でもあるかのように、顔を曇らせ心配そうな顔になった。

内心あれ？つて思ったけど、それは気付かないそぶりを見せ、こちらも精一杯の笑顔で対応する。

「だから、アドマの用意が出来たら出発したいのだけど、リツキも一緒に来て手伝ってくれる？」

「わ、わたしがですか？」

「どうよりも君に、リツキにも来て欲しいのだ。湖を見せてあげたいし、この城の外の空気も吸わせてやりたい。そして、何より親友を公の場に引き出す為にはリツキという存在が必要不可欠だ。

「あの……」

「ん?」

おずおずと心配<sup>ヒビキ</sup>しがあるかのよひに、突然と上田遣いで、ひかりも見上げるリツキに、

『これは何かあつたな』

と僕の直感がそう告げる。大方、ディラン家のジエネミーとひと悶着あつたのだね。

でも、そんな気持ちをリツキには見せず、見せるのは精一杯の笑顔と

『もううん、手伝ってくれるよな?』

とこう気持ちを込めての眼力パワー。

「……わかりました……」

案の定、リツキは納得してくれた。

「ナリ、良かつた！じゃあ、早速準備を頼むよ」

僕もホッと一安心。

「それに、異世界からこの世界に来て、この城からあまり出た事ないでしょ？だから、こっちの世界にも綺麗な所はたくさんあるんだって事、見せてあげたいんだ」

この言葉は本当。縁あってこの世界にやつてきた彼女に、この世界のいいトコを少しでも知つて欲しいんだ。

いつか、帰つてしまふかもしないのなら、なあせうだ。この世界の事は、忘れないでいて欲しいから。

…まあ、そう簡単に帰るなんて、彼がどんな行動に出るのか、想像しただけで恐ろしいから、今はその時を考えないでおぐ。

「心遣い感謝します、ジョナ息様」

赤く色づいた小さい唇から、素直に感謝の言葉を口にする彼女があまりにも可愛らじくて、ついかまつてしまいたくなるのが僕の悪い癖。

「次回から、間違った呼び方したらお仕置をするよ。」

大きい瞳を、更に大きく見開き一瞬固まってしまった彼女の頭の中は、きっとお仕置きの事で一杯だらう。

「なーんてね。じゃあ、アドマのお手伝いよろしく頼んだよ。たまに城の外も見ないとね。

…ああ、これぐらいにしておかなないとね。…アデレイが怖いからね

ー

「はい？」

なぜそこに彼の名が出てくるのか、意味がわからぬように不思議そうな顔をするリツキに僕は笑ってしまった。

これは、相当手ごわいぞ、アデレイ。

見る者全てを魅了する容姿を持つ彼の魅力が、リツキには効果を發揮しているのか、いないのか。振り回されているかもしれない様子が想像ついて笑ってしまった。

「じゃあ、準備をよろしくね

さつさうと笑顔を振りまきつつも去り際に、

「あつ、そうだ。もし次回は、僕との約束破つたら、どんなお仕置きがいいのかリツキの考えたお仕置きの中で選ばせてあげるよ？考え方といでね」

リツキの固まつたまま弓をつる顔に笑顔で答えてその場を去つた。

…ああ楽しい。

「一体どんなお仕置きを想像したのやう。リツキの表情を見て笑つてしまつた。

言つておくけど、僕はそんなに口で言つ程、意地悪ではないつもり。もちろん人を痛めつける事なんて嫌いだし、ましてや自分より弱い女の子を痛めつける事なんて想像すら出来やしない。

…だから、僕はすぐ優しいつもり。傷つかないように、壊れないようにそつと丁寧に触れるつもりだよ？」

だいたい、いつまでもこのままの状況では、何も変わらない。

例えリツキが興味を持つていなくても、彼に興味をもたれた時点で将来的に確実に巻き込まれると思うし、そうなる前に知る権利はあると思う。

それに彼女は異世界の人間だし？こっちの世界の常識とか知らないと不利だろうし。

傍で見ていると、彼はきちんと自分の意志は固まっている。昔から一度言いだしたら、自分の考えを曲げない性格だ。ただ時期を見ているだけで。

心配なのは彼女だ。

実際彼女は、とてもよく働いてくれている。人望もあるし、他のメイドとも仲良くやつていて皆に慕われて可愛がられている。暮らしていた世界は高い教育が一般的らしく、彼女の一般常識的考え方或多或少の国の違いはあるが基本しっかりしていると思う。

何よりも彼女は媚びない、真つ直ぐな性格だ。加えてその容姿。

ストレートに伸びた黒髪に、黒曜石色の瞳は、何事にも一生懸命でいつも輝いていて、その輝きを失わない。

白い肌に、小さく赤い唇に、物おじしないその態度。彼が興味を持つのも十分わかる。

いや、彼以外にも魅かれている人はたくさんいるだろう。現にこの僕も魅かれているのは認めざるを得ない。

なんだか、リツキの先程の表情からみて、ジェネミーとひと悶着あつたようだけれど、ジェネミーが彼女を気にするのはじょうがない事。

だつてリツキはとても魅力的だから。ジェネミーは、メイドの姿を見かけると常に眼で追っている。

まるでお目当ての人物を探しているかのようだ。そしてティータイムの時間が近づくと、そわそわし始めるんだ。お目当ての彼女が来るのを心待ちにしているのが丸わかり。

だけど、アデレイだつて負けではない。あの超がつくほど低血圧の人間が、毎朝早朝嬉々としてこっそり城を抜け出しているのを僕は知っている。

あんなに爽やかに早朝に起きるアデレイを、付き合いの長いはずの僕でも初めてみたよ。

ああ、そうそう。

アデレイはやっぱり湖からリツキを連れて帰つたけど、まあこれも予想どおり。

僕としては、ライバルに花を持たせた感じでもあるけど、アデレイには、一つ貸しだな。

まあ、これはこれで彼女に『先に帰るなんてお仕置きかな』って言つて遊べるしね。

…ああ、彼女の引きついた拳句、困つて固まつた様子を想像すると、思わず笑みがこぼれそうになるぐらいい、たまらなく可愛く感じてしまう。

大きい瞳を更に大きく見開き、固まつたまま僕の顔を少し見上げる表情を想像すると、自分の中の隠された加虐精神が刺激される。

このまま、本氣で彼女を困らせて、追い詰めてみたい。

そんな気分にさせなつてしまつ。

だけど、彼女がそれで、もしも泣いたり本氣で困つたりしたら、すぐさま救いの優しい手を差し伸べるだろ？、僕は。

彼女は、笑った顔と少し困った顔が一番可愛い。

もし彼女が泣く事があるならば、僕はそれを許さないだろう。

誰かが彼女を困らせるのも内心おもろくない、：僕以外の誰かが彼女を困らせるなんて。

なんなら、この城にずっといればいいのに。……僕の元に。

なんて、うつすら考える。

さあ、アデレイ、ライバルは多そうだよ。  
うかうかしていると、誰かにとられちゃうかもよ。それがジェネミーだつたり…僕だつたりして？

その可能性も完全否定はしないまま僕は一人で笑った。

37 フラッシュな回想（後書き）

ドリッ！

「では、ここで冷えるまで待ちまーす」

私は、テキパキと周りに指示をする。

…と、言つても私とローディの2人だけですが。

今日は、トマトの有効活用と、美味しく頂く為の工夫をしようと料理教室を開いてみました。

事の発端は、最近、ローディの叔父さんにお世話になつて、市場の方へトマトを出品させてもらつてているのだけれど、それが、最近は好調でよく売れるようになつて來たのだ。

トマトに興味を持つてくれる人もいて、自分で育ててみたないと言う嬉しいお客様もいるらしいので、最近ではトマトの苗をミニカップに入れて売つてたりもする。

それと同時に「お勧めの食べ方は?」なんて結構聞かれるらしくて、それをローディの叔父さんから言われたローディは私に

「何か、いい料理があるか考えないか?」ふふつ…、一人でつ

と誘ってくれたので、喜んで即答〇〇を出して本田の作業に至る。

まずは、トマトを半分にカットしてへたを取り、ボールに入れて、つぶしてつぶしてトロトロにしたら網田の荒いこし器でこす。

続いて細かい田のこし器でさうこしす。これで種や種の碎けたもの、皮が奇麗に取りきれるはず。この手間をきちんと行つと舌触りが全然違つはずだ。

2度こじでトロトロの混ざりつけなしの100パーセントトマトジュースの出来上がり。

まずは、試食をする。一口飲んでみて

「美味しい～～～」

太陽の熱を全部集めて凝縮した甘さに、驚きと喜びの声を上げる。ローディ一人で、その美味しさに感動する。

だけど、ここで全部飲んではいけない。

ここぞひと手間加えるのだ。全部飲みほしたい欲望のまま突き進んではいけない。

まずは、トマトジュースを軽く火で加熱して、温める。

そして、『タメラ』という粉を火にかけてトロトロに溶かす。

このタメラの粉は、甘く、その上ゼラチンと同じで固める性質があるらしいので、こっちの世界では、いろいろなお菓子や料理に使われているんだとか。

すごいぞ、タメラ。まさに一粒で一度美味しい、なんてグッジョブ、イカス。

そしてタメラを溶かした後に、加熱したトマトジュースとタメラ

ーを混ぜ合わせて、その後は小さいカップに入れて冷やす。

…と、以上の一工程をローディーが手際よくやつてくれた。

私はただ指示したり、意見を言つだけ。何だか、ローディーは器用な手つきで、テキパキと動くので、私は、見守りながらも試食役に徹する事に決めたのだ。

ローディーがすぐ楽しそうに作業するので、余計な手出しをして邪魔するのも気がひけたので、お願いする形にしてサポート役に回る。

「出来たー！」

彼女が、興奮気味な声を出して叫ぶ。

冷やして固めている間、上手く固まるかな？味は美味しいのかな？と心配する彼女はまるでオヤツを楽しみにしている子供みたいで、そんな様子がまた可愛くて微笑ましくて、つい笑ってしまう。

ああ…俺って結構重症かも。

出来上がったばかりの冷たい赤いゼリーを、緊張しながらカップから皿にうつすのは俺。

白い皿にプルプルと揺れながらも、ちょこんとたたずむゼリーを見て彼女は眼を輝かせる。

「なんて真っ赤でキレイなゼリー…」

うつとりとゼリーを眺める彼女の横顔を見ると、黒い髪が邪魔にならないように、一つにまとめられ、白い頬は興奮からか、赤く染まつていた。まとめ髪から出る、さりげないおくれ毛が、何だか色っぽくてつい見つめてしまつ。

そして真っ直ぐに真剣な瞳で俺の手元のゼリーを見つめる、輝くよ

うな黒い瞳、そのまつげの長さに驚く事、透き通つてキメの細かい白い肌、ゼリーに負けないぐらいのつやつやして赤く小さい頬。

彼女の瞳は真剣に、俺の手元にあるゼリーを見つめている。

あまりにも真剣なその様子に、ドキドキと胸の鼓動が高まる自分がいる。

ああ……俺……今、このゼリーになりたいかも。

一瞬、そんなバカな事を思つた自分がいるが正直な気持ちだ。

そんなバカな考えを我ながら恥ずかしく思いながらも声をかける。

「味見してみよっか」

喜んでうなずいてから、用意していたスプーンでたつた今完成したばかりのゼリーを口に運ぶ彼女。

その小さく赤い唇の可愛らしさ」と。そして

「味見だー！」

そう言いながら、口にスプーンを運ぶ彼女の豪快に開いた口の大きさに思わず見とれる。

あんなに小さく赤い唇が、ビリやつたら、あんなに大きく開くのか。

「美味しいー！トマトの濃厚な味がギュッと濃縮されていて、舌触りもツルンと滑って心地よくて！」

彼女は、興奮しながらも話してくれる。良かった、どうやら美味しい出来たみたいだ。

俺もゼリーを一口、口に入れると、ヒンヤリとしてなめらかな舌触りと、フルーツのような甘みと優しい酸味を感じて思わず笑顔になる。

その横で彼女は、興奮気味に話し続ける。

「さあ、箱口付近で見てみよう。」

リツキ、またかの彦摩呂発言

彼女がすくなく喜ぶので、まだ何個か冷やしてあつたゼリーを食べるよつに彼女に勧める。

最初は遠慮していたけど、まだ材料はあるし、何ならまた次回作ればいい、そう告げると皿を輝かせて俺の隣に腰を下ろして上機嫌で食べ始めた彼女。

「私、このゼリー、バケツ一杯分ぐらい食べたいわ」

冗談にしては、目が本気な輝きを見せる彼女に、

「いや、それはさすがに飽きると困ります」

苦笑して言う俺に彼女は、

「そりゃ。この入れ物ぐらいの少ない量で、もっと食べたいと思わせるからいいのか」

俺の言った事に素直に納得している彼女だけど、結局、彼女の試食した全部の量を合わせるとバケツ一杯分ぐらいにはなってる気がし

たけど、黙っていた。

笑顔で口にゼリーを運ぶ彼女を横目で見て思つ。

ああ……俺……今、幸せかもしんねー。

好きな子と一緒に一人で、台所に立つて料理して、彼女が俺に話をしながら指示をしてくれて、俺は手を動かす。

そんな作業をしている間も彼女は、楽しみにしてくれているようだ、わくわくした様子で見てくれている。

期待に満ちた表情を浮かべながら、大きい瞳を更に大きく見開いて俺の作業を見ている様子がまた可愛くて、俺はその期待に答えたくて、そして彼女の喜ぶ顔が見たくて、張り切つて頑張つてしまつた。

そして、俺が作ったゼリーを彼女が美味しい、美味しいって褒めながら笑顔で食べててくれる。

こんな傍から見たら何てことはない事でも、俺からすれば、すっげー幸せに感じる。

こんな毎日が続けばいいのにな...

と、思ってしまう。

彼女がふと食べる手を休めて口を開く。

「…最初さあ、こっちの世界に来た時

俺は黙つて彼女の声に耳を傾ける。

「もへ、どうしたらいいかわからなくて、パニックでさーーー

彼女は真剣な顔で手に持つゼリーから視線を外さないまま続ける。

「地面に寝転がって泣いたもん。私

そこで照れたように、でへへと笑う彼女のできるべくがまた可愛らじくて、胸がキュンとなる。

「だけど、最初に出会ったマーサさんにお世話になつて、そこからも皆が親切で優しくてさ。皆のお陰でここまでこれたと思うの。雇つてくれたヒューストン伯爵に、カリ亞にアドマさんにメリーストさんや、お城の仲間たち……」

彼女の、話を聞きながらうなづく。ああ、皆がリツキに優しいのは、リツキも皆に優しいから。

人は、優しくされると優しさで返そつと思つ。

彼女は、噂になるぐらい美人なのに、自分で美人であると自覚して、それを鼻にかけるような態度は決して取らない。

むしり、勝気な気性でさつぱりしている。そして、飾らないありのままの自分をさらけ出してくれる。

一緒にいて楽しいと思えるし、彼女が人気があるのも当然の結果だ  
と思う。

「本当に、やつて来たのが」の地で良かった、つて感心の

そこで、俺を見てニコッと笑う彼女に、俺は心臓が高鳴り始める。

… もしかして、今、結構いい感じなんじゃ…。

俺の胸の鼓動が一気に高まる。ヤバい。彼女に、俺の心臓の音が聞こえたらどうしよう…。  
だけど、止まらないこの高鳴る動悸。

「あーもちろん！ローディーも！ローディーにも出合えて良かったと本当に感謝しているよー！」

照れて頬をほんのり赤く染めながらも言つ彼女の顔を見たとき、俺に稻妻が落ちたような衝撃が走る。

…もしかして、俺は今、絶好のチャンスなんじゃないか…？

そうだ、彼女と二人きり。気持ちを伝えるなら今じゃないのか？緊張しながらも、自分から溢れ出るこの想いを伝えるなら、今しかないと決断する。

頑張れ！ローディー！頑張れ俺！今が人生のチャンスなんじゃないか？！  
いけ！いつてしまえ！いくんだ俺！！そして彼女に、

『俺もそつ思つてこない、できればこの先もずっと一緒にいたい  
つて伝えるんだ。』

俺はありつたけの勇気を振り絞り、震える声で

「あ…俺…俺も…つ…！」

「だから、すーーーっと友達でいてねー…ローディー」

にじり笑う彼女に俺は

「あ…あ…、も…も…も…」

とつたに条件反射で返事をしてしまい、力なくうなずいていた自分がいる。

「……いいぞ！ チャンスはこれから、一回限りといつ訳ではないし！

そつ……それに、友情は愛情へと変わるかもしれない第一歩だもんなつ……！」

チクショ――――――――

は  
…

は  
…

は  
…

「まつべじょーん」

「あひ、リツキ風邪？」

カリ亞の心配する声に首をふりながら、風邪とは違つべしゃみに一瞬身ぶるこをかる。

これはきっと誰かが私の噂話をしているに違いない。ズズズツと鼻をすする。その音にアドマちゃんは顔をしかめながら

「うひうひ、リツキ。年頃の娘が鼻なんてすすりもんじゃいけないよ。それとくしゃみをする時もおちと手で口を覆つて

アドマちゃん、うひの世界の私のお母さんのような存在なので、

大人しくはいと云つ事を聞く。

「まつたく、可愛い顔が台無しだよ」

あきれたよう云ひアドマせんこ、笑つて誤魔化す。

ジエネミーと共に湖に落ちて、なぜか現れたアーデレイと一緒に監より先に帰つてきて、あれから一週間。

一緒にお手伝いとして行つたアドマさんやカリア達には、ラインが上手く言つてくれたらしく、湖に落ちた事をすごく心配された。

『昼食後に、散歩をしていて湖に近寄つたら転んでしまって、全身濡れてしまつたから、見張りの人と一緒に先に帰らせた』 という設定で皆に言つてくれたらしい。

…

どんだけマヌケな私。その設定は悲しすぎる。

けど、半分以上は事実なので、黙つていた。

ラインの優しさに感謝すると同時に、借りを一つ作ったようで、それはそれで後が怖い。

そんな気がするのは、私の勘ぐりすぎか？

あの湖に出かけた翌日、紅茶を運んで行ったラインの部屋で、笑顔で距離を縮めながら一步一歩近づくラインに、私の顔はひきつっていたに違いない。

先にアデレイと帰ったから、お仕置きか？お仕置き発言が発動か？

ラインが一步近づく。

「ああ。暫には上手く言つておいたから、話を合わせてね？」

優しい笑顔のラインの裏の部分を知る私は、何を言われるのがビクビクして、本能で危険を察知して一步後退する。

「あれから、ジェネニーは一人で濡れて帰つてきたまま機嫌は悪いし、リツキの姿は見えないし大変だつたんだよ。けど、ジェネニーから聞いたよ、アデレイが迎えに来たんでしょ？」

後退した私に、また一步と近づくラインが、

「だけど、湖に落ちたのは本当に心配したんだよ。大丈夫だつた？」

はつ、はい…！大丈夫！

との意味あいを眼力に込めて、うなずきながら、そして後退しながらも返事をする。

部屋の中心で話をしていたはずが、いつの間にか、部屋の隅まで追いやられてもう一步も下がれない。

まるで追い詰められた獲物みたいな私と、かわいい顔して実は、めつさ肉食獸を思わせるラインとの距離は近い。

隅まで追い詰められた私を、ラインは、壁に手をかけて更に私の逃げ場を失う。

私はその手に閉じ込められた体勢で、何だかラインに捕まつた気分だ。

スミレ色の瞳は、優しく微笑んでいて、栗毛の髪の毛は思わず触れてみたくなる程、やわらかそうだ。

中性的な可愛らしさの中にも、ふとした仕草や表情が時々男らしくて、見かけとのギャップに驚く事もある。

これがギャップ萌えといつものだらうか。

しかし、ラインは可愛らしげバンビやんを思わせる容姿なのに、なぜか中身は人食い熊グリズリーを思いだすのはなぜだらう。あつと私の本能の呼びかけかもしない。

「まつたく心配をせて悪い子だね、リツキは」

ラインのスリーブ色の瞳を見つめたまま、呑気に考え方をしていた私はラインの一言で我にかえる。

「もし次に湖に落ちて濡れたらその場で服を脱がないとね」

は？なんですか？

「だつて、濡れて風邪ひいや困るじゃない。」

しつと壁のラインに先口アテレイに言われた『俺しかいなから脱げばいい』と言われた台詞を思いだし、『お前もか』と、心の中

でツツ「ミニをいれる。

なんだつて、人を脱がせたがるのか、この一人。余程、私にストリーキングをさせたいのか。

広い部屋の隅で、何だかラインに責められている気分な私。この部屋はこんなに広いのに、なぜか隅に固まる2人。こんな隅に2人でいる必要はないはず！

もつと部屋の中心に移動する事を提案したい。

そこでふと、私はある事を思いだし、すぐにそれを口にする。

「…あの、ライン。結果的に先に帰ってしまったけど、緑の景色は綺麗だし、湖もすごく綺麗だった。…だから、ありがとう」

きちんとお礼を言つてなかつた事を思いだし、お礼を口にする。

ラインは、一瞬スミレ色の瞳を大きく開いた後、可愛らしい顔が笑顔全開になる。

「リツキにそつまつて貰えると僕も連れていったかいがあるよ

微笑むラインは、まるで性別不詳の天使のよつにも見える。

素直に喜ぶラインの姿を見て、やはつきりとお礼を言つて良かった。  
たと思つた。

思つても言葉にしなければ伝わらない事つてあるもんね。

「ありがとう、リック。そいつしてくれて」

私も何だか照れてしまつて、顔が少し赤くなりながら照れ笑いで誤魔化す。

ラインも嬉しい、私も嬉しい。

そして、私の照れて赤くなつた顔を見たラインは、まるで何か面白い事を見つけたかのように、スミレ色の瞳がキラキラと輝きを増す。口元には喜びの笑みさえ浮かべている。  
そして、こきなり声のトーンを上げ、まるで感動したよつこ

「ああ…！もうかわいいなあ！そんな顔しないでよ、リック…もつ  
とこじめたくなるじやない…！」

この台詞を輝くよつた天使様の微笑みで言われた瞬間、私はドン引きした。

本日の紅茶の時間、慣れた手つきで用意を手伝ってくれるアドマさんとは逆に、何だか気の進まない私。だって、あの湖の一件、あれからアデレイにもジョネミーにも会っていない。

なんだかんだと用事を見つけては裏方に回っていたのも事実だ。だってジェネミーは、結果的には足を引っ張って転ばした訳だし、私的にはお互い様だと思うのだけれど、恨まれていたら困るし。内心、罰則を受けるかもしれないとドキドキしていた小心者でもある訳で。

もし罰則がラインによる『お仕置き』だったら早々に逃げだすわ！私！

アデレイはアデレイで何だか…。

正直恥ずかしい。

だって、よくよく考えると、きなり抱きしめられたんだよなあ。あの香りに包まれて。

彼が何を思つてそんな行動に出たのかはいたつて謎だが、それもあるアデレイだ。

相変わらず意味不明なので、しおりがないが、そんな彼の行動に顔を赤らめる自分に少し腹が立つ。

アデレイめ、状況が状況なだけに、あっけにとられたが、もし次回そんな事があつたら、アッパー・カットでもお見舞いしてやらないといけないな。うむ。これ、軽くないマイ・ポリシー。

色々考えていろいろつむに、カーテンを押し進んで歩いていたら、いつの間にやら立派な扉の前だ。

なんだか、緊張するが、そこは仕事なので、嫌だとは言つていられない。

深呼吸の一つをしてから、扉をノックしようと手を握ると、

『だから……で……そうだ……』

扉の向こうから声が聞こえる。どうやらアデレイには来客がいるらしい。一瞬悩むが、来客がいるならお茶の時間にちよつとい。焼き菓子も紅茶の葉っぱも余分にカーテンに入れてあるはずだから。そう思いつつ扉にノックのグーを押しつけようとしたが

ん？呼んだか？誰かが？私を？

『リツキに…』

空耳かと思つて周りを見回しても誰もいない。

だけど、確かに聞こえた気がする。自分を呼ぶ声が。気を取り直してもう一度グーと握った瞬間、

『だから… リツキを…』

んんん？ 待てよ。やっぱり空耳じゃない。扉の向こうでは私の話題だ。

なんだ？ 私の事？

なんだら？ 本人不在の間に話すとは、人はそれを噂話という。

一瞬、行動を静止して、ここ最近の自分の行動を振り返つてみると、確かに話題になつてもおかしくはないと思つ。

『リツキが湖でジエネミーの足を引っ張つて転ばしたらしいよ』

『そしたら逆に転ばされたんだって』

『そして最後に逆ギレして泳いだらじいよ。浅いのに』

『なんでも元の世界では『カツバ』と呼ばれていたらじいよ』

などなど自分の噂話になりそうな部分を自分の中でいくつか上げてみたけど、どうでしょ。う。

…しかし、アレだわ。

いい話題だらうが何だらうが、まあ、悪い話題なら特にだけ、自分の話題の最中に、その場所に飛び込んで行くのって割と勇気がいるな。

何も知らない振りして、部屋に入つていけばいいのだらうけど、その後の空気が微妙。

扉の前で、うんと悩む。悩んでいても仕方ないので、私は決意する。

やつぱり今はやめよ。ひ。

だつてアテレイが自室で誰かと大事な話をしていたら、悪いし、それが自分の話題だつたら、なおさら聞きたくないのが本音だし。

立派な扉のまん前で、後から出直して来る事を決め、まずは自分の持ち場に戻る決意をした私が回れ右をした瞬間、固い何かに顔面を打つた。

「…つ…痛つ…」

固い何かに勢いよくあたり、顔を思いつきりぶつけた。  
さして高くもない鼻がこれ以上潰れたら困る。鼻血ブーも、もちろん困る。

鼻を心配してさすりながら、ぶつかつた何かを確かめようと顔をあげたら、私を見下ろす二つの赤い炎を灯した瞳。

『あ…ジェネミー』

今一番会いたくない人物ランキングの首位争いをしている人物がそこにはいた。うげつ。

ジェネミーもなぜか痛みに耐えるような顔したまま自身の顎を片手で押さえて、私の事を見ている。  
そして、忌々しげに口を開く。

「…お前は何をしているんだ、こんなところで」

どうやら私の鼻をつぶしそうになつた原因はジエネニーの顎だつたらしー。

なんだ、痛み分けですね。お互い様です。

しかし、アレです。あなたとは痛み分けな状況が多いですね。ドローが多い気がします。

お互い様なのでそんな睨まないで欲しい。

カートを指さし、まだ痛む鼻をさすりながら身振り手振りの、ジエスチャーで答える。

失礼と思いつつも今回は鼻が痛むので、許して欲しい。

私がジエスチャーで説明を終えると、

「……聞かれた事も満足に答えられないんだな」

鼻でバカにしたように笑われたので、カツチーンときた。  
誰にぶつかって痛い思いをしていると思つてんだ！

「それは、今、鼻をぶつけたからです。……なんかヘンなのがいたので」

へラフと笑つて小声でケンカを売ると、

「何だ？ 今何と書つた？」

後半部分は聞こえないはずと、小声で書つたつもりだったのに、どうやら文句を言われたと瞬時に悟つたらしい。人間、文句を言われるとすぐ気がつくのはなぜだらう。

よせば良いのに、不用意な言葉で相手をつい怒らせてしまつ。こんな自分の性格つて損だと常日頃から自覚している。このチャレンジヤー精神、無駄に余計だわ。

声を荒げ反論しようとするジェネリー、『しまった』と思い、指先で『しーっ』として扉を指さしながら、小声で

「今、お客様がいらしているみたいなので、紅茶は後からにしようかと」

まずい、こんな場所で騒いでは客人と部屋の主、アーテレイに気付かれてしまつ。

だから、こんな扉の前でケンカしている場合ではないのだよ。

「セツカ」

「やつと笑つたジエネニーに、何やら嫌な予感。

「では、懲戒めので…」

「待て」

立ち去りとする私を呼びとめるジエネニー。

「では、俺の部屋にきて、そのお茶をもいかない。

「は…?」

「ちよひじゆかつた。お前には聞きたい事がいっぱいあるからな」

不敵な笑みを浮かべるジエネニーを見て、もしや、前回の仕返しか  
?体罰か?

恐れおののく私を尻目にジエネニーは、私の腕を引っ張り強引に廊  
下を進む。

ちよ…、待て…痛いぞ…ジエネニー…

私の腕を掴みながら、前だけ見て進むジェネミーに引きずられる形で、赤いじゅうたんの敷かれた廊下を進む。

その間、最初は力で抵抗を試みたが、途中で早々諦めた。

無理だ。腕を取られて引きずられては、力の差では到底かなわない。逆らうだけエネルギーの無駄使いと悟った。いくら細身で年下といえども、相手は男だし。

強引な引っ張りに引きずられていき、ジェネミーは部屋につき荒々しく扉を開けるなり、私の掴んでいた腕を離した。

「…痛つ」

顔をしかめる私の様子を、驚いた顔してジェネミーは見つめる。まるで、私の腕を強く掴んで痛いだろうとか、今気付いたような、『しまった』みたいな顔だね。

ジェネミー、アンタあれだね。

夢中になると周りが見えなくなるタイプだね。

非難めいた目つきで彼を見ると、

「…痛かつたか？」

急に素直に私を気遣う様子の彼を見て、少し驚いた。

「…少し。けど、大丈夫です」

彼も素直に私を心配する声色を出してきたので、まあ許しましょう。  
悪気があってした訳じゃなかろうし。

そんな広い寛大な心でジョネニーを見つめていると、すぐさま

「一体お前は、どういった関係だ？　あのお方と」

「…またその話題ですか。

「IJの間の湖での出来事といい、何かの関係があるのだろう」

「…はあ、いい加減疲れたよ、その質問。どこか余裕のない彼の態度  
に諦めに似たため息を吐き、

「……とつあえずお茶にしませんか？」

まずは、お茶と甘いスイーツでも食べて落ち着きませんか？疲れていようと甘いモノ食べたくなるでしょう？といわんばかりに業務用メイド笑顔を作りジョニーに向けて微笑む。

「まずは、」用意いたしますから、お掛けになつて下さい」

やんわりと余裕の笑みを浮かべながら、ソファに腰かけるように勧める。

「これは年上の余裕な態度を見せてやらないと。私の方が年齢的にはお姉さんなのだから。

ジョニーは、私の態度に少し我に返ったのか、ソファに腰をやる。

「では、お茶の用意を…」

「…つて、カートがない！」

お茶セツトもろもろの入つてゐるカートが、ないのだ。急いでジョ

ジェニーに引きずられてここまで来たので、途中でカートを置き去りにしてきたに違いない。

年上の余裕で…なんて、落ち着いたトコをみせようと優しく微笑んでみたが、なんてこつた。

自分の失敗を、恥ずかしくなるとともに、ジェニーのせいだと責任をなすりつけたくなったが、平常心を保ちつつ笑つて誤魔化すと、

「お前はどうか抜けてるな」

人の失敗をなぜか楽しそうに笑うジェニーへ、

「…誰のせいですか」

「俺のせいだと言いたいのか」

「やうですよ、責任とつて持つて来て下せよ」

いくらなんでも、アデレイの部屋の前にカート放置はヤバいだろつ。そして、ジェニーに持つて来てくれと言つてはみたけれど、立場的には何か違う気がするので、自分の失敗としてため息一つをつき、あきらめる。

「…カートを持つてきますので、お待ちください」

頭を下げる、部屋を出て行こうとする

「お茶はいい。まずは、隣に座れ」

自分の腰かけたソファの隣に腰をおろせといわんばかりに、隣のソファを指さすジェネミーに

「無理です。今は勤務中！」

そう辞退する旨を伝えるが

「いいから、座れ」

無理矢理腕を掴んで座らせられたので、ジェネミーから一番離れた席にちょこんと腰を下ろす。

今度は加減をしたのか、力強く握られたけど、痛くはなかった。

何だか気まずい…。

言われるままに、ソファに腰掛けたが、一体ジョネニーはどうもりだろう。微妙な沈黙の後、ジョネニーを覗き見ると、ジョネニーもじつちを見ていた。

「今日は大人しいんだな」

今日は？今日はひでじう意味？と突っ込みを心の中でいれつつあいまいに微笑む。

「！」の間の俺を転ばした時の威勢はどうに行つたんだろうな

やつぱり根に持つていたのか…（当たり前か）！」は大人しく

「！」の間はすみませんでした

丁寧な口調と共に頭を下げる。

「…別にいい。あれは、じつちも悪かった

意外な言葉に驚きを隠せずに、顔を上げるとジョネニーと田があつた。

「なんだよ、その意外な顔は」

「意外です」

やべっ！ 間髪いれずに突っ込んでしまった。自分の口に蟲をするかのように手で押さえるが、もう遅し。ジエネミーにジロリと睨まれた。あわわわわ。

「まつたくお前は、言いたい事を好き勝手に言つてくれるなー。」

すみません、性分でして。

「すみません」

頭を下げるヒ、今度ジエネミーは眉間に皺をよせ、

「あとその態度、今はやめろ。勤務中だと何かだとお前は言ひつと思うが、その調子ではこいつの調子が狂う」

はあ。業務用態度は気にいらないって事だな。そーゆう事なら、了解しました。

「どうあえず、お茶でも飲みましょう。カート持つてくれる」

ずっとそらしていたジェネニーの話に、ヒジとん付き合ひの事にした  
私は、立ち上がり、カートを取りに行つた。

「わあ、お待たせしました、紅茶をどうぞ」

淹れたての上品な香りを放つ紅茶と、今日の焼き菓子は、ガトーショコラとマドレーヌなど。とても美味しいそうで、見ているだけで心ときめく。そんな焼き菓子詰め合せをお皿に飾り、ソファの前のテーブルに並べて、ジェネシーに勧める。

「お前も飲め」

ジェネシーに勧められたので、遠慮はせずに、自分の分の紅茶も淹れる。

こんな高級な葉っぱの紅茶、飲める事はめったにないので、ゆっくり味わいながら飲まなくては。ティーポットでしばらく蒸らした紅茶をティーカップに注ぐ。ああいい香り。紅茶のこの香りだけでもリラックス効果があるんじゃなかろうか。

そのまま香りよい紅茶のカップを持ち、ソファに腰掛ける。…ジェネシーから一番離れてだけど。そして遠慮なく紅茶を口にして、その美味しさにビックリする。

「美味しい！」

自分で淹れた紅茶だけど文句なしに美味しいと思つ。  
自然に口から出た台詞を黙つて聞いていたジョネニーは

「… そつか」

ただ一言つぶやいて、ソファの前のテーブルに置いてある焼き菓子の皿を、私の皿の前に差しだした。

「…え？？」

これは、食えって事なのか？それとも見せびらかしてるだけなのか？その真意がわからず、戸惑う。

「俺は、甘い物は嫌いだ」

そつつい放つたジョネニーに驚きの声をあげる。

「ええ？ 甘いものが嫌いなんて信じられない。勿体ないよー」

甘いお菓子が嫌いだなんて、人生損をしていると私は思つ。

そのまま無言で焼き菓子の皿を私に押しつけてきたジョネニーにビ

ツクリしながら、遠慮なく頂く事にした。一口、口にした途端、口の中に広がる甘い焼き菓子、バターの上品でまろやかな風味は口の中でとろけてしまいそうだった。

「美味しい！」

そう言いながら、私の口はノンストップ。次から次へと休む間もなく口に入れる。

そして最後の一つのガトーショコラに手を伸ばした瞬間、何となく視線を感じてジェネミーを見てみると真っ直ぐに私を見ていた事に気がついた。

ソファに肘をつき、片手で頬づえをついて赤茶色の瞳は私の動作を見つめていた。

何だか、まるで興味ないようなそぶりで私を見ているが、私は気付いてしまった。

一瞬、彼の口元は優しく微笑んでいたこと。

私と田が合つと、口元は瞬時に引き締められたけれども。

私は、最後の一つのガトーショコラを手に持ったまま、ああそうか、と自分の中で気付いてしまった。  
気付いてしまったら、そのまま知らない振りは出来ない。そこで

「いる？」

と最後のガーランドを差し出して聞いてみた。その後にジョンニーは

「嫌いだと呟つたら」

と、眉間に皺をよせて嫌そうに、たつた一言、吐き捨てた。

なんだよ、そんな物欲しそうな情熱的な瞳で見つめているからさあ、本当は欲しいんじゃなかろうかと思つたじやん。じゃあ、いいよ、あげないもんね。ジョンニーの気が変わる前に早く食べてしまわないと。

「まつたく、よくそんなに食えるな」

「……本当は、欲しかったんじや…………？」

「……食べるかー見てこむ」つままで胸やけがしそうだ

「私の体の約8割は甘い物で出来ています」

「……なんだ、それは」

意味がわからない、とでもいいたげなジエネミーは

「お前は俺の前でも……。誰の前でも変わらないんだな」

一言ついでやいた後、

「俺は姉上と一緒に、はるばる王都から、Jのヒューストン伯爵の城まできた。姉上は有力な候補者だからな。…それに、ずっとお慕いしていたのだ、あのお方を」

語り始めるジエネミーに、黙つて聞く私。

「それが、最初、俺はおろか姉上にもお会いなやうつとはしなかつた。まるで興味がないような、どこ吹く風だ。やつとお会い出来たと思つたら、なぜかお前が側にいる」

そこでジエネミーは、私を真つ直ぐに見つめて問う。

「お前は、一体アーデレイド様どいつもこつた関係なのだ?」

「私は、ただの異世界人だよ。アテレイとは…」

そこで一瞬言葉に詰まる。

アテレイとは…？

ただの顔見知り？

友達？

それとも…

おなじ趣味を持つ畠仲間？

私達の関係は何て言うのだろう。そして、言葉にして表わす事は、なぜか難しく思う。

「そもそも、あのお方を愛称でお呼びになつてゐる…。それ自体が珍しい。じくわずかの人間にしか許可していないものの…」

「私にとつてはアテレイはアテレイだわ。そもそも本名が何ていう

かも知らないわ」

そう考えてみると、私はアーテレイの事を何も知らない。そう思いながらも、最後の焼き菓子を口に入れ、紅茶で喉を潤す。その間もジェネニーは私の事をずっと見つめていた。

なんだなんだ、やっぱり欲しかったんかい？」の焼き菓子。だけど、もうないよ、完食しちゃったし。

私のあつさつとした態度に、ようやく嘘がないと思つたらしいジェネニーは、少し笑顔になり態度が柔らかくなるのを感じた。何だか、さつきより空気が和らいだ気がするし、私も少し安心した。

そこで今度は逆に私の方が質問を投げかけてみた。

「ね？ ジェネニーは王都のほうから来たつていつたけど、王都はどんな感じ？ こここの土地よりも賑やか？」

好奇心丸出しで聞いた私に、

「王都は、文化が華やかで賑わっているし、数千年の歴史を持つ都。華やかな王都であるから人々や商人が集まる商業の街としても、栄えている」の国を中心だ」

そつか。王都とこうだけあつてやはり栄えているじい。

「そつなんだ。何だか華やかで楽しそうだね。少し憧れるわ

「ここは土地からあまり離れた事のない私は、好奇心からじょっと見てみたい。

自然溢れるこの土地も好きだけど、王都とは華やかなんだろうな。

私には想像もつかないわ。

「……いつか連れて行つてやる

「え」

ぱつりとつぶやいたジユネミー、「瞬驚いて言葉の意味を考えながらジユネミーを見つめると、

「こつか一緒に連れて行つてやるよ

はつかりと再度、そづ告げた。

ジエネミーは綺麗な顔を私に向け、ビームを投げやりで、そしてなぜか面倒くさそうな言い方をする。

彼の真意を確かめる為、顔を覗き込むと、赤茶色の瞳は真剣な眼差しだったので、本心から言つてくれているのだと勝手に解釈する。会わせた眼も、すぐに逸らされてしまったけれど。

それでは、ジエネミーのお言葉に甘えちゃつてもいいのだろうか。

…てことは、アレか。ジエネミーは王都を観光案内してくれると言う事だな。

きっとアドマさんやカリ亞も皆で行つたら楽しいに違いない。このなつたら、王都まで団体旅行と決め込むしかないな。観光馬車ならぬ、ハト馬車か。いいかもしない。

一人で旅行プランなるモノを考えていると、ふいにジエネミーの手が伸びてきて、私の髪の毛を軽く引っ張る。

え？、ゴミでもついていた？

不思議に思つて、ジエネミーにされるがままに髪をいじりせつてみると

「…」の黒い髪といつのも珍しい

「え？、そうなの？」

私の世界では一般的だけど、そついえば私と同じ黒髪の人は見た事がない。

「お前のような異世界から来た人間も王都では、何人か存在すると聞く」

「……は！？」

その台詞を聞いた瞬間、『なんですってえ！』と叫んで思わずジェネミーを掴んで揺さぶりたくなつた。

その話は本当なの？ああ今すぐ、呑気に私の髪を触るジェネミーの肩を掴んでガクガク揺さぶつて問い合わせみたい。しかし、私は驚きのあまり声も出ないし、思考回路はパニックだ。

「その異世界から来た人間も黒髪だと聞く」

私は、常日頃から、自分のように異世界に来た人と会つて話がしたいとずっと思つていた。だつて、私だってできれば帰りたい訳だし、いつどうやってどういう経路でこの世界に来たのか知りたい。そうする事で帰る事の糸口が見つかるかもしないし、人間希望は捨て

ちやいけないよね。

「ぜひ、その人達に会つてみたいわ！！」

面会希望…同志よ…今、まわにこに集結するとき…集え…異世界  
迷い人同盟！

勝手に同盟を結成し、期待を込めて力強く叫ぶと、急にジエネミー  
は押し黙る。

何かを考えているように、黙つた後、急に低い声で聞いてきた。

「…会つてどうするつもりなんだ？」

「…会ってどうするつもりなんだ？」

「そりゃー、もちろん、元の世界に戻る手段を考えるのよ…」

そうだが、情報交換はとても貴重だ。三人寄れば文殊の知恵とは昔からよく言ったもんだ。この際、何人でもいいけど、私以外にこの世界にやつてきた異世界人と呼ばれる人がいる…。そして王都に行けば会えるかもしれない！その事実に私は興奮した。それこそ興奮マックスで鼻血を吹きそなぐらいに。

私の興奮とは逆に、押し黙つて考え方をしている様子のジエネミーに視線を戻すと、ジエネミーは目を細めて私をみていく。そして

「…………やめた」

「はい？」

冷たい一声が聞こえてきて一瞬、聞き間違えかと思って、間抜けな声で聞き返す。

「お前にほ、」の田舎がお似合いだ。王都なんて、行かなくていいだろ？」「

「は？」

何、その手のひらを返したような変わりよう。あんた、人を期待させるだけさせとこい、その変わり身の早さは何ね？！

「こやこやこやこやこや、ちゅうと待つてくださいよっ。」

「何？」

ぶつかりまつて返事をするジョンニー「私は焦りと苛立ちは隠せない。

「何で、期待持たせるような事を言つた後で突き放すわけ？意味わからんないし。わざと連れて行って言つたじゃないー。」

「気が変わった」

ふいと顔を反らすジョンニーに、拳を握りかためる。思わず赤毛の頭を殴りたくなるが、我慢我慢。

「そつ…。でも良い事聞いたわー王都には私みたいな人もいるつて。あなたが連れて行ってくれなくても、いざれどうにかして行くわ」

そうだ、ジョネミーを頼らなくとも、いざれ自分の力で行けばいいのだ。簡単な事だ。道案内とか不安だけど…そこまで、ふいに思っていた考えに、深く考えもせずに口にする。

「案内ならアデレイに、頼んでもいいわけだしー」

だつて、アデレイ毎日暇そうだしー・プラプラしてやつだしー・そつ言いかけた瞬間、

「お前は、すぐこそりやつて、あのお方ばかりを頼りにこじよつとする。……なぜだ」

急にむきになつて反論してくれるジョネミーに私も負けではないらしい。

「だつて、案内してくれるのやめたつて言つたじゃない。だつたらアデレイに頼むわよー」

「それは、お前が元の世界に帰る手段を探すとか言いだすからだー。」

「だつて帰りたいものー誰でも、自分の家が一番居心地いいでしょ！それとおんなじよ」

私とジェネミーの口ケンカが始まる。毎度顔をあわせつやこのパターンだけど、もう慣れた感がする。

「私だつて……ここの人達は皆良い人達で、いきなり異世界から來た私を優しく迎えてくれた。その事については、感謝しているし、恵まれてるつて思つてる。

だけど、やっぱり帰りたいつて思うのが、本音だわ。私が生まれてからずつと過ごしていた場所だもの。戻りたいと思つのは当然ですよー？」

真剣にジェネミーの目を見て訴える。私の剣幕に押され氣味な様子のジヒネミーの赤茶色の瞳を見つめながら、再度叫ぶ。

「だから、帰るわよー！」

「…………つー」

「絶対に帰るんだからー…………」

私は、声を大にして部屋の中心で叫ぶ。念じればいつか叶うはず！いや、絶対何か方法はあるはずだ！

『あきらめる』なんてそんな言葉、私の辞書には載つてない。

拳を天に突き上げて、決意を叫ぶ。

「……それは…帰つてほしくはないと言つてもか…？」

は？

どうじう意味だ、今のは。

熱弁をふるい、熱い女と化した私に、戸惑うような声がかけられる。声の相手のジエネミーを見ると、眉間にしわを寄せて唇をかみしめていて、何だか苦しそうな様子だ。

赤茶色の瞳はせつなそうに揺れているようにも見える。よく事態が飲み込めずに考えていると…。

「リリにいたのか」

考えこんでいた私の背後から、不意によく聞きなれた声が聞こえてきたので、驚く。

その声のする方を振り向くと、部屋の扉が開いていて、扉の向こうには聞きなれた声の主のアデレイがいた。

そのアデレイの後ろにはラインもいて、その側にはジエネニーにそつくりな美少女なお姉さまのアルメリア様までもいた。

「おー、皆さまお元気ですね！」

「アデレイ」

どうしてリリに、と聞こえてみようとして口を開く前に、アデレイが口を開く。

「今日の紅茶を楽しみにしていたのに、なかなか来ないから探しにきた」

… そうか、アデレイ、そんなに喉が渴いていたのか。すまぬ。  
けど、いくら喉が渴いていても、ここはジョネリーの部屋だよ。ノ

ツクぐらいしようよ。

今更ながらアデレイに常識をくじくじ言つてもしそうがないので、黙つていたけど。

「時間になつてもリツキが来ないから、アデレイは待ちきれなかつたみたいで…」

ラインが苦笑しながら言つその側には、何だか浮かないような不機嫌な顔したアルメリア様の姿が…。

あれ？あれれ？何だか私の顔を睨んでみえる気がするのは気のせいでしょうか…？

それとも、アルメリア様も喉が渴いて我慢できなかつたのでしきうか？

アデレイは、考え込む私に笑顔を向けた後、ジエネミーの方を向き、目を細める。一瞬、空気が凍つた氣がするのは私の氣のせいじょうか。すぐさま、お茶の時間が遅れた理由を言い訳する。

「お部屋の側まで行つたんだけど、立て込んだ話をしていたみたいだつたから、もう少し待とうと思つて引き返す途中だつたの」

アデレイは優しい笑みを口元に浮かべて

「立て込んでなんかいない。ラインと話をしていただけだ。リツキがなかなか来ないから、部屋を出て歩いていたら、廊下まで大きな声が聞こえたから何事かと思つて」

「あー…」

聞こえていたんだ、ジェネミーとの口ケンカ。恥ずかしい。

「大丈夫か？」

「え？」

真剣な瞳で聞いて来るアーテレイに、何の事が?と首をかしげて聞くと

「嫌な事とかされなかつたか?」

え? 何かつて? そこにいるジェネミーにですか?

… てか、そこに本人いるのに、本人の目の前で聞くと言つ事は、わざわざケンカを売つてるとしか思えないんですけど。私は焦つて、

「え、え、してないよ! 何にも!」

「 あいか？」

「 うそ、 本当だよーね、 ジュネミー……」

ジュネミーの同意を得ようと、 ジュネミーを振り返るヒジュネミーは険しい顔つきでアーテレイを見ていた。

あれ？ あれれ？

二人の間の空気が怪しげ靈行きだと思うのは私のせいでしょう  
か。

#### 44 微妙な空気（後書き）

アルメリア様の存在忘れていた人、手えあげて――！

ハイ！（作者）

今後、出していきたいキャラです。

「どこが苛立ちを隠せない様子のジョネミーが、早口で問いつめる。

「アーデレイド様、失礼かと思いますが、この娘は何も知らない異世界から来た娘。あなた様がそこまで気にかける理由もないと思いますが」

「ジョネミー！」

姉のアルメリア様が弟の苛立つ様子をたしなめ、押さえようと声を張り上げるが、ジョネミーは聞く耳もたずだ。

急に私の方に、顔を向けたが、怒りを抑えたような顔つきで、赤茶色の瞳はその感情に揺れていた。

「リツキ」

「え？ 私？ まさかのハツ当たり攻撃？ んな訳ないよね？」と思いつつ呼ばれたので、背筋を伸ばしてジョネミーに向き合つと、

「お前が、アデレイ様と慕うお方は、この国の王位第一継承者であり、我が姉の婚約者でもあるアーデレイド＝セイロティウス・カルディア様だ」

え  
…  
?

えつ  
…  
？！

「その様子じや何も知らなかつたな

いきなりネタばらしをしたジェネミーに、私は驚きのあまり、口を開けたまま固まる。

な  
…

な  
…

「名前……長つ……」

思わずポツリと漏らした本音に、周りの空気が変わったのを肌で感じて、愚鈍な私でも『しまつた』と思い、慌てて自分の口に手をあてるも、時すでに遅し。私の発言は、かなり場違いだつたらしい。周りの人物を目だけで探つてみるが、何だか誰もが動かない。フリーズです。石像化です。

……なつ……

何なのつ。

まさかのＫＹ発言に皆固まる事ないでしょ。しょうがないじゃん、正直な本音がついポロリと出てしまつたんだからさあ！それとも何？『ひかえおろーこの黄門が目に入らぬかー』な台詞に、『ははーー

ー参りましたー』

みたいな反応でもすれば良かつた訳？

なんだか、この空氣の悪さに、一人逆ギレするしかない私の気持ちを考えてくれつていづのー

「……クツ！」

もつこりうなりや、人間開き直りが肝心と、逆ギレ態度を決めかけた瞬間、誰かの吹き出す声が聞こえてきたのでその人物に顔を向ける。

「アツハツハ！…」

その人物は、私と目が合った瞬間、今まで我慢していたかのように、盛大に笑い出した。

…アデレイだよ。

よりによつて当の本人だよ。しかし、この笑いのおかげで私が肌で感じていた空氣の重さが一気に軽くなつた。…ちょっと、良かつた、安心した。

今のでアデレイに対して好感度が3ポイントぐらいはアップしたかも。やつと50ポイント到達ぐらいにはなつたかもしけれ。100ポイント満タン計算として。

盛大に笑うアデレイに、安心しつつ、

「なつ…何よー！そんなに笑う事ないじゃない！だいたいそんなに名前長いなんて、聞いてないよー覚えられないじゃない！」

そして私の反論を、聞いたアデレイは、ますます笑いだした。…ツボにはまつたな。

どこが面白いのかちつともわからないけど、アデレイとはツボが違うと認識しているので放置するに限る。

そうだ、だいたい横文字になんて慣れてない、苦手分野だ。しかし、今聞いたアデレイの本名を忘れないように、心の中で反復する。

アーテレイド・セイ…

セイ…

セイ…ロ…？

セイロガン…？

まさかの正露丸？そんな訳あるまい。しかし、なんだつけ…もつ忘れた。ソラで言える自信がないので、メモ紙必要だ。

ラインはとさうと、これもまた肩を震わせて笑っているし、アデレイと同じ反応だ。

だけど、アルメリア様とジョンニーの姉弟の反応は少し違った。

アルメリア様は私の事を、まるで『信じられない』とでもいう風な眼で見つめているし、ジョンニーはなぜか、きつい眼差しを向けてくれる。

おーい。何なのこの反応の差は。

それに、ジョンニーの言つた事が本当なら、アテレイは次期国王さま？

リアルで王子さま？カボチャパンツと白タイツを舞踊会で着用してる？？

しかし、実は職業王子さまだなて、どうりで白馬の似合ひ素敵な容姿なはずだよ。

私は貴族の道楽息子かと思つたよ。プラプラしている放蕩息子系ね。

でも、それなら尚の事、毎朝畠でトマトを見つめてる暇なんてないんじやないの！？

楽しそうに笑つてゐるアテレイを横目で見ながら、真剣にこの国の未来を心配してしまつた自分がいる。

今日の仕事が無事終了し、寝る前のベットの中で改めて今日一日の出来事を考えてみる。

アデレイが王子だったなんて、やっぱり驚きの新事実だ。しかしアデレイめ、王子という立場なら、こんなところでいつまでも、遊んでないで皇帝学とか勉強しなくてはいけないのではないか?

アルメリア様やジエネミーが、こうやって会いに来るあたり、アデレイの自由に遊んでる時間も終了する時なんじゃないかな、と思う。しかし、そうするとアデレイはアルメリア様とジエネミーと王都に帰るのもしれないな。

アデレイが、王都に帰るのか…。

何せか、もやもやした気分になり、すつきりしない気持ちのまま眠りについた。

早朝、いつもの煙に行つてみると、

また來てた。

ほぼ毎朝、頻繁に煙に来る、田の前の人物は、このカールティア王國の王位第一繼承者、つまり『王子さま』と最近判明したアーテレイだ。

この国の次期国王になるかもしけないといつに、また今朝も来てるよ。

何だか、この間は微妙な感じの別れだったけど、あえて気にせず、声をかける。

「…おはよ、アーテレイ」

アーテレイは、私の挨拶にいつものように軽く手をあげ、笑顔で答える。

「…お前はやはり変わらないのだな」

どじが安心したような様子の台詞に、頬を緩めているアーテレイに、私は顔をしかめながら

「昨日、今日で、そんなに変わる程、私成長期じゃないわ」

ほぼ毎日会つてゐる人物に『変わったな』なんて言われたら逆に驚くわ。

そんなに私太った？身長伸びた？身長は伸びても良いが、横に育つのは勘弁してくれ。

何だか、前回判明した出来事に、少し心配もしたけど、いつものアーデレイだ。王位第一継承者だらうが何だらうが、アーデレイはアーデレイだもんな。余計な心配して損をした、と気分も軽くなり私はいつものよう、完熟トマトを試食しながら苗に水をやつたりトマトを摘んだりした。

太陽も高くなってきたので、そろそろ城に戻ろうとしたところ、アーデレイに声をかけられた。

「ラインの父…ヒューストン伯爵が、近々、アルメリア達と近隣の伯爵を招いて舞踏会なるものを開催するそうだ」

「舞踏会？」

「そうだ」

舞踏会？それって私の中で暗黙に出てきたイメージはシンデレラ。シンデレラがカボチャとネズミを使つてまで行きたかったアレね。

「一応、こつちはお忍びの休暇という名目だったが、アルメリア達がたずねて来た時点で、お忍びではあるまい」

事実、この国の王子といふ話は、一瞬にして城に知れ渡っていた。まあ逆に今まで隠し通せていただけ奇跡なのかもしれない。メイド仲間の間でも、いろいろな噂や憶測が飛び交っていたけれど、まさか王子さまとは思わなんだ。

「そつか舞踏会か…」

それは、わざ忙しくなる事だらうな。それじゃあ、私は裏方として精一杯お手伝いしよう。トマトを口の中で味わいながら考える。

「…それで一緒に出席しないか？」

あまりの突拍子もない申し出を聞いた瞬間、私は口に含んでいたトマトを盛大にむせた。

「ゴホゴホ言いながら、喉に詰まつたトマトを何とか、飲み込む。

「…」

殺す気かっ――――

そんな私の様子をアーテレイは、涼しい顔して見つめながら笑顔で

「焦つて食べるのには良くない」

あんたに言われたかないわ。心の中でツツ「ミミを入れた後、先程の突拍子もないお誘いの返答をする。

「無理。お断りする」

「なぜ?」

私の出した答えが気にいらないことでも言つよつに眉間に皺寄せで、明らかに不満そうですが、一言言わせて頂きたく思つ。

なぜつてこゝちが聞きたいわーあなた様は何を考えてこると?

「私が出る幕じゃないでしょ」

「豪華な料理に甘い菓子も出るし、喜ぶと思つたが

は?

豪華な料理も甘いお菓子も大好物だけど、そんな料理にホイホイ釣られて出席するアホビijojo。

「一緒に出席する意味がわからなーいわ。第一アデレイと私じゃ立場が違つでしょ? 私メイドであなた客人で主賓でしょ。それともメイド服着てアデレイの専属メイドとして側に仕えていればいい訳?」

そんな訳にもいかんだろうと、言つてみるが、

「…専属か。…それもいい案だな」

「……つて、いいんかいつー!」

良い案を聞いた、と言わんばかりに顔を輝かせるアデレイに鋭くつづこむ。

「…だいたい、私個人を側においていたら、誤解されるわよ」

「何を誤解?」

全く、話の通じないアデレイに私の方が頭が痛いわ。

「もう行くよ。…舞踏会は、精一杯、裏で私は私の仕事を頑張るから、アデレイも頑張つて」

アデレイやアルメリア様やジエネミーをもてなす為の舞踏会でしょ。アデレイの仕事は貴族達の相手でしょ。私は私の仕事を頑張るから、アデレイも自身の仕事を全うしなさい、お互い頑張りましょう、そんな意味を込めて告げ、城に向かおうとする私にアデレイは何かを言いたそうに重い口を開けた。

「……………アルメリアは、婚約者の第一候補だ」

「……………?」

「だが、候補であつて、決定ではない。第一俺の意志ではない」

淡々と話し始めるアデレイの言葉に、黙つて耳をかたむけていた。

「アルメリアは、幼い頃から、俺ではなくこのカールディア王国の王妃になるべく周りに育てられて来た。それは刷り込みであると思つ

恋愛の価値観の違いに、思わず口を出してしまつ。

「…大変なんだね。自由恋愛が出来ないなんて、身分が高すぎるつて言つのも善し悪しだね」

「この国のある程度の身分の者は、だいたい政略結婚だった。だけど、俺自身の考えは……」

そこでいつたん言葉を切り、真っ直ぐに私を見つめるアテレイの瞳は真剣そのもの。

蒼い瞳は、静かな空の蒼色でいながら、熱い熱を帯びているかのようにも見える。

何かを言いかけたアテレイの言葉をさえぎつて、

「私なら、自分の一生の相手ぐらい自分で選びたいわ。例えどんなに身分が高くなつてもそこだけは譲れないわ」

育つてきた環境や感覚の違いだろうけど、いきなり『婚約者だよ』って連れてこられた相手がもし、『デブでハゲでチビだつたらどうよ？…いや、容姿はしようがないとしても、性格でカバーしよう。』

だけど、その性格が、もじどりしようもない人だつたら？  
すぐ根性悪かったり、価値観が合わなくて側にいるだけで苦痛だつたら？

結婚どころか、同じ部屋にいるのも嫌かも。それなのに、あんな事やこんな事して子孫繁栄しなきやいけないなんて……

ヒーッ、私出家させて頂きます。

じゃなければ、そんな相手と一緒に遂げるくらいなら、トマトで愛をそいで一生を終えたい。

…いや、それは極端すぎるけど。

「自分の相手は自分で選ぶ…か…」

「そうよ、それが一番よ」

「…なぜそう言つたされる?」

ラブ＆ピースだからだよつ…!

何だか、いつまでも食い下がるアーテレイに叫んでやりたくもなったが、いつもより真剣に何かを考えている風だったので、

「人を『好きになる』って言つ感情って、自分の損得を考えない自然にわきでる感情だと思つんだけど」

人の考えはそれぞれだと思うので、何のアドバイスにもならないと思つけど、自分の考えを言つてみる。

普通に自分の考えを述べた私に、いつの間にやらアーテレイは、側に来て、優しい微笑みを讚えていた。そつと、人差し指で私の頬をなぞりながら、蒼い瞳を嬉しそうに輝かせ、

「俺も、今ならわかる。損得の考えない相手を想つ感情の名を。それはお前に出会つ…」

「ちよつヒー・アーテレイー・足元・トマトの苗踏んでるー。」

近づいてきていたアーテレイの胸板を勢いよく押し返す。

これで何度目だらうか。

畑にいる母、いきなり近寄つてくる事がたびたびあるのだが、そのたびにアーテレイは足元の苗を踏みつぶす。

もっと足元に注意しろー毎回言つてるので、効果はナシで今に至る。

「もつアーテレイーー」これ以上、苗踏んだら、覗としてしまはりへ出入り禁止にするよー?わかった?!

「…………」

私に怒られたせいなのか、何だか、眉間にしわを寄せたまま明らかに不機嫌な態度になつたアーテレイは、返事の一つもしない。

もつアーテレイの精神でトマトに接しやつてこのー

まったくー!

## 【番外編】→アルメリアお嬢様

アルメリア

アルメリア

お前は、あの方の花嫁になるのだよ。

幼い頃から、そう言われ続けてきたこれまでの人生。  
もちろん、私もそのつもりできたわ。

だって、私以上にあの人側が似合う女性はいない。  
あの人側でいつか隣に立つ日が来る…。その日の為に、私は自分  
自身を磨く努力を惜しまないつもり。  
今まで、これから先も。

あの方はいつも堂々としていらして、生まれ持つ王者の気品に合  
わせもつ威圧感。

それにハーブロンドの輝くような金の髪に、蒼い空色の瞳で、見  
る者全てを魅了するような容姿。  
憧れている人は男女問わずに大勢いるわ。

あの方は、その気持ちをあまり顔に出す事はなく、いつも冷静沈  
着。

王となる者は、あまり考えを表情に出してはいけないからなのだろ  
う。

…やつ思つていた。

あの時まで。

ヒューストン伯爵家の元まで尋ねてきて、やつと面会する事が出来たのは、何日かたつてから。

きつとアーテレイド様はお忙しい方だから時間がとれなかつただけなのよ。

面会が許されたアーテレイド様のお部屋の机の上には綺麗な小さいガラスの皿が置いてあり、その皿の上に置かれている物がふと皿にとまる。それは、飾りのつもりなのか、それとも大事な物なの…？いつも余計な物を置かずに、シンプルな様子を好むアーテレイド様にしては少し意外な気がして、尋ねてみる。

「それはなんですか？」

「…………トマトとこ」

数秒の沈黙をした後、たつた一言素つ氣なく呴いてから、軽く微笑みながらまるで愛おしそうに見ているその赤い実に嫉妬すらした。

私が側にいるのに、なぜその赤い実をそんな皿で見ているの？

次にお見かけしたのは、ヒューストン伯爵に与えられた部屋の一室でのこと。

基本、眠りの浅い私は、その日もふと喉の渴きを覚えて早朝に一人で目覚めた。

寝台の脇の水差しから水を飲み、もうひと眠りしようと思つて、ふと目をやつた窓辺から見えたのはアーデレイド様のお姿。

意外な場所でお見かけしたので、声をかけようと窓辺に近づいて、その足をとめたわ。

だつて、アーデレイド様が楽しそうな顔してどこかに歩いていかれたから。

もしかして早朝に、散歩かしら。

いえ、それはないわ。と瞬時に自分の考えを否定する。アーデレイド様は、毎日の業務等でお忙しい方。毎日、業務は深夜までわたり、朝は得意ではなかつたはず。

しかし、何だか、妙な胸騒ぎを覚えたので、私はそつとバルコニーから部屋を抜け出し、アーデレイド様の後をつけてみる事にした。はしたない事をしていると自分でも思つたけれど、何だかそうしなければいけない気がして。

気付かれないように、こつそり進む私に、アーデレイド様の足取りは確かなもので、はつきりとした目的があつて進んでいるのだろうと確信する。

気付かれないように、一定の距離を保ちながら、木々の間を進んで行く。

木々の間を進んで行くと、突然視界がひらけた。視界がひらけたその先で、私を迎えたのは、赤く色づいた赤い実の大群。

これは… いつかアーデレイド様の机の上でお見かけした、トマトとかいう実だわ。

そのトマトが一面に赤く色づいている。  
誰かが手入れしているのだなつ、赤いトマトとやらが、きれいに一定間隔に植えられている。

その光景を『なぜこんな場所に?』と不思議に思い見つめていいたら、不意に誰かの話し声が聞こえてきた。  
とつやに木々の間に身を隠し、その話し声に耳をかたむけるよつじ、そつと木々の間から顔をのぞかせる。

そつと木の陰からのぞき見た私の視界に入ってきたのは、アーデレイド様とその隣に立つ一人の女性。

黒い髪に白い肌。赤く色づいた上向きの唇は、アーデレイド様の部屋でみた赤いトマトと同じ色をしていた。

彼女は確か…この地に初めて来たときに見た『異世界からきた娘』

彼女の透き通つてゐる白い肌に、神秘的で美しく珍しいと言われている黒い髪に黒い瞳。ぱつちりとした瞳は吸いこまれそうに大きく開いて輝いている。赤い上向きの唇に、笑つた顔が更に、彼女の美しさをひきたてる。

彼女の美しい容姿に、私の中で燃え上がるこの気持ちは、何だとうのだろうか。

そして何より驚いたのは、アーデレイド様が笑つて、彼女と会話している。

アーデレイド様の金の髪は太陽の光を浴びて、尚いっそう輝き、溢

れんばかりのその存在感。

王者の気品を放つオーラに、臆する事なく、横で笑いかけて会話をする異世界の娘に驚きと、感じる焦り。

今まで、アーデレイド様が笑顔で楽しそうに自分から進んで話しかけている姿はあまり見た事がない。

その会話の相手を見て、私はいよいよのない焦りと危機感を感じる。

私にだつて、あんな笑顔を向けてはぐだぐだな事に。

そこでふと、戸につけた違和感。

彼女のあの頭は、何だろ？。

美しい彼女の、その様子の意味がわからず、また、そんな彼女に優しく微笑みかけるアーデレイド様をこれ以上見たくはなくて、その場からそつと立ち去る。

「あ？これ？この頭の事？」

今日も来てるのね、早朝に。

そして、私の『その頭は何だ』ときたもんだの、アーデレイに教えてしんせよ。ふつふつふ。

「この頭は『ほつかむつ』と云つただよ、アーデレイ君

偉そうに胸を張つて教えてやるが、なぜかアーデレイはそんな私を見つめたまま苦笑している。

「いやー、日差しも強いじゃない？今更だけど、日焼けもしたくな  
いしゃ、だからこれで直射日光をガードしてやるのを」

私は、ほつかむつを作っている布を指さして教える。対するアーテレ  
イは、相変わらず苦笑したまま。

あれ？

やつぱりダメ？この頭？

やつぱり、ただの布じゃダメかー。

ほつかむつは手ぬぐいでやらないとね、いまいちインパクトに欠け  
るのよね。 酒店とか××工務店とか書いてあつたら、私のほつ  
かむり度がアップする気がする。

「だつて、頭にかぶるのもつてないんだもんー。」

逆切れして言つと、アーテレイは笑つたまま

「……今度、頭にかぶる物を贈ろわ」

何だか、同情されちゃつたみたい。まあ、いいや。ラッキーーとば  
かりにありがたくその申し出を受けるとする。

「そつかーー楽しみにしてるわー。」

こつちの世界に、手ぬぐいと言つ物があるのか知らないけれど、ア  
ーテレイがプレゼントしてくれるので事だもの。ありがたく頂戴しよ

う。

「じゃあ、こっちの列のトマトが収穫時だから、こっちから収穫始めるね」

相変わらず手伝う気があるのか、ないのかわからんアーデレイに、一応本日の作業内容を伝える。最近は前にも増してローデイの叔父さんの市場でも売れ行き好調で、苗もトマトもよく売れる。時には、『明日もって来てほしい』などリクエストされる事も。市場で買つてくれる人達も喜んでくれているみたいで生産者としてはこの上ない幸せだ。

こうなりや、元の世界に戻った日には、都会のオフィスガールなんて辞めて、田舎に行つて自給自足の生活でもしようかしら。いつか戻る日を想像しながら、赤く実ったトマトをカゴに摘んでいく。

空は青く澄み渡り、鳥たちはさえずり、きっと今日も良い天気。

明るく眩しい日の光に、目を細めつつも、太陽の恵みに感謝しながら今日も収穫をするのだ。

私は笑顔で、頭に布を巻いたほつかむり頭のまま作業を進めた。

舞踏会。

今夜は私がこの城に来て初めての舞踏会が行われる。

なんだか、朝から全員フル稼働で働いている。もちろん私も例外ではない。

朝から、庭園で花を選んでは飾り、また庭園に花を選びに行く。という城中を花でいっぱい飾るのが私の使命。ローディお勧めの花をセンスよく飾るのが私の役目。

しかし舞踏会って何が行われるんだろう。

それこそ、小さい頃、童話で見たシンデレラが憧れる乙女の夢の舞踏会なのだろうか。

…まあ私は裏方だけど、裏方バンザイ。

どんな様子か、影からこっそりのぞき見したい。きっとうらぎやかで華やかな世界なんだろうなあ。

紳士と淑女の集まりで、レディー アーノド ジェントルメン

何だか、城の皆の慌ただしい空気がとても新鮮に感じられて、私もわくわくしてしまつ。

太陽が沈み、夜の気配が近づくにつれ、城は、華やかな夜の灯りに包まれ、着飾つた貴族達が集まつてくる。

招待客が集まつてくる前は、カリ亞と一緒にホールの準備をしたり、皿などグラスの用意にてんやわんやの大忙し。

招待客達がようやく集まつてきはじめて、我ら裏方部隊が一息ついているとカリ亞が急に

「ねえ、リツキ。こっち、こっち」

調理場を出て長い廊下から不意に手招きしてくる。  
何だらうと思つてカリ亞の側に行くと、こっちよ、と田配せと手招きで合図される。

不思議に思つてついていくと、長い廊下を右にまわつて、突き当たりまで進んだ先の小さい階段を上つて行つた。

おおおつ！

こんな所に隠し階段発見！ チヤラララーン！

と、鼻息も荒く興奮した。やはりこの城は広すぎて、私はいまだに把握が出来ていない。

カリ亞は、周囲に人がいないのを確認してから、階段を上つていつたので、私も後に続く。そして階段を登つて行つた先は、なんと大ホールの天井に通じる回路だった。下の大ホールでは、今までに舞踏会が始まつたばかり。

何このベストポジション。ベスポジで眺める光景は、豪華で一瞬目が眩んだ。

「ねつ？すゞいでしょう。ここからならホールの様子を誰にも気付かれずに眺める事ができるわ」

得意げなカリアに、ここは、ホールの上窓など天井付近を掃除する時に、使用する通路だと教えてもらった。

なるほど。ここなら、上からホールの様子をじっくり眺める事が出来るわ。

ホールは数十人もの男女が集まり、輝くシャンデリアの下、貴族達は着飾り、樂師たちは音楽を奏で、料理をつまみながら雑談を楽しんでいる。

その中でも、ひときわ目立つ存在が目に付いた。

その人物は、長いマントをはおり、いくつもの勲章のついた白い正装に、手足の長さが際立つ。

「アデレイだ。

「すゞい。」の下に広がる世界は私達とは別世界ね

カリアが興奮したように口を開く。

「ええ、そうね

「しかも、見て!アーデレイド様の周りに集まる令嬢の数!」

アーデレイの周囲では貴族の令嬢達が集まり、皆、一定の距離を保ちながらも、アーデレイに視線が集中しているのがわかった。

着飾った令嬢達は、頬を染め、はにかんだ様子でアーデレイを遠巻きに見つめている。対するアーデレイは別段気にもしない様子で、そのまま「ココともせず無表情で隣のラインと雑談している。

隣のラインは、貴族の令嬢達に負けない、ぐらり可憐らしく、かつ中性的で、まるで天使のような微笑みを浮かべながらアーデレイと話している。

そんな様子のラインとまるで正反対で心配になるのが、アーデレイだ。

ちょっと、ちょっとーーアーデレイってば、もう少し愛想よくしなさいってー。

貴族の美女達が、熱い視線を投げてるよー。  
あの愛想のなさは、見ていろこっちが心配になつてしまつわ。

…もしや鈍感?

どうか、アーデレイは色恋系に鈍感なのか!

「さすが王位第一継承者だけあってアーテレイ様の気品は別格ね」

感心するカリアと、盗み見している立場でいながら、アーテレイの愛想のなさが心配になり、天井裏から、『もつとーーーーーーーーー』と注意したくなる。せっかくの乙女の夢の舞踏会なのだから。

しばらく下に広がる華やかで、それでいて自分には無関係のきらびやかな世界を眺めていたけれど、私は卓上の料理が気になってしまふがない。

なぜなら、とても美味しそうだから。

…ではなくて。

実は、こつそり仕掛けをしておいたのだ。そもそもな料理の中、こつそり忍ばせておいたトマトのジュレ。

上品なワイングラスに入れて固めてジュレを造り、砂糖漬けにしたトマトを一つ飾る。真っ赤なジュレ。

ワイングラスに入れて造つた出来はなかなか綺麗に出来たと思つ。私のちよつとしたイタズラ心だ。それに、

誰か、食べてくれたら嬉しい。

ただ、それだけの思いで、こつそり忍ばせておいたトマトのジュレ。誰かの目に止まり、食べてくれる人はいるかしら。

しばらく観察していると、ホールの中央に立つアーテレイが料理のテーブル付近に移動する。

きっとワインでも飲む為だらう。アーテレイは、料理は興味ないよう見つめていたが、ふと視線が止まつたようだつた。そしてそのままつと一か所を見つめている。そして、急にワイングラスのトマトのジュレを手に取つた。

おっ！アーテレイ！もしや気付いたか？

いたずらがばれた時のように、私はドキドキした。  
そりやーアーテレイが、毎朝早朝にご執心になつておられるトマトですものねー。  
気付きますよねー。

トマトの原型とは姿形も変えてるけど、トマトに対する想い、その愛は本物らしい。その愛は半端じやないって事が今ここで証明されたよ。

ふとアーテレイが天井付近を見上げたので、私はどきりとして、反射的に、その身をひいて陰に隠れる。

のぞいて見てるのがばれた？

いやいや、そんなはずあるまい。ここは天井に続く通路隅の一角。まさかここから見られているとは誰も気づくまい、見える訳がない。もし気づいたら、その人は超人的な視力、オスマンサンコンだつてびっくりだよ。

自分の小心者具合に笑いつつも、気を取り直してまた華やかな世界

を見る為に身を乗り出すと、

アデレイが見ていた。

視線が交わり合つた気がしたのは、私だけだろうか。驚いて瞬時にまた身を隠す。

いやいやただの偶然さ、と気を取り直して、再度のぞき見ると、先程までの無表情はどこへいったのやら、口の端を上げて微笑している気がした。

もしや… ば れ て る?

いやいや、まさかね、とばかりに乾いた笑いを一人でしていると、

「ん? どうしたの? リツキ? 何か面白い物でも見つけた?」

カリ亞に不思議そうに聞かれた。いやいや、まさか視線が合つた気がするのは私の勘違いだろう。

しかし、まったくアデレイめ! 一人で笑ってる怪しい人物に認定されたではないか!

完全なるハツ当たり思考の後、

「なんでもない。ねえ? そろそろ戻らないと」

「そうね」

そうして私とカリアは階段を下がつて戻つていく。先程見た光景は、私とは無縁の世界。少しの間だけでも、見る事が出来て幸せだわ。あとは、私のトマトのジュレが誰かの口に入りますよつ」。ドキドキしながら祈る気持ちで階段を下りた。

階段を下り、カリアとは離れて自分の持ち場に戻つた後、

「あつ！いたいた、リツキ！」

アドマさんになつた瞬間に大声で呼ばれてびっくりする。

「ど」に行つてたんだい！探してたんだよ

「「あんなさい！」

サボつて舞踏会をのぞき見してきた私は、どうにもバツが悪い。何だか、慌てている様子のアドマさんに、謝ると

「ほりほり、早く一向にお部屋でライン坊つちやんが、お呼びだよー早くー」

え？なぜラインが？そんな疑問が頭に浮かんだまま、アドマさん引きずられる形で連行された。

私、  
何かしたつけな  
?

## 47 舞踏会の始まり（後書き）

どうでもいい知識

オスマンサンコンさん 赤、視力は6・0だつたらしい

アドマさんから呼ばれ、引きずり入れるような格好で別室へと一人連れて行かれた。

別室に連行された私と、先に部屋の中に入ったのは、執事頭のメリーストさん。

そしてその部屋の豪華さに驚きで目を見開く。

衣裳部屋だらうと容易に想像がつく、大きいクローゼットがいくつもあつて、全身をうつす事の出来る大きい鏡が何枚も。

何だか自分がこの場所にいる不思議と、場違いな雰囲気に、そわそわして落ちつかない。そんな私にメリーストさんは、静かに口を開く。

「ラインナルト様がリツキをお呼びなので、ここに用意をして待機しているよつに」

「はい？」

理解不可能で聞き返した私に、メリーストさんは微笑みながら、再度静かに口を開く。

「リツキに公式の場で用があるので、ここに準備をさせて待機するよつに仰せつかつた。この部屋の物は全て自由に使ってくれてかまわないので、アドマにも手伝つてもらつて用意するよつ」

そうメリーストさんがアドマさんに告げるとアドマさんは、全て理

解しているかの様に頭を下げてうなづく。

「え？ 用事？ え」

対する私は一人テンパる。

そんな、用事なら次回会った時にしてくれ。

なぜわざわざ、公式の場に引っ張りだす必要があると……。

部屋を出て行くメローストさんの後ろ姿を見ると、意味がわからず不安で涙が出てきた。涙が止まらなくなつた。

アドマさん

「馬鹿だね、リツキ。泣くんじゃないよ。こんなに光榮な事があるかい？」

きつとあんたは何か褒められる事をしたんだよ。じゃなきゃ、一人のメイドにここまで事をするかね？」

それに、ライン坊っちゃんの性格を知っているだろ？ あの優しく慈悲深いお方があんたをわざわざ皆の前に出して意味もなくいじめるもんかね」

「ううう、でもあの人、実は隠れドウなんです……。

「堂々としておこせー！」

アドマさんの励ましの声に、逆にびびって、涙が止まらなくなつた。

「まあ、 しの衣装などどうへ・絶対リツキに似合ひと感つただ

彼がたくさんある衣装の中から、迷いもせずに選んで手に持つてき  
た衣装は、華やかなザインの白ニードレスだった。

……か、 ライン……あなたがなぜここにいる?

「リツキが綺麗な格好をするつて想像したら、 いつもたつてもいら  
れなくてねー」

だからと言つて、女性の着替えの部屋に、堂々と単身乗り込んでく  
る、そのゴーリング・マイウェイは勘弁して欲しい。

ラインが手に持つてきたドレスを見ると、体にぴったりとした形の  
白ニードレスで、膝下付近から裾が豪華に広がつてゐるマー・メイドラ  
インのとても素敵なドレスだった。

生地の肌触りから見て、一流品だと庶民の私にもわかる。トザイン  
もしつかりしていて、派手すぎず、女性じみを引き出す形だと思  
う。

それなのでなむむむ無理ー無理ーメイドの私が、こんな素晴らしい  
ドレス、着れる訳がない。

慌てて手を振り、無理だ、とつ意志表示をすると、ラインは眉を

下げて悲しそうな顔になる。

それを見た私は『やばいっ！』と、焦ってしまった。だつてラインがせつかく私の為に似合つドレスを探してくれたのに、その気持ちだけでもありがたい。だけビ、やつぱり着る訳にはいかない。

「…そっか…。リツキはこのドレスじゃ嫌かあ…」

ラインの声のテンションが下がつてきているのに気付いて慌ててフォローする。

「嫌といつ訳ではなくて、私にはもつたいなくて…」

ラインは悲しそうにドレスを持ったまま何かを考えている様子で、うつむいている。

栗毛で柔らかそうな髪に、大きい瞳はふせていて、何ともやのうつむき加減も絵になる」と。悲しそうな顔をするラインに、申し訳なく思つと同時に、その男性にしては可愛らしい顔立ちに見とれてしまつたのも事実。

うつむいていたラインが、何か急に吹つ切れた様子で、顔を上げたのが、

「わかった。リツキが嫌なら無理強いは出来ないしね

悲しい気持ちを押し隠した様子で無理にラインが微笑む。その様子を見て、胸がチクリと痛んだけど、ラインが折ってくれた…良かつた、安心した…とホッと胸をなでおろした。

ラインはそのままドレスをしまつ為に、クローゼットに進んでいく。

後ろ姿も何だかさびしそう。『れじゃあ、いつか必ず』彼を傷つけた気分になる。

私が罪悪感を感じ始めた時、

「じゃあ、次は、うちのドレスか、このドレス…どちらが好きな方を選んで！」

クローゼットから輝きに溢れた笑顔で戻つて来て、これまた迷いなく着のドレスを選んで持つてくれるワインの様子に

ねえ？あなた、さつきの悲しそうな顔は嘘だったのかしら？  
演技？それ演技なの？

と心の中でシシコリをいれられるやない。

あきらめないラインの持つてきたドレスに目をやつた瞬間、私は体がフリーズした。

一着目は可愛らしく、丈のドレス。

…フリフリの全身総レースで、色はビ・ピンク。ほんのり色づくピンクではなく、ビ・ピンク。目にも優しくない色合いで、見てみると目がチカチカしていく。

しかも、明らかに膝上丈のドレスでフリフリのフリルが満載だ。

まあ…なんて可愛らしい…似合つかもしれない！

…私が5歳児だつたならだけど。

一着目は大人っぽい体のラインを強調したドレス。

…ドレスというには、極端に布が少なすぎる、情熱の赤ドレス。胸なんてこれで、どう隠せと？

まさにセクシーダイナマイツ。

こんなドレス着ていたら『歩く露出狂』といつあだながつく。間違いない。

瞳を輝かせ自分チョイスのドレスを勧めてくるラインに私は力なく、

「…………一番最初に見せてもらつたドレスでお願いします……」

こつ答えるのが精いっぱいだった。

「えー…」じつちの2着も素敵なのに…」

素で言つてると…どうしろと…これを私にどうしろと…？

引きつり笑顔の私にラインは、ふふふと笑つて

「…だけど、最初に見せた白いドレスが一番リックの魅力を引き出

すかもね。楽しみにしてるよ」

耳元で囁く。

セツヒー、アドマさんを呼びながら、

「あーリツキ。着替えて、着替えて。用意が出来たら僕を呼んで。ホールまでエスコートするのが僕の役目。それとも、着替えも僕に手伝つて欲しい?」

不敵に微笑むラインをアドマさんが

「わあわあ、紳士は外に出て下さーいね」

セツヒー軽く流す。ナイスだ、アドマさんー。

「じゅあね、リツキ」

上機嫌な様子で部屋を出て行くラインの後ろ姿を見送つていると、急に振り返り、すこいく真面目な顔をして口を開く。

「……やっぱつ、わしき見せた? 着は、絶対着ては黙

その件は?」安心げだわい。

例え『着る』と命令されても断固拒否する。

「だつてさ、僕以外の人の目にも触れる訳でしょ？それっておもしろくないじゃない」

「そんな理由ですか。あくまでも自分中心の意見なのですね。

「だから、今度リツキが何かしたら『お仕置き』として2人つきりの時にも、着替えてもらおつかなー」

「そう一人で楽しそうに言い、部屋から出て行った微笑む天使様の顔は、墮天使だ。間違いない。」

「そうして意味もわからず泣きたくなっていた私は、次の瞬間アドマンにより身ぐるみをはがされた。」

キヤー。

白いドレスは、マーメイドラインで体の線に沿つていて、嫌でも体系がわかる。

首の後ろで一つのリボンでまとめている形のドレスで、胸元は膨らみが強調され、背中はすつきりと開いている。

髪は、まとめアップにして上げもらい、白い小さい花のついた

ペンで止めこむ。なんだかうなじがスースーする。

いつもとは違う、ベースからじつかりした化粧をしてもらひ、何だか嫌でもこれから引っ張り出される公式の場を想像して身震いしてしまう。

全身が[写]の鏡を見せられて、まるで結婚式のドレスみたいと思ひ。とこづか、結婚前にドレス着ると婚期が遅れるつてこづジンクスあるんですけどー。

「本当に綺麗だよ、リツキ。よく似合つている」

感心したよつてアドマさんのお褒め言葉これで行き遅れ決定だと思った。

私の複雑な気持ちとは裏腹にアドマさんは、何だか満足気に得意げだ。

「じゃあ準備はいいね。今ライン坊ちゃん、呼んでくるから待つて

いや、服の準備はいいのですが、私の心の準備の方が聞に合つません。

そんな訴えもアドマさんは聞こえない振りをしてラインを呼びに行つた。

ラインを呼びに部屋を出て行ったアドマさんの後ろ姿を、恨みがましく見つめた後、鏡の中の自分の姿と向き合つ。

綺麗なドレスに、丁寧にされた化粧。まるで自分じゃないみたい。

いつものメイド服の私じゃなくて、白にマーメイドラインのドレスは、肩や背中を出すデザインで、髪もアップにしてるので、何だかうなじがスースーする。

私だつて、一応女の子なのでこんな格好をして、まるで嬉しくない訳ではない。

なんだか鏡に写る自分が、自分じゃないみたいで、鏡の前で思わず笑顔を作つてみる。

一人で照れながらもスカートの端を持ち、鏡の前で回つてみたりもしちやつたりして…。

そこで、ハッ…と気づく。

やばー。

このままでは相手の思つシボではないか…。

というより、誰だ！私をあの場にわざわざ引っ張りだそつなどと思ふ輩は！

そんな輩は、思い当たる事もなげはないが、後で文句を言つてやる。

アドマさんを見送つた後、いつもと違う自分に一瞬テンションが上

がりかけたが、しばらくして我に帰つて何とか、対策を練る事にする。

さあどうする？

今なら部屋には私一人。逃げだしたいけど、逃げだす訳にはいかないこの状況。

本当は本音はすつゝく、すつゝく逃げだしたいけれど。

一人部屋で待つ緊張に耐えられなくて、どうにか救いの手はないものかと、部屋の扉を開けてキヨロキヨロする。この衣装部屋も初めて入る部屋だし、第一この衣装部屋も、この城のどこに位置するのか、私はわかつていらない。

しばらく茫然と廊下を見つめいたら、廊下の端の向こうに、見慣れた人影を見つけた気がして、我に帰る。

そうして目を凝らしてしばらく見つめ、その人物を確認した瞬間、私の中でターゲット、ロックオン。

その後は安堵のあまり部屋を走つて抜け出し、その人物に救いを求める。

「…………え！？」

私は上品なドレス姿とは思えぬ、マッハな走りでお目当ての人物に近づく。その人物は、私の勢いに驚いたのか、上手く声を発する事も出来ずに、私の姿にただただ驚いていた。

そりやそうだ。ドレス姿の女が自分目がけて一直線、必死の形相で

近づいて来るんだもの。

驚くどころか、私なら怖くて回れ右して逃げるかも。

「……えつ？！……え？……えつ？？！……」

「……口……ローデイ！」

「……えつ？！……リツキ！」

私は、見知った顔を見つけて安堵のあまりローデイへと駆け寄ったが、なにぶん全速力疾走だ。息が切れる。しかもこのドレス重いし、何だか体に張り付くし、足元が邪魔だ。こんな服装を常日頃からしている貴族のお嬢様達を心の底から尊敬する。私はこのドレスを恨めしく思いながら、息を切らして、

「ローデイ……お願い！助けて！」

「え？！……え！？……つてリツキ！？」

「お願い力をかしてほしいの……」

私は、ローデイにすがるような口力で懇願する。

何だか、ローデイはいつになく赤くなつた顔でまじまじしている。何だか今にも爆発しそう。いや、気のせいかな。

私も全速力疾走で息も切れ切れで顔も赤いだろつ。

「私を連れてここから逃げて！」

そうー今なら逃げだすチャーンス！

建前はこの場から逃げ出す訳にはいかないってわかってはいても、本音は嫌なのだ。

例え、口では『覚悟を決めるしかない。逃げる訳にはいかない』『そう言つてはいても、心の底では苦痛なのだ。

あの場に行くのは緊張するし、何より意味がわからないし。

それが、よく知るローディの顔を見た瞬間爆発した。彼は私の頼れる兄貴分つて感じだから、気持ちが甘えてしまったのかもしれない。

あとは随口じつ言つて訳をしようか考へる。お手洗いに行こうと部屋を出たら、城の中で迷つてしましました設定で「ーー！」

その後は、舞踏会が終わつた後、ひょっこり顔を出して、じつてり絞られる。

用事があるなら舞踏会が終わつてから、聞きに行こう。

そんな都合のいい事をローディの手を取りながら考へていた。

彼女が潤んだ瞳で俺を見つめる。彼女は、白い肌によく似合つ白いドレスで彼女の美しさを際立たせている。

腕や体の細さがよくわかり、胸の膨らみも強調されていて、動搖してしまいつい拳動不審になつてしまつ。

『まるで花嫁衣装みたいだ』

彼女の美しい姿を見た俺は、あまりのキヤパオーバーに意識が幼少の頃に飛んだ。

- - - - -

あれは、俺がまだ小さい子供だった頃。

俺の隣の家のマゼナ姉ちゃんの結婚が決まった。相手は、親子程の年も違う高利貸しのオヤジだった。

なんでも、マゼナ姉ちゃんの父親が借金を多額に作つたらしい。俺は子供だったから、意味も理解出来ずに、初めて出席する結婚式をただ楽しみにしていた。結婚が決まってから、マゼナ姉ちゃんはため息ばかりついていたのは、何となくだけど覚えている。

結婚式当日。

マゼナ姉ちゃんは白い花嫁衣装にとても綺麗だったのを子供心に覚えている。そしてなぜか悲しそうな顔だった事も。マゼナ姉ちゃんは高利貸しのオヤジと誓いの言葉を口にしようとした瞬間、響き渡る一人の若い男の声。

「行くな！マゼナ！」

「マルセン！」

現れたのは、マゼナ姉ちゃんの幼馴染のマルセン兄ちゃんだった。そしてあれよ、あれよと、マゼナ姉ちゃんは白い花嫁衣装のままマルセン兄ちゃんの手を取り、一人で愛の逃避行へと走つていった。

当時、俺は子供だったから、『あー…結婚式の料理どうすんだろう』とか呑気に考えていたが、今ならわかる、マルセン兄ちゃんの気持ち。惚れた女をさりげに来たその勇気。

あれから、一人は、一緒にになって、一人で働いて借金も全て返した。あの時、綺麗と感じたマゼナ姉ちゃんは、子供を4人も産んで、当時より体は2倍ほど大きくなつた。

身も心もビックな女になつたのだ。

俺の記憶の中では、マルセン兄ちゃんに手を取られて幸せそうに走行していくマゼナ姉ちゃんの顔が忘れられない。

- - - - -

きっと…

リツキは、今この現状から逃げたいんじゃないのか？

俺と手を取り合つて行きたいんじゃないのか？

今が、そのチャンスなんじゃないのか？

俺の心臓が高鳴る。

行け！行つてしまえ！

俺の頭の中で、あの日のマゼナ姉ちゃんの笑顔が鮮明に浮かぶ。手と手を取つて、第一のマゼナ姉ちゃんとマルセン兄ちゃんを田指すんだ。

「おっ……俺！ 俺と……」

一緒に、生きてくれ！

そう喉まで出かかった瞬間、

「馬鹿な事考へでないよー」

響き渡る大きな怒声。その声で我にかえる。

聞こえて来た方向を見ると女中頭のアドマさんが仁王立ちしていた。

リツキを見ると、頭を押さえてその場でうずくまつてこる。

リツキ……アドマさんから正義の鉄拳へらつたよつだね……。

それは、イタイ。そりゃもうイタイ。

俺も小さこ頃、いたずらしてはアドマさんから、ゲンコシへらつてから、よくわかるよ、その気持ち。さすがに大人になつてからはないけれど。

「いい加減覚悟を決めておしまい！」

怒られながらもアドマさんに引きずられていく彼女を茫然と見送る。

「な……なんだつたんだ……俺……」

今の一瞬の出来事は、夢か幻か俺の妄想か？  
人気のなくなった廊下でしばらく考え込むが、

「……まあ……いつか」

俺は一人でポツリとこぼす。

よく似合つてたもんな、あの白いドレス。

そしていつか、俺の隣で今度は本物の花嫁衣装でも着てくれたら最高だらうなあ……。

取り残された廊下で、一人そんな想像をして、赤くなつた。

ラインに手をひかれて、中央までゆっくりと歩いて進む。明るい広間、大きくて豪華なシャンデリアに華やかに着飾った人々。自分とは住む世界が違うと感じる。この場に足を踏み入れてる事はとても場違いだと感じる。

その証拠に入々の視線が突き刺すように痛い。

この痛みは気のせいではないはずだ。だって、何だか皆に見られている。この広間に入った瞬間から私は感じていた。

うおー。ますます私は逃げ出したい。猛ダッシュ、Bダッシュで。きつと皆が

『得体の知れない平凡顔の娘』

『豪華なドレスに負けてる田舎娘』

『無理してよせて上げてるなんちやつてCカップ娘』

なんて囁き合つてるに違いない。

それを証拠に見て。

あそここの柱の隅に固まってる3人のお嬢様方の突き刺すような視線の痛いこと。

なんだか、好意的な視線ではない事を肌で感じる。その中でアルメリアお嬢様の姿を見つけた。

なんだか、特に彼女の視線が一番きつい気がする。かわいい顔に眉間に皺よせて、にらまれてる気がするのは私のせい?女が数人集まると怖い。これは、どこの世界でも共通なんだな、と実感する。

何だか自分はとつても場違いだと感じてるけど、ラインのエスコートは完璧で、スマート。

こんな場に慣れていない私でも、側でエスコートしてくれる人が完璧なので少しだけ自信が満ち溢れてくる。

ラインのエスコートに恥をかかせないよう、せめて私は真っ直ぐに、姿勢を正しく、前だけ見て進む。

しかし、わざわざこの場に駆り出されるなんて、いったい何を考えているの？何の為？

人の波をかきわけ、進むラインについていくと、どうやらお田端の人物にたどりついたらしい。

大勢の人に囲まれたその人物は、ゆっくりと近づいてくる私から視線を外す事なく、見つめていた。

やつぱり、黒幕はお前かっ！

アデレイ！

目標の人物の蒼い視線を外す事なく、私も真っ直ぐに彼を見つめていた。

「アーデレイド様」

エスコート役のラインが、礼儀正しく腰を折り、挨拶をする。

「我が城にてその身を預かっている、異世界からの娘です」

義務的な挨拶と共に、私にも配せをする。なので、

「リツキと言います」

簡単な自己紹介をして頭を下げる。正直、アテレイ相手に名前を名乗るなんて、今更何言つてんの？

今朝も畠で会つたじやないか！と言つてやりたくなるが、ここは公式の場なので我慢我慢。

社会人として、会社で習つた『マナー講座』を思い出す。

「リツキか…」

アテレイは畠を細めて口端を少し上げ、美麗な顔で余裕ありげに微笑んだ。

はー？

何、その初めて会いました、みたいなニュアンスの言い方。そっちがその気なら、じつちだつて猫かぶるもんね。

「ヒューストン伯爵の」好意により、この地に身を置かせて頂いております」

深々と礼を取る私と、私を見下ろすアテレイと、私達を注目しているであろう周囲の視線。

そんな周囲の視線を気にする風でもなく、アテレイは続ける。

「…質問なのだが」

「はい」

私を見つめながら口を開くアデレイの手には、私がこいつをつ忍ばせたワイングラスのジユレが握られていた。

「この赤いワイングラスの中味は？」

「はい、それは、私の世界から持ち込んだ食糧の一種でトマトと言います。そのトマトをつぶしてジユレにしたものです」

「やうか。最近、国の市場に出回っているところ珍しい赤い食糧はトマトといつか」

感心したように言つアデレイだけ、あなた、毎朝観察しに来るぐらにトマトに惚れこんでるんじゃないの？それこそ観察日記書ける勢いで毎朝来てるじゃないの！つまり食いだつてしてるでしょう？

今更何言つてるの？その演技は何の為？

しかし、アデレイはその演技にほひろびは見せない。

「異世界人とは、時として我々の知らぬ知識でこの国にとつて、富をもたらしてくれる存在だ。よつて深く感謝をする」

蒼い瞳を優しく細め、口端を上げて感謝の台詞を言つアデレイ。周囲を囲んでいた貴族達は、そんな私達の会話を興味深そうに聞いている。

それに貴族のお嬢様達は、そんなアデレイを遠巻きながら見とれて

いる。

そりやそうだ。

正装に身を包み、見た目も麗しく、いずれこの国の最高権力者になる予定の人物。堂々として強者のオーラを放ち、ひときわ目立つの存在感とその魅力にひかれる人は男女問わざ多いだらうと思つ。

顔良し、体つき良し、身長良し、身分良し、の高クオリティ。

しかし、性格と頭だけは、いまいちよくわからん。性格は、悪くはないと思つけど、考へてる事がいまいちわからない。

しかも、感謝の台詞のはずなのに、上から目線でとつても偉そつ。けど、当たり前か。

実際偉い人なんだもんね。

「異世界人の知識は役に立つ。これからも、その豊富な知識で、この国の繁栄に力を貸してくれ」

その上から目線な言い方、人に物を言うのに、昔から慣れている人の言い方だね、こりや。

「はい。もつたないお言葉、ありがとうございます」

私は礼をする。

だけど、実際褒められると悪い気はしない。緊張しながらも、やはり嬉しさを隠しきれなくて、自然に笑顔になつていたと思う。礼をしていた頭を上げた時、微笑しているアテレイが私の目の前すぐ側に近寄つていて、驚く。

距離の近さに驚いたと同時に、私の視界に入ってきたのは大きくて広いアデレイの手。

そして、頭の上に何かが乗った感触がした。

「いつまでも、この世界について、これからもこの国の繁栄に力を貸して欲しい」

目前で微笑むアデレイと、囲む貴族達は何やら、どよめき、続いて沸き上がった盛大な拍手。

そして一人意味がわからず、周囲を見渡し、拳動不審になる私。何だ、何が起こった？そして私の頭の上には今何が起こっている？私の頭上に何かがのつている…。

今すぐ確かめたくて、頭上に手をやり確かめたくても、あまりに多い人数に囲まれてるのでそんな不自然な行動をとれない自分がいた。心の中では、相当動搖していたけど、それを隠して笑顔でアデレイに返答する。

「いつか元の世界に帰るその時までは、全力を尽くしたいと思います」

そう言った後、つい今まで微笑んでいたアデレイの視線が鋭くなつたような気がした。あれ？

不穏な空気を感じ取った私は、アデレイを見つめると、私を鋭い視線で見つめたまま瞳を動かさないアデレイがいた。先程までの優しい蒼い瞳が、一瞬で鋭く冷たい瞳に変わった気がした。

あれ？私、何か変な事言つた？

しかし、そんな事よりも、私の頭の上の重さの理由は何かを知りたくて、礼をすると、ラインと共にその場を立ち去つた。

「すまじよ、リツキ」

「何だか、頭が重い気がするのだけれど……。気のせいにかしら……」

「いや？頭にのつてゐるよ？銀のティアラ……」

「ギヤーー！聞きたくない、きつといの頭の重さはストレス性の頭痛……」

私は本気でしゃがみこんで耳を塞ぎたくなつた。そんな私にラインは優しく微笑むと

「似合つてゐるよ？この国に貢献してくれた人達に、王族から贈られる名誉の証であるシルバーティアラが見事に輝いてるよ？」

ライン……。爽やかな笑顔と共に、簡潔に説明ありがとう……。

しかし、アテレイ！なんちゅう物をくれたのだ！こんな高価な物！こつちは、高い物に免疫がないんだぞ！

リアルな世界で現金10万でも持つて歩いてると嫌な汗かくぐらい庶民な私に、こんなセレブアイテム銀のティアラだと？！何だ、こ

れは！これをどうすればいいと言つのだ！自宅保管すれど？

そんな事になつたら、どこかで聞きつけた泥棒が来るかもしれないぢやないか！そしたら夜も眠れないし、居候の身でマーサさんに迷惑もかかる。セコムしなきや安眠できない！

ティアラを手に取り確認したいが、私の指紋がついたらどうすれば？

正直、今すぐ返品希望、心臓に悪い。

一人青くなつておろおろする私にラインはクスリと微笑むと、瞳を輝かせ始めた。

なんだか近頃ラインの瞳が輝きだすと、私はうくな事を言われない、と気が付き始めた。

私だつていい加減ただのバカじやないし、学習能力だつてつく。身構えた私にラインは、

「しかし、今日のリツキはいつも増してすごく綺麗で見違えたよ。あの広間で皆の視線がリツキに集中したのわかつた？僕はエスクート役として鼻が高いよ」

おや？ラインにしては、普通に褒め言葉？

私の勘違だつたかと安心して素直にお礼を言おうとしたら、

「だけど、あのトマトってどこで栽培していたのかな？何なにこの土地を使って栽培していくても全然かまわないのだけど……」

うつー優しいお気遣いもつたいたい。ありがとうございます。

そのお言葉に甘える前に勝手に土地の有効活用……違つた、無断借用してました。

今こそ、ラインに無断借用を詫びて改めてお願ひするチャーンス！

「あのね、ラ…」

「（）の土地を使っていたとしても僕は全然構わないし、むしろ応援したいけど、けど、リツキはきっと僕に一言相談するよね？相談もしないで、使っていたら、そこは信頼関係的な意味でショックだな。

まあ、リツキの事だから、そんな事しないで、僕に一言相談してくれるって信じているけどね。

もし黙っていたなら、温厚な僕だって、ちよつとへソ曲げちゃうかな。

それなら、僕の機嫌をなだめてもらひつ為にも、いろいろな事をしてもらわないとね。いろいろとね？」

うふふふ、と天使の様な無垢な笑顔で優しい眼差しを私に向けるけど、私は知っている。

このお方は、天使のような見かけとは裏腹に腹黒ドロだと。

きっと知っている。

私がどこでトマトを栽培しているのか。

そして知つてて私の反応を見て楽しんでいると言つことを。

私の口から、言わせたいのだろうが、私はそのラインの言つ『いろいろな事』がとても怖くて

引きつりながらも首をフルフルと横に振り、乾いた笑みが出る。

頭の中には、どちらを選んでも究極の選択になる先程のラインお勧めドレス2着を思い浮かべながら。

## 5.1 ティアラ

ラインに、『何だか精神的頭痛がするので退散します』と告げ、一人早々と先程の衣裳部屋に戻ると、一人になつた安堵からか、びつと疲れが出てきた。

鏡面台の前の椅子に腰かけ、恐る恐る鏡を見ると、私の頭上には銀のティアラが輝いていた。

ぎやー。

やつぱり私の頭痛は気のせいではなかつたのね。

鏡ごしに見つめる自分の姿にしばらく固まる。

その頭痛の元のティアラは、私の頭上できらめき、輝きをはなつていた。

まつたくアデレイめ。やる事がいちいちスケール大きくないか？  
畑にいる時に『この世界にトマトを持って来てくれてありがとう』の一言ですませばいいのに。

あんな貴族に囲まれる中で話しかけられて、いつも緊張するつていうの。

そもそも畠の前に引っ張りだしてまでこのティアラをくれるなんて、注目の的じやん。

「まつたくーアデレイめ！

「呼んだか？」

私のひとり言の他に不意に、聞きなれた声が聞こえたので、反射的に後方の扉を振り向くと金の髪をなびかせて蒼い瞳を輝かせながら、私に精神的疲労と頭痛を与えた王子様がいた……って、

「ノックぐらいしろ~~~~~！」

私がお着替え最中だつたらどうするのだ！レディの着替え部屋に単身乗り込んでくるとは、『ゴーイングマイウェイなところはラインとそつくり！』ですが生まれもつての王子様！だけど一言いいたい。言わないと気が済まない。

「私が着替えてる最中だつたら、どうするのよー。」

「それを狙つてきたのだ」

「げーーの変態！」

思わず表情に出てしまつたら、それを見てアデレイは愉快そうに笑つた。そしてそのまま部屋の中まで歩いて進み、こちらに近づいてきた。

「ずっと後ろから追いかけていたのに、気付かなかつたか？」

「知らないし！だつて私、後ろに目がないもの！」

私の返事を聞いてますます愉快そうに笑うアデレイは、先程の広間で見せた態度とは打つて變つていつもの畠にいるアデレイだ。

私には、こっちのアデレイの方がしつくりくる。先程のアデレイは『王子様』今のアデレイは『アデレイ』なんだか、少し安心した。

……ひて、いやいや違うダロ。

ノックもせずに入つて来た事をうやむやにしてはいけない。

「それはそうと、ノックぐらいして入つてよ。」

少し強めに主張するとアーテレイは不思議そうに首をかしげた。金の髪がちらつと落ちる。

」  
」  
」

その答えを聞いた途端、私は目が点。

か——つ！ やつぱり「トイツにや、話が通じん！ 何この俺様隊長。」  
我が道をゆくタイプ。

私がつくり肩を落とした様子を見てアテレイは、

「それは冗談だが……」

冗談か！相変わらず見分けがつかん！

「ノックならしたぞ、1回」

たつた一回か！しかもなぜか偉そうな言い方！

「ノックと同時に部屋に入ったのは認めるが、

しないと回り回りやんか！

「だけど、私にこんな立派なティアラなんて…。どうして急に？」

訳がわからないという風に聞く私にアデレイは、

「前に畠で約束しただろう?」

「つて！ 何て？」

「今度、『頭にかぶる物を贈る』と約束したはずだが…」

アデレイの言葉に私は記憶を遡る。

そう言えは、以前、タオルで頭をぼうかむりにしていたら、アーティ  
イがそんな私に同情して『今度あたまにかぶる物を贈る』と言つた  
ような言わないような…。

しかし、どこをどう間違つたら、ほつかむり頭から銀のティアラになるんだあああ。

ねぐら手ねぐら…！

「……このティアラをかぶつて畠仕事しろと？」

「それもいいだろ？」「

「わーい。次、畠で仕事するのがすげく楽しみ——————。」の訳あるかつ！！」

何が楽しくて煙にティアラかぶつていいくのか。  
そんなイタイ人物にはなりたくない。

「…冗談だ」

毎回思うがアーテレイの「冗談と本気の区別が私にはつかない。

「煙でティアラをかぶるのは「冗談」にしても、この世界に新しい食材を広めてくれた事は感謝する。その敬意をはらつての事だ。新しい食糧が増えるという事は、それだけ人々の暮らしも豊かになるだろう? ティアラ一つでは安いものだ」

そんな、最初はただの気晴らしで、今では趣味の一つとして好きでやっていた事なのに、そこまで感謝されるのも気が引ける。まあ嬉しい気持ちも大きいけど。

「このティアラは、国にとつて有益な事をしてくれた人物に授けているのだ」

それって『国民名誉賞』みたい感じですが…。そんな恐れ多いティアラを本当にもらっちゃっていいんでしょうか! ? 「これ! ? 」  
しばらく一人で考えこんでいると、

「ティアラでは不服なら、もつと別の…」

「いえ、ティアラ最高! イヤッホー …!」

隣に立つこのお方は、煙でいきなりティアラをあげる事を思いつくお方だ。不服だなんて言つたら次回、何を持ってくるのかわからな

い。そんな思考回路の持ち主だ。

「でも、それならそりと、わざわざ公式の場に引っ張りだす必要はなかったんじゃないの？」

そつまうとアデレイは、口の端を上げて微笑んだ。私を優しく見つめる蒼い瞳が揺れる。

「…………綺麗に着飾った姿が見て見たかったのだ」

率直な言葉を言われて私は照れて赤くなつた。

「そのドレスもよく似合つている。気づいていたか？あの広間の者がお前に注目していたのを」

鏡台の椅子に腰掛ける私のすぐ隣に立つアデレイは、蒼い瞳で私を見下ろしている。

私は鏡越しにアデレイを見つめる。

鏡ごしに見えるアデレイは横顔で、その整つた顔を私に向かたまま口を開く。

「そんなお前を誇らしく自慢したい気持ちと、閉じこめて誰の目にも触れさせたくない気持ちにもなつたがな」

なんだか、熱の入つた蒼い瞳でさりとつと言つられて私は何と返したらいいのかわからず、黙ってしまう。

そうした沈黙の後、その空気に耐えられなくなつた私は

「アデレイ、もう戻らなくていいの？抜け出して。主役でしょ！」

「…すぐ戻る」

そう言って、やつからずつと隣にいるアテレイに私は苦笑する。先程の広間で話した時、アテレイとは距離を感じ緊張もしたけれど、今はこうやって隣に立ち、普通に会話が出来る。先程よりリラックスした関係に私は、安心してアテレイの蒼い瞳を見つめ、微笑みかける。

「何だ？」

「うん」

私は首を横にふる。

やつぱりアテレイはアテレイだ。

この国の王子である彼とは、時には距離を感じる事もあるけれど、私の中では出会った頃のまま変わらない。

一人で納得して笑顔になる私をしばらく見つめていた彼は、その後に扉の方を向き、何かを考えている様子で扉を見つめていた。

どうやらアテレイは、やつと広間に戻る事にしたらしく。ふー、やれやれ。やつと、この窮屈なドレスを脱げると安心して息を吐く。アテレイは無言で私の隣から扉の方へと歩いて行く。

アテレイ、バイバイ。…ってか、挨拶ぐらいしなさいよ…

そつぱりと思つて口を開くと、金属の擦れるような音が部屋に響く。

アテレイは扉の側に立つていて、その音の正体は鍵だったと気づく。

“どうやらアテレイはこの部屋の内側から鍵をかけたらしい。

そう気付いたのは、私の隣へと戻ってきたアテレイの笑顔を見た時  
だった。

か、か、か、

かぎ ！？？

なぜここで鍵をかけるの？

そうしてゆつくりと、微笑みながら私の隣に戻つて来たあなた様は  
一体だあれ？！

その微笑みの理由はどうしてなのかしら？！  
しかも微笑みながら、瞳は真剣と感じるのは私の気のせいかしら  
？！

周りの人達に『鈍い』と言われ続けてきた私だけど、この部屋に一  
人きりという状況は鈍い私にでさえ、いろいろと想像をさせる。

ただ鍵をかけただけなのに、閉じ込められた気分がして落ち着かな  
い。

だけど、そんな気持ちを相手に悟られるのも癪に障るので、表面上  
は平静を装い、余裕の態度を取る。

心臓は正直で、鼓動が早くなる。  
顔が赤くなってきたのか、熱いと感じる。  
手の位置は決まらずせわしなく動き、目が泳ぐ。

…こんな状態で平静を装つていると誰が信じようか。

もう！私のバカ！このバカ正直者め！

どうから見ても挙動不審人物。見事にキヨドリてるじゅん！

『閉じこめて誰の目にも触れさせたくない気持ちにもなったがな』

先程のアデレイの台詞を思い出す。

…まさか、あなたこの部屋で私を飼う気じゃないでしようね？  
やめてよ！私は人間よ！ペットじゃなければ珍獣でもないわ。

そんな私の動揺を知つてか知らずか、アデレイは長めの髪をうつと  
おしそうにかき上げながら、微笑んだ。そして私の隣でゆっくり  
と向き合つ。

「一度ゆっくりと話をする時間が欲しかつたんだ」

アデレイはそいつひとつ両手を組み、鏡台に寄りかかる姿勢で私の前  
に立つ。

その台詞を聞いて、ちょっと安心した自分がいる。良かつた、話が  
あるだけか。

だけど、鍵をかける必要がどこにある？余程誰かに聞かれたくない  
話なのか。

「話つて…？」

改めて話とは一体何だろ？

「こつが、元の世界とやりに帰るのか？」

「帰るよ」

あつさりケロリンパと言つ私にアテレイは、一瞬眉をひそめる。そんな彼にじく当たり前かのように言ひ。

「だつて私の本来住む世界は向こいつだもの」

「……それでどうするつもつだ？」

「何が？」

「ここのままヒューストン伯爵の城に元の世界とやりに帰るまでこのか？」

「……そのつもりだけど？」

だつて、他に行く場所もなればあてもない。いきなり何を言い出すのだらう。

「……俺はこずれ王都に戻る」

「…………えつ！？」

唐突に聞かされた台詞に私は言葉を失つ。そんな私の様子と違つてアテレイは淡々としてすく冷静だつた。眉ひとつ動かさず、言葉を吐きだす。

「……元よつこの城へは長期休暇でお忍びとこつ名目だつた。次にこ

の地を訪れるのはいつになるのか、俺にもわからない

急に聞かされた事実に私は一瞬、頭の中が真っ白になつた。

それって、もうすぐアデレイとはさよならつて事？

お忍び休暇だつたけどアルメリアお嬢様とジエネミーがアデレイを迎えに来たのだろうか。

だから帰つてしまつというの？

何だか、頭の中をいろんな事がぐるぐる回つて何から考えていいのやらわからない。

二人の間を沈黙が包む。

私はアデレイを真つ直ぐ見つめ、彼もまた私を見つめる。

沈黙に耐えきれず先に口を開いたのは私のほう。

「…………そう」

アデレイは、何も言わずに私を見つめる。

「……そっか……。アデレイは……」

帰つてしまつんだね。

そこから先は言葉にする事が出来ない私。

例えここでアーティストを引きとめる言葉を吐いたとしても、そんな権限私にはない。

それに彼の立場から言つていつまでも、こゝにいられる訳ではないだろう。

普通に考えればわかるはずだけど、私は  
イがこの場所にいる気になっていた。

毎朝畠に来るものだとばかり思っていた。  
もしや、この私の頭上で輝くティアラはお別れのプレゼントって事

鏡につつる私の頭上に輝くティアラ。なんだかその輝きが眩しく、

そして少し懸しへりつる気がするのは私のせいだらうか。

「…………アデレイは忙しい立場なんだもんね」

- 1 -

再び沈黙。

氣まとい。ものまくら氣まとい。」の微妙な空氣。

だけど、その後にかける言葉が見つからない。

たつてアーティストはアーティストの住む世界があつて、私にも私の住む世界がある。

そしていつか元の世界に帰りたいと願う私が  
帰りたいようにアテレイも本来の居場所に  
帰りたいのかもしれません。

そんな私がアーティストを止めてしまう。止められた立場ではないはず。

そもそも私は引き止めたいの……？

じゃあ…その理由は…？

なんだか、急な出来事で頭の中が上手くまとまらない。  
元の世界に帰りたい私と本来の居場所がここではない彼と。  
お互い、住む世界が違うって事なのだろうか。  
…もしそしたら遅かれ早かれ別れは来るのだ。  
けど、いつか来る時と、ほんやりとは思っていたけれど、

こんなに現実味を帯びたのは初めてで。

どうこうした態度を取つていいのや、もうわからずで。

虚勢をはるのが精一杯で。

本来の勝気な性格の私は強がる事しか出来ない。うつむいていた顔  
を上げ、努めて明るい声を出す。

「…………じゃあ、王都に戻る時には、トマトの苗あげるわ。頑張つ  
て育ててよー。」

いつもと変わらない笑顔を無理に作りアーティストに向かへ。

「……」

アデレイは眉ひとつ動かさず、私を無表情のまま見つめる。その表情からは感情が読み取れない。

「お別れのプレゼントよー」

から元気とも思えるような声で精一杯の作り笑顔で言つ私。

その時、私を冷静な顔でずっと見ていたアデレイが口端を歪めてふつと笑つた。

アデレイのその笑顔を見た瞬間、私に衝撃が走る。

アデレイの蒼い瞳は冷たさを帯び、鋭さが加わる。今までの優しい眼差しの様子など微塵も感じられない。

一見笑つてゐる様子に見えるけど、絶対違う…！その様子は…！

その異様なまでの視線の変わりように、私はたじろぐ。

「… どうか。 その態度か…」

自嘲氣味に笑うアデレイが何だか、怒つてゐる感じられてー。正直、アデレイに対して初めて『怖い』と思つてしまつた。

張り詰めた空氣のなか、目をそらす事も出来ずアデレイを見つめていた。

アデレイは、腰を折り鏡台の椅子に座る私にゆっくりと視線を合わ

せる。

アデレイの顔が至近距離で私の瞳にうつる。  
そうして、激情に揺れている蒼い瞳を私に真っ直ぐに力強くぶつけながら言った。

「ならば、俺はもう遠慮はしない」

その台詞を聞いた瞬間、アデレイの瞳がまるで、今にも掴みかかってきそうな鋭い目つきになっていたので、その様子にたじろぐ。

私の動搖と同時にいつもの香りが鼻腔をくすぐる。

弾ける水しぶきのような爽快感を思わせるベルガモット系の香りは、透明感と力強さを併せ持つ香りで、

アデレイの香りだ。

そう感じたと同時に、私は彼の腕の中に閉じ込められていて、唇が重ねられていた。

噛みつくように激しく捕らわれた唇

熱い吐息

私を包む逞しい体

私の頭の中は真っ白だ。

重ねられた唇と、腰と背中に回された逞しい腕によって私の体は完全に固定されていた。

驚き目を見張る私に飛び込んできたのは、アデレイの整った顔。そうして透明感と力強さを併せ持つベルガモット系のアデレイの香りに全身包まれる。

まるで噛みつくように激しく私の唇を奪った後、アデレイは一瞬唇を離して私を見つめる。

私を見下ろすその蒼い瞳は激しく熱を持っていた。

その瞳を見た瞬間、私の本能が危険が察知して警告音を鳴らすのが聞こえた。

まずは落ち着け！！

そう言いかけた唇もまた、彼の唇によつてふさがれた。

先程までの噛みつくよう<sup>ヒリ</sup>奪われた唇とは違つて、今度は優しく奪われる。

ゆつくりと確かめるかのよ<sup>ヒリ</sup>、私の唇に何度も口づけを繰り返す。

何だか、頭の中がぼんやりしてきた、私やばいかもしれない……。

いやいやいや！

激しかるうが、優しかるうが、奪われてるのは一緒だから！

合意の元ではないのは同じだから！

流されちゃダメダメよ！

なんとかこの状況から逃れようと胸に閉じこめられた私は手を突っぱねて押し離そうと力を入れるが、全然びくともしない。

以前からよく、畠で突き飛ばしたりしたけど、あの時とは全然違つ。今まででは力加減をしてくれていたんだと、この時理解した。

やはり男性なのだ。

腰にまわされた腕は、細く見えて力強く逞しく、身をよじつて逃れる事もできやしない。

優しい様で強引な口づけは私の思考回路を停止をせら。唇の中にアデレイが容赦なく侵入していく。

思わず体に力が入り逃げようとするが、逃げることなど叶わない。

包まれるアーテレイの香りが媚薬のよつとも感じられ、酔いつだ。

足元はふらつち、体に力が入らなくなつてくる。

じぱりくするアーテレイは唇を離して私を見つめる。私は呼吸が乱れ、赤い顔なのは確実で、もうそれ以上自分がどんな状態のかすらわからないままアーテレイを見上げる。

息も絶え絶えな私に、

「…そんな目で見るな。止まらなくなる…」

いや、止まれ！

そう言おうと思つたが、私の体が酸素を求めていたため、上手く言葉が出ない。

「コッキ…」

私が上手く話せない状態なのに、追い打ちをかけるかのようにアーテレイは私をきつく抱きしめてきた。

私の右肩に顔をつづめて、腰には両手をまわされてしつかりと掴まれている。

右肩にはアーテレイの吐息を感じて、くすぐつたぐ、そして熱い。

あ

あ

あ

「死んでいいですか……。

窮屈なドレスにその下に身につけている「ルセツト。先程の口づけと、加えてアデレイからの抱きしめ圧力。なんだか、視界にもやがかり、意識がもひりじてきたのは気がせいでしょうか…。

そんな私の首筋にアデレイは唇を一つ落とした。その瞬間、背筋がぞくりと震え我にかかる。

いかん。この場で意識を手放してはいかん！

起きろ！私！落ちてはだめだ！起きろ――寝るな――！

気分は雪山遭難隊。

私の精神の格闘も知らずに、アデレイは私の首筋にまた一つ唇を落とす。

アデレイの髪が私の肩にサラサラと当たる。いつもの香水とは違う香りのするアデレイの髪がくすぐつたく背筋に震えが走る。

そうしてアデレイは私の首の後ろでドレスをまとめてくるリボンに優しく触れ始めた。

ちよ……

۷۵

な  
何するつも  
り  
?

何だか、先程から首の後ろのリボンに触れているアデレイに嫌な予感しかしない。

もれか……！

そのリボン…！

ほんとく氣じゃないでしょうねえええええええ！？

私の脳内で警笛音かヒーヒー鳴りまくっていたその時、部屋に響き渡ったのは扉をノックする音。

『トントン』

# 救世主来了

! ! !

私はノック音のした扉の方を向く。アデレイは扉を忌々しそうに見つめる。私はアデレイの腕の力が緩んだ隙に、彼の腕の中から抜け出す事に成功する。

距離を取つて、乱れた呼吸のままアデレイの顔を見ると、アデレイ

も私を見ていた。

アーデレイは、ふと手で自分の唇をぬぐつ。その手には私の口紅の色がついて、私はその色を見た瞬間赤くなつた。  
彼はその手を見つめると、薄いピンクに色づいた口紅の色を見て笑みを浮かべた。

何だ、その笑顔。

そのかわりに私の頭の中は大混乱。

「な……何を……」

「何をつて？俺はもう遠慮はしないこと言つたはずだが

悪びれもせずに言つて田の前のこの方が心底理解不可能。

「……お前が悪い

「は？」

「どこのをどつて交換したら私が悪い事になるのにならうか。  
誰か教えて。

その時、再度扉をノックする音と共に聞こえてきたのが、可愛らし  
い鈴を鳴らしたよつた声。

『アーデレイ様、いらっしゃいますの？』

聞こえてきたのはアルメリアお嬢様の声。

その声を聞いた瞬間、アデレイはため息一つつき、扉へと向かい鍵を開けて彼女を招き入れる。

扉を開け、入ってきたのはアルメリアお嬢様。

彼女の赤毛はウェーブで綺麗に波打つてオレンジ色のドレスは可愛らしくよく似合っていた。

なんだか、ふわふわした砂糖菓子みたいなお嬢様だ。

彼女は、私とアデレイを交互に見た後、アデレイに向かって微笑みながら、

「さあ、アーデレイド様。行きましょう」

可愛らしい声をしたアルメリアお嬢様がアデレイの腕にそっと手をよせる。その手を一瞬見つめたアデレイだが彼女の手を振り払うでもなく、腕に手を寄せられたまま部屋を出て行こうとする。

私の事は振り返りもしない。

な…

何、その態度…！？

どうして私がそんな態度をとられないといけない訳？

あっけに取られてお口はポカーン状態な私。

そんな呆け氣味でアホ面した私をアルメリアお嬢様は横目でチラリと見ると、まるで勝ち誇ったかのように微笑みアデレイの腕に寄せていた手をそのまま、アデレイの腕に絡める。

は？何それ？

まるで2人の世界みたいですが…。

空氣。

私、空氣と化してない？

「 さあアーテレイド様。皆がお待ちかねよ」

アルメリアお嬢様に腕を取られたまま、私に退室する時の一言もなく、そのまま部屋を出て行く一人。

それを空気になり、静かに見送った後、残された私は少し冷静になつて状況を整理しようと試みる。

あのアルメリアお嬢様の勝ち誇ったような笑顔の意味はわからないけれど、何より一番頭にくるのはアデレイ！何だ、その態度！いきなりベロチューしてきて人を圧死のごとくしめ上げたあげく、自分は迎えにきたアルメリアお嬢様とさつさと退散ですか。

しかも私の事は無視ですか！？シカトですか！？スルーですか！？ベロチューの弁解は一言もなしですか！？

しかもアルメリアお嬢様が来なければ、そのままどうしようと思つ

ていたのだ？

だいたいアルメリアお嬢様は婚約者でしょうー前に「俺の意志ではない」とかなんとか良いながら、人の唇奪うだけ奪つたら、自分は婚約者とさあ退散。そんな都合のいい話あるかつ！

冷静に考えたらどうしようもない怒りが沸き上がり今にも噴火しそうになつていた。

怒りが溢れ出てきて自分で自分が止められなくなつた時ー。

気が付くと私は立ちあがり部屋を飛び出していた。重いドレスを身にまとい走つて駆けつける。

裾を引きずる程、長いドレスは両手でまくし上げ、走りやすい格好で、先程部屋を出て行つた2人を探す。はしたなくともかまうもんか。

「アデレイーー！」

前方で並んで歩いていた2人は、私の呼びかけに気づいたらしく、アデレイとアルメリアお嬢様は私の方をゆっくりと振り返ろうとする。

その瞬間。

振り返る前のアデレイの背中に跳び蹴りキックを食らわした。

両手を口元にあてて驚きのあまり何やら叫んだアルメリアお嬢様と、

前に立つのめるアデレイ。

そして、怒り心頭の私は、アデレイの白いマントのど真ん中に私の足跡が見事綺麗にうつっていたのを確認した。

## 54 調子の出ない私

本日も晴天なり。太陽は晴れ晴れと、雲ひとつなく、照りつける太陽の暑さに、喉が水分を欲する。

眩しすぎて直視出来ない太陽の光の強さに目を細めながらも、つい見つめてしまう。

こんな晴れた日は最高だ。

しかし、私の心は曇り時々雨、場合により雷雨。そんな一向に晴れない気分。

その原因は、アレ。そう先日のちょっととしたあの事件だ。

私的には、ちょっととというよりはなんともビックな事件、人生において3本の指に入るぐらいの事件をしでかしたかもしねりない。

やつちまつたよ、私。

回想にふけつとも、今日はお休みなので、私は朝早くからいつもの畑に来て草むしりに没頭していた。

頭にはもちろんかぶっている、先日貰った銀のティアラ。…ではなくて、いつものほつかむりですけど。

あの舞踊会から10日たつた。

その後、標的に鮮やかにとび蹴りキックを食らわし、マントについた足形を確認し、一瞬すつきりして爽快な気分になつたものの、すぐ自分の中でかした事の重大さに気付き慌てた。そしてつんのめつたアーテレイが振り返ろうとした瞬間、その顔と対面する前に恐れ

をなし、マツハでその場から走つて逃げだした私。

普段は強気なくせに、こつゆう時に臆病者の面が出る。

そうして、全速力疾走後、息も切れ切れに衣裳部屋へとたどり着き、呼吸も荒いまま急いで内側から力ギギをかけた。

その後、アデレイが逆襲しに来たらどうしようかと心臓をバクバク言わせながらも、とりあえず動きやすい格好を求めて窮屈なドレスを脱いでいつものメイド服を着用。慣れないハイヒールも脱ぎ捨てた。

だつて、こんな動きにくいドレスじゃ戦えないし！

…ってか、戦う気満々ですけど、何か？

しかし、着替えを済ませて来るべく逆襲に備えていても、アデレイが一向に逆襲に来る気配が感じられなかつた。しごれを切らした私は、鍵を開け、そーっと廊下を確認した。だけども人気がないので、なんだかホッとした。逆襲に備えて用意はしていただけれど、先程アデレイにがんじがらめに腕の中に閉じ込められた時に感じた事は、圧倒的な力の差だ。やはり男性なのだ。私なんかが本気を出してもかなう相手じやない。

しかしアデレイが逆襲に来ないなら、ここにいる意味もないと思い、そのまま衣装部屋を抜け出し、何とか元のメイドとしての持ち場に戻つたつて訳。

しかし、今思い出すとアレはまづかつたかしら…。

この国の王子であるアデレイに後ろからとび蹴りなど、どう考えても不敬罪に値すると思う…。

いつそ正々堂々と、前からなら良かつたか？

いやいやいやいや違つだロ。そつゆつ問題、じゃない。  
しかし、相当なダメージをくらわせた自信はある。

何せ、ハイヒールでジャンピングキックだ。用心していなかつた隙  
だらけの背中を狙つてクリティカルヒットを叩きだしたと思つ。  
しかし、あれで格好悪くすつ転ぶ計算だつたのに、つんのめるだけ  
で終わりとは標的の主、アデレイもなかなかやるな。

しかし一国の王子を足蹴にするなどと、処刑されたらどうしよう。

こうみえても私は暴力反対の人間だ！……どの口が言ひ。  
だけど、基本カツとなりやすい性質なので、いろいろと後悔する事  
が多い。短気は損氣。わかつちやいるけど止まらない性分なのだ、  
はあ。

ため息をつきながらも、手は休めずに、生き生きと伸び放題の雑草  
を抜きながら考える。

…しかし、アレはアデレイも悪い。

そうだ、私は自分の行いばかりを後悔しているけど、思い出せ！  
私がどび蹴りを行うまでに至つた経路を。

私だって何もしない相手にいきなりとび蹴りをくらわすなど、そん  
な真似はしない。

そもそも元の原因はアデレイが、

いきなり抱きしめてきて…

それから急にキスをしてきて……

しかもベロチューで……

何だか、激しくて……

いや、優しいような……

……！

いやいや…何を思い出している…私のバカ！

思い出さなくともいいような事柄まで思い出していく、私は一人で赤面する。

耐えられなくて、抜いた草を集めた雑草の山に寝転がり、悶える。思い出してはもだえて転がる、あれからそんな日々が続いている。

「はあ……」

ため息も出るつていうの。

しかし、次回会つたらどんな顔をしよう。彼も何か思つていろいろがあるのか、あれから顔を合わせてはいない。

その証拠に畠へは来ない。あれだけ毎日頼んでもいないのに、畠へ来ていたのに、音沙汰なしもいいところだ。毎日のお茶の時間にも呼ばれないし、あれ以来パツタリだ。

「…まあいいけどね…別に」

別にアーテレイが畑に来なくても困る事なんてないし？

どうせこの畑に来ても見てるだけだし

別に何か用事ある訳でもないし

別に一人でも収穫出来るし

別にいいし

……勝手にしてろ！

私は勢いよく起きると、ぶつぶつ言いながら、畑の雑草を抜いていく。心を無にするべく、何も考えずに縁の草に手を伸ばしては引っこ抜いていた。

「……おおおつー！？」

手元が狂つて雑草と間違つて、植えたばかりの小さいトマトの苗まで抜いてしまつたではないか！

私とした事が、心を無にしてしまいました！

大切な苗を雑草と間違えるなんて、私の目は曇つてしまつたようだ。私の今の心を表しているのだろうか。

「まつたく！これも全部アーテレイのせいだ！」

はあ……。

ため息一つついて、空を見上げる。何だかいつも調子が出ない。

こんな感じで最近の私の調子はいまいちなのだ。

もう、いいやとばかりに抜いたばかりの雑草の山に寝転がる。多少ちぐひくするが、別に気にならない。

このまま寝転がって「口口」口口していいが、太陽がまぶしそうに、それに暑い。

早朝の涼しいうちに終わらせるつもりが、何時の間にかだいぶ時間は過ぎたように感じる。

せっかくの休みだし、このまま草むしりで終わらせるのももったいないしな…。

ぼんやりと考え方をしていた時に、

「何をぶつぶつと一人ごとを言っているんだ？」

急に後方から声が聞こえてきた。

私は寝ころんだまま声のする方を反射的に振り返り、そこにいた人物の出現に驚いて目を見開いた。

私は寝ころんだまま声のする方を反射的に振り返り、声を掛けた人物を確認して驚く。

その場にいたのは、ここにいるはずは無かつた人。なぜ? どうしてここに?

びっくりすると同時に、心のどこかアテレイじやない事に驚く。いや今会つても微妙だけど…。

「ジユネミー…」

少しくせ毛混じりの柔らかそうな赤茶色の髪は太陽の光を浴びて、なおいつそう赤味が強く輝き、同系色の瞳は大きく見開き私を真っ直ぐに見つめていた。

ジェネミーがこの場所にいる事に驚いて、どうしてここへと尋ねる前に

「…まずは起きろー地面に寝転がるなんてはしたないー。」

口調はきつく、説教じみていたけれど、雑草の山に寝転がる野猿のよつな私に優しく手を差し伸べてくれた。

どうやら手を貸してくれるらしい。

私はその手を遠慮なくとり、起き上る事にする。

…よつこりじよ、つと。

気合の掛け声を一つかけたら、ジエネミーは心底呆れたような顔をした。

「なぜここが？」

どうしてわかったの？この場所が。広大なヒューストン伯爵の土地の片隅にあるこの一角の畑、偶然にもここまでたどり着くとは考えにくい。

「ラインナルト様が教えて下さったのだ」

その名をジエネミーの口から聞いた瞬間、私の背中を嫌な汗が流れた。

「ラ、ラ、ラ、ラインがあ？」

「…声が上ずつていろど」

やつぱりラインは知っている。私がこの地で勝手にトマト栽培をしている事を。

最初は、ほんの趣味程度、家庭菜園レベルだったのに、何時の間にやら本格的なトマト畑へと変貌を遂げたこの土地をラインはどんな思いで見てきたのだろう。きっと、ラインの事だから初期の家庭菜園レベルの頃から気付いていたけれども、ここまでトマト畑が広がるのを黙つて見ていたのかもしれない。

私が楽しそうにトマトを育てているから黙認してくれていたんだと思つ。

そんな優しい気持ちを持っているラインだとは思ひけど、何より私をいじるネタの為、ここまで黙認して泳がせておいたような気がする。後者の方にファイナルアンサー。

ああ、次回お会いするのが怖い。ついに今度こそお仕置き決定な予感がする。

優しい色合いの薄紫の瞳を潤ませ、とろける砂糖菓子のような笑みを浮かべながら

『今までの黙つていた罰として、ビビリじょうかな?』

なんて、嬉々として言いそうな姿が目に浮かぶ。天使の笑顔の裏に隠しもつ本性は、さつ氣たつぶりだ。

私は、次回ラインに会つた時を考えるとグッタリだ。そんな私の動揺を知らずにジェネミーは私の自慢の畑を見つめている。列をなしで赤く実るトマトの大群を感心したように眺めていた。

どうぞ、どうぞ、よく見ていいって、私の力作。…無断借用地だけど。

「…しかし見事なものだな」

いつもは素直じゃないジェネミーが、珍しく褒めてくれたので、私は純粹に嬉しくなる。

「ありがと。」

「舞踊会で、聞いた時から気になっていた。それに最近世間でも出回っていると聞き、どんな物なのか、实物に興味があつたんだ」

「え？ そうなの？」

私はまさかのジエネミーの発言にビックリする。だつて貴族のおぼつかやまが興味を示すなんて。

「アーデレイド様の発言力の強さは、お前が思つていい以上にあるんだ。しかもあんな貴族に困まれた場での事だ。噂になるのは当然だし、あのお方の取り巻きの貴族や、取り入るつとする貴族が今後、この実に興味を示してくる事もあるだろ。」

「やうなの？」

「アーデレイド様の身分を考えれば当然だろ。あのティアラをアーデレイド様から直々に授かつた事は、とても名誉ある事なんだ。だから……よつ……よかつたな」

最後はつぶやくように小声で言つたジエネミー。

視線をそらしてぶっきらぼうな物言いだけど、彼なりに私の事褒めてくれたんだなあ、と感じる。

しかし……だ！

そんな発言力のあるお方に、あの後とび蹴りくらわした事、あなた知らないでしょ？

一国の王子が、つんのめったのよ？自慢のマントに、私の足跡くつ

きりよ？

…それを知つても、私の事そんなに褒められる？

何だか、アテレイの名前を聞いた瞬間、一気に現実に戻ってきた。  
褒めてくれたジェネニーには『ありがと』と言ひ返す。

しかし、もう今田は面倒な事を考えるのが嫌になつてきた。  
せつからのお休みなんだから、もう、やめ！やめ！

「私はこれから、市場へ買い物に行く事にするわ」

ここは自分のテンションを上げる為にも、買い物に出かける事にする。

そうだ、今日はお休みなのだ、市場へひとりショッピングでも出かけよう。見てるだけでも、テンション上がるよね、可愛いアクセサリーとか、素敵な服、あとは肥料とか肥料とか肥料とか…。

そう考えたら何だか気分が上がつてきた。よし！行くぞ！そうとなつたら、ここは作業は中断して着替えに帰ろう。

「…俺も市場に用事がある」

「へ？」

一人、自分自身に気合を入れていた私は唐突のジェネニーの台詞に驚く。  
まさか貴族のお坊ちゃんが市場という庶民的な場所に用事があると  
はビックリだ。

そつ思つたけど、適当に相槌を打つておべ。

「ナウなんだ」

「ああ

「……

何この沈黙。

「じゃあ、もう行くね

手を振つて立ち去つ際に、

「待て。俺は市場へ行くのは初めてだから、お前が案内してもいいぞ」

「…その場合は『俺を市場へ案内して下せ』。お願いします』とい

う言ひ方が正しいと思つただけれど

「…

素直じゃなく、図星指されて、たじろいだ様子のジェネミーに、ま

あいいや、と微笑みかけ、

「そつか。じゃあ一緒に行こつか、市場へ。ジェネミー慣れてない

だらうし

私が誘うと、彼は一瞬笑顔になりかけたようだが、すぐにムツとし

たように睨んだ後、

「そんな迷子になるような子供扱いをするなー。」

と言つて怒られた。だけど、実際私より年下じゃんー。

その後、私は畠から出で、市場へ行く用意をする為一田はジエネミーと別れた。

いくらなんでも、ほつかむりに寝転がつたせいで土だらけの服で買物に行くのは気がひけたし。

そうして私は、膝下スカートに薄い水色のブラウス、日差しが強い為、お出かけ用にと買った帽子を着用して待ち合わせ場所に行き、ジエネミーと合流した。

ジエネミーの格好は、丈の短めのブラウンのパンツ姿に、上は白いブラウス。

足元は皮のブーツを履きこなし、一見してラフなスタイルなのだけど、着てこる物の質は上等だとわかる。

貴族である事を悟られないような格好をしてきたのだろうナビ、やはり育ちの良さがにじみ出ている。

「これなら、市場へ行つてもなじむだろう。」

自信満々と言つジエネミーだけど、

くつーこのお坊ちゃんまめー。

市場ツ子はねえ、そんなシミーつない服きてないから。

棒きれもって、鼻水垂らしてトンボおつかけて真っ黒に田焼けしていないとダメだから。

…って、何ソレ、いつの時代よ？

「まあいつか。…では、行くわ」

「ああ

「フフフフして迷子にならないでね」

「それはじつちの台詞だ！」

私の「冗談をすぐに真に受けてムツとして強がるジェネリーを何だか可愛らしく思い、つい笑ってしまう。

「迷子にならないよつこ、手をつないであげよつか？」

私が冗談で差しだした手をジェネリーは、一瞬驚いた顔をした後じつと見つめている。

あれ？ここで『こりんー』とか言ひて手を叩かれる展開だと想像したんだけど…。

私の差し出した手を見つめたまま何かを考えてる風なジェネリーが、いきなり顔を上げる。

「お前がそこまで言つなら…」

『グ〜〜〜ツ

いきなり地響きのような音が聞こえてきたので、私は慌てた。それも自分のお腹から聞こえてきたと知った時は、さすがに私も照れくさかったので、慌ててお腹をさすりながら、

「今、お腹が鳴ったよー。お腹空いたってお腹が催促してるわーねえ?  
早く行こうか?」

恥ずかしさと、照れ隠しの為に一気にまくしたて、市場の方向に足を向ける。

ジエネミーはなぜか付いて来ずに、その場で立ち止まつてこる。

「?」

私は、後ろを振り返りながらも、なかなか付いてこないジエネミーを見ていた。

「もう! 来ないと置いて行くよー。」

まったく世話をやける。迷子になんてならない宣言したけれど、この時点では迷子になりそうな予感がビシバシするわ。

なんだか、ジエネミーは、憎まれ口をたたいてばかりいる弟みたいな感じ。弟がいたら、きっとこんな感じなのかな。まあ、しようがない。私の方がお姉さんとこうした事で、広い心で接してあげよつ。

「行くよー。」

「全くー。お前とこう女は、本当に頭こへるー。」

いきなり怒りだしたジエネミーと私も前言撤回する。

やつぱりこな怒りっぽい弟いらないわ。

ジエネミーとギャーギャー言いながらも無事に到着すると、市場は相変わらずの熱気と人々の活気にあふれていた。

やつぱり一人で、ウジウジと考えてこるよりも、いつやつて外に出ていた方が気分も晴れる。

それに、来るまでの道中、ジエネミーと何だかんだで、ギャーギャー言い争っていたのも、結果としてはすぐ『晴らし』になつた気がする。

市場の活気があたられて、体の中から自然とエネルギーが沸いて出てくるような感じがする。

「まずは腹」シリアル。

ジニアとの毎度の口喧嘩も一時休戦して、

「そ二、た！アレを食へよ、か！」

不意は思い一こした唐突な和の申し出は

アレ、二で何だ？」

不思議そぞな顔をしたショボミーに

「そうそう！市場に来たらアレ食べないとねー」

「だからお前は人の話を聞け！」

騒ぐジンジャーだけじ、説明するより、実際实物見ても「ひつたまつ  
が早いだろ」と思い、ジンジャーの後方にある柵の、ちょうど口か  
げになつている場所で待つように告げ、急いでお皿並の場所に行  
く。

私は言われた通り素直に、柵の口かげになつている場所で、大人し  
く座つて待つて、いたジンジャーに笑いかけながら、先程の会話のア  
レを差し出す。

「これは…？」

紙にくるまれて熱い蒸氣のたつソレを不思議そつな眼差しで見つめ  
るジンジャーに

「これは、ランデだよー！肉を秘伝のソースにつけて焼いてから、新  
鮮な野菜と包んで、またソースをかけて、パンで包んで焼き上げる  
ところ、ここいらの伝統料理らしいよー！」

市場に来たらまずは「レを食べないとね。

しかしナイフとフォークを使わないランデに、どうかじりつくるのだ  
らうか。多少戸惑いの色を隠せない様子のジンジャーに、

「まあ、騙されたと思つて食べてみなよ」

ほれほれ、遠慮なさらずに…と勧めてみると、一瞬迷つた様子を見

せたものの、ジョネミーはランデに勢いよくかじりついた。味わうよつこ、噛みしめている様子のジョネミーに声をかける。

「ねつ？！美味しいでしょ？」

そつ尋ねると、ジョネミーは

「…まあ、悪くはない」

まったく素直じゃないんだから。だけど、黙々と食べすすめているのが美味しいって証拠だと思うんだ。

そんな様子のジョネミーを横目で見ながら、彼の隣に腰かけて、二人並んで私も自分のランデを一口かじる。

一口食べた後、今までと違う何かを感じた。

そこで、私はランデを手で割つて中味を確認してみる。

確認後、私はそのランデをはやる気持ちで一気食いした。

それこそ、先に食べ始めたジョネミーがまだ半分程しか食べてない頃に完食した。

「…おまえ…」

早すぎるだらう、どれだけ腹空かせてたんだ、と驚き、ドン引き気味なジョネミーだったけれど、いいのだ、早食いは私の自慢にならない特技の一つなのだ。

早々完食し、口についたソースをぬぐつと、

「ちょっと行ってくるから、ランデ食べて待つて！」

呆氣にとらわれるジーハニーをその場所に残すと、私はお皿の場所に行く為、再び駆け出した。

「おばさん…おばさん…」

「おやっ…わざわざランナーを買って行つてくれたお嬢さんじゃないかい？ 息切らじてびつつかしたかい？」

「わざわざ買ったランナー…今までと違つ…」

私は走つてきた為に、呼吸が苦しくて上手く説明ができない。けれども、全てを説明する前に気が付いたおばさんは、ああと、うなずきながら

「昔からいろいろな野菜を入れてあるんだけどね、最近この市場を中心に出回りはじめたトマトを入れてみたんだよ。甘いソースと絡んで抜群だろ？」

しかし、あんた良く気付いたねえ、と豪快に笑つおばさん。

やつぱりやつなんだ。

ランデの中には、沢山の野菜が包まれていて、その中にトマトが薄く切られてサンドされていた。

ほのかに酸っぱくもあるトマトの酸味が甘辛いソースとほどよくマッチしてランデの美味しさとよく合っていた。

一口食べた後、いつもランデと一味違うと気付いたのだ。そうして早速中味を割ってみるとトマトが出てきたのをこの目で確認した。それから、はやる気持ちを抑えて完食し、真相を確かめに走ってきたのだ。

ああ、私の作ったトマトがこの市場を中心に広がっている。もしかしたら、ローディのおじさんから苗を購入してくれて、栽培してから販売している人もいるかもしれない。

今この瞬間にも、誰かに美味しいと言わされて食べられているかもしれない。

どうじつた形で、広がつていつてるのだ。この市場から。そして私の手元から。

「ちょっと……どうしたんだい？まさかトマトが泣くほど嫌いかい？」

私は知らずに涙ぐんでいたみたい。

私の事情を知らずにビックリしている屋台のおばさんを見て、笑つてしまつ。

「ううん。違うの。トマトが大好きだから嬉しくて泣いているの

そうなのかい、変わった子だねえと、おばさんに豪快に笑われた。その笑顔を見て私も涙を流しながらうつられて笑つた。

ねえ、私、この世界に来た事で、少しは役にたつたのかな…

ランデのおばちゃんに手を振つて別れて、再びジエネミーと会流して市場を見て回る事にした。

「あつーあのお店みたい！」

私はいつも見ている雑貨系のお店に飛び込む。それからすぐこ

「あつーあつちの服屋も見たい！」

かわいいお洋服達の誘惑に誘われて足を向けると

「あつち行つたつこつち行つたりと、まづは落ち着け！」

あきれ顔のジエネミーに怒られる。

しかし、田の前に興味ひかれる物があると見たい気持ちが抑えられないのだ。

あつひふりふり、じつひふりふりで飛び回つてしまつのだ。

「頼むから迷子になんな行動はとらないでくれ……」

… 今度はお願ひされてしまった。

だいぶ、いろんなお店を見てまわったので、少し休憩する事にした。  
喉が渴いたし、足も疲れてきたし。

それに、だいぶジョネミーを連れまわしたという印象もあるし…。

しかしジョネミーは自分も市場に用事がある、と言っていたけれど、  
用事なんてないよつに思える。だって、ジョネミーは文句を言いな  
がらもずっと側にへつ付いてくるし。

ボーッと考え方をしながら、足を休めていたら、ジョネミーは私に  
無言で飲み物を差し出してきた。

「え？ これ…？」

もしかして買つてくれたの？ 私がボーッと休んでいる間に気を  
使って？

「ありがと」

ちゅうど喉が渴いていたので、こうひき遣いはすげへ嬉しい。  
素直にお礼を言い、飲み物を受け取つて、ベンチに腰を下ろす。

そういうえば、先程から市場で働く売り子の娘さん達が、休憩時間な  
のか集まってジョネミーをちらちら見てくる。

そうしてその娘さん達は、キャアキャア言つて、なにやらむしゃむしゃ  
でいる様子だ。

その中の一人が私に近づいてきた。彼女は確か、キャンディ屋で働く子だつたはず。

私と彼女は、そう親しくもないけれど、何となくの顔見知りで挨拶とか軽い会話程度はする関係。

「彼、すうじい綺麗な子ね！…どうじつた関係？」

こつそり耳打ちしてきたキャンディに言われて、（名前は知らないので勝手に命名。）とか、そのまま彼女の視線の先のジェネミーを見る。

いきなり娘集団に近づかれたジェネミーは興味なさそうに、そして面倒くさそうに一歩下がって、木陰に入り、そしてその木に寄りかかって市場を眺めている。

確かに、柔らかそうな赤茶色の毛に同じ赤茶色の瞳、体格は成人した男というよりは、まだ線の細さも残っているジェネミーは、一般的に気の強そうな美少年。美少年ゆえに、ヒゲもない。そしてツルツルお肌。ひょっとしたら、すね毛もないんじゃなかろうか。

しかし性格は、生意氣ばかり！…口答えしてばっかり…って感じだけどね。

「…そうだね。うん、まあ…弟…みたいな感じなのかな？」

キヤーと黄色い声と共に、娘さん達は次から次へと、紹介してくれ、だの、あんなに綺麗な顔の少年見た事ないなど、騒いで質問ぜめだ。

市場の娘さん達は積極的に、若いだけあって、行け行けゴーゴーだ。紹介してくれと言われて、断る訳にも行かないの、後方の日かげで木に寄りかかって休んでいるジェネミーの名を呼ぶ。

ジェネミーは黄色い声達に、面倒くさそうにけだるそうに顔を上げる。その様子も、けだるげな美少年の図として高く売れそうだ。

そんなジェネミーに、キャンディーが近づいていき声をかける。

近づいてきたキャンディーに気付き、市場を眺めていた視線をゆっくりとキャンディーに持っていくジェネミー。

ジェネミーの視線を受け止めたキャンディーは、頬を真っ赤に染めながらジェネミーの前に立つ。

ちよ…溶けるぞ! キャンディー!

今にも溶けてベッタベタになりそうなキャンディーが、

「ねえねえ、リツキの弟分って本当?」

それを聞いた瞬間、ジェネミーは赤い顔して私を睨むと、

「誰が誰の弟だ! お前みたいな姉などいらん!」

と、すばり剣幕で怒られた。

…」の……やつぱり可憐くない!

市場からの帰り道、なんだかムツとした感じのジェネニーの顔をチラチラ横目で見ながら、機嫌伺うのは私もしかして…もしかしなくても…何か…不機嫌…? だよね…。

「「めんね、ジェネニー」

2人っきりの帰り道、この微妙な空気が嫌で私は口を開く。立ち止まるごとに、真っ直ぐにジェネニーを見て素直に謝罪の言葉を口にする。

「……」

ジェネニーは無言で赤茶色の瞳を私に向ける。なんだかどこか非難めいた色を含んでいる気がするのは、決して気のせいではないはずだ。

私は自分の何も考えなかつたゆえの行動を後悔して、唇をかむ。

「……」

ジェネニーは、そんな私の謝罪に一応耳を傾けてはいる様子のまま、無言で私を見つめる。

その無言に堪えられなくなつた私は、ついに声を荒げる。

「……」

「勝手に肥料三袋も買つた挙句、ジェネミーに持たせていろの私を責めているんでしょー。」

そうなのだ。

私ときたら、後先考えずに肥料を三袋も買つてしまつたのだ。これぞ、ザ・衝動買い。

なじみの店に入った瞬間、思わず欲しくなり、それを背中に担いでジェネミーの前に現れた時の彼の顔つたり……。

きっと心底呆れていたと思う。私の事バカだつて思つたと思つ。だつて、口を少し開けて『アポーン』と呆れた顔をしていたもの！

いつものジェネミーの態度から考えて、『返品してこい』とか『もう少し考える』と即座に怒られると思つたけれど、予想に反して無言で私から奪い取ると、全部自分の肩に担いで持つてくれているのだ。

美少年でヒゲ跡の一本もないけれど、さすがは男の子！私は背中に担いでヒーヒー言つて登場したけれど、ジェネミーは軽く肩に担いで歩いている。その袋には『肥料』とテカデカ書いてあるから、『美少年、肥料を担ぐ』という、なんだか似合わない残念な図にはなつてゐるけれど……。

「……違つ

ジェネミーはポツリと呟く。

違うつて何さー。何が違うのさー。だったら、何でそんなに不機嫌なのさー。

開き直つた私に向かつて

「これは欲しかつたんだろ?だから別にいい…」

帰り道を真つ直ぐに見つめながら肩に担いでいる肥料を手で軽く叩くと、

いつもと違ひ静かな声で話すジョネミーに何だか心がドキッとした。

「…俺が不機嫌な理由わかるか?」

いや、今あなた様に持たせている肥料三袋以外は思いつきませんが。フルフルと首を横に振る。

「…俺はお前を姉だと思って扱つた事など一度もない」

ああ、そつなのか。それで何だか不機嫌なのか。

「まさか…!」

私は彼の言いたい事に気付いてしまつた。

ジョネミーは私を真つ直ぐ見つめる。視線は私の視線より少し、ほんの少しだけ高い程度。

ほとんど田線の変わらない赤茶色の瞳を、私も逸らす事なく見つめる。

「ジョネミーは、私の兄貴分のつもりなの!?」

おーおい、それは年齢の順番から言つて違うだらう。  
そもそもいくら頼りない私でも、それはとても心外だ！  
と、すかさず抗議の声をあげたら、

「…………お前みたいな姉も妹も「めんだつて事だ！」

ジェネミーからもすかさず抗議の声が上がる。

そつして帰り道、市場へ来た時と同じようにギヤーギヤー言いながらも、一人で並んで歩いて帰った。

やつぱり私達は、大人しく静かに歩いて行く事は出来ない運命らしい。

市場でのお買い物も無事終了し、帰宅途中の私とジェネミーなのだけれども、  
今日は、いつぱい歩いていい運動にもなつたし、満足のいく買い物も出来たし、何よりいい気分転換になつたので、本当に良かつた。

私の隣に並んで、私の市場での戦利品を持つてここまで歩いて来てくれたジェネミーに最後に笑つて声をかける。

「今日はありがとうございました。」

市場に行く前に、集合場所にしたヒューストン伯爵家の庭園の前までは、あとほんの少しの距離。

行く前は「ひじひじ悩んだりもしたけれど、今日はいい気分転換になつた。

ほら、気分が軽くなると足取りも軽くなつて、スキップなんてできちゃうし。

こうなつたら、スキップしながら鼻歌なんか歌つちゃう。

ジョネミーを追い越し、スキップのまま進んで庭園前までたどり着くと、クルリと振り返り、

「楽しかったね」

私の荷物を持つて歩いて来てくれたジョネミーに声をかける。いつもより素直にお礼を言える事が出来た気がする。

「…お前が、行きたいのならまた連れて行つてもいいし」

「何それ〜？案内したのは私でしょー」

口をとがらせながら言つジョネミーの憎まれ口も、今では少し可憐く感じる。

楽しかつたけど、足が少し疲れたから、私はこれからひさしき帰つてお茶を飲んでから、昼寝でもするよ。

昼寝は私の至福の時間。

じゃあね、とサヨナラを告げようとしたその時、

「ジョネミー？」

庭園の方からジェネミーを呼ぶ声が聞こえたので、声の聞こえた方向に顔を向ける。

庭園の入り口は、見事な色とりどりの薔薇と緑のアーチでお出迎えになつている。

ローデイが一生懸命造り出しているその薔薇のアーチは、いつ見ても美しさに目を奪われる。

そして、その声をかけてきた人物を見て、少し驚く。

その人物は、柔らかいほほ笑みを浮かべて、

「やあリツキ！」

私に声をかける。

「…」

……ピックリした。

ジェネミーが呼ばれるまで、まるで気配に気付かなかつた事も驚きだけれど、

ラインのその天使様のよつなほほ笑み、そして、中性的なお姿を見たその一瞬、

見事な薔薇のアーチから飛び出してきた、『薔薇の妖精（属性ドレ）

』かと思つちやつたよー！

薔薇の妖精もどきラインは、にこやかに笑いかけながら、

「今日は天気が良くて風が気持ち良いから、庭園でお茶会をしていたんだ。そこで、ジェネミーにも声をかけようと思つて探したんだ

けど、どこに行つていたの？」

「ちよつと用事で…」

少し言葉を濁し気味なジェネリーにラインは驚いたように、

「用事つて？リツキと一緒に？」

ええ

ふうん、と私とシユネニーの顔を交互に見比べるラインの瞳が輝き始めた気がする。

「セツなんだ。けれど、レジで会つたなら丁度良かつた！ リツキ  
もジヒネリーも一緒にお茶会に混じりつよ。向こうにみんないるか  
ら。」

「...え...? みんなつて?」

微笑むラインに嫌な予感がする。

「アデレイとアルメリアだよ」

ノおおおおおお——予感的中——！

「いえ、せっかくのお誘いですが、私具合が悪いので」と遠慮させて

頂きました

すかさず辞退を告げると、

「せつせつ、スキップしてたよね?」

ぐはつーじこから見ていたんだ、じの人。

「いえ! 何だか急に腹痛が…!」

「大丈夫? 何か変なの拾つて食べたりした?」

おいおい私は拾い食いしそうな程、食い意地がはつてゐるよつに見えますか?

心配して私の顔を覗きこむラインだけれど、その瞳は輝いている。輝きに満ち溢れているし…

そしてその顔は絶対楽しんでる顔だし…

「私はただのメイドですし、恐れ多くも混じる事などできません」

アイ アム 一般ピーポー…ピーポー…を主張する…

「今更何を言つてるの?」

クスリと笑つた後、ラインは続ける。

「名譽の証であるティアラを王族から授かつて、なおかつ僕の友人でもあるリツキがなぜ混じる事が出来ないといつの?」

今更ながらですが、そんな重要な肩書きを持つティアラなら返品したい。

「隣国から取り寄せた美味しいお菓子もあるからおこでよ」

手招きまでして誘うラインだけれども、さすがにお菓子に釣られてホイホイ行ける程、私は脳天氣ではない。

目の前に広がる広大な庭園の彩られた薔薇と緑のアーチの奥には、あの2人がいると思うと一刻も早くこの場から立ち去りたい気持ちに駆られた。

頑張れ私、負けるな私。

「今日、私はお休みです。つまり労働日ではないのです!」

そうだそうだ、労働者としての権利をここに主張する。今日は完璧オフだよ。

お休みなんだから、自由に過ごしてもいい権利があるはずだよ。雇い主の「ご子息様の無理も今日は聞かないよ」

「そうなんだ。じゃあ、別な日に一日お休みあげるよ」

ハイ、雇い主の「ご子息様は、即答です。

私が返事に困り口を閉じて黙つていると、

「どうしても嫌?」

「…困ります」

足早に立ち去りたい私と引きとめたいラインとの攻防戦。  
今日だけは負ける訳には行かないの…！

ラインとの攻防戦に夢中になつていたら、急にラインが私を見て、  
『おや?』と不思議そうな顔をする。

そのラインの不思議顔の視線の先は、私の背後。

その時、初めて自分の背後に感じる人の気配に気付く。

ラインは田の前、ジエネミーは隣で困惑顔。

…と、いう事は…。

何時の間にやら自分の背後から立つ影の存在に気付き、恐る恐るその影を作っている人物に視線をやると、私は驚きのあまり卒倒しそうになつた。

ラインが影の人物へと微笑みかける。

「アデレイも来たの?」

ラインとの攻防戦の間に、いつのまにやらアデレイ登場  
！來た

いきなりのラスボス登場に、私はいつたゞうすれば…。

背後に立つであらう人物を確認し、はつきりと田を合わせる事が出来ない私は、ラインを見つめながらも背中から感じる気配に顔が引きつっていたに違いない。

問題の人物は私のすぐ後ろに立っているはず。だつて、何だか視線を感じている。主に視線はつむじ部分に集中しているような…。

いや、これは身長差のせいだらうけど。

「ジョネミーの姿が見えないと思つたら、リツキと市場に行つてたんだつて」

この空氣の中、軽くすねたような声色を出すラインは、やつぱり大物だと思つ。

しかし、そんないした事でもないのに、わざわざ叫び口するなー！

「…一緒に…？」

ラインの明るい声とは対象的に問いつめるような低音の声が、私のつむじ周辺から聞こえる。

「やうみたいだよ。リツキのこつものメイド服も素敵だけれど、今日の服装も似合つてるよね。しかし、ジョネミーするいなあ

背後から何だか不穏な空氣が漂いはじめた気がする…。

その空気に気付いているのか、いないのか、相変わらず呑気に軽くすねたような声色を出すラインは、やっぱり大物、あんたが大将。

「……一人で？」

しかも背後の人物もなかなかしつこく聞いているし。

「そりなんだつて！」

明るく呑気なラインとは真逆に、空気が益々怪しい方向になつてきている気がする。

何だか、責められているような雰囲気だが、怒られる理由なんてないはずだ。

いかん！ここで流れを変えなくては！

私は勇気を振り絞り握った拳に力を込め、自分の背後を振り返る事に決めた。

そうして、無理矢理でも何でも笑顔を作り、こいつのつのだ。

「……アデレイ！」

ひつ…

久しぶり

！！！

そんな能天気な声をかけようと思い、勇気を振り絞り背後を向いた私は、その人物の視線に凍りついた。

振り向いた私を待っていたのは、蒼色の瞳の冷たく刺すような険しい視線。

眉間にしわを寄せつつも無表情に、田を細めて私から視線をそらさない。

な……なんか……怒ってるし……！

いつもの蒼い空色の爽やかな瞳が、氷だ、吹雪だ、アイスブルーだ！

私がその視線にとまどっていると、

「ああー…ああー…」んな所で立ち話も何だし、皆でお茶しようつか

ラインの能天気な発言が固まつたままの私の耳に届く。

その後、私は先程の氷の視線によつて固まつたままなぜかお茶会に連行された。

アテレイは目から人を凍らせる吹雪を出す事が出来るに違いない。

庭園は花が咲き乱れ、緑に包まれている空間だ。

その庭園を歩いて進んでいくと、緑の芝生の上に豪華なテーブルと椅子と紅茶セットが用意されていた。

その椅子に可愛らしく、腰をかけている人物を見て、私はフリーズ化から、やつと我にかかる。

豪華な椅子にその小さくて可愛らしいお尻を、ちょこんと乗せて座っている人物。

その人物は、近づいてきた私達に気付いたらしく、手に持っていたティーカップをテーブルに置く。

その可愛らしいお顔、やや釣り目の「ほれそつ」な程大きい瞳に長いまつげ。

赤い唇は上向きでほほ笑んでいる。

ほほ笑んだ瞬間なんて、最高！可愛い！シャッターチャーンス！！

そんなアルメリアお嬢様は、私の姿を見た瞬間、眉をひそめて怪訝そうな顔をし、顔から笑みが消えた。

……

……………！

先日の私のとび蹴りを田の当たりにしたんですもの。その反応は普通ですよねーー！

可愛らしい笑顔のシャッターチャーンスなんて、今後私にはやつてきませんよね、当り前ですよね。

そこでお嬢様らしく

『わたくし、こんな野蛮な方とは席を『』一緒にできません』  
なんて言つて私を解放して欲しい。

期待を込めて視線を送るけど、  
ところがどつこい、お嬢様は私の方をまつたく見ない。  
スルー作戦を決めこんだらしい。  
まさに『嫌なモノは見ない』作戦ですかね…。

しかし、なんたるメンバーだ。

私の左隣にはアデレイ。その隣に座っているアルメリアお嬢様に、  
右隣にはジェネニーに、ラインは立つたままほほ笑んでいる。そして  
引きつり顔の私と。

自分以外の豪華フルメンバーに、気疲れと精神的疲労を感じてひそ  
かにため息をつく。  
ため息と同時に先程から気になる点が一つ。それは隣の席のあの方  
方。

庭園の入り口で、氷漬けにされ、薔薇のアーチをくぐつてここまで  
連行されたはいいけれど私達はまともな口を効いていない。

テーブルについたものの、黙つて私に腰をかけるように椅子を引いて  
くれたので、私も黙つたまま椅子に座る。

そうして自分は、私の隣の席に座った。

その後のアデレイはといふと、テーブルに肘をつき、手のひらに自  
身の顔をのせ、無表情にずっとこっちを見ている。まさにガン見。  
横を見るな、前を見る！…なんて今この場では言いたくても言えな

い。

先日の事もあるので、私は大人しくしている事に決めたのだ。

私はその視線に気付いてはいるけれど、彼の方は見ない、いや、見  
れない。

だつて睨まれそうでなんか怖いし！

ああ、本當なら、ジェネミーとあの場で別れて帰宅して一息ついて  
から、ゴロゴロと愛用抱き枕を抱いて昼寝をするつもりだったのに。  
何がどうしてこうなつた。

ぼけーっとしながらも、愛用抱き枕の手触りを恋しく思い、その抱  
き心地に思いを寄せていると、

「それで市場で買い物はどうだったの？」

ラインに不意に話を振られて、慌てる。

「あ、楽しかったです…よ…ね？ジェネミー？」

ジェネミーに相槌を求めるのと同時に、その台詞を聞いた瞬間、頬  
杖をついていたアデレイが何かを言つつもりだつたのか、口を開き  
かけた。しかし、私は気付かない振りをする。

そんな調子で私はアデレイの視線をずっと無視し続けて庭園を見て  
いた。

せめて縁で癒されたい。体と心も疲れた私に癒しを。

そんな中、アデレイが急に椅子から立ち上がる。

その瞬間、体が反応してビクッと驚く。急に立ち上がるなんて、驚くじゃないか。

非難する視線を送るつもりで顔を向けようとすると、

「じつちを見る」

あらう事か、アテレイは私の顔を両手でグイッと掴んで無理矢理に視線を自分に持っていく。

いでででで！痛い、痛い！

こりー無理矢理引っ張るな！首がもげる！いきなり何するんだ！

「あはは。アテレイってば強引だね。リツキが痛そうだよ

紅茶を自ら率先して淹れてくれていたラインが、愉快そうに声を出して笑うけれど、笑うところじゃない！

それにアルメリアお嬢様も目を細めて、じつちを見ているし。その視線こそ、刺さりそうで痛そうで怖い。

「ずっとじつちを見ないから見るようにしてただけだ」

なにその、手加減なしの力技は。

ハーブロンドに輝く髪に、吸い込まれそうな程に蒼く深い瞳。その瞳の中に、先程感じた冷たさはもう感じられなかつた。

…こうして視線を合わせると、何だか久しぶりに会つたと今更ながら実感した。

私は大きくて温かい両手に、顔を掴まれて身動き出来ない姿勢だ。いきなりのアテレイの行動に反抗したくても力じやかなわいのは

わかつてこるので、  
せめて思いつきり睨んでみた。

「…相変わらず元気そうだな」

ふつと笑うと、手を離してくれた。全く、顎外れるかと思つたわ。  
いきなり何すんねん。

元氣かどうか何て、顔をのぞきこまなくても確認出来るでしょうに  
!

## 59 シュガーポット

アーテレイに両手で掴まれ、持ち上げられた顔を解放された後、私は首を振つて姿勢を直す。

急に掴まれたので、地味に首が痛い。生身の人間なので、もつとそつと優しく扱つて欲しい。

「あーもう、シュガーポットが空になっちゃったね」

私が首を回して首体操をしていたら、ラインがおしゃれなガラス細工のシュガーポットを持ちながら、砂糖がなくなつた事を残念そうに告げる。こじゃれた細工のシュガーポットの中は、もうわずかしか入つていない。

空になりそうなシュガーポットを見た途端、私の目が光る。

そのチャンスもらつた——！

「ぜひ！私が取つてきます！」

このチャンス逃すまい！意気込んで名乗り出て立ち上がる私。砂糖を取りに行く任務を仰せつかつたら、私はちんたらちんたら遠

まわりして砂糖を取りに行き、

帰り道はゆっくりゆっくり、砂糖をこぼさないように慎重に慎重に歩いてこの場に帰つてくるのだ、そうしよう。たとえ遅くなろうと時間稼ぎと思われようが、いいのだ。この場にいる苦痛を考えたら、のろまと言われた方がマシだ。シュガーポットを持つラインに勢いよく両手を差し出す。

さあー私にちょうだい！そのショガーポットをー。

ヘイー！カモン！

私の申し出を聞いた後、ラインはにっこり笑い、ジョネニーの方を向くと

「じゃあ、ジョネニー、申し訳ないけれど、もうひとつてくれる？..」

「…………は？いや…………私が！」

ラインの持つショガーポットを受け取ると更に手を伸ばすも、ラインは笑顔でやんわり拒否をする。

「いいよ、リツキ。いつもはリツキが動いて紅茶を淹れる役でしょ？今日は特別にゆっくりしてなよ」

「でも…………」

「だつて、お休みなんでしょう？今田は」

にっこり優しく微笑みながら、私を気遣う素振りを見せたラインだけれど、

私をいたわっての発言なのか、いたぶつての発言なのか、ラインの真意はわからない。けど、きっと後者。

ジョネニーに向かって

「『じめんね、厨房のアドマに置いて砂糖をもひつてきてくれる？』リツキも市場で歩き疲れていると思うからね。それに疲れた時は甘い物が一番って言うでしょ？だから甘い紅茶でも飲ませて疲れを取つてもらいたいしね」

ラインに頼まれたジエネミーは、私を見て「まつたく、お前はしじうがないな」と嫌そうに咳きながらも、すぐさま席を立ち上がり、ガラス細工のショガーポットを手に厨房に向かい歩いて行く。

ちゅ……なんでこんな時ばっかり素直なの？

いや……私が行くしーむしろ行かせてお願い！

こうなりや強行突破で、ジエネミーの手からひつたくつて走つて行くか？

そんな考えが頭をよぎつた。

「良かつたねえ、リツキ。とつあえず座つて待つてたり？」

いや、良くないしー

そのまま追いかげようか齒むとに、やんわり座るように強要する。

ライン……私をどうやっても解放しないつもりだな……。あなた、この場を楽しんでるでしょ……。

私の態度を見て、拒否してゐつて、勘のいいラインの事だから気付いていないはずはない。

もしかして『リツキは何をそんなに拒否しているんだ？』と思いつ、様子を見ているのかもしれない。

それか……またか……。あの背後からとび蹴り事件を知つてゐるんじゅ

ないのかと、疑いたくなつた。

だから、私の動搖を楽しんでいるのかもしれない。

もしや…どこからか見ていた？私の華麗なる蹴り技を。確かあの時、周囲に私達以外、人はいなかつたはず。

しかし、私も夢中になると周りが見えない性格なのでいまいち自信がないけれど…。

もしや、柱のかげ、ドアの隙間、壁の間からこつそり見ていたとか…。

『「JXT様は見た!』シリーズかよ！』

一人心の中で突つ込む。

いろいろな憶測が頭をよぎるが、ここで下手な事を口に出しては自分の首をしめる結果にならかないと判断し、黙つてる事に決めた。下手なツッコミは危険だ。口は災いの元とは、昔の人はよく言つた。

紅茶を淹れてもらい、砂糖もミルクもなしに、まずはストレートティーのまま一口飲むと、

紅茶の葉っぱの渋みと香りが口の中に広がる。

…おいしい。

やはり喉が渴いていた私は、もう一口続けて飲む。

ストレートティーでも、紅茶そのままの味が味わえて私は好きだ。確かに疲れている時とか、ちょっと砂糖が欲しいけれど、このままでも十分美味しく感じる。

喉を潤し椅子に座つて庭園を見渡すと、縁に囲まれ、色とりどりの花が咲き乱れていて、その綺麗な花の数々に見とれてしまう。風が肌に心地よく、近くの噴水の水は太陽に反射して水しぶきは輝

いている。

きっと手や足を噴水に浸すと気持ちいいだろ？。

そんな庭園を見ていると自然と心が落ち着いてくるを感じる。

そうだよね。

いくら気まずくて避けていたって、いつまでも避けれることはない。

私一人が焦つて動搖していても、しょうがないし。

なるようになるわ。

それに、アデレイもアルメリアお嬢様も、この場では、何もあの時の事に触れてこない。

きっと子供じゃないんだから、過去の事は蒸し返すつもりはないのかもしねり。

最初はアデレイが怒ったような雰囲気だつたけれど、その後はアデレイの態度がいつもより違うとか、そんなの感じられないし。

もし、ここで会つたのが一対一だつたら…と想像すると、私はどんな態度をとつたのだろう。

例えば前方から一人で歩いてくるアデレイがいたとする。

私は、きっとその場で回れ右をして引き返したい衝動に駆られただらう。

いや、実行して走り出すかもしれない。

そうして、その後はお決まりの、自分の行動に後悔して悩むパターン。

そう考へると、逆に今この場で、大人数で会つたから良かつたのか

もしけない。

ただ、アルメリアお嬢様は私の事、快く思つてないのはわかる。そりやあ、愛しい婚約者に目の前でとび蹴りくらわした女だもんね。もし、私が逆の立場で、自分の婚約者にとび蹴りくらわした人がいたら、

私もその相手にとび蹴りしちゃつかも。カウンター、これ発動。

そう考えると、アルメリアお嬢様が私を嫌う理由は理解できる。むしろ好きになれ、って言うほつが無理よね。

しかし、こんなに可愛らしい女の子に嫌われるつて、やつぱりチト悲しい…。

しかし私なりに、あの蹴りにも理由があるのだ。

そもそも、アルメリアお嬢様という婚約者がいるくせに！  
アデレイ、コヤツは何をやつてるんじやーー！

一連の出来事を考えていると、思いだして頬が赤くなつてきた。

婚約者がいるくせにーこの浮氣者！

隣のアデレイをジロリと睨むがアデレイは涼しい顔して見つめ返すのみだ。

そこで、ふと、ある記憶がよみがえる。…………あれ？

そう言えば、以前『アルメリアは婚約者の第一候補であつて決定ではない』って言つてたよつな…。

……と、いう事は、まだまだいっぽいいるのか？婚約者候補達…。

そもそも、この国つて何人と結婚出来るの？

一夫一妻？それとも一夫多妻制？

一人考え事をしていたけれど、隣の席のあの方の視線を相変わらず感じるので、その視線の主のアーテレイをまた睨む。

このスケベ！

心の中で悪態をつき、次回、私に無断であんな事をしたら、蹴りは蹴りでも後ろからではなく、前からにしようと心に決め、また紅茶を一口飲む。

そんな血の氣の多い事を考えながら、薔薇の香りが強く、緑と花々が色鮮やかな庭園を眺めていた。

薔薇の香りが強く、緑と花々が色鮮やかな庭園を眺めながら

「本当に綺麗な庭園」

ポツリとつぶやくと、

「気にいった？」

ラインが嬉しそうにほほ笑む。

仕事でよく庭園へは来ているけれども、休みの日にゆつたりと椅子に座つて紅茶を飲みながら、じつやつて庭園を眺める事は初めてだ。

「アルメリアのティラン家の庭園も見事なんだよね」

その後、ラインとアルメリアお嬢様の一人で、庭園の話題で会話が弾んでいたみたいだけれど、私は会話には入らずに庭の花々を眺めていた。そもそも私の家には庭園なんてなかつたし。まあ、いち庶民なので当たり前なんだけど。自慢出来る事といえば、こっちの世界のトマト畑ぐらい。人様の土地だが、あのトマト畑は私の自信作。あの場所は、私の癒しの庭園、いや赤い楽園だ。

「そう言えば、庭園に新種の薔薇を植えたって聞いたな

「まあ！何色かしら？」

おおっ！

アルメリアお嬢様、薔薇の話題にがつきました。

アルメリアお嬢様は、興味津々と瞳を輝かせている。

そう言えど、ヒューストン伯爵家に来た初日、部屋に飾つてある花を全部薔薇にかえるよう言われたな。

余程、薔薇が好きなんだろう。私がトマトを好きなのと同じぐらい好きなのかな。

「深い青色の薔薇だつて聞いたけど、僕もまだ見ていないんだ

「それは珍しいわ！ ゼひ、『』一緒に拝見させて頂きたいですわ！」

興奮気味に立ち上がるアルメリアお嬢様の赤茶色の瞳は輝いている。赤が強めの茶色の髪は柔らかく自然なウェーブで流れるように風に吹かれている。

ラインは庭園の右側にある柵の奥を指さして、

「じゃあ行こうか。薔薇は向こうの柵の奥だよ

「ええ……あつ！ でも……」

つい先程まで、わくわくして瞳を輝かせていた様子のアルメリアお嬢様は、ふと何かに気付いた様子で躊躇する様子を見せる。何だろう？ どうしたのだろう？

その時、不安そうな目をしたアルメリアお嬢様と目があつた。

『あ、このお茶会に参加してから、初めて目が合つた』

赤茶色の瞳はまるでビー玉みたいに輝いて綺麗。そんな呑気に考えていると、

「さあ、行こうか

アルメリアお嬢様の躊躇する様子を気付いていないのか、それとも気付かないふりなのかはわからないけれど、ラインは少し強引に、躊躇する様子のアルメリアお嬢様の手を引いて進む。

「でも…アーデレイド様が…」

心配そうな声色を出すアルメリアお嬢様に

「アデレイなら、ここで待つてるって」

ラインがアデレイに視線を送ると、アデレイは軽く目で合図してうなずく。

そんな様子のアデレイを黙つたまま不安そうな瞳で見つめているアルメリアお嬢様。

そうして、チラリと私の方を見る。あ、また目が合った。

もしや、アルメリアお嬢様は私とアデレイを一人つきりにするのが不安だとか…？

もしかして、また私がアデレイに蹴りをくらわすかもしれない不安に駆られているとか…？

大丈夫！それはない！…………多分…。

……アデレイが変な事をしなければ…。

だから、安心して薔薇を見に行くといいよ！

いささか強引なラインの様子に、はじめ戸惑う様子で後ろを振り返りながら歩いて進むアルメリアお嬢様だつたけれども、途中で観念したらしく、大人しくラインについて歩いて行く。

青い薔薇か…。実は、私も見た事がないので興味があるので。  
すごい珍しい色だと思う。薔薇と言えば、赤やピンクや黄色が一般的だと思うの。

そう言えば、カリ亞が休憩時間に『神秘的な青い薔薇を見た!』と興奮気味に話していたのを思い出した。

どうしよう。私も見たいかも。今ならまだ間に合うかな、ラインとアルメリアお嬢様にくつついて見に行く事も出来るよね。

歩いて行く一人を追いかけようか少し迷った挙句、

『やつぱり私も行くー!』

心の中で叫び、椅子から立ち上がったその時、左手首が何かに掴まれ、急に力強く引かれるのを感じた。

おおおつとーーー!

力強く引かれた私の手首を無言で見ると、掴まれて拘束されていた。もちろん、左隣の席に座るお方の手によつて。

「…………」

「…………」

掴まれた自分の手首とアーテレイの顔を交互に無言で見つめ、視線で意図を伝えようとするが伝わらないみたいで、私の手首から手を離す様子は見られない。なので、

「…………手」

「…………」

簡潔に一言告げる。しかしそれも無視かよつーなうば、

「手首を離して欲しいのだけれど?」

「…………」

低姿勢でお願いしてみるも、またもや無視される。椅子に座つたまま私の手首を掴んでるアデレイを、私は側に立つたまま見下ろす。

頬杖ついた姿勢で、右手はしつかりと私の左手首を掴んでいる。

「つなりや、ストレートに」

「なんで手首を掴んでるの?」

私も青い薔薇が見たい。早くしないことライン達が先に行つてしまつ。だから離して欲しいのに。

「……離せば行つてしまつだなつへ」

瞬間、手首により一層力が込められた気がする。

頬杖をついたまま私を下から見つめるアデレイの瞳は蒼い。きっと薔薇に負けないぐらい綺麗な蒼い色だと思つ。

けれども、まず行きたいから離してつてば。力を込めて引いてみても、離す気配は一向にない。手首を振つてみても、離れやしない。

……もう、いいや…。面倒だし。

何が面倒かつて、それはもちろん、アデレイを説得するのが面倒だつて事。

きっと、話が通じにくくなる上に、彼はきっと譲らない。

アデレイと付き合つていくうちに、彼には譲らない頑固な一面もある、つて事に気付いてきた。

それで不毛な会話を続けるぐらいなら、大人しくこの場に残る方を選ぶ事にする。

今日は、私が引いてあきらめ、大人しく椅子に座りなおす。

しばらくするとラインが、アルメリアお嬢様に何かを告げ、その場に少し待たせてこつちに走つて戻つてきた。何だろう、何か忘れ物？アルメリアお嬢様は、その場でたたずみ、そんなラインの様子を見守つていた。

ラインは走つてテーブルに戻つてくると、すぐさまアデレイに向かつて、

「アデレイ、君が愛用している万年筆があつただろう。…アレが欲しいな」

笑顔で催促するラインと、それに対するアデレイは少し考える様子を見せた後、

「……ああ

といい、『了解』とばかりに片手を上げてサインを送る。

そのサインを受け取つた後のラインは、私達に手を振りながら笑顔

で、待たせているアルメリアお嬢様の元へと駆けて行く。

「何？今の？？」

ラインのおねだり？

欲しがったからと書いて、愛用品をそんなにあつさりとあげやつ  
の？このお金持ちめ。

欲しがるからと書いて、何でも物をホイホイあげていてはダメなん  
だぞ。

アテレイに説教じみた非難の視線を送るけど、別に気にした風もなく  
その視線を受け止めながら、

「交換条件だ、って事だろ？」

「… 交換条件？何と？？」

私は、一瞬意味がわからなくて、きょとんとした後、キヨロキヨロ  
と周囲を見渡す。

庭園の風景は、先程と別段変った所もなく、花美しく緑鮮やかに癒  
される空間。

風が心地よく、私の髪が風になびくのを感じながら庭園を見渡した  
後、  
隣の席のアテレイを見ると、豪華なテーブルに頬杖ついたまま、静  
かにこつちを見ている。

不思議顔の私は、彼を無言のまま見つめる。

アテレイも無言のまま。

私と彼はしづらく音のないまま見つめ合ひ。

ハニー・ブロンズの髪は、光を受けていつせつと輝き、蒼く深い瞳をじかに真っ直ぐに向けていた。

気付けば、庭園に一人つきりの状況だ。

あれ……。

もしや……。

もしかすると……。

ラインめ――――私の事売ったな――――

私がその事実に気付き田を見開くと、頬杖をついて無表情のままこちらを見ていたアーテレイは、口端をかすかに上げて笑った。

ラインの策略に、はまつた事に今更ながら気が付く。

しかし愛用万年筆と交換してまで私と一人つきりの状況になりたいなんて、何で?どうして?

私は少し身構える。

「もう固くなるな」

苦笑しながらもアーテレイは、

「ラインは、ラインで気をきかせたつもりなんだろう」

「何の氣だ！ どんな氣だ！ 気になる木！」

「まあ、万年筆を持つてかれたのは、少し予想外だったが……」

「相変わらず抜け目のない奴だと、目を細めて楽しそうに笑うアーティは

まあ、あれはラインの照れ隠しでもあるがな、と付け加えた。

「けど、大事にしていた万年筆なのでしょ？」

「昔、自らアーティザインして職人に造らせた万年筆ではあるが……」

「おいおい、それはオーダーメイドと言つのだよ、アーティ君。私は慌てる。

「そんな高そうな物いいの！ あげちゃって……？」

「この時間に比べれば錯しきはないだろ？」

目を細めて楽しそうに笑うアーティは、どうやら本当に万年筆をあげちゃうみたい。

お金持ちの感覚はいまいちわからない。

そうして薔薇の妖精はちゃんと万年筆を手に入れた。

それと……

そろそろ手を離してくれませんかね??

ラインとアルメリアお嬢様の後ろ姿を見送った後、とりあえずアーティに掴まれて拘束されていた左手首を無理矢理引っ張り、紅茶を淹れる為に立ち上がる。

またショネミーが砂糖を取りに行つたまま戻らなければ、ストレートでも十分美味しいから大丈夫。私は喉が渴いたし、アデレイの

紅茶をセッテし、蒸らす時間、沸き立つ紅茶の香り。

「あつー！そりだ！私ね、今日市場に行つたんだけど、『ランチ』つて言つ一般的な伝統料理の中にトマトがサンドされて入つていたの！もう感激して嬉しくつて、思わず涙が出た」

興奮して身振り手振りで話す私に、アテレイは黙つて耳を傾けている様子なので、私は続ける。

「それで、市場のおじさんの所にも顔を出したんだけど、売れ行きは好調で、苗もトマトも足りなくなる事もあるらしいの」

私は得意げに、

「誰かが喜んでくれるなら、それだけで私も嬉しい」

これぞ生産者の喜びってやつね

自分の姿を重ねる。

この世界で、初めは居場所がなかつた私。  
皆さん助けてここまできました。  
ただし、周囲の人達、

『居場所がなければ作るまでよおおー!』

そんな思いで畠の土を耕した事もあった。私はアデレイからティーカップを受け取り、紅茶を注ぎ入れると、紅茶の香りがティーポットから沸き立つ。

風が心地よい庭園で、のどかな時間が流れる。

「……それで畠には、ティアラをかぶつて行つてるのか?」

「うん、そう。……つて、そんな訳ないでしょー!」

アデレイと軽口を叩いて笑いながら穏やかに時が流れる。

何だか、昨日の私からは想像出来なかつたな、こうやつてアデレイと普通に会話してバカな話で笑うとか。アデレイも大人なので、あの一連の出来事は水に流す気なんだろうか。

それなら、それで私も水に流そう。しつかり蹴りもくらわしたし。

自分で上手くまとめて、淹れたての紅茶を穏やかな気持ちで口に運ぶ。

「……舞踊会のアレは痛かったな……」

ぶつほー。

聞いた瞬間、私は口に入れた紅茶を思わず盛大に吹きだした。

今、この平穏で穏やかな時が流れているこの時に、そんな話題出す? もう少し空氣読もうよー? ?

しかし、忘れていた訳ではなかつたのだと思い知つた。

もしかして、この2人つきりの時のチャンスを狙つていた？

それとも偶然思いだしたの？？どっちだよー！

それや、忘れてても忘れられない経験かもしけないけど、忘れる事も大事だぞ！？

それか水に流す事も。

前回の出来事は、忘れても人生になんら支障はない！

「強烈な体験だつたな」

人生何事も経験よ。しかし、どうぞ忘れてくれたまえ！

「女性からあの様に攻撃されるとは、

てゆうかむしろ忘れて。

「祖父から譲り受けた公式の場で着用する白コマントに、堂々と足跡が付いていたな」

……忘れて下さいお願いします。

やつぱり忘れる訳がないか…。そんな都合の良い事ある訳ないだろうと腹を決め、顔を上げると

「わかった。蹴りは謝る、ごめんなさい」

暴力はよくない。それはわかる。

場合によつては、罰せられる事もあると思う。私のいた世界でもそうだったし、こっちの世界ではアーテレイは高い身分なんだし、下手

すれば不敬罪として牢屋に入れられていたかもしれない。  
だけど…

「だけど、あれはアーテレイも悪いわ」

「…俺が？」

「そうだよ。私は謝ったわ。だから…」

「…………」

「アーテレイも私に謝つて！」

そうだ、そうだ。蹴りに至るまでの経緯を思い出して…そして私に謝つて！

乙女の唇ベロチュー事件。もしやアレをただの『挨拶だ』などと言つて済ます訳ではないでしょ？ そんな言い訳納得しないし、もしそんな事言つたら、その口縫つてやる。

アーテレイは、一瞬不思議そうな顔をした後、頬杖をやめて私に向き合つ。

そして椅子に座りながらも姿勢を正すと、私の視線よりずっと高い位置に視線がいく。

無表情に見つめられているが、ここで視線をそらしたら負けなような気がして、私も負けずに見つめ返す。

「確かに背後から蹴られて驚きはしたが、俺は怒っていない

「…………え？」

怒つてないの？私のクリティカルヒットを受けたのに！？  
アデレイ、もしやそつちの趣味の人？それは、それでドン引きだけ  
ど。

「あの時、驚いて後ろを振り向いたらもう姿がなかつた」

「だつてあれば、アデレイが…」

そりや、そうですよ。一田散に逃げ出しましたから。  
仕返しされるかと思ったんだもん。その反撃の為の準備をしに行つ  
たんだもの。

「…あればすまなかつた」

その時アデレイが、予想と違ひあまりにもあつさり謝罪してきたの  
で私は何だか拍子抜けした。何だかんだとの外れなことを言いそう  
な予感がして、覚悟していたのに。もしそうだつたら、今回ばかり  
は私も引く訳にはいかないので、話し合おうと思つていたのに。

「もうへ、一度としないと、約束する」

「…そつ、そつよ」

いつになく真剣に謝罪するアデレイに、逆にこいついた態度を取つ  
ていいのかわからなくなつた。

まずい…。こんな態度は予想していなかつたから、逆にこつちが動  
搖してしまつ。

「リツキ一人を置いて部屋から出て行く事はもうしない」

…ちょっと違ひ。

「言い訳になるが、アルメリアとあの場で鉢合わせしてしまって、お前が下手に口をつけられたら、あとあとまずいだろ。側にいる時には、かばう事も出来るが、離れている時に何かあつたら守る事も出来ない。だから、早々に冷たく無関心を装つて立ち去つたのだ」

アデレイの言い訳とやらは、わかつたが、私が謝罪を求めている部分と根本的に違ひのような…。

しかもアルメリアお嬢様には、もうとつぐに口をつけられている気がする。マーク済みな気がするわ。

伝えようかどうか視線をた迷わせる私を、アデレイはほほ笑みながら見つめて、

「…あの時の続きの催促だつたら、俺はこいつでもいいだ

私をからかうような口調で言つアデレイはやつぱり、懲りてないし、わかつていな。

「な、な…何言つてゐのよ…！」

私は一瞬にして赤い顔になり、文句を言つ。

アデレイは、そんな私を見て、口端を上げて楽しそうに口を細めて笑う。

「の…！まだまだ蹴られ足りないのか！」

私が赤い顔してもつと文句を言おうと口を開きかけたら、アデレイは急に真面目な顔つきになり、私に顔を近づけてきた。驚き、身を

引ひつかかる私に耳元でささやくように小声で

「…あの時は、多少強引で悪かった。自分の事ながら、俺も余裕がなかつたのだ」

驚く程、素直に謝つてきたアデレイに私はとつさに言葉が出なかつた。

そうして弾かれたようにアデレイの顔を見つめる。至近距離にあるアデレイの顔立ちは整つていて、薔薇の香りが強い庭園で、アデレイの香りが私の鼻腔をくすぐる。

「俺は王都に帰らねばならん。だから…」

何かを決意したように、力強い口調で話すアデレイから田が離す事が出来ない。

力強い蒼い瞳の輝きに、目が奪われる。

「アーデレイドさま！」

その時、足早く戻ってきたアルメリアお嬢様の姿が見えた。

彼女は、去つていつた時よりも駆け足でこちらに向かつてくる。名を呼ばれたアデレイはその姿に、一度視線をやるも、再び私に視線を向けると、

「…大事な話がある。今度時間をあけてくれ」

真剣な蒼い瞳から視線をそらす事が出来ずに、見つめ返す事しか出来なかつた。

そして、翌日の事だったのだ。

私が呼び出されたのは。

翌日、朝一にアドマさんから、午前のお茶の時間に名指しで使命されたので用意して部屋に出向くよひに命じられた。

「ご指名で、つてところが嫌な予感がしてくるのですが……。取り越し苦労だといいのだけれど。

……って、そんな訳ない、それは甘い考えだつて自分でもわかっている。

行きたくないけど、行かなければ。だってこれは仕事。重い足取りで、紅茶セットの入ったカートを押して目的の部屋へと進む。

目的の部屋に到着し、ノックを3回して入ると、私を名指しで呼んだ張本人がソファーに腰かけ優雅に座っていた。その姿を確認すると、何だか私にも緊張が走る。

けれども、仕事と割り切つてソファーの人物に礼をして、早速紅茶の準備に取り掛かる。

紅茶の葉をティーカップに入れてからお湯を注ぎ入れ、蒸らしていく間に焼き菓子を皿に用意して、温めたティーカップを取り出す。そんないつもの慣れた作業だけれど、視線をずっと感じていた私は落ち着かない。

紅茶をティーカップに注ぎ、焼き菓子の皿をトレイにのせ、準備は完了。

淹れたての紅茶の香りと焼き菓子の甘い香りを届ける為に、ソファーに腰掛ける人物に近寄る。

赤茶色のウエーブで波立つ髪と、同系色の瞳を持つアルメリアお嬢様は、そんな私の様子をずっと見ていた。

私を紅茶の時間に名指しで指名したアルメリアお嬢様は、先程から何も言わずにずっと私の動きを観察している。

正直、気まずい…。

名指しで呼ばれたからには、何か理由があるに違いないと身構えてきたが、特に何を言われるでもなく用意した紅茶を口に運んでいる。しばらく無言で紅茶を口に運んでいたので、私も傍らにつかえたまま部屋の窓から見える景色を眺めていた。

ふと、窓際に飾られていた大きくて白いガラスの花瓶が目に入る。今日飾られている花は、薔薇だ。正確には今日も薔薇だ。

アルメリアお嬢様は薔薇が一番好きなので、毎日部屋には薔薇の花を飾っている。今日飾られている薔薇の花は淡いピンク色の薔薇だった。

「あなたに一つ聞いておきたいのだけれど」

ソファーに腰掛けたアルメリアお嬢様が急に口を開いたので、私は上の空だった意識を元に戻し集中する。アルメリアお嬢様の感情のこもらない冷たい印象を与える口調は、部屋の空気を更に重いものとする。

先程まで、口に運んでいたティーカップをテーブルの上に置くと、

「アーテレイド様とどうじつた関係なの？」

畠仲間です。

…そんな事言えやしない。そもそも何と言えば良いのだろうか。何と言えば納得するのだろうか。

明確な言葉が見つからない。考えている間のこの沈黙が怖い。少し間をおいてから、

「えつと、アーテレイとは……」

畠仲間です。

…いやいや無理無理。そんな事言えないってば。私が言葉を濁していると、アルメリアお嬢様は私の言葉を聞きつけて

「だからなぜアーテレイド様を愛称でお呼びになるの？それ自体おかしいわ！あの人をそう呼ぶのは、ごく親しい人達だけよ！」

いきなりのアルメリアお嬢様の剣幕に驚いて、手に持っていたトレイを落つことしそうになつた。

だつて、アーテレイが自分でそう呼べって言つたんだもん。

そもそも本名知つたのなんて最近だし。…長すぎてフルネームを完璧に言える自信がないのは秘密だが。

それに、他にどう呼べばいいのかわからなかつたし…次回から『王子さま』とでも呼べば、アルメリアお嬢様は満足するのか？

急に、ヒステリックに叫ばれた私は、驚きつつもそれでも黙つて聞

いていた。このヒステリック具合から言つて、何を言つても今は聞く耳は持たないだろう。

アルメリアお嬢様は立ち上ると、私に赤茶色の瞳を向けて激しい剣幕で叫ぶ。

「私はね、ずっと生まれた時からこのカールディア王国の王になる人と生涯を共にするんだと言われ続けたわ。それが、私の使命だと思つて育つたわ。何人もいる婚約者候補達の中でも、第一候補と言われてきたし、幼い頃からあの方の側に寄り添うべく、礼儀作法も勉学も努力してきたわ。あの方の側にいても恥ずかしくない、釣り合つレベルになるよう努力してきた」

私の真正面に立つアルメリアお嬢様は、激情のまま私に言い放つ。その様子を黙つて受け止めて聞いていた。

「それなのに、あの方は婚約者候補達には目もくれない。…私も含めて」「

最後はどこか自嘲氣味に吐きだすような言い方をしたのに気付いた私は、何と返答すればいいのかわからず口を開きかけたが言葉が見つからない。

その様子に気付いたアルメリアお嬢様は、そんな私をきつい眼差しで睨むと、

「それなのに、あの方の側にはいつもあなたがいる。気がつけばアーデレイド様を愛称で呼び、あなたの側ではいつも笑っている。なぜなの？！」

アルメリアお嬢様は、怒つてはいるけれど、泣いている風にも見えて、そんな様子がどこか痛々しくも感じる。うつすら赤茶色の瞳に

涙が浮かんでいるのは、気のせいではないと思ひ。

「もしあなたを気に入つたとしても、ただの一時のきまぐれな遊びよ。あなたなんかに本気になる訳がないわ！ 婚約者にでもなれると思つたら大間違い。よくて愛人どまりよ」

赤茶色の瞳に怒りをにじませて、皿を吊り上げて叫ぶお嬢様に、最初はポカーンとして開いた口が塞がらなかつたが、お嬢様の言葉を頭の中でもう一度リピートかけると、怒りがふつふつをマグマのように沸いて出てきた。

黙つて…

聞いていれば…

好き勝手に…

私だつて言わせてもらひわ――――――！

まくしたてる一方的な剣幕に、私だつて負けとはいられない。

直前まで頭の中で『相手はお客様、ここは我慢よ』『言い返して機嫌を損ねたら下手すりや首が飛ぶ。明日から異世界でもハローワーク通わねば』など、身の保証を考えて黙つていたけれど、さすがに『きまぐれな遊び相手』とか『よくても愛人』とか言われるのは、ブチッとキレた。

だつて、私の言い分なんて聞いちゃあいない。こうなつたら、もうどうにでもなれ！と、捨て身で皿を吊り上げるのは、今度は私の番だ。

「一言、言わせてもらいますが、『冗談じゃないです！一方的に怒られて、遊び相手だと愛人だと！』言つておきますが、遊び相手も愛人関係もどっちもお断りです！」

アルメリアお嬢様は、私の反逆に目を見開く。  
もしかして、あまり人から反逆された事などないのかも知れない。  
そりや、そりだよ、お嬢様だもん。

…だけど、私は言つよ！もう止まらないし！  
こっちの世界で、何の身分もない私だけ、言われて我慢出来ない  
事つてある。

「それに私は、婚約するなら、私一人を愛してくれる人とします！  
遊びも愛人も公認の婚約者なんて誰がいるかーー！」

私は誰かの遊び相手になるつもりも、愛人になるつもりも、これつ  
ぱつちもない。

例え相手がどんなに顔が良くても身分が高くても、私一人を愛して  
くれる人じやなきや嫌だ。その他大勢の女なんて嫌。オンリーワン、  
これ当たり前だし、譲れない。

アルメリアお嬢様は唇をきつく結び、赤茶色の瞳を吊り上げ私を見  
ている。

その瞳に怒りの色が見えるのは、決して氣のせいではないはずだ。  
対する私だって、怒りモードの顔つきをしているに違いない。昔か  
ら『考てる事が顔に出るタイプ』と言われた私だもの。ちょっと  
は顔に出さずに隠せよ、私！……いや無理、今回ばかりは隠せな  
い。

じりじりと無言のまま視線が交差し、空気が凍る。

ほんの数十秒の睨みあいか、はたまた数分の睨みあいなのか、わからぬけれども時間が長く感じられた。

その時、部屋にノック音が響き渡る。そのノック音は優雅にゆっくりではなく、どこか焦つているような音の大きさと速さで部屋に響き渡る。そのノック音に一人我にかえると、アルメリアお嬢様はノック音のした扉に視線を投げると、一言「どうぞ」と扉向こうの人物に声をかけた。

「失礼するよ」

ノック音の主が、このギスギスした空気の場に似合わない爽やかな笑顔で部屋に入ってくる。

「急に『ごめんね。だけど…』

ラインは突然の入室をまずは謝る。そうして、次に薄紫のすみれ色の瞳を困惑ぎみに、口元を言いにくそうに歪めて

「廊下まで響いていたから、気になつて…」

あ…

やば…

……………。

そうね。そうよね。聞こえたわよね。廊下までつづぬけよね。けど…

かまうもんか！

「一体どうしたの? 一人とも」

「…………」

「…………」

事情を尋ねるラインに私とアルメリアお嬢様は、二人共黙つたままだ。

どうしたもこうしたもー空気を読めば察してると思つけど、バトル中です。

とんだ言いがかりを受けてる最中! けれども、この場でラインに言つのも何だか告げ口な様な気がして、私は黙つたまま立っていた。

「…立場をわきまえた方がよろしいと忠告していただけですわ」

しばらく沈黙が続いた後、先に口を開いたのは彼女の方だった。

「アーデレイド様の立場も考えずに、側をうろついていらっしゃるから、迷惑を考えた方がよろしいかと、忠告していたんですね」

それは、誤解。つらちよろしてくるのはアーデレイの方だ!

反論したくなり、口を開きかけるが、ぐつとこらえる。そんな事を言つたら、ますますアルメリアお嬢様の目はつり上がるだろう。まさに火に油をそそぐ結果になるのは目に見えている。火、ボツ!!

それに、今はラインが事情を聞いているのだ。  
側で言い争う訳にもいかないので、ぐっとこじえて黙つて聞いていた。

「へえ……そ、うなんだ」

ラインは、なぜか納得した顔でアルメリアお嬢様の話を聞いて頷いている。

「そうですね。アーデレイド様はお忙しいお方ですもの」

アルメリアお嬢様は、多少落ち着いてきた様子で、そう言つけれど、  
私から見てアーデレイドのどこが忙しいのかわからない。  
毎朝畠に来て、トマトを観察する程時間を持て余してこらるよつて思  
える。

「そう。……確かに迷惑はかけちゃいけないよね」

ラインは、私に視線を投げた後、笑顔でやんわり言つ。

……え？わたし？

私はラインの言葉と向けられた視線の意味を考える。

はい——？

私、悪者？？

決定！？

完全に出遅れた——私の言い分ど二——？

黙っている事が美德とされる日本人な私だけど、やはり二には自己主張ガンガンにいくべき、と考え直し口を開きかけた瞬間、

「けど、友人の僕からも一言、言わせて欲しいな。アデレイは、王都での日々の忙しさに疲れてここには避暑を兼ねて長期休暇に来たんだよ。自分の身分も最初は隠して、日々の業務から離れてただのアデレイ個人としての時間を過ごす為に」

ラインは私から視線をアルメリアお嬢様に移動させて、まるで小さい子に言い聞かせるかのように、声色は優しいまま話し続ける。

「その為に、必死になつて自分の業務を前倒しで片づけて、ここに来たんだよ。ゆっくり体も心も休める為にね。それなのに、いきなり王都から押し掛けて、アデレイを個人の都合で連れ帰ろうとする我が家ままお姫様に、正直めんどくさいと思うのが本音だと思つんだよね」

瞬間、アルメリアお嬢様の顔つきが変わった。

それでもラインは、なおも続ける。

「これを迷惑といわなければ、何を迷惑といつのだらうね？」

爽やかな顔で言われたけど、この言葉の意味にはアルメリアお嬢様に対するお説教でもあると気づく。

「……でも！ だつてそれは……私の友人が夜会を開く事になつたから、アーデレイド様のエスコートで一緒に出席して欲しくて……！」

アルメリアお嬢様は、ひるむ様子を見せながらもラインに自分の意見を語り、この意見を聞いていて思った。

『ああ、自分が中心の生まれながらのお嬢様だわ』と。

『なんだよね、自分の都合のためなら、相手の都合はお構いなしの自己中心的な人。』

『この世界にも、どこの国にもいるもんだな。これも万国共通ね。生まれながらのお嬢様なので、それが当然で当たり前の感覚なのかもしない。』

『でも、人付き合いする上で相手の気持ちに立つて物事を考えられるようになると、人間関係がぐっと円満になる気がする。』

『エスコートだけなら、誰でも出来るだらう。それに一緒に出席したい理由は、他の婚約者候補への牽制の為だらう？ それこそ、君を一回だけでもエスコートしたいと名乗りを上げる紳士はたくさんいるはずだらう』

『…それでも私はアーデレイド様にエスコートして欲しくて…。休暇中でも会つて頼めば何とかなると思つて…』

ラインは、首を横に振りながら、少し残念そうな声色でつぶやく。

『アルメリア…。アーデレイは、そういう所が疲れてここに来たのに。君は何にもわかつていなー』

アーデレイの立場になつて考えてみたらさ、そりや、誰だつてのんびりの休暇中に、たつた一回の夜会にエスコートして欲しいが為に、休暇先まで押し掛けられ、連れ戻しに来られたら迷惑だわ。

最初はアーテレイが、なかなかアルメリアお嬢様に会おうとした理由がわからず、「

『会つてあればいいのに!』なんて思つていたけれど、理由も知らずにアーテレイを責めてしまつていた過去の自分を反省し、アーテレイごめんと、心の中で謝る。……よし、反省終わり。

「彼がこの地に、そして……魅かれるのは無理はないだろ?」

ゆつくりとラインとアルメリアお嬢様は視線を合わせた後、アルメリアお嬢様が問いかける。

「……ラインナルト様は……誰の味方なの?」

「僕? 僕は誰の味方とかは特にないけれど……あえて言えば……」

ラインは、宙を見上げて少し考えた後、

「親友の味方……と言えばわかるかな?」

そして、薄紫のすみれ色の瞳で私を横目で見ると、小声でつぶやく。

「あとは、面白い事が好きだから、楽しくなりそうな展開の味方」

ちよ……

……サラッと書つたが聞き逃さなかつたぞ。今、何て言つた?

アルメリアお嬢様はそんな私達の様子を見て、悔しそうに歯を噛んだ後、

「異世界からの娘だから、もの珍しくて皆が同情しているだけでしょう。実際、元の世界に戻る手段も、時期もわからないんですものね！」

「アルメリア……」

その時、ラインが今まで聞いた事もないような声を張り上げて彼女を止めに入る。

けれどラインが声が止めに入ると、アルメリアお嬢様は益々しきりたつ様子で

「本当の事でしょう！元の世界に確實に戻れる保証はどこにもないって事は！私としては、いい迷惑な事だけれども！」

アルメリアお嬢様は、皿を吊り上げて私を睨みつけるが、肝心の私は動けないでいた。

彼女の鋭い視線も怒りの叫び声ももはや私の心に届かない。今この場所に立っている事が出来るのが不思議なぐらい足元がふらついた感覚におちいる。

彼女の台詞を聞いた瞬間、私の心の中で何かが壊れ始める予感がある。

え……確実に元の世界に戻る保証は……ない……の？

彼女の台詞をリピートするも、すぐさま否定する。

そんな事はないはず。だって、この世界には、たまに異世界人が紛れ込むって……

そして時期がきたら、帰るって……アドマさんもマーサさんも皆がそう言っていたし……

けれどここでは私は気が付いてしまったのだ。

ずっと心の中で疑問に思っていた事だけれど、改めて向き合って考  
える事をやめていた疑問。

この世界に異世界人がたまに紛れ込んで、  
まるでおどき話か、言い伝えかのように誰もが知つていてそつそつ  
けれど

具体的に、どこに、どんな人が来て、いつ頃元の世界に帰る事が出  
来たのか、

そんな具体的な話は一つも聞いた事がないという事。

言い伝えではあるけれど、はつきりとした事は誰にもわからないん  
じゃないのか…って。

もしかしたら、帰れる保証は誰にもわからないんじゃないの…って。

心の奥にあつた疑問に、向き合ってしまった瞬間呼吸が苦しくなる。  
胸が、まるで何かの病気のように苦しくなつて顔をゆがめる。

けれども誰かに、『そんな事ないから大丈夫だよ』って言つて欲し  
くて、すがるような目で周りを見つめると、ラインと目があつた。  
いつもみたいに笑つて『そんな事ないよ、リツキ』と言つてくれる  
のだと思つて期待を込めた目で見つめる。

けれど、その顔は、苦痛にゆがんだ表情だった。まるで、急な出来  
事に笑顔を取り繕つ暇もなかつたような、そんな顔つきだった。そ  
うして、ラインは私の視線を逸らした。…今まで一度だつて逸らし  
た事などなかつたのに。

…ねえ違うよね？

…違うひつひつとくられるんでしょう。

「……嘘でしょう…。だって、この世界に来て帰った人だっているんでしょう？」

声が震えて、けれどその震えを隠すように平静を装つてラインに尋ねたつもりだけど……駄目だ。声の震えが止まらない。

「……この国には確かに異世界からの迷い人がたまに紛れこむ事があるけれど…」

そこでラインは、眉をひそめてすうぐ言つてさうして口を閉じた。

そして視線を床に落として少し考えた後、何かを決心したかのように顔を上げて再度口を開きかけた。

やつぱり、やめて！自分で聞いておいて勝手だけど、その先は聞きたくない！

もう嫌な予感しかしない。今すぐ耳を塞いでしまいたい気分な私にラインは続けた。

「……過去に帰った事例は、ほんの数件だと聞く

そこで私は瞳を見開き息を飲む。

私の質問に観念したように口を開くラインは、それに詳しい事は誰にもわからないんだ、と小声で付け加えた。

嘘だ、嘘だ。

時期が来たら私だって帰るんだ

ほんの数件？ だつたら、その数件のうちに入ればいいんだよね？

田の前に叩きつけられた現実をすぐさま飲み込む事が出来なくて、身動きが取れない。

心臓が、どくどくと鼓動を増し、そして痛いー。

胸が苦しくて、自分で胸を押さえるも、何とか立ち続ける事が今の私には精一杯。

そんな私にラインは、すじく悲しそうに、そして心配そうな顔をする。

そして、そつと手を差し伸ばし、

「…リツキ」

私の肩に触れようとした瞬間、

「触らないで！」

声を張り上げて、ラインの手を突き放す。

拒絶されたラインは瞳を大きく見開き、差しだされた手は、行き場を失つて、だらりと下がる。

「私…！ 大丈夫だから…！ 心配なんてされなくとも平氣だから！ だつて、何人かは帰る事が出来たんでしょう？ だつたら、そのうちの一人になればいいだけだと思つから、だから、だから…」

精一杯の笑顔のつもりで声を張り上げて言つてゐるけど、強がりだつて自分で一番よくわかつてゐる。だつて、涙は頬をとめどなく伝つて流れる、止める事なんて出来やしない。だけど、今支えられたり、優しくされたら、私はその手にすがつてしまふ。相手が困るぐらい

に取り乱して泣きわめいて暴れると思つから、だから今は優しくしないで。

自分を奮い立たせないといけない時だから。

目の前の視界がぼやける、ラインもアルメリアお嬢様も皆がぼやける。けれど、ラインが私を苦痛の表情で見ているのをすく感じる。今まで皆がすく優しかったのは、私が帰る事は出来ないかもしないから、同情していく優しかったの？『時期が来たら帰る』という嘘をついた罪悪感から、親切にしてくれたの？

「絶対帰るから心配しないで！…」

号泣しながら、最大限の作り笑いを皆に向ける。これが強がりだと思われてもいい。  
あきらめて下を向いて泣いて過ぐすよつ前向きに考えたいと私は思う。  
ただ、今は流れる涙は止める事は出来ないと思つた。

「…じゃあ……もつ失礼します！」

空気が重く凍りついていた部屋から、逃げるよつに退散して、廊下を小走りで走つて進む。

ラインが私に声をかけよつとしたのはわかつたけど、それに気付かない振りをして誰とも目を合わせずに部屋から足早に走り出る。幸い誰も追いかけては来ない。けど、それでいい。

誰も来るな、同情なんてしないでほしい。

みじめになるから。

人気のない廊下を進み、普段あまり使われていない部屋の前まで来ると、その扉にもたれて、ずるずるとしゃがみ込む。

先程の聞いた台詞が頭の中でこだまする。

帰れる保証はどこにもないと。

叩きつけられた現実に、涙がまた溢れてきた。だけど、幸いにもここは一人。

声を押し殺しながらも、それでも漏れてしまつ嗚声を響かせて、扉にもたれてしゃがみこみ、しばらくは泣いた。

／＼＼＼＼

扉に背をもたれて声を殺してひとしきり泣いた後、そろそろ業務に戻らなくてはいけないと思い始めた頃、長い廊下の向こう側から歩いて来る人影が見えた。

いつもの余裕げな爽やかな微笑みと違つて、ひどく心配した顔のランが足早に私に近づいてくる。

「あはっ。大丈夫。なんか余計な心配かけちゃったみたいだね」

私は、から元気な声を出して立ち上がる。

「…リツキ」

私の強がりが痛々しいのか、ラインの顔も悲しそうに見えた。  
そんな顔されると、また泣きたくなつてくれる。

「ちよつといいかな？」

そうしてそのままラインに部屋の一室に連れていかれた。

革張りのソファーと大理石のテーブルに、豪華な調度品の飾られた  
その部屋に通されると、まずは座つて、と即されたので遠慮がちに  
座つた。そして私がソファーに座るのを見届けると、ラインは「  
ちよつと待つて」と言い残し、部屋から出て行つた。

改めて一息ついて、部屋全体を見渡すと高級そうな家具や本棚が置  
かれていた。

きっとここはラインの私室の一室であつて、書斎部屋なのかもしれ  
ない。

ぼーっとした頭で考えていると、部屋の壁に鏡が飾られているの  
に気がつく。

そこで私は立ち上がり、鏡をおそれおそれ覗き込むと、そこには、  
泣き晴らした真っ赤な田の私がいた。

…つまつ…

ブス！ブスだわ！

我ながら、ぶつさこくな顔になつてるわ！

傷心な私だったが、自分のブサイク度にビックリしながらも笑ってしまった。

目は真っ赤で、熱を持つて腫れている。誰が見たって一目瞭然、泣いたつて。

こんな顔で、仕事に戻つたら、皆に心配されるに決まつてい。

良かつた、ラインが声をかけてくれて。

泣いた後も、無理矢理擦つたから、ヒリヒリするし。

鏡を見ながら、目をそつと触ると熱を持つていて少し熱い。  
あちゃー、こんなじや、明日にはもつと腫れるかな。

しかし、こんなに泣いたのはいつぐらいぶりだらうか。この世界に  
来たばかりの時も泣いたなあ、そう言えば。

「お待たせ、リツキ」

そうこうしている内にラインが部屋に戻つてきた。しかも、先程私がアルメリアお嬢様の部屋に忘れたお茶のカートを持つて。

「…あ…じめんなさい」

「子息様自らカートを持って来てくれるなんて。本当、メイド失格  
だね、私。

カートを見ながら、お礼を言つて、カートと共に去ろうとする  
ラインはいつもの爽やかな笑顔を浮かべて、

「ああ、これは違うよ。たまには、僕が紅茶を淹れてあげようと思つてね」

「いえいえ！そんな！紅茶だつたら、私が……！」

「いいんだよ。僕だつて、自分で淹れる時もあるんだから。まあ座つてて。」じつ見えて『紅茶を淹れるのが上手い』って言われてたんだから

言いだすやいなや、早速ティーポットを持ちながら、準備を始めるラインに、どうじょづと困惑つていると、

「さあさあ、お嬢様、まずはお座り下さいな」

ラインは、さう言つと、にっこりと微笑んだ。その微笑みを見た瞬間、クラッコとくる。

何この、執事萌え。アゲイン。

偽造お嬢様と執事萌えフラグが再び立つた気がした、リアル執事力フェ再開。

私は、さつきまでの鳴いたカラスはどうに?の状態で何だかドキドキしている。なんて現金な私。

以前、アデレイとラインの二人にお茶の時間に対応してもらつて、かなりドキドキした事を思い出す。

いやいや、ただラインは紅茶を淹れてくれようとしているだけで、私が勝手に執事力フェとか想像しているだけなのだ。  
なんたる腐れた妄想するヤツなのだ、私つてヤツは。

そんな私の相手をするワイン執事様は、なるほど、慣れた手つきで紅茶を淹れ始めた。

その慣れた手わざの元、紅茶の香りにプラスされて向やう甘い香りが漂つてくる。

その香りは何だか泣いて疲れきった私を優しく包み込むような心地よい甘い香り。

ラインの慣れた手つきと、部屋に漂つた香りを心地よく感じていると、白い陶器で出来た花柄のティーカップを私に差し出す。

「はい、紅茶に甘いフレーバーホーリセансをほんの少し混ぜた僕のオリジナルだよ」

手渡された紅茶のティーカップから沸き立つ湯気は甘い香りがする。

「…すい、甘い香り」

「やう? 良かった。では、どうぞ、ご堪能あれ、お嬢様」

面白がつて丁寧に礼までする、リアルすぎるラインの執事ぶりに、やつぱりこんな執事喫茶があつたらはまる、絶対に。元の世界にあつたら給料つき込んでるに決まつて、そんな気持ちを再認識する。

手渡された紅茶を一口飲むと、口の中に広がる花の蜜のような味と香り。

一口飲んだだけで甘味が広がり、それと同時に心が満たされたような気持ちで、本当に美味しかった。

「美味しい…」

「ラインは、

「もう言つてもううて良かつた。フワリーエッセンスは、甘い味と香りで、気持ちを落ち着ける作用もあるんだよ」

そう言いながら、私の田の前のソファーに腰掛け、向かい合わせでティータイム。

体が温まって、甘い香りに包まれたら、なんだかとつても気持ちが落ち着いてきて、さつきよりも冷静に考える事が出来る。田の前のラインも紅茶を優雅に飲んでいて、先程の出来事は彼の方からは一言も聞いてこない。

「ライン……」

「ん？」

「あの……あらがとう

「うと」

優しく皿を細めてほほ笑むラインは、思い切つて尋ねてみる。

「そして聞きたい事があるのだけど……」

「いいよ」

ラインは、持つていたティーカップをテーブルに置くと、そのまま私の隣のソファーへと移動する。

「リツキが望む事は全て答えるよ」

まるで私がそう切り出す事を待っていたかのように真剣な顔つきになり私と向き合ってくれた。

そうして私は自分の聞きたい事の全てをラインに問いただした。

「このカールディア国には、時たま、異世界からの迷い人が現れるつてのは本当。だけど、僕もこんなに身近なこの地に現れたのは、リックが初めてなんだ。正直、僕も王都に行くまでは、話にしか聞いた事はなかつたんだ」

ラインは、静かに話しながらも続ける。

「だけど、王都にはいろんな人達が集まるからね。僕が聞いた話では、確かに一人ほど王宮に仕えてるって聞いたな。だけど、実際はもつと存在しているかもしれないし、何らかの事情で異世界から来た事を隠している人もいるかもしれないから、実際の所は、何人いるのか見当もつかないんだ」

ラインの言葉の一つ一つを聞き逃さないように、黙つたまま聞いている私。

「昔からこのカールディア国は『異世界からの迷い人は保護して面倒を見る』っていう考えが根づいているんだ。だから、かなり昔から迷い人はいたと思うんだ。実際、昔から異世界からの迷い人達の知識は、カールディア国にとつて有益になる事が多かつたらしいし。

『迷い人は時期がきたら帰る』というのも、ある意味あやふやであつて、真相はわからないのが本当の所なんだ」

ラインが話してくれた事実を、私は頭の中で整理する為、少しうつむいて考え込む。

本当の事は誰にもわからない…。

そして王都には私と同じ『迷い人』と言われる人が存在する…。

ラインの言葉が私の頭の中をぐるぐる回って反響する。

そんな私を下から心配そうに覗きこんだラインは、顔を近づけると、

「……だけど嫌？」

「え？ 何が？」

唐突な質問と、その顔の近さにドキッとした。

薄紫の瞳は、いつもの茶化すようなどこか黒い物を含んだほほ笑みではなく、

心の底から私を心配しているような、そしてどこか不安そうなスミレ色だった。

不安そうな瞳で瞬き一つすると、

「僕はリツキがこの国に、そしてこの地に来てくれた事をとても嬉しく思っているよ」

真正面から投げかけられた赤面モノの台詞に、照れてしまつ。そこで私も正直な自分の気持ちを伝える。

「私もそれはすごく皆に感謝しているの。この城の人達は私みたいに不得体の知れない人間に優しくしてくれた。

それが例え同情が混じっていたとしても感謝している。

……だから、迷い込んだのがこの地で良かつたと心から思うの

この感謝の気持ちだけは、本物。帰りたい気持ちとは別物。

ラインは、ホッとしたような安心したような表情を浮かべた後、満足気に微笑むと、

「それは良かった。それにトマト畠も立派に育つてるしね」

「ナニウチトマトもよく育つて……て、え？」

あっけにとられた私の顔を見たラインは吹きだして、

「あはは。僕が知らない訳ないでしょー」

「…………ですよね」

「はい、白旗あげました。その説はビッグもすみません、ってか、お世話になっています。立派だし、本當尊敬するよー！」

私のバツの悪そうな顔を見たラインは、

「畠の事は別にかまわないよ。なんかす、い事やつてるなあ、と思つてずっと見てたよ。よくあれだけの畠を作ったね。立派だし、本當尊敬するよー！」

いや、そんな所で尊敬されても……。

もつと人としてこう、尊敬されたい氣もするが、褒められればやはり単純に嬉しい。

しかし、良かった。土地の無断借用ではなくなった今この瞬間、ホッとした。

ラインはその後も興味深そうに聞いてくる。

「……で、あの畠はアーデレイと作ったの? 一人の共同作業?」

いやいや私の一人、単独作業。

アデレイは見てただけ　　！

「王都で、その『迷い人』は生活しているんだ……」

話を元に戻して、ラインに聞き返すと、彼は静かに頷いた。  
そうか。現在もいるつて事はまだ、帰つていないつて事だよね。

私みたいな迷い人がいる……。

どうやって、どんな経路でこの世界に来たのか。また、この世界に  
来て何年たつのか、いろいろと聞いてみたい。  
何か共通点でもあるかもしないし。それによつて帰る手段が見つ  
かるかも知れないし……。

王都か……。

名前からして国の中心部だという事はわかる。  
何だか都会で華やかなイメージだわ。

ここヒューストン伯爵の土地は、自然がたくさん残つていて、人ご  
みでごみごみしているのは、市場の活気ぐらいだけど、私的にはこ  
の程々の田舎加減が好きだ。

空気は美味しいし、緑は色鮮やかに優しいし、何より水も土もいい  
のかトマトもよく育つし。

そんな私が王都と言われても、いまいちピンとこないし想像つかな

い。

しかし、そんな王都には私以外にも迷い人が存在する。その事実に興味が沸かない訳がない。

帰れないかもしれない現実をどう受け止めているのだろう。私みたいに、『いつか帰れるだろう』と思い込み、のほほんと生きてる？

それとも、帰る手段を必死になつて探ししているのだろうか。

考え込んで沈黙になつていたけれど、いつまでもソファーに座つて考えこんでいる訳にもいかないので、とりあえず自分のやるべき事に戻らなくては。

「ライン、美味しい紅茶、ありがと」

「いいや、どういたしまして。ちょっとは元気でた？」

「うん、さつきは動搖してパニックになつちゃつたけど、ラインのおかげで元気がでたわ。だから、…ありがと」

私はラインの目を真つ直ぐに見つめてお礼を言つ。

ラインは軽く微笑み、そして薄紫の瞳で私を見つめ返しながら優しく静かな声色を出す。

「…リツキはもつと人に頼つてもいいんだよ」

「…うん」

「僕はリツキが泣いても怒つても受け止めるつもつ。…だから」

静かで、それでいて力強い意志を感じさせる声のトーンと、薄紫の瞳に吸い込まれそうに魅入ってしまいそうだ。

「もっと甘えてくれてもいいのに

ああ、この人は私をすでに十分甘やかしている事に気付いていない。そう、彼はいつもは私をからかうような言葉や行動が多くて、私の困る様子や動搖を楽しんでいる素振りを見せるちよつぱり困った部分もあるけれど、本当のところは優しいのだ。

ラインは、私が本当に困っている時には、絶対意地悪なんかしないし、じうじって助けてくれる。

そんな彼の優しさに、今度は違う意味で泣きたがる。

「… ありがと」

潤んだ瞳で照れ笑いをしながらお礼を言つた私に、ラインは目を細めて笑つた。

ラインと話した後、そろそろ仕事に戻らなくては…と、重い腰を上げる。

いくらひどい顔してるってわかつていても、いつまでも業務を怠つてはいけないわ。

お給金だって貰っているんだし。

座り心地の良い革張りソファーから立ちあがると、ラインは慌てて制す。

「ああ、待つてコソキ。その事なんだけど、今日せ僕の書棚の整理をお願いしたいんだけど」

急な業務変更の申し出に私は聞き返す。

「…書棚？」

「うん、そう。分野も種類も『じつやになつてゐから』も、整理をお願いしたいんだけど」

それなら私でも出来るだろ？と、即座に返事をすると、

「あと、今から書棚の整理を始めても、結構時間もかかると思つんだよね。だから、終るのは夜になると想つから、今日せ、一室部屋を用意するから、そこには泊まるといつよ」

「いえ、そんな！帰れますよ！」

「駄目駄目。夜も遅くなるから、泊まりなよ。それに、その顔をマーサに見せたら僕が叱られるよ、『泣かせたな』って。質問攻めは勘弁して欲しいしね」

ラインの書棚の整理つて事は、私が皆に会わなくても良こよつと氣遣いだと、さすがに鈍い私でも気付いたわ。

ラインの優しさに、心が温かくなつてくるのを感じる。まったく、ビハビハこんなに優しいのか。

気持ちを切り替え、書棚の整理を行う為に、腕まくりをする。

ラインは、用事があると言い、部屋から出て行つたので、一人になつた私は、ふと、壁に飾られた鏡が目に入る。

その鏡に映る自分の姿をみて驚愕。さつきよりも目が腫れて、一重まぶたのはずが一重まぶたにまで腫れている。..

瞳は赤く潤んでいるが、その瞳すらいつもの半分の大きさになつている。

『これは…ラインが誰にも会わせられないと判断したのもわかるわ…』

鏡の向こうに映っていたのはまるでアンパン ン

あんこのつまつていなアンパンマ

我が顔ながら、『ジャ おじさん、新しい顔持つてきて!』と思つたが、そうはいくまい。

鏡を見つめ、そのむくみ具合に力なく笑う。そうしてみると、ラインの言葉が頭の中でよみがえつてくる。

王都には、私以外の『迷い人』がいる。

鏡を見つめて、ぼーっとしながらも、私の心中は先程の言葉を何度も何度も繰り返していた。

眠れない。

なぜか、今夜は眠れない。

ラインが用意してくれた部屋は、客間にあたる一室で広くて豪華すぎて落ち着かない。

わざわざこんな豪華な部屋を用意してくれたラインに、最初は遠慮したのだけれど『せっかくだからいい部屋に泊まりなよ』といつラインに押し切られてしまった。

きっと彼なりに気を使つてくれたのだと思うけど、広すぎる部屋に豪華に飾られた調度品の数々に、私が5人程寝れそうな広いベッドに、何だか落ち着かないし、一向に眠気が来ない。

きっと枕が変わったからだと思う。ただそれだけの事なのよ。昼間の出来事は、もう私は気にしていない。

気にしていないし、大丈夫。

自分自身に言い聞かせるように繰り返し、ベットから抜け出し、そつと窓辺に立つ。

窓辺からは大きな満月の月明かりが入つてくる。

真夜中だというのに明るくて、窓辺は月光で溢れている。

月の光に誘われるよう、バルコニーへと足を進める。やつしてバルコニーへとつながる窓を開くと、

風が吹いた。

夜の匂いを運び、少し肌寒い風が私の肌を冷やす。

バルコニーは思つたよつも広くて、月明かりを浴びて暗い空間を作つていた。

月明かりに誘われるかのように月のまゝ足を進め、外の空氣を吸つ為に外のバルコニーに出る。

バルコニーの手すりに手をかけ、身を乗り出して月を眺める。

いつの世界で見つめる月と、私のいた世界で見つめる月は同じ。生活も習慣も異なつてこるのに、空に浮かぶ月は同じ色に同じ形だなんて、不思議だな。

ぽんやりと満月の月光を浴びながら、月を見る。

今、私は望郷の気持ちで月を眺めている。

それと同じように日本で誰かも私を思つて月を見ている事つてあるのかしあ。

不思議な気持ちで月を眺めていると、なんだか涙腺が弱くなつてしまつて、涙があふれてきた。

私が産まれた日も月が綺麗な満月の夜だつたそつ。

その時の月のように、同じにしても輝くよつこと、意味を込めてつけられたのが

私の名前、莉月<sup>リシキ</sup>といつ。

日本にいた時は、こんな風に月を見つめて泣いたりした事なんてなかつたのに、さつと月光を浴び過ぎたせいかもしれない。

しばらく、故郷を思つて涙を流れるままにして月を眺めていたら、

「リシキ」

不意に後ろで、聞き慣れた声がしたので、驚いて反射的に振り返ると、近くのバルコニーからアデレイが身を乗り出していた。

「…アデレイ」

そうだった。

ここはたくさんある客室の一室だから、アデレイの部屋とも近いはずだ。

けれどまさか、こんな時間まで起きているとは思わなくて、驚くと同時に、泣いていた事を知られるのが恥ずかしくて慌てて顔をそむけて手で涙をぬぐう。

そうして慌てて拭いた後、

「どうしたの？アデレイ、眠れないの？」

平静を装つてそう尋ねると、アデレイは返事をする代わりに、バルコニーから身を乗り出し、手すりに小さな長い足をかけていた。

ちょっと…ちょっと危ないよ、

焦った私が声をかけようとすると同時に

「あ…！」

アデレイはバルコニーの手すりに足をかけたと思ったら、瞬時にそこから飛び、私のバルコニーまで見事着地したのだ。

なんたる、瞬発力。褒めてやりたい所だが、しかし

「危ないよーアデレイー！」何階だと思つていいのー。」

そうだ、ソレは三階だ。下手したら怪我では済まなくなるの」

心配して怒った顔のままアデレイを見つめると、アデレイは

「何をしていたんだ？」

やつぱり人の話を聞いていない。

「まあ、いいや。いつもの事だし。

あきらめと、慣れと共に私はため息を一つついて、空を見上げると、「すう」いね、アデレイ。満月に満点のソラの星空、見ているだけで素敵だと思わない？」

そう言われてアデレイも、私と一緒に満月を見上げる。

「私のいた国でも、満月の時があつて、ソラで見る月も、私のいた所で見る月も同じだなあ……って見てたの」

アデレイはいつの間にか私の隣に立つて、一人で並んで月を見る。月光が私とアデレイを照らす。アデレイの月光に照らされた横顔は、いつも見ている私でさえ一瞬どきりとしまつ程の整った顔立ちに、やたらと輝いている気がする。

なんだか、何時も会っているアデレイに対してもん気持ちは持つ事を恥ずかしく感じて、慌てて顔をそむけ、月を眺める。月明かりは優しい光で私とアデレイを照らし出す。

そうして、どのくらい時間がたつたのか、しばらくは月に見とれていた。

ふと隣のアデレイを見ると、沈黙したまま真っ直ぐに視線をぶつけてくる。

「？」

首をかしげて何か言いたい事でもあるの?と聞いてみるが、何も言わずにはちらを見つめているだけのアデレイは月光に照らされて、その存在自体が輝いている気がする。黙つたままのアデレイに

「まだ寝ないの?ひょっとして寝れないの?」

私も眠れないんだけどね、そつぱんとした私に

「…今日の事、ラインから聞いた」

静かな口調で言つアデレイに

「…そつ」

そつか。聞いたのか。じゃあ、私が何となく落ち込みモードな訳は知つてるはずよね。

「…すまない」

唐突に謝られて私は咄嗟に

「何でアデレイが謝るの?」

アルメリアお嬢様の事?それとも帰れる保証はないつて黙つていた事?

けれど、どつちも私の問題だと思つ。

何だか、昼間の事にこれ以上触れて欲しくなくて、私はわざと話を逸らして同じ事を聞いた。

「もう夜中だよ。眠れないの？」

「お前が近くの部屋にいるのに、眠れるものか…」

えー何ソレ？意味分からん…と口を開けて笑おうとしたした瞬間、急に手を取り引き寄せられた。

そして私を包み込む、透明感と力強さを併せ持つアテレイ香りと甘い吐息。抱きしめられているのだと、認識した瞬間。

「なぜ、今泣いていた」

「…え」

力強く頭をアテレイの手で押さえられ、私の頭はアテレイの胸元へ、もう片方の手も私の腰にまわされていて、逃げだす事は不可能。だつて、アテレイに抱きしめられている。

この状態に私は急な事で頭がついていくはずもなく、なすがまま、されるがままの状態で抱きしめられていた。

身動きとれない程に力強く抱きしめられ呼吸する事も忘れてしまう瞬間。

優しく、けれど力強く、私を抱きしめているアテレイの香りに酔いそうだ。

抱きしめているアテレイの逞しい胸元から、私の耳に響いて来るアテレイの心臓のリズム。

思考停止している私に、耳元で囁かれる甘い吐息。

「一人でなんて泣くな」

「え…」

やつぱり気付いていたのか、アデレイ。泣いていたのがばれて、少し恥ずかしい私。

「元の国の月をみて、元の国の月を思い出し、一人で泣くな」

「……」

アデレイの胸元から、そつとアデレイの顔を見上げる。私が顔を見上げると、アデレイは少し腕の力を弱めてくれた。下から見上げるアデレイの瞳は月明かりに照らされて輝きを放ち、その存在は独特のオーラを放つ存在だと思う。人の目を惹き付ける魅力のある人だと、今更ながらに思い知った。そして、そんな人物に今抱きしめられる。

そんなアデレイの顔を黙つて見ていたら、アデレイの顔がだんだん下に、私の目線まで下がってきた。

あれ…

ちよ…

ちよつと…！ アデレイ近い…！ ちか…

せまつてくる至近距離のアデレイの顔に、だんだん焦つてきて抱き

しめられて いる私の体に力が入つて きた。

体に力が入つて きているのがわかつたらしく、アデレイは、

「… そ うい え ば 前 に も 近づ き す ぎ て 園 庭 で 張り 倒 さ れ た な

自嘲 気味に クスリと 笑う アデレイ だけ ど、その 笑顔 すら 月明かりに 照ら さ れ て 輝 いて 見える。

何 だ か、目 が 離 せ な い し、緊張 し て 心臓 の 鼓動 が 速 く 高鳴る。 だ け ど、そ れ を 認 め る の も 瘢 に 障 る の で、

「張り 倒 す に 決まつ て る わー！」

照れ 隠し に 強 が つ て 叫び、アデレイ の 胸 の 中 で アデレイ を 瞥 む。 アデレイ は、そ ん な 私 の 様子 を 一瞬 笑 つ た 後、急 に 真剣 な 顔 つ き に な り 私 の 耳 元 ま で そ つ と 降り て き て、 そ のま ま 耳 元 で さ さ や く。

「… 触 れ た か つ た ん だ」

静か に 小 声 で さ さ や か れ て 私 の 心臓 が ドクン と 波 打 つ。

「… お 前 に 触 れ た か つ た ん だ よ」

私の耳にかすかに触れる柔らかい感触はアデレイの唇なのかー。

## 67 感じる想い

弾ける水しぶきのような爽快感をイメージさせるベルガモット系の香りは、

透明感と力強さを併せ持つアデレイの香りで。

その香りに包まれた私は、自分の心臓の音が最大限に響いているような気がしてならなかつた。

アデレイは固まっている私に微笑むと、そのまま、私のおでこにキスを一つ落とした。

目を見開き、驚いている私にアデレイは軽く微笑んだ後、真剣な顔つきになり私に告げる。

「俺は、もう王都に戻らねばならん。だから……」

月光を浴びて輝き、まるで王者の氣品を放つアデレイはそのまま続ける。

「お前を連れて行きたい」

王都：？

昼にラインに聞いた事が頭の中によみがえる。

王都には私と同じで異世界からの迷い人が存在すると言つ。

私は、その人達に会いたい。会つて話を聞きたい衝動に駆られる。

そして「元の世界に帰れる手段がわかるのなら 」。

そこでふとアーテレイは私をなぜ王都に連れて行きたいと言つたのだろうか疑問に思つ。

うつむいて考えこんでいた顔を上げ、アーテレイを見上げると、彼は私にその疑問の答えを告げる。

「……側にいて欲しいと思つ」

だけど、私は元の世界に戻りたいの。

私にとって、もし王都に行くつてなつたら、元の世界に帰る手段を見つける為に行くんだよ？

だけど、それは側にいて欲しいから王都に来て欲しいアーテレイと元の世界に帰る手段を探す為に王都に行く私と矛盾してない？

アーテレイのその気持ちを私は利用する、って事になるんだよ。私の複雑な表情の意味を感じとつたアーテレイは、

「俺は、お前が側にいて欲しいと思つ。……たとえ元の世界に戻る手段を探す為に王都に来ると言つても、俺は喜んで受け入れるだろつ」

私の考えている事を見透かしたようにアーテレイは『それでもいい』と言つ。

「王都に来たら、いつか帰る手段を見つけるかもしね。その時までは、帰りたい気持ちを躊躇させる程の男になろつ。その前に王都に戻つたら、俺もいろいろやるべき事や、片をつけるべき事が出来た。」

アルメリアや他の婚約者候補達の事情も含めて、「だ

アデレイの真剣で真っ直ぐな視線を向けられて、私は口を挟む事も出来ずに聞いていた。

「側について欲しいし、その力を貸して欲しい。…俺が今言えるのは、ここまでだ」

側について欲しい。

田と田を合わせて、そつはつきりと告げられて、まだまだ私の知らない事の多いこの広い世界で、こんなちっぽけな私の存在でも必要してくれる人がいると思うと、心は動搖しながらも、正直嬉しく思つた。

「…その先もはつきりと言葉にしたいが、まだ俺はそれが口に出来る立場ではない」

どこか少し心残りな様子で、けれどもはつきりと言つて切るアデレイは、自分の中で何かを決めているようだった。

その先の…言葉…？

アデレイは一休私に、何を言つつもりなの…？

「…今、その言葉を口にしてしまつたら、お前に対して不誠実になつてしまつだらう。」

「だから王都に戻りすべてが片づいたら、その言葉を口にしよう」

熱を含んだ蒼い瞳は、ぶれる事なく私を真っ直ぐに上から見下ろす。私もアデレイの瞳を見つめ、数々の言葉の意味を考えていた。

もしかして…

アデレイ…

私の事…好き…な…の…?

その可能性に気付いた私は、そのまま包み込まれる姿勢で、そして黙つたままアデレイを見上げている。

月明かりは、優しい光で私達を包み込む。

アデレイは、自身の右の手のひらでそっと私の頬を軽く、そして優しく撫でる。

はつきりと口にしなくとも、アデレイの瞳を見ているだけで、そんなアデレイの気持ちが伝わってきた。

月明かりに照らされて、蒼い瞳は神秘的に熱を持ち、その輝きを放つている。

「……仮に私が一緒に王都に行つても…特別力になれる程、何かを出来る訳ではないよ」

買いかぶられても困るので、そんな大それた才能も技術もないという事を、あらかじめ宣言しておく。

「…側にいてくれるだけでいい…」

笑つて言つアデレイが、ふと顔を上げる。

「…風が出てきたな」

確かに先程より風が強くなり、アデレイのハーブロンンドの髪も風に流されている。

そうして、ゆっくりと私の体を離して解放する。

「そりそり部屋に戻つたほうがいい。風邪をひく」

「あ…うん」

素直に返事をする私にアデレイは

「それに、俺も男だから…な。我慢にも限界がある」

そう言つと、私の手を取りバルコニーから部屋の入り口まで移動させる。

そうして自分は、バルコニーに足をかけると、

「…おやすみ」

一言もう呟くと、最初にこのバルコニーにきた方法で、せりやと自分の部屋に引きあげて行った。

その間、私は黙つたままアデレイの後ろ姿を見送つた。

アデレイが去つてから、しばらくその場にたたずむ事数分…はいたと思われるが、突風が吹いて我に還る。風も強くなつてきて、急に肌寒く感じて身震いをする。

つい先程まではアデレイと一緒にいたから、そんなに寒くは感じなかつたけど、やはり夜は気温が下がるし肌寒いな…。

そう思つた瞬間、抱きしめられていたから寒く感じなかつたのだ、と気付き、頬が一瞬で高揚する。

抱きしめられていた腕の感触、耳たぶに感じた甘い吐息、心地よく感じたアデレイの香り、思い出すと心臓の鼓動が早くなる。高鳴る心臓を自身で落ち着かせようと、深呼吸をひとつ。

しかし、もう寝なくては…

バルコニーから部屋に戻り、鍵をかけ、広いベッドに戻り、疲れた体を沈める。

広いベッドに体を沈めて、高い天井を見上げて考える。

今日はいろいろな出来事がいつぺんに起きて、考へる事は山積みだけど、焦つても仕方ないし、すぐに答えは出ないだろ。

私は私で一つずつ解決していくしかないのだ。

まずは、明日の仕事に普通に出勤する事だ。その為には、まずはしっかりと寝て、体を休めて明日に備えるのだ。ベッドの中で横向けになり、目を閉じて、深呼吸を一つして眠りにつく準備をする。

わあ、おやすみなさい…

…

…………つて！

寝れる訳がねえ、つつづの！…！

なんなの、なんなの、アデレイ！あの態度は反則だろ！しかも『王都に連れて行きたい』つて…！

おまけに『側にいて欲しい』…つて…！

私の事す、す、す…好きっぽくない…？？

うお  
！

私は先程までの出来事を反芻して、一人ベットで悶絶死しそうになつて、恥ずかしさと照れでジタバタと騒ぎ、まさに身もだえ。5人は寝れそうな広いベットの中を一人で何往復もした、ゴロゴロと転がつて。

なんかもうキヤパオーバーというか、興奮MAX、これが騒がずにはいられようか！

アデレイ！私を寝かせないつもりか！そう来たか！

その後、私が眠りに付く事が出来たのは、空に朝日が昇りはじめて部屋がうつすら明るくなりかけた頃だった。

そうしてこつもの朝を迎えた。

朝日が部屋に入りこみ、薄明るくなってきた頃にやつと眠つこつこつにござりてはならなことは、何とせつない事か。

私の全身がベットから離れるのを拒否していると感じる。

部屋の外で鳴く小鳥達の元気なその姿でさえ正直羨ましい。その元氣、今の私に分けて欲しい、切実に。

ああ……だけど、起きなくては……。

自分自身を何とか奮い立たせて寝心地のいいベットから、のそのそ起き上がる。

そつして、いつものメイド服に着替えて、脳内をすっきりさせる為にも、両手で自分の頬を叩く。

……痛い。

……けど眠い。

駄目だ。痛みより眠氣の方が強い。さつきまで寝ていたベットを振り返ると、ベットが私を呼んでいる気がする。

あのシーツの肌触り、ふかふかの寝心地……。  
一緒に行きたい夢の国。

だけど、それも叶わぬ夢と早々にあきらめて仕事に向かわねば。

昨日の昼間はあれだけ泣いたし、それに加えての寝不足で、自分の顔がどうなっているのか見るのが怖い。

上手く働かない寝起きの頭で考え事をしていたら、不意に扉がノックされ、ノック音が部屋に響き渡る。

「びつぞ、と声をかけると扉が開いた。

「…………」

ノックの主は、この豪華なお部屋をある意味無理矢理、私に勧めてくれたラインだった。

はは～っ、ライン様の粋な計らいのお陰か、ただいま寝不足です。

ラインは扉を開けて、部屋に入つてくると、無言のまま私を見つめる。

「…………？」

薄紫の瞳を見開いて、無言で私を見つめている。不思議に思いながらも、私も無言で見つめ返す。

「あの…………？」

痺れを切らして私の方から声をかけると、

「ああ、コツキーおはよつ！良かつた！部屋を間違えたかと思つた  
よ。」

…それは、こいつたらいじりこいつ意味でなのだらうかと不思議に思つ。

「…あと、今日なお休みにしなよ」

「へ？」

「コツキは今日は仕事はお休み」

「え…？でも…どうこう…？」

唐突なワインの申し出に驚いて、じりじりした理由で…と聞えます  
前に、

「」の前、庭園でリツキがお休みなのに無理矢理お茶会に参加させ  
たでしょ？あの時言つたよね？『代わりに好きな田にお休みをあげ  
る』つて。だから、それが今日

でも…、と聞いかけるが、そんなありがたい申し出に正面乗つかか  
りたい。

「じゃあ、」の部屋は今日一日使つていいからね

私が返事に迷つていると、言つだけ言つて早々と部屋から去つてい  
ったライン。

寝不足の私の頭が、正常な判断を下す前に、来た時と同じ様に爽や  
かに部屋を出て行つた。

何だつたんだろつ…。

しばらく考え込むも、せっかくなので、意味もわからずその好意に甘える事にした。

とりあえず部屋についている洗面台で顔を洗い、備え付けのタオルで顔を拭き、鏡を見ると、

…ラインが急に休みにしてくれた理由がわかった。

鏡にうつる私の顔は、前日泣いた為、腫れぼつたく重いまぶたに変貌し、寝不足の為か、目の下にクマまで作っていた。

「じつや、ひでや  
。

ラインが部屋を間違えたかもしれないと一瞬思ったのは、私の顔のひどさに驚いたのだろう。

確かにひどい顔をしている。自分でもびっくりだ。

まぶたがこんなに腫れていっても、目は見えるもんなんだなー、と変な所で感心する。

水で顔を洗った為、わっせよつは多少頭の中がクリアになった。

私はベットまで戻り、端に腰をかけて急なお休みを貰つたので、今日一日向をしようか考える。

やつやつじょーつと、考へていると思に出して来るのは、昨夜の出来事。

アテレイは王都に連れて行きたいと言つ。

王都には迷い人達もいるし、私としても興味がある。

だけど、この地を離れる事は正直抵抗がある。

このヒューストン伯爵の土地の皆はよくしてくれたし、今さら他の土地で過ごすのは想像がつかない。

アドマさんやローサさんやカリ亞などのメイド仲間とも離れたくない。

それに…私の大事なトマト畑だつてあるし。

「…よくわかんない」「や

悩んで、ぐじぐじ考えていても、結局はなるよつにしかならんのだ。  
考えてもわからないのなら、今は考えるのをやめにす。

悩んで答えが出ないなら、悩むのは今はパスする、保留にする。  
今は、きっと答えの出る時ではないのだ。基本樂天的で能天氣な、こんな私だけど、悩み続けていたら頭がシヨートしてしまつ。

大きい悩みでも、ひとつひとつ解決していくば、いつか大きい悩みも解けるはず。

その為に、今出来る事からしていこう。

私はそつ心に決めると、そのまま一度寝を決めた。

まずは、この睡眠不足と、ひどい顔をどうかしないとなおやすみなさい。

そつして悩みを保留にすると決めた私は、見事三秒程で眠りに落ちた。

二度寝から目覚めると、もう曇すぎだった。  
どんだけ寝たんだ私。

しかしあ陰様で頭がすつきりした。

顔のむくみはまだあるけれど、気分爽快だし、頭は朝より冴えてる  
気がする。

さあ、体力も補充したなら、あとは自分のお休み楽しむべし！

私は起き上り部屋を簡単に掃除すると、客室を飛び出し、向かうのはいつものあの場所へ。

赤く実ったトマトが並ぶ、いつもの畠。

今日も晴天で、太陽は地面を照りつけて輝いている。  
いつもは、朝に来る畠だけど、今日は二度寝したので、こんなに太  
陽が高くなつてから来てしまつた。

畠に近づくと、光り輝く太陽の下、人影が見えた。

その後ろ姿と、太陽の光を受けて輝く髪は間違えようのない人物だ  
つた。



後ろ姿でも、すぐにわかる。

すらりと伸びた手足に、ハーブロンドの髪は光輝き、風に揺れている。

白いシャツが清潔感を感じさせ、黒いパンツに革のブーツを履いたラフな格好で優雅に佇んでいる。

後ろ姿からも感じる事が出来る、その存在感。

柵に腰をかけて、そこから伸びる足の長いこと。

同じ人間なのに不公平だ。いやいや人間、見た目じゃない。大切なのはハートさ、ハート。

自分で自分をなぐさめながら、後ろ姿の彼をみつめる。

しかし、私はここでためらっていた。

なぜなら昨日の今日なので、正直気まずい。

心の準備も何も出来ていない私は、どういった態度を取つたらいいのか一瞬戸惑う。

「……アデレイ」

悩みながらも思わず名前を呼んでしまった私と、呼ばれて振り返ったハーブロンドの主は、

「……遅い」

と一言。

しかも眉間にしわ寄せつき。

は？何で少し不機嫌モードなの？  
私が来るのが遅いって？

そりや、廻過ぎに畠に来る事は珍しいけど、そもそも、約束なん  
てしてないじゃん！

逆ギレ気味に、口をとがらせる。

…と、ここで私は重要な事に気付いて慌てて声をかける。

「もしかして、ずっとここにいたの？いつから？」

「…いつもの時間からいた」

「…いつものつて！？いつもつて朝からいたの…？」

無言で私を見つめるアテレイの様子をみて、そうなのだと知る。  
何と無謀な事を！天高く燃え上がるお天道様を甘くみるではないわ  
〜！

「熱中症になるでしょ…危ない！」

「ねつちゅうつ…？」

「あーもつ、ほら、早く口かげに入る…」

意味がわからない様な顔をして、そのままボケッと突っ立っている  
ままのアテレイに、説明するより早いと思い、近くの大木の下にア  
テレイの手を引っ張つて、無理矢理連行する。

本当にいつから待っていたのだろう。

私が優雅にお客様ベットで一度寝をしていた間も、ずっとこの煙の炎天下の中、待っていたのか？

私がヨダレを垂らしている間も、いびきをかいていたであろう間も？

聞きたいけど、怖い。

アデレイを無理矢理引っ張り、日かげに入れる、風は吹いている爽やかな気候なので、割と肌には気持ちいい。

ここにじしばらく休んでいてもらわないと。

しかし良かつた、倒れる前に私が畳に来て、心の中で安堵する。

次期第一王位継承者、干からびて畳で発見…

そんな一コース、シャレにならんわ。

「だけど、何で私を待つてたの？ 何か用事？」

木陰で休むアデレイを振り返り、ふとした疑問を投げかけて、その蒼い瞳を見つめて首をかしげる。

アデレイは私が質問をして、私を見つめたまま軽く口端を上げて笑うのみ。

…そうだ。

思い出した…。

私は昨夜アデレイに抱きしめられ、まるで告白みたいな想いを告げられたのだった。

思い出すと急に恥ずかしくなり、どうこう態度を取ればいいのか迷う。

しかし、私の動搖とは別にアデレイの態度はいたって普通で、特に照れも恥ずかしさもない様子。

炎天下の下に長時間いたくせに、至つて涼しい顔で平然としている。

くつー美形は汗の一つもかかないのか！

私は、一人あたふたと動搖から拳動不審になつて、そわそわとして手なんて落ち着きがなくなつてしているのに。アデレイは口を開く。  
あきらかに動搖した様子の私を見ると、アデレイは口を開く。

「昨夜は混乱させたと思つて」

そりやあね、混乱するに決まつてー。

けど、それも一度寝をしたら、多少はすつきつもしたけどさ。  
しかし、見た目は平然としているけれど、その言葉から私を気遣つ  
てくれる様子は伝わつた。

いつもと変わらぬ普通の態度で接していくアデレイに、私だけ動搖  
した様子を見せているのも何だかアホらしく、気が抜けた。  
けれど、アデレイがいつもと変わらぬこの態度を取つてくれた方が  
ずっと楽。

いつものふてぶてしい態度でも、コーナーング・マイウェイな態度で  
も、そよそよしきみりずつと樂ー。

私はある程度気が楽になり、

「そりや、混乱もするわー！」

などと、笑つてツツ「ミながらも、今日も畠へと来た田町の一つ、完熟トマトをカゴに集め始める。

その赤く熟れたトマトの一いつを、田陰で休んで眺めているアーテレイへと手渡す。

出されたトマトを黙つて受け取ると、アーテレイはそのまま口に運ぶ。私は自信たっぷりに、

「どう? 美味しいでしょ。それに、この畠も広くなつたでしょ?」

田の前に広がる、赤く色づく私の宝の畠を見つめる。

「 そうだな。このまま増やす事が出来るなら、この国にとっても貴重な食料が増えたという事だな」

「 それに、アーテレイが食べている時点で毒見は完了してゐるわね」

私も笑いながらトマトを口に入れゐる。

みずみずしくて、口の中で広がる酸味と甘み。

田かげで二人並んで、赤いトマト畠を見ながら二人で頬張るトマト。

次期、第一王位継承者の立場だという彼に認められたなら、今後はどんどん国に出回るかしら。

なんて、ちょっと期待してしまつ。

眩しい思いで、アーテレイと並んで畠を見つめていたら、

「 … 焦らなくていい」

並んで立つ隣から、不意に静かな声が聞こえてきた。  
その声の主を、私はゆっくりと見上げる。

まっすぐに私を見つめる蒼い瞳は、この快晴の空みたいに雲一つないのと同じ、迷いのない蒼い色。

「返事は待つていろ。リツキの心が決まるまで

優しげな、それでいて力強い瞳を見ていると本気なんだ、って伝わってくる。

『王都と一緒に来て欲しい』

昨夜言われた事は、やはり夢でも冗談でもなかつたのだ。  
彼が本気になれば私の意見なんて無視して強引に連れていいく事だつて可能なはずだ。彼の身分や立場を考えると。  
だけど、実力行使をしないで、私の返事を待つと言つ。

「……うん」

私は目の前に広がる赤いトマトの大群を見ながら、一言返事をした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4591o/>

---

トマトリップ

2011年11月12日22時26分発行